

絶
海
中
津
の
基
礎
的
研
究

目次

序章 「基礎的研究」の必要性	四
第一節 受容史および研究史の概観	四
第二節 本研究の目的および方法	三〇

前編 伝記研究

第一章 『仏智広照浄印翊聖国師年譜』の再検討	四〇
第二章 『仏智広照浄印翊聖国師年譜』と『勝定国師年譜』との関係	五七
第三章 絶海中津の関東再遊について	七九
第四章 日記類に見る絶海中津——「坦率の性」に注目して——	一一〇
付 章 絶海中津略年譜	一三二

後編 作品研究

第一章 『蕉堅藁』の諸本概観	一四八
----------------	-----

第二章 『蕉堅藁』の作品配列について	一六六
第一節 五言律詩の場合	一七七
第二節 七言律詩の場合	一八九
第三節 五言絶句、七言絶句の場合	二一四
第四節 書簡の場合	二四四
第三章 絶海中津の自然観照	二五七
第四章 五山文学における禅月の受容——『蕉堅藁』を起点として	二九七
第五章 五山文学における「和韻」について——絶海・義堂を中心に	三二七
結 章 今後の絶海中津研究	
第一節 『蕉堅藁』の魅力解明に向けて	
——「清婉峭雅にして、性情の正より出づ」——	三七〇
第二節 今後の五山文学研究——五山文学と薔薇	三八四

序章 「基礎的研究」の必要性

第一節 受容史および研究史の概観

一 受容史の概観

絶海中津〔一三三六―一四〇五〕は応永十二年〔一四〇五〕四月五日、相国寺の勝定院において示寂した。七十歳だった。その後、同十六年九月十四日に後小松天皇〔一三七七―一四三三〕から「仏智広照国師」の号を追諡され、同二十三年十二月十四日には称光天皇〔一四〇一―一四二八〕から「浄印翊聖国師」の号を加諡された〔勝定国師年譜〕（以下、『勝定年譜』と略す）、『延宝伝灯録』、『鹿苑日録』、『扶桑五山記』等）。また、同十八年には南禅寺にて七回忌、同二十四年には相国寺にて十三回忌、永享九年〔一四二七〕には相国寺と南禅寺にて三十三回忌、永正元年〔一五〇四〕には相国寺にて百年忌がそれぞれ営まれたことが、当時の日記類で確認できる〔看聞日記〕『満濟准后日記』『蔭涼軒日録』『鹿苑日録』等）。今日、絶海は、義堂周信〔一一三二―一五〇八〕とともに「五山文学の双璧」と称されているが、それはいつたいいつ頃から、誰によって、絶海の商品や文学活動のどのような点を評価してのことなのだろうか――。以下、論の進行上、便宜的に「室町時代後期」と「江戸時代」とに分けて、各時代における絶海の、主に文学面における評価を見て行きたい。ただし、絶海の示寂後のものに

限る（一部を除く）。

〔室町時代後期〕

まず、明僧道衍（一三三五～一四一八）による『蕉堅藁』¹の序文から抜粹する。

日本絶海禅師之於詩。亦善鳴者也。自壯歲挾囊乘艘。泛滄溟。来中国。客于杭之千歲岩。依全室翁。以求道。暇則講乎詩文。故禅師得詩之体裁。清婉峭雅。出於性情之正。雖晋唐休徹之輩。

亦弗能過之也。

厳密に言うと、この文章は、絶海生前のものである。後編第二章で詳述するが、絶海は応永十年（一四〇三）、入明する弟子の龍溪等間に『蕉堅藁』と『絶海和尚語録』（以下、『絶海録』と略す）を預けて、両書の序と跋を中国僧に請い受けることを求めた。絶海が示寂するのは、この二年後である。

さて、道衍は当時、僧録司左善世の要職にあり、そのような彼が、絶海の詩風を「清婉峭雅にして、性情の正より出づ」と評していることは注目に値しよう。『蕉堅藁』の序文に関しては、本研究で度々言及すると思うので、今はこれ以上、触れないことにする。

つぎに、絶海の後輩僧らによる絶海評（観）である。①～⑤の番号は私に施した。

①独吾徒、効文字語言於中華之體、習禅之餘、著文賦詩、山林之樂也、然而辞有和習、字亦入和様、令中華之人、觀之則皆云、其間文字也、蕉堅大士、壯歲南遊、入全室室、其詩也、文也、筆蹟也、与

彼山川風物、爭其壯麗、明人跋其藁曰、雖吾中州之士、老於文學者、不_レ是過、且無_レ日東語言氣習、而深得_レ全室之所_レ傳也、評其書則曰、得_レ楷法於清遠、可_レ謂_レ集而大成矣、既而帰朝、吾徒之從事於此者、競游其門、刪_レ詩、定_レ四六之體、變_レ書法之卑弱、各得_レ其所、至_レ今叢林、無_レ不被_レ其沢者、可_レ尚矣、

(「旭岑詩并四六序」、『翰林葫蘆集』第八、『五山文学全集』第四卷)

②蓋禪四六之盛行于世也、始_レ于蒲室、蒲室出_レ乎皇元之間、一手定_レ其躰格、整_レ其句法、而自編_レ其集、雅頌各得_レ其所也、繼_レ于蒲室者曰_レ季潭、曰_レ用章、皆有_レ家法、而季潭開闔鍵可_レ觀矣、吾朝蕉堅蚤入_レ大明、從_レ之以游者、洎_レ乎十年、故罄_レ其所_レ蘊以帰、於是乎海東禪林、四六具_レ體、而後登_レ其門者、双桂太白曇仲為_レ之頭角、(下略)

(「四六後序有_レ詩」、『翰林葫蘆集』第八)

③昔蕉堅老師、遊_レ大明國、于_レ時老皇帝召_レ見英武樓、勅令_レ賦_レ三山詩、御製賜_レ和、一時盛事也、加之、季潭・清遠等諸大老、与_レ師唱和、千載美談也、及_レ帰國、其光華也、並_レ扶桑日、其清高也、凌_レ三山雲、苟從_レ事斯文者、一游_レ其門、則以為_レ登龍、而我師曇仲其一也、吁、異矣哉、正甫叔少年、乃蕉堅第四葉也、(下略)

(「次_レ韻正甫少年試筆_レ詩并叙 譚法叔、字正甫、后改_レ汝雪」、『補庵京華前集』、『五山文学新集』第一卷)

④乃祖広照国師、大明洪武年中、航_レ于中華、太祖高皇帝、召_レ見英武樓、令_レ賦_レ吾邦三山之詩、辱賜_レ和、可_レ謂_レ大法東被_レ之秋也、萬年喬年和尚、廼国師的孫也、(下略)

(「送_レ喬年赴_レ大明國」、『默雲藁』、『五山文学新集』第五卷)

⑤此詩ハ、絶海和尚渡唐アリテ、大明太祖高皇帝ノ御前ニテノ詩也。此時ハ洪武九年ノ春也。高皇帝英武楼へ召レテ、日本国ノ使僧津絶海ニ御対面アリテ、日本ノ風土ヲ御尋アリ。其次デニ、「信ヤ、日本ニ三山アリ、ソコニ徐福ガ祠アリト云ハ。若実ナラバ、ソレニ就テ詩ヲ献ゼヨ」トアル処デ、賦ニ此詩也。天子勅感アリテ御制、尊和ヲ下サル、也。名誉ノコト也。総シテ、日本ニ名僧ヲ御賞翫アルハ、コノ為也。日本一州ノ名望ヲセラル、モ、名僧ノ故也。希有ノコト也。然間、唐へノ書札ハ時ノ名僧ニ書カセラル、法也。ソレニ就テ有ニ書札法也。(下略)

(『中華若木詩抄』九八一—、岩波・新日本古典文学大系)

【注】「全室」とは季潭宗泐、「清遠」とは清遠懷渭、「蒲室」とは笑隱大訥、「用章」とは用章廷俊、「双桂」とは惟肖得巖、「太白」とは太白真玄、「曇仲」とは曇仲道芳、「老皇帝」とは高皇帝(洪武帝、朱元璋)、「正甫叔少年」とは正甫(汝雪)法叔、「喬年和尚」とは喬年宝松。

これらの記述を概観すると、彼らの絶海評(観)は、大体、以下のように分類できる。(a)〜(f)の記号は私に施した。

- (a) 詩文に秀でている。和習(臭)がない。(季潭宗泐から学ぶ)。①
- (b) 金陵の英武楼において明の太祖高皇帝に謁見し、熊野三山に関する詩を唱和した。③・④・⑤
- (c) 季潭や清遠懷渭らと詩を唱和した。③
- (d) 書法に秀でている(清遠から学ぶ)。①
- (e) 「蒲室疏法」を将来して、わが国の四六文の作法を定着させた(季潭から学ぶ)。①・②

(f) 後輩僧が競つて、詩文や書法や四六文の指導を受けた。(①・②・③)

(a) について。後編第一章で詳述するが、『蕉堅藁』には五山版があり、当時からある程度、流布していたと思われる。①では、「明人、其の藁に跋して曰く」として、明僧如蘭による跋文から引用されている。「吾が中州の士の、文学に老ゆる者と雖も、是に過ぎじ。且つ日東語言の氣習無くして、深く全室の伝ふる所を得たり」——絶海は中国人と同等、もしくはそれ以上の創作力を有して、和習(臭)も無く、深く季潭(全室和尚、一三二八〜九一)の真髓を会得していたという。玉村竹二氏は『五山文学』(日本歴史新書、至文堂、昭四一)の中で、

又(絶海は)日本人の思惟方法を離れた用語句法を用いているので、「日東語言の習氣なし」と明僧如蘭から賞讃されるのである。これは支那語で考え、支那語で概念を形成して作詩することであり、日本語の概念を翻訳して作詩する一般日本人と異なるといふことである。これらの点は中巖圓月と最も酷似する。

(一九〇頁)

と述べておられる。例えば、『蕉堅藁』の「真寂の竹菴和尚に呈す」詩(二)に、「流水、寒山の道、深雲、古寺の鐘」という句がある。同詩に和韻した清遠(竹菴和尚)の詩(一番詩A)の序文に、「まさに江東に遊ばんとし、詩を留めて別れを為す。曰ふ有り、流水、寒山の路、深雲、古寺の鐘、と。気格音韻、居然たる玄勝、まさに作者に愧じざるべし」とあり、太極藏主(一四二一〜?)の『碧山日録』寛正元年(一四六〇)五月二十二日条に、

二十二日戊戌 絶海・寰中(規カ)共入中州、学詩於泐季潭、皆得妙、絶海、以一水寒山路(道)深雲古寺鐘之句、見称、寰中、作白雲流水路 紅葉夕陽山之句、播其名也、余初聆觀中句於客、紀之、

〔増補 続史料大成〕第二十卷)

【注】「寰中」に関して、『大日本史料』第七編之七・応永十二年四月五日条では寰中崇枢(規庵祖円——

蒙山智明——東山崇忍——寰中)としてあるが、觀中中諦で良いだろう。と、いうのも、少しく文字の

異同はあるものの、『青嶂集』(觀中著)の「題神護寺」詩(一四七)に「白雲深谷路、紅葉夕陽山」

という句が見えるからである。『青嶂集』の作品番号は、梶谷宗忍氏訳注『觀中録 青嶂集』(相国寺、

昭四八)による。

という記事があることから、この詩句が、日中の禅林社会で人口に膾炙していたことが知られる。

(b) について。③や⑤にあるように、この絶海と高皇帝の逸話は、本朝禅僧にとって一時の盛事とか、名誉事として理解されていたようである。逸話の内容は、『仏智広照浄印翊聖国師年譜』(以下、『仏智年譜』と略す)の永和二年「一三七六」条で詳しく知ることができるのだが、同年譜は応永三十年「一四三三」、絶海の法嗣である叔京妙邨によって撰述され、寛文十年「一六七〇」に『絶海録』の付録として、はじめて刊行されたものなので(前編第一章参照)、室町時代後期の段階では、それ程、流布していなかったように思う。両者の唱和詩は『蕉堅藁』にも収められており(絶海の詩は「制に応じて三山を賦す」(八〇)、高皇帝の詩は「御製、和を賜ふ」(八〇A)、おそらく『蕉堅藁』を媒介にして、この逸話は広まったのではないか、とわたくしは考えてい

る。八十番詩B、すなわち応永九年（一四〇二）秋に中国僧の天倫道彝が、相国寺で和韻した詩の序文には、
鹿苑絶海和尚曩遊中華。卓錫于龍河。時当大明洪武九年之春也。太祖高皇帝召見英武楼。顧問海
邦遺跡熊野古祠。勅令賦詩。欣蒙賜和。未幾東還。宝蔵珍護積有年矣。

という記述も見られる。なお、絶海と高皇帝の詩は『中華若木詩抄』にも採られているし（⑤は絶海詩の抄文の一部）、絶海詩は横川景三（一四二九〜九三二）撰『百人一首』の巻頭に付されている。

（c）について。絶海が、中国で師事した季潭や清遠と唱和した詩は、『蕉堅藁』で確認できる。それは先に触れた、五言律詩の部の巻頭詩である「真寂の竹菴庵和尚に呈す」詩（一）と、七言律詩部の巻頭詩である「錢唐の懷古、韻を次す」（二首）詩（二三）である。前詩は洪武六年（応安六年、一三七三）十二月二十日、真寂山において、これから江東地方（金陵）へ赴かんとする絶海が、清遠に贈呈した留別詩である。この詩に対して清遠は、見心来復や易道夷簡とともに和韻した。いずれの詩も『蕉堅藁』に収録されている（一番詩A・B・C）。後詩は詩題には明記されていないが、季潭の「錢唐懷古（二首）」詩（『全室外集』卷之下所収）に次韻したものである。各詩の詠作状況の詳細は、後編第二章参照。

（d）（e）について。双方とも関連記事を、『蕉堅藁』に確認することができる。直前でも触れた一番詩C（易道）の序文に「又、楷法を西丘の竹庵禪師に得たり」とあり、『蕉堅藁』の跋文（如蘭）に「信なるかな、其の疏語、絶だ蒲室の体制に類す」とある。「疏」は四六文で書かれており、禅林で下から上へ出す文書を言う。入寺疏・淋汗疏・幹縁疏の三つに分類される。

こうして見ると、この時代の絶海評（観）は『蕉堅藁』に依拠しており、しかも、絶海が、漢詩文の「本場」である中国の有名人（僧）と交渉を持ったり、彼らに評価されたことが、そのまま、当時のわが国の禅林社会における絶海評価に繋がっていたように思われる。

〔江戸時代〕

結局、絶海と義堂を一括りにして、五山文学の代表者たらしめるようになったのは、つぎに挙げる『日本詩史』巻之二（江村北海著）の記述に起因すると思われる。

五山の作者、その名今に徴すべきもの、百人に下らず。しかして絶海、義堂、その選なり。次は則ち太白、仲芳、惟忠、謙岩、惟肖、鄴隱^{（憲）}、西胤、玉腕、瑞岩、瑞溪、九鼎、九淵、東沼、南江、心田、村庵の徒、枚挙に堪へず。

絶海、義堂、世多く並称し、以て敵手と為す。余嘗て『蕉堅藁』を読み、又『空華集』を読む。二禅の壁壘を審かにす。学殖を論ずれば、則ち義堂、絶海に勝るに似たり。詩才の如きは、則ち義堂、絶海の敵に非ず。絶海の詩、ただ古昔中世敵手無きのみならず。近時の諸名家と雖も、恐らくは甲^{（よう）}を棄てて宵^{（の）}に遁れん。何となれば則ち、古昔朝紳の詠言、佳句警聯無きには非ず。然れども疵病雑陳、全篇佳なるもの甚だ稀なり。偶^{（たま）}佳作有るも亦ただ我が邦の詩のみ。これを華人の詩に較ぶれば、殊に逕蹊を隔つ。近時の諸名家と雖も、余を以てこれを觀れば、亦ただ我が邦の詩なり。往往俗習を免れ難し。絶海の如きは

則ち然らず。今集中の佳句若干を録す。五言には「流水寒山路、深雲古寺鐘」（以下、五言十句、七言十二句省略）等、工絶なるもの有り。秀朗なるもの有り。優柔静遠、瑰奇瞻麗、有らざる所靡し。義堂、絶海に視ぶれば、骨力加ふる有りて、才藻及ばず。且つ禅語多く、又議論に渉る。温雅流麗なるものは、集中幾も無し。絶句の如きは、則ち佳なるもの有り。懐旧の作に云ふ、「紛紛世事乱如麻、旧恨新愁只自嗟、春夢醒来人不見、暮簷雨洒紫荆花」（以下一首省略）

（岩波・新日本古典文学大系）

絶海と義堂は、世の中でよく並び称され、ライバル視されている。わたしはかつて、絶海の『蕉堅藁』と、義堂の『空華集』をつぶさに読んだ。その結果、学殖を論ずれば、義堂は絶海よりも勝つていると言えよう。が、詩才においては、義堂は、絶海の敵ではない。絶海の詩は、古昔、中世にライバルがないのみならず、近時の諸名家であっても、恐らく甲を脱いで、宵に紛れて逃げて行くだろう――。

斯くの如く江村北海（一七一三〜八八）は、絶海の詩才を激賞している。その主たる理由は、「何となれば則ち」以下に記されているように、絶海の詩が、奈良、平安時代における搢紳貴族や、江戸時代における儒者文人の詩と異なり、中国人の詩と比べても遜色なく、「俗習」すなわち「和習（臭）」を全く感じないからである。この点に関しては、先に見たように、すでに室町時代から指摘されていた。また、北海は続けて、集中の佳句を挙げて、「工絶」「秀朗」「優柔静遠」「瑰奇瞻麗」と評している。『蕉堅藁』には五山版の他にも、寛文十年（一六七〇）刊本があり、また、高峰東峻（一七一四〜七九）らによる古注釈の類も存したので、当時、かなり流布していたことが知られる。なお、本文中で義堂の詩が、「義堂、絶海に視ぶれば、骨力加ふる有りて、才藻及ば

ず。且つ禅語多く、又議論に渉る。温雅流麗なるものは、集中幾も無し」と酷評されているが、これに關しては、補足しておきたい。それは『蕉堅藁』と『空華集』の、作品集としての性格の違いである。詩の中でも、内容が仏教的（禅宗的）なものを、特に「偈頌」と言う。『蕉堅藁』は偈頌を排除している（『絶海録』に所収）。それに対して、『空華集』には偈頌が含まれており（道号は『義堂和尚語録』巻第四に収められている。『空華集』は詩型によつて分類されており、文芸詩と偈頌を区別しない）、そのことが、同集が『蕉堅藁』に比べて、筆力が加わっていたり、禅語が多い理由の一つではないか、とわたくしは思うのである。

ここで、北海と同時代の人々の絶海評（観）を瞥見しておきたい。例えば、林羅山（一五八三—一六五七）は、つぎのように述べている。

○余閱_二經子史集_一之暇、偶見_二本朝詩人文人及五山禅林之遺稿_一。若_二官家_一文章已論_二于前_一。至_二禅家_一則虎関濟北集、雪村岷峨集、絶海蕉堅藁、義堂空華集、夢岩旱霖集、中岩中正子、永源寂室録（下略）

（『五山文編序』、『林羅山文集』巻第五十・序下、弘文社、昭五）

○以_レ余觀_レ之、虎関、中岩、夢岩、義堂、絶海等、本朝之鐔津、覚範、北礪、鎧庵、志磐、蒲室、全室之流者乎。（同右）

○我朝富士山之名、播_二于異域_一者義楚六帖云、日本国最高山号_二富士_一。一曰蓬萊。秦時、徐福来_レ此。又宋濂日東曲、有_二富士山絶句_一。而我国沙門津絶海入_二大明_一。明太祖問_二徐福事_一。津賦_二絶句_一謂、徐福祠在_二熊野_一。

又南禅寺僧岩惟肖謂、凡指_二蓬萊_一者_二三処_一、一曰富士、一曰熊野、一曰尾州熱田。

羅山は、絶海・義堂を何等特別視しておらず、例の絶海と高皇帝の逸話を引いている。また、頼山陽（一七八〇〜一八三二）は、

○国朝詩運。兩開兩壞。猶ニ文章也。初壞ニ於長慶體。後壞ニ於萬歷體。中間争乱。不レ暇レ為ニ中晚・宋・元一也。五山僧侶。頗為ニ瘦硬絶句。其中巨擘。有レ若義堂・絶海。頗雄奇。有ニ台閣儒紳不レ及処。当時王霸盛衰。渠輩冷眼傍觀。頗形ニ之吟詠。含ニ有譏諷。又非下近時士君子。徒鑿ニ刻風月。為ニ無益詩一比也。

（『書ニ五刹詩鈔後ニ』、『頼山陽全書〔文集〕』所収「山陽先生書後」卷下、頼山陽先生遺蹟顯彰会、昭六）と述べている。「五山の僧侶、頗る瘦硬の絶句を為る。其の中の巨擘として、義堂・絶海の若き有り。頗る雄奇なり」——山陽は義堂と絶海を、細かくて硬い絶句ばかりつくる五山の僧侶の中で「巨擘」と捉え、彼らの詩風を「雄奇」と評している。

こうして見ると、この時代になると、『蕉堅藁』もかなり鑑賞や研究が進み、絶海の作品評価も、前時代のよりに、中国人による評価をそのまま踏襲するのではなく、作品分析を通して独自に導き出されたそれのように思われる。特に、北海の『日本詩史』の影響力は大きく、現在もまだ、その影響下にあると言つてよい。ただし、評価の根拠は曖昧である。

以上、甚だ大雑把ではあるが、室町時代後期から江戸時代にかけての絶海の、主に文学面における評価を追つてみた。つぎは、このような絶海の受容状況を踏まえて、明治時代以降の研究者がどのような研究をしてきたか、

を見て行きたい。

二 研究史の概観

小西甚一氏は、五山文学研究者の必読書である、玉村氏の『五山文学』に対する書評の中で、つぎのように述べておられる。

五山文学は、はたして珠玉なのか瓦石なのか、わたくしには、まだよくわからない。しかし、とにかく考えられるのは、あれだけ多くの人たちが、あれだけの熱心さで、あれだけの分量におよぶ作品を残している以上、当時の人たちは、何かの「良さ」を感じていたにちがいないということである。彼らがどんな「良さ」を感じていたか。それは、価値批判にさきだつて、はつきりさせなくてはならぬキイ・ポイントである。そのような「良さ」を感じていた彼らの精神構造がどんなものであるか、あるいは、そうした「良さ」が世界文学史においてどのような地位を占めるか等の問題は、それよりも後に考えられるのでなくてはなるまい。

（『文学』第二十三卷第十号、昭三〇・一〇）

小西氏の、この発言からすでに半世紀が過ぎようとしているが、五山文学を取り巻く研究状況は、いまだに低調であり、「傍流の文学」という汚名を返上するには至っていない。その理由は、作品の難解さ——例えば、日本漢文であること、禅語が駆使されていること、作者である禅僧の悟境が超論理的に表現されることが多いこと、経書・史書、經典・禅書、詩文集というように典拠が多岐に渡っていること等——に起因すると思われる。五山

文学を解明するためには、国文学、漢文学、歴史学、宗門等の多方面の知識が要求され、また、それぞれの分野間での協力、連携が、必要不可欠であろう。しかし現状は、研究者人口が圧倒的に少なく、まさしく「学界の孤児」たる存在である。

絶海中津の場合を見て行く。彼に関しては、著書や論文以外にも、辞書や概説書、文学史の類で言及されることもあり、中には、明らかに依頼原稿で、鑑賞の域を出ていないものも存する。便宜的に「伝記研究」「作品研究」「注釈」「その他」に分けて、これまでの研究の流れを整理してみたい。

「伝記研究」

絶海の伝記史料の中で最も基本的なものは、先に触れた『仏智年譜』である。古くは卍元師蛮（一六二六—一七一〇）の『延宝伝灯録』や『本朝高僧伝』、上村觀光氏の『五山文学小史』（裳華房、明三九）や『五山詩僧伝』（民友社、明四五）、岡田正之氏『日本漢文学史』（共立社書店、昭四）など、これに依拠する著書、論文、辞書の記述は非常に多い。ところが、昭和五十三年、玉村氏によって、この年譜本文に対する疑問点が提出された（『絶海年譜』に就ての疑義）、『日本歴史』第三六四号、昭五三・九。後に『日本禅宗史論集』下之二（思文閣出版、昭五六）所収）。氏は他資料と比較するなどして、最末部の示寂に関する記事、編者の名前、文和二年（一三三三）に建仁寺に掛錫して龍山徳見（一二八四—一三五九）に師事した可能性を検討し、訂正を加えられた。また、『日本の禅語録』第八卷「五山詩僧」（講談社、昭五三）の解説においては、この三点に加えて、

貞治三年（一二三四）に鎌倉へ下向し、報恩寺の義堂に随侍した可能性も吟味されている。ちなみに同書の解説が、最も絶海の伝記を網羅しているのではないだろうか。

さて、絶海にはもう一種類、『勝定年譜』という撰者不明の年譜がある。同年譜や、『蕉堅藁』、『絶海録』、義堂の日記である『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）などを精査すると、絶海の事跡を、かなり細かい部分まで知ることができる。にもかかわらず、残念ながら、いまだに絶海の入明を応安元年（洪武元年、一三六八）二月、帰国を未詳とする記述に出会うことがある。いま一度、玉村氏のご指摘も含めて、『仏智年譜』の本文を再検討し、絶海の事跡を確認する必要があるだろう。

〔作品研究〕

蔭木英雄氏は、平成十年に『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇。私家版『蕉堅藁全注』（昭五二）を増補改訂）を刊行され、現在、絶海の商品研究の第一人者である。氏には「絶海中津の詩風」（『漢文教室』八四、昭四三・一。後に『五山詩史の研究』（笠間書院、昭五二）、『中世禅林詩史』（笠間書院、平六）所収）というご労作がある。数少ない絶海の先行論文の中で、正面から作品と対峙した、最もオーソドックスな論文で、しかも、絶海の商品研究をめぐる諸問題を網羅していると思うので、あえて同論文を採り上げ、叩き台にしながら、これまでの研究の流れを追ってみたい。論文の要旨を記す（番号は私に施した）。

はじめに横川景三、『日本詩史』、夏目漱石の用例を出して、絶海の詩（『蕉堅藁』）が激賞され愛読され

ていたことに触れる。そして絶海の詩風を、①在明時代（三十三〜四十二歳）、②山居遊歴時代（四十二〜五十歳）、③輦寺在任時代（五十〜七十歳）の三期に分けて、以下、言及して行く。

【渡明する迄の略伝】では、絶海の出生、出身、両親、剪髪、上京、西芳寺・天龍寺・建仁寺での修行（夢窓疎石や龍山徳見に師事）、関東下向、報恩寺や善福寺での修行（義堂との交流）、入明、道場山・靈隠寺・中天竺寺・径山での修行（清遠や季潭に師事）等を、横川や正宗龍統の文章、『仏智年譜』や『蕉堅藁』、義堂の『空華集』や『日工集』等を用いて記している。

【在明時代の詩風】では、まず、『蕉堅藁』の序文（明僧道衍）に注目する。道衍は「詩の道を去ること遠からざるなり」と、道徳的詩文観を展開させており、これは、義堂の「築雲三隱倡和詩叙」（『空華集』巻第十一）に見るように、わが国の禅林詩壇にも通ずる所がある。『蕉堅藁』は「清婉峭雅にして、性情の正より出づ」と評されており（道衍の詩観は、性理学に基づく）、以下、その評価の適否を検討する。

さて、絶海の在明時代の作品を、主題によって大別すると、（1）懐古、（2）望郷、（3）師友への情、の三つに分けられるという。（1）懐古の用例としては、「多景楼」詩（三九）と「姑蘇台」詩（三八）を掲げ、さらに高青邱の作品との関連性も指摘する。（3）師友への情の用例は、「流水、寒山の路、深雲、古寺の鐘」という句が有名な冒頭詩、「湛然静者に呈し、并せて画を謝す 三首」詩（二）、うち二首）であるが、後詩を起点として、絶海の詩によく見られる「清」の形容詞に関して論を展開させる（ここでも高啓の影響を指摘）。絶海の「清」字が内包するものは、「道家的な超俗境」や、清らかな内面的詩境である。

このことから、絶海はまさに「清狂」の詩人であり、道衍の「清婉峭雅」はまさに適評である。

【山居時代の詩風】では、最初に絶海の帰国、九州滞在、今川了俊の九州計略、帰京、臨川寺事件等について記し、絶海の心労を指摘。ついで、康暦元年から至徳三年迄、絶海が近江の杣、甲州恵林寺、摂津の銭原、羚羊谷、阿波の宝冠寺等と住居を転々とした、いわゆる山居遊歴時代の作品を見ていく。この時期、絶海は、足利義満に逆らうなど、時の権力も、僧位の栄達も眼中には無かった。同時期の絶唱として、禅月に次韻した山居十五首（三四、うち四首）を挙げる。諸作品から、「権力に屈せぬ詩人の気概」「自然と一如になった心境」「見性成仏へと昇華しきれない詩僧の人的たゆたい」「詩禅一致という言葉さえも超越する日々是好日の生活」等を読み解く。この他、王維の作品との関係、疊語の多用、「宋詩の如き、又義堂の如き観念詩から脱却し得ている」ことを指摘する。

【輦寺在住時代の詩風】では、まず、絶海の（阿波からの）帰京、等持寺住持、巖島同行、相国寺三住、鹿苑僧録就任等を、義満との関係を押さえながら記し、そのような環境の変化と、詩風の変化とを関連付けて論を進める。その結果、この時期の作品は、王朝貴族的であり、平凡で観念的と結論付ける。

まず、蔭木氏は、呉中四傑の第一人者である高啓（字は季迪、号は青邱子。一三三六〜七四）の文学が、絶海に影響したと指摘されるが、このことは、すでに岡田氏・前掲書に記されている。その主たる根拠は、高啓が、季潭や見心や道衍と交流があったからである（例えば、絶海が入明した洪武元年、高啓が天界寺で『元史』を編纂するに当たって、その修史主任を勤めたのが季潭だった。また、高啓は、道衍の『独庵集』の序文を書いてい

る。『高青邱詩集』(続国訳漢文大成)には「次韻靈隱復見心長老見^レ寄、兼簡^二泐禪師^一」詩など、季潭や見心との雅交を示す作品が少なくない。この指摘はその後、北村沢吉氏⁴⁾や松山秀美氏⁵⁾にも支持されたが、いまだに両者の作品を対照して、具体的に影響箇所が検討されるまでには至っていない。それは、蔭木氏に關しても同様である。なお、絶海の詩と、杜牧、王維、韋応物の詩との類似性を指摘する意見もあるが、これも、作品に即した具体的な考察がなされたわけではなく、論文執筆者の経験に基づく、主観的、感覺的な意見の域を出ていないように思われる。ただし、『蕉堅藁』には「杜牧集を読む」詩(八四)があるので、この観点は注目すべきであろう。

また、蔭木氏は、絶海の作品に「清」字が多いことを指摘し、論を展開されていたが、抑も五山文学作品には、「清」字が多用されているような気がする。したがって、氏がそのことを主張されるのならば、まず最初に、他の五山僧の作品や、平安漢詩文、江戸漢詩文、中国文学、經典や仏典などにおける用例を視野に入れて、その特徴を相対化する必要があるのではないだろうか。同様のことは、大野実之助氏が絶海詩に、韋応物詩の如く「幽」字が多用されていることに注目し、絶海の詩風に韋応物と相通ずる部分が少なくないとされたことについても言えるだろう。

『蕉堅藁』には「山居十五首、禪月の韻に次す」詩(三四)があり、川口久雄氏による「禪林山居詩の展開について——道元山居十五首と絶海山居十五首——」(『国学院雑誌』第七十二卷第十一号、昭四六・一一。後に『花の宴』(吉川弘文館、昭五五)所収)という御論考もある。ただし、川口氏も含めて、同詩を在明時代の作

品と見るのが大方の意見であるが（実証はされていない）、蔭木氏は、山居遊歴時代の絶唱と見なされている。寺田透氏は『義堂周信・絶海中津』（日本詩人選²⁴、筑摩書房、昭五二）の奥書で、

第二は、はしがきや本文中でも言及したが、日本の（というより広く極東のと言えるかも知れない）詩歌は、折に触れ事に臨んで制作諷詠されるものが多く、出来るだけその折その事の時期と内容について記述するのが、注解評釈者の義務と言ったところがある。筆者もその試みに次第に深入りする羽目に立至ったが、しかし当然のこと、各詩篇に即し、そのときどきの必要に応じて試みた素人しごとだったから、記述は前後錯綜、重複遡行を重ねて、二詩僧の一生の経過の次序とはあまり合致しない結果を招いた。

（三〇一〜二頁）

と、詩歌作品の詠作状況（時期・場所等）を明らかにすることの重要性と、その難しさを説かれている。絶海の先行研究を見渡しても、作品の詠作状況を把握していないがために、論旨が微妙に歪曲しているものが少なくない。蔭木氏は別の機会に、『蕉堅藁』所収の詩偈を、詩型と制作時期により分類し、次頁の表のようにお纏めになったことがあったが、この表からは、各作品の制作時期を知ることができないし、第一、数値自体が正しいのかさえも心許ない。「在明期」「帰朝後」「不明」という（制作時期の）分類の仕方、大雑把である。

『蕉堅藁』の「人の相陽に之くを送る」詩（五一）には、「到る日、諸昆、もし我を問はば、倦懷、昔の清狂に似ず、と」という句がある。蔭木氏は、絶海が「清」字を多用していることも加味して、彼を「清狂の詩人」と評される。しかし、厳密に言う、昔、自身が関東で修行した頃は「清狂」だったけれど、今は違う、という

計	不明	帰朝後	在明期	
二六		一〇	一六	五言律詩
六五		二七	三八	七言律詩
一		一		五言排律
一九	二	一六	一	五言絶句
五二	五	四六	一	七言絶句
一六三	七	一〇〇	五六	合計

〔『蕉堅藁』所収詩偈の詩型と制作時期 蔭木氏「義堂周信・絶海中津」より抜粋〕

句意なので、絶海をそのように表現するのは、少し強引なような気がする。第一、「清狂」という語の概念規定がなされていないので、絶海の実像があまり見えて来ない。ちなみに、他の研究者が絶海をどのように見ていたかと言うと、「超脱飄逸にして榮辱窮達の外に立てるものあり」「神秀超邁にして、懐抱の曠達なるものあり」「詩人的の性情を帯びたり」「山水に放朗して、悠然自得の趣あり」（岡田氏）とか、「神秀超邁、脱然として羈絆の

外に出で、狷介にして飄逸なり」「全く詩人的也」（北村沢吉氏）、「狂狷不羈にして、感情に激し、妥協性に乏しく、異常の正義感をもつ詩人肌であった」「隱遁癖と流浪性も相当に強かった」（玉村氏⁸）などと評している。いずれも、絶海が義満に逆らつて、摂津の銭原（大阪府茨木市）に隱棲したことを念頭に置いての言のように推察される。

また、蔭木氏は、在明時代の作品（「早に発つ」（一三）等）から帰納して、「道衍の『清婉峭雅』はまさに適評」とも言われるが、ここでも「清婉峭雅」の概念規定はなされておらず、不明瞭の感を免れ得ない。岡田氏は「清婉峭雅の四字は絶海の詩を尽すものにあらざるなり。俊麗雄健なるものなり」と指摘し、「若し清婉なるものを挙げれば」として、「折枝の芙蓉」詩（九二）や「梅花野処の図（に題す）」詩（一二四）など、在京時代の作品を挙げられている。

こうして見ると、絶海の作品研究は、中国の詩人との影響関係、詩文の制作状況（時期・場所等）、絶海の人物評の、どれを採っても、かなり立ち遅れていると言つても過言ではないだろう。指摘をそのまま放置するのではなく、検討や追跡調査をする必要があるのではないだろうか。

【注釈】

朝倉尚氏には「禅林の文学（五山文学）——注釈書を中心に——」（『仏教文学講座』第九卷「研究史と研究文献目録」所収、勉誠社、平六）があり、それを参考にしながら、絶海関連の注釈書を列挙し、気付いたことを

簡単に述べてみたい。

① 梶谷宗忍氏訳注『絶海語録』一・二（思文閣出版、昭五一）、『蕉堅藁 年譜』三（相国寺、昭五〇）

梶谷氏は、宗門の方である（相国寺管長）。これらの三冊は、絶海の全作品を網羅している。それぞれ巻頭に、『語録』は五山版、『蕉堅藁』と『仏智年譜』は寛文十年版本の本文を一括して挙げ、その後、各作品ごとに訓読と口語訳と語注が施されている。おそらく訓読は江戸の版本、語注は『諸橋大漢和辞典』に全面的によっていると思われる。また、典拠の指摘は、高峰の『絶海録考証』（天龍寺慈濟院、相国寺慈照院、建仁寺兩足院等蔵）や『蕉堅藁考』によるのだろう。口語訳には、少し難点がある。

② 寺田透氏『義堂周信・絶海中津』（日本詩人選⁴、筑摩書房、昭五二）

寺田氏は、著名な文芸評論家であり、本書で毎日芸術賞を受賞されている。一連の道元に関するお仕事は有名である。本書は、義堂編と絶海編から成っている。絶海編では、著者が『蕉堅藁』から秀作と思われるものを選び、まず本文を掲げて、その後に語釈、訓読、解釈、鑑賞を、状況に応じながら記している。本文の引用は『五山文学全集』第二巻、訓読は必ずしも同書に従っていないという。朝倉尚氏もご指摘のように、著者の真骨頂は、古今東西の文芸や詩作——例えば、芭蕉や国木田独歩等——を視野に入れての批評にあると思われる。ただし、残念なのは、語釈の誤りが目に付いたり、作品の詠作状況が曖昧な箇所が見受けられ

ることである。それは、一つには、著者自身も告白されているように、梶谷氏・前掲書をはじめとした先行研究を参照されなかったからであろう。巻末に「蕉堅、銭原、鷹巢、東宮秋月に関する補足訂正を兼ねる奥書き」が付されている。

③玉村竹二氏『日本の禅語録』第八巻「五山詩僧」(講談社、昭五三)

玉村氏は歴史学者であり、言わずと知れた、五山文学研究の大家である。昭和四十八年、『五山文学新集』(東京大学出版会)の刊行により日本学士院賞を、昭和五十六年には『日本禅宗史論集』(思文閣出版)により角川源義賞をそれぞれ受賞されている。他にも『夢窓疎石』(サーラ叢書10、平楽寺書店、昭三三)、『扶桑五山記』(鎌倉市教育委員会、昭三八)、『円覚寺史』(春秋社、昭三九、共著)、『五山禅僧伝記集成』(講談社、昭五八)、『五山禅林宗派図』(思文閣出版、昭六〇)等、多数の著書がある。本書は、義堂周信・絶海中津・中巖円月・虎関師錬・雪村友梅の作品を抜粋抄録しており、各作品ごとに上段に読み下し文、中段に現代語訳、下段に脚注が施され、原文は巻末に一括して収められている(『蕉堅藁』の底本は寛文十年版本、五山版で校合)。絶海編には、詩九首と疏一首とが収録されている。著者は、高峰の『蕉堅藁考』、梶谷氏・前掲書、蔭木氏『蕉堅藁全注』(私家版)を参照されたく、それは脚注に十二分に生かされているよう。また、朝倉尚氏も言われるように、現代語訳には、製作の経緯が反映させられており、細部に渡って説明的で、禅詩・文解釈の一典型が示されている。

④入矢義高氏校注『五山文学集』（新日本古典文学大系48、岩波書店、平二）

入矢氏は、著名な漢文学者であり、『寒山』（中国詩人選集5、岩波書店、昭三三）、『求道と悦楽——中国の禪と詩——』（岩波書店、昭五八）、『碧巖録』上・中・下（岩波文庫、平四〇八、共訳注）等を著したり、『禪語辞典』（思文閣出版、平三二）や『景德伝灯録』三・四（禅文化研究所、平五〇九）等の監修をされたことから知られるように、中国の禪、とりわけ唐代の禪の研究の大家である。本書は、絶海中津は全詩作品を収め、その他——義堂周信・虎関師錬・雪村友梅・寂室元光・別源円旨・中巖円月・愚中周及・古劍妙快——は抄録にしている。そして、各作品ごとに、まず訓読文を掲出して、その後に原文を付し（『蕉堅藁』の底本は五山版）、脚注も施されている。絶海を軸に据えて編集した理由を、「五山文学者として最高に位置づけ得る成績を示していると認められるから」「そこには求道者としての生き方と、文学制作者としての在り方が、互いに程よい諧和の関係を保っており、そしてそれを支える詩人的感性の豊かさ、言語感覚の細やかさがある」（解説 五山の詩を読むために）とされる著者の校注態度は厳しく、和習（臭）の語句や、各禅僧の詩風を容赦なく指摘される。反面、玉村氏の『五山禅林宗派図』などで調べれば、簡単に判明する禅僧が、未詳となっていたりする。

⑤蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇。私家版『蕉堅藁全注』（昭五二）を増補改訂）

蔭木氏は国文学者であり、絶海のみならず、五山文学の、主として作品研究における第一人者である。そ

のことは、『訓注 空華日用工夫略集』（思文閣出版、昭五七）、『蔭涼軒日録 室町禅林とその周辺』（そして、昭六二）、『中世禅者の軌跡 中巖円月』（法蔵館、昭六二）、『一休和尚全集』第二卷「狂雲集 下」（春秋社、平九）、『良寛詩全評釈』（春秋社、平一四）等の多数の著書からも窺うことができよう。本書は、『蕉堅藁』所収の全作品を対象としている。基本的に、まず本文を掲げて、その後訓読と語注が施されているのだが、詩偈に限っては、さらに口語訳が付されている。本文は五山版を底本とし、国会図書館蔵の寛政十年（一七九八）の写本と、内閣文庫蔵の写本で校訂している。著者の校注の特徴は、一つには、中世の口吻を少しでも理解するために、語注や補注に抄物（『碧巖録抄』『中華若木詩抄』『詩学大成抄』等）を用いているところにあるだろう。抄物の抄者の大半は禅僧なので、非常に有効な方法と思われる。反面、著者自身『碧巖集』への傾倒が深く、同書に引き付けての解釈が目立ち、中には強引とも思われる箇所も存する。先に述べたように、絶海の偈頌作品は『絶海録』に収められており、『蕉堅藁』に収められているのは彼の詩作品である。したがって、そこに、絶海の道心や禅境を積極的に読み解こうとされるのは、聊か無理があるように思われる。

以上見てきたように、著者（校注者）の顔触れはバラエティーに富んでおり、これは、ひとえに五山文学が様々な分野の研究対象となり得ることを示しているように。と、同時に、著者に得手、不得手の作業があり、なかなか細部にまで行き届いた注釈書を完成することが難しい状況を示しているように。なお、最近、福岡国際大学の愈慰慈

氏から、「日中文化交流史的基础研究」《扶桑五山文学原典箋注係列》第一種——絶海中津《蕉堅藁》箋注（I）
く「同（IV）」《福岡国際大学紀要》第一〜四号、平一一・三〜平一二・七」という御論考をいただいた。全文、
中国語で記されており、いまだに詳しく見ていないが、いずれ内容を報告したいと思う。

〔その他〕

絶海は中国に渡って、季潭や清遠に師事したり、高皇帝と詩を唱和し、また、帰国に際して「蒲室疏法」を日本に伝えたので、従来、絶海と中国を関連づけた論文は、割合多く見られた。が、いずれも、絶海の中国における事跡の確認や、彼地で詠出した詩の鑑賞に徹したものがかりだった。近年、西尾賢隆氏によって『中世の日中交流と禅宗』（吉川弘文館、平一一）が上梓された。同書には、「第九章 室町幕府外交における絶海中津」（旧題「室町幕府外交における五山僧——絶海中津を中心に——」、「『日本歴史』第五三七号、平五・二）や、「第十章 日中禅林における疏から表への展開」（『日本歴史』第五八八号、平九・五）という御論考が収録されており、今までとは少し異なった視点で、絶海と中国が論じられている。後者で論及されている主な資料は、『蕉堅藁』の疏と、絶海が起草した応永十年の表（『善隣国宝記』巻之中・応永九年条所収）である。要するに氏は、①絶海を通して五山僧が外交官の任に堪えうる士大夫的教養を十二分に具えていたこと、②疏から表という流れの中で、室町幕府が明朝との国交を開くにあたり、五山僧を外交文書の起草者として登庸する必然性があったこと、の二点を主張されている。今後も、氏の動向からは、目が離せない。

注

(1) 引用は五山版、作品番号は蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』(清文堂、平一〇)による。返り点は、江戸の版本(寛文十年版か無刊記本)等を参考にして、私に施した。句読点も私に施した。

(2) 伊東卓治氏は「絶海中津の墨蹟」(山地土佐太郎編『絶海国師と牛隱庵』所収、雅友社、昭三〇)の中で、「絶海は詩文を以って知られているが、又能筆を以つても知られた名僧である」「絶海の墨蹟を通じてその筆の跡を尋ねてみると、唐様振りの筆道は、元の趙子昂一派の、所謂元代正当派の一風をうけつぐもので、行儀のいゝまことに穏当な書風といつていゝ。これは一つには、彼の性格の格をはずさぬ品のよさにも依ると思われるが、主たる点は、彼が入明して元末明初の当時の書風の一つを伝襲した所にあるとしなければならぬ」「絶海の墨蹟に、その師事した両師(季潭と清遠、朝倉注)の書風の見えることは、まことに興味深いものである。少しく弱く清らかなるものは清遠懷渭の筆蹟に似、筆力あつてこくのあるものは季潭宗泐に似ていることは、注目すべき特徴である」と、示唆に富んだ意見を提示しておられる。

(3) 『蕉堅藁』の古注釈書としては、建仁寺両足院蔵『蕉堅稿考』(高峰東峻著)や松ヶ岡文庫蔵『蕉堅藁別考』が有名である。戸田浩暁氏「松ヶ岡文庫蔵『蕉堅藁別考』——その校訂と補注——」(『大倉山論集』第八輯、昭三五・七。後に『中国文学論考』(汲古書院、昭六二)所収)、同「蕉堅稿考と蕉堅藁別考について」(『大東文化大学創立六十周年記念中国学論集』、昭五九・一二。後に『中国文学論考』所収)参照。

(4) 北村沢吉氏『五山文学史稿』(富山房、昭一六)。

(5) 松山秀美氏「古典と土佐」(『絶海国師と牛隠庵』所収)。

(6) 古沢未知男氏「僧絶海の詩風」(『九州中国学会報』四、昭三三・五)、大野実之助氏「絶海と蕉堅稿」(『漢文学研究』一〇、昭三七・一〇)。

(7) 蔭木英雄氏「義堂周信・絶海中津」(『仏教文学講座』第三卷「法語・詩偈」所収、勉誠社、平六)。

(8) 玉村竹二氏『五山文学』。

(9) 蔭木氏は『中世風狂の詩——一休『狂雲集』精読抄——』(思文閣出版、平三)において、「私(蔭木氏、朝倉注)は、『狂雲集』は『碧巖録』の室町版なり。と放言したくなるのである」(三五九頁)と記されている。

第二節 本研究の目的および方法

今日、禅宗が、わが国の社会(政治・経済等)や文化(宗教・文芸・芸能・絵画・茶道・建築・庭園等)に齎らした、主に精神的な側面における影響には測り知れないものがある。稿者はその実態の解明に興味を抱き、文

芸の面すなわち五山文学を追究することによって明らかにできないものか、と考える。「五山文学」とは、鎌倉・室町時代に五山派の禅僧によって作成された漢詩文を言う。その研究状況は、歴史学の分野では、史料として頻繁に援用されるにもかかわらず、文学の分野においては、ともすれば「傍流の文学」として敬遠される嫌がある。禅僧が抄者である「抄物」は、専ら国語学の分野で活用されている。このような状況を鑑みると、稿者は、早急に五山文学を中世文学史、さらには日本文学史の中に正確に位置付ける必要を感じる。

さて、稿者は、数多くいる禅僧の中でも、とくに絶海中津（一三三六～一四〇五）に注目した。その理由は、第一に、前節で見たように、彼が、法兄の義堂周信（一二二五～八八）とともに「五山文学の双璧」と称せられ、詩文に秀でていたことが挙げられる。また、中国に留学したり、三代將軍足利義満（一三五八～一四〇八）と衝突したり、相国寺に三住したり、五山派の中で最大勢力である夢窓派の一員で、自らも多くの弟子を育成したり、經典や外集の講義をする一方で、自身の説が抄物の中に引用されたりなどして、五山禅僧が持つあらゆる側面を、絶海はすべて兼ね備えているように思われたからである。彼の伝記や作品を追究して行くと、五山文学やそれを取り巻いた状況を把握しやすいのではないだろうか。ところが、前節で見たように、禅僧の中では著名な絶海でさえ、驚くほど基礎的な事柄が明らかにになっていなかったり、研究成果が無批判に踏襲されていたりするものが現状である。何よりも、江戸時代の江村北海（一七一三～八八）による評価が、現在においても、しばしば引き合いに出されている。これも、ひとえに研究者不足に起因するのだろう。例えば、同じ中世という時代でも、和歌研究に目を向けてみると、藤原定家や西行を研究対象にする人は、多数存在する。翻って五山文学研究では、

一人の研究者が何人もの作家（禅僧）を掛け持ちしているという状態で、概説書やシリーズ物や注釈書の類を除いて、特定の禅僧に関する研究書は、殆ど出版されていない。¹したがって、稿者は、まずは絶海に焦点を絞り、先学の成果を確認しながら、基礎的な事柄を、逐一明らかにして行きたいと思う。そして、特定の禅僧に関する研究方法を確立するとともに、中世のみならず、各時代の作家と、容易に比較、検討できるレベルにまで研究水準を高めたい。やや内発性に欠ける研究動機かも知れないが、五山文学研究に今以って必要なのは、基礎的な作業であり、その積み重ねによって、絶海作品の文学性や五山文学の全容が明らかになり、やがては禅宗の精神美の概要も説明されるものと信じている。

なお、一口に「基礎的な事柄」と言っても、それをすべて、具体的に規定することは不可能である。当然、本研究で取り扱う事柄以外にも、「基礎的」という範疇に含まれる事柄はあるだろうが、稿者は稿者なりに、絶海研究において最優先すべき事柄を選んだつもりである。ただし、基礎的であるが故に、個々の事柄の独立性が強く、章や節同士の繋がりが弱いのが、本研究の弱点である。以下、章立ての概要を簡単に記す。

前編を伝記研究、後編を作品研究とした。まず、前編については、第一章では、玉村竹二氏の呼び掛けに応じて、『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）の本文を再検討する。同年譜の記述内容の正否が、即絶海の履歴を左右するので、ある意味、重要な研究テーマと言えよう。第二章では、『仏智年譜』と、もう一方の年譜である『勝定国師年譜』とを比較する。これも結局は、両年譜の関係を明らかにして、絶海の履歴を確かなものにするための試みである。このように基本史料の性格を確認した上で、第三章において、両年譜に加え

て、『蕉堅藁』、義堂の『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）などを考察することにより、絶海の履歴に、関東に再遊したことを、新たに付け加える。じつは、本章の研究テーマは、『蕉堅藁』の作品配列に注目するうちに、どうしても説明できない作品群（六十〜六十八番詩）が存したことから、思い立ったものである。『蕉堅藁』の作品配列については、後編第二章で言及する。第四章では、絶海の人物評に関して言及し、彼が「坦率の性」（「さつぱりとして飾らない」という意。『日工集』至徳三年（一一三八六）二月三日条に基づく）の持ち主であったことを指摘する。稿者が本章を執筆したのは、先人の意見が錯綜していたこともあるが、禅僧を客観的に見ることに、言い換えれば、禅僧を人間として見ることを主張したかったからである。抑も五山文学は、ある意味、*リ*曖昧*リ*な部分を有している。なぜなら、本来、仏道修行に専念すべき禅僧が、自由に精神を解き放ち、膨大な量の作品を残しており、しかも、日本人でありながら、漢文で作成しているからである（「和習〈臭〉」が見られる）。それ故に、そのことを手厳しく批判する人もいる。^②稿者は、その意見に対して反論はできないが、当時の禅僧を取り巻く社会状況や、文化水準を勘案すると、禅僧を擁護したい気持ちになるのである。われわれ俗人は、どこか知らないうちに、求道者（出家者）を*リ*超人化*リ*偶像化*リ*してはいまいか。そして、らしからぬ求道者を、心のどこかで排斥してはいまいか。彼らも求道者である前に、一個の人間である。色眼鏡を掛けずに、客観的に彼らの行動や作品を分析し、その分析結果を追究すべきではないだろうか。ある先学は「本物の禅詩が読みたい」と述べておられたが、このような態度では、五山文学の表現性や、心の襞の内側を追究することはできないように思う。以上のような考えから、稿者は、絶海の間人像をいま一度、捉え直そうと思ったのであ

る。なお、本編の終わりには、絶海の略年譜を付しておいた。

つぎに後編について。絶海の作品は、『蕉堅藁』と『絶海和尚語録』（以下、『絶海録』と略す）に収められているが、主に前者を研究対象とした。その理由は、前者が詩文を中心に編集しているのに対して、後者は法語や偈頌を中心に編集しており、稿者は今回、文学研究に重点を置いているからである。勿論、法語や偈頌にも文学的表現は見受けられるが（偈頌の形式は、文芸詩と全く変わらない）、その内容に作者（禅僧）の悟境が反映しており、詩文とは解釈基準が異なってくるのである。語句の用例レベルで利用するのは、全く構わないと思う。なお、絶海の場合は、本人が文芸詩と偈頌とを区別しているが、絶海以前の禅僧は、そのような区別をしていない（偈頌のみだったり、詩型で分類している。絶海には大慧派の影響がある。後編第三章参照）。よって、これから五山詩の評価基準を考えて行く場合、文芸詩と偈頌を区別するのではなく、一括して考察しなければならぬいのかも知れない。³⁾

さて、第一章では、『蕉堅藁』の諸本を概観する。最近まで『蕉堅藁』の翻刻本文と言えば、上村觀光氏の『五山文学全集』所収本（明三九）しかなく、同集には、書誌学上および校勘技術上の処理の不徹底さが目立っている。勿論、当時の学問の風潮もあったのであろうが、『蕉堅藁』の伝本整理や、それに基づく底本、校訂本の認定は、早急な作業である。第二章では、『蕉堅藁』所収作品の制作状況（時期・場所等）を明らかにして、その配列順序に関して言及する。詩歌作品の詠作状況を明らかにすることが、重要かつ難解であることは、前節で寺田透氏のご指摘を見た通りである。やはり作家の履歴の把握具合が、この作業の進行を大きく左右するだろう。

また、実際、禅僧の作品集の配列順序は、何かと問題になるので、そういう意味でも、具体的に『蕉堅藁』を検証する意義は大きいと思う。第三章においては、絶海と自然の関わりを論ずる。文学と自然の関係は、洋の東西を問わず、非常に深いものがあるので、『蕉堅藁』の自然描写に注目することによって、同書の表現特徴や、そこに現われる絶海の内面性・精神性・主体性の一端に触れることを目指した、文字通りの試論である。なお、本章を中心に、稿者は今回、試みに『中華若木詩抄』や『三体詩素隠抄』をかなり利用している。第四章では、『蕉堅藁』をはじめとして、五山文学作品に屢々見られる禅月受容の実態・様相を、第五章では、『蕉堅藁』『絶海録』『空華集』を中心に、五山文学作品に頻繁に見られる和韻詩の様相に迫っている。ともに絶海に限った研究テーマではなく、用例の羅列に終始した観のある論文であるが、中国の詩人との影響関係や、作詩法などを整理するような基礎的な作業なくして、五山文学研究は深まって行かないように思う。

最後に訓読に関して述べておきたい。最近、漢文訓読の、いわゆる伝統的な訓みを改める向きがある。例えば、入矢義高氏による岩波文庫の『碧巖録』上・中・下（平四〇八）。解題には「本書は、朝比奈宗源氏の旧文庫版（昭一二、朝倉注）が伝統訓みに従っていたのに対し、唐・宋の口語の語意に即して内容を語学的に正確に明らかにしようとするもの」とあるが、要は、当時の人が実際に読んでいた訓み方（誤読も含む）を、原文の解釈に即した訓み方に改めんとしたこと、さらに言えば、『碧巖録』をわが国の禅僧の教科書としてではなく、純粋な中国の思想書、文学書として読まんとしたことを言っている。また一方で、明らかな誤りは訂正しなければならぬが、「特に禅門においては古来独特な訓み方・言い回しが伝えられ、それが現代における禅

門行持の法語・法戦式等々において現行しているのが実状⁴なので、宗門の慣例的な訓みを、無闇に変更すべきではないという意見もある。結局、わたくしは、この訓読改訂問題は、読者がどの立場に立って作品を読むか、が問題なのではないか、と思う。宗門、国文学、国語学関係者は伝統的な訓みを尊重するだろうし、中国文学関係者はそれを改訂しようとするだろう。

翻って、『蕉堅藁』の訓読について考えてみたい。注釈書類の訓読の傾向は、前節で触れたので、縷述しないが、わたくしは、今のところ江戸の版本に従うのが妥当ではないか、と考えている。後編第一章で詳述するが、『蕉堅藁』の諸本には版本と写本があり、版本には室町初期版（五山版、訓点ナシ）、寛文十年（一六七〇）版（訓点アリ）、無刊記本（訓点アリ）、写本には国会図書館蔵（寛政十年（一七九八）書写、跋文ナシ、訓点ナシ、頭注・傍注アリ）、大阪天満宮御文庫蔵（嘉永二年（一八四九）書写、『絶海録』所収の真讚および自讚全作品を含む、訓点アリ）、内閣文庫蔵（書写年不明、訓点ナシ）、彰考館蔵（未見）がある。いずれも本文は一〇行二〇字で（序・跋は一〇行一七〜八字）、諸本間に詩文の取捨による異同もないので、同一系統と言えよう。諸本の中で最も古いのは五山版で、寛文十年版は五山版をもとにして、それに訓点を付して刊行したものと思われる（無刊記本は、寛文十年版を覆刻）。川瀬一馬氏『五山版の研究』上巻（日本古書籍商協会、昭四五）には、つぎのような記述がある。

また室町時代は南北朝よりも開版が盛んではないが、室町時代の傾向として注意すべきは、五味禅・臨濟録・碧巖集・聚分韻略等、特定の禅籍類が各地で頻繁に印行せられる様になったことである。これは一には

種々な禪録が五山版の印行で行き互ったといふこともあるかもしれないが、——（事実、それらを師弟相伝して大切に譲り伝へてゐる。すべての禪籍に悉く訓点注解等の書入が詳密であつて、十分に読解せられ、読みこなされてゐた跡は、現存遺品が何よりよくこれを示し、それだけ禪の理念は全体として行き互り、よく消化されて来たことを、物語つてゐる。それがそっくり次の江戸初期に附訓刻本として出版されたのである。）——
——実は室町時代に於ける禪僧の修行法が前代とは変化をしてゐる事実を示すものとも考へられるのである。

（二三頁。傍線部は私に施した）

傍線部を参考にして、『蕉堅藁』の場合を考えてみると、江戸の版本（寛文十年版か無刊記本）に見られる訓点は、同時代のみならず、室町時代初期から江戸時代にかけての、『蕉堅藁』読解の集大成と見ることはできないだろうか。以上のことから、わたくしは江戸の版本に注目した。

注

（1）管見の範囲では、中本環氏『一休宗純の研究』（笠間書院、平一〇）と朝倉尚氏『就山永崇・宗山等貴 禅林の貴族化の様相』（清文堂、平二二）ぐらいである。

（2）入矢義高氏「五山の詩を読むために」（新日本古典文学大系48『五山文学集』、岩波書店、平二二）、尾崎雄二郎氏「抄物で見る日本漢学の偏差値」（新日本古典文学大系53『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』、岩波書店、

平七)等。

(3) 文芸詩と偈頌の批評規準が異なり、五山文学を一つの価値基準で割り切ることの困難さを主張されたのは、小西甚一氏である。「詩と禅思想——五山の漢詩——」(『国文学』二八—四、昭五八・三)、
「雪村友梅と形而上詩——」(『文学・語学』五八、昭四五・一二)等。稿者は、今のところ氏に反論する手だてを持ち合わせていない。

(4) 大谷哲夫氏『訓註 永平広録』上卷(大蔵出版、平八)、《凡例》・(三)「訓読」について。

前
編

伝
記
研
究

第一章 『仏智広照浄印翊聖国師年譜』の再検討

はじめに

絶海中津（一三三六～一四〇五）は南北朝時代から室町時代前期にわたって活躍した禅僧で、義堂周信（一二二五～八八）と並んで、その漢詩文は「五山文学の双璧」と称せられている。

現在、絶海には二種類の年譜が残されている。一つは『仏智広照浄印翊聖国師年譜』、もう一つは『勝定国師年譜』である。絶海本人によって書き記されたものが、詩文集（『蕉堅藁』）と語録（『絶海和尚語録』）に限られるので、絶海の履歴をたどっていく作業において、これらの年譜は基本的な伝記史料と言えよう。にもかかわらず、これまで、両年譜に関して十分な検討が行われてきたとは言いがたく、玉村竹二氏が、『絶海年譜』に就ての疑義（『日本禅宗史論集』下之二所収）や、『日本の禅語録』八「五山詩僧」（講談社）のなかで言及されているに過ぎない。本稿では、とくに『仏智広照浄印翊聖国師年譜』の記事本文において従来から問題となつている箇所をいま一度確認し、さらに考察を加えてみたい。

一 『仏智広照浄印翊聖国師年譜』について

『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）という書名は、絶海が、応永十六年（一四〇九）

に後小松天皇（一三七七〜一四三三）から「仏智広照国師」という号を追諡され、同二十三年（一四一六）に称光天皇（一四〇一〜二八）から「浄印翊聖国師」という号を加諡されたことに由来する。この年譜は、絶海が示寂してから約二十年ほどたった応永三十年（一四二三）に、絶海の法嗣である叔京妙禰が撰述したとされている。『国書総目録』によると、『絶海和尚語録』の付録として、寛文十年（一六七〇）版本（平楽寺村上勘兵衛刊行）にはじめて付された。¹⁾文化十二年（一八一五）版本（西山招慶禪院蔵版）にも付されているが、同版本は寛文十年版本を覆刻したものである。宗政五十緒氏『近世京都出版文化の研究』（同朋舎出版）によると、村上平楽寺（主人は勘兵衛）は、殊に日蓮宗関係書の出版・販売で知られていた書肆である。また、同書には、寺院蔵版書の印刷および販売について、以下のように記されている。

江戸時代の出版図書には寺院の蔵版書が多い。とりわけ、仏書にははなはだ多い。このような蔵版書の出版には寺院自体が直接に印刷・販売の業務を行なうのではなく、特定の本屋にその業務を委託するのである。この場合、その本屋はこの蔵版書の支配人と呼ぶ。
（一四〇頁）

なお、『仏智年譜』は『大正新修大蔵経』第八十卷「続諸宗部」と、『続群書類従』第九輯下「伝部」とに活字化されて収録されており、前者の底本は文化十二年版本である。本章における本文の引用は、『大正新修大蔵経』第八十卷による。

さて、『仏智年譜』は、絶海が誕生してから示寂するまでの履歴が、興味深い逸話を交じえながら年を追って綴られており、よく纏まったものである。『延宝伝灯録』や『本朝高僧伝』（ともに卍元師蛮著）、『五山文学小

史』や『五山詩僧伝』（上村観光氏著）、『五山文学史稿』（北村沢吉氏著）、『五山禅僧伝記集成』（玉村竹二氏著）、『岩波日本古典文学大辞典』（名波弘彰氏執筆）、『国史大辞典』（葉貫磨哉氏執筆）等の「絶海中津」の項の記述も、この年譜に全面的に拠っている。言い換えれば、これらの諸書の記述は、『仏智年譜』の語るところからほとんど出ていない。ただし、玉村氏等によって、年譜本文に関する疑問点が提起されているので、以下に、他の資料と比較するなどして、それらを再検討してみたい。

二 問題点Ⅰ——出生について

建武三年丙子。師諱中津。字絶海。字乃全室和尚所_レ命。自号_三蕉堅道人_一。土佐州津野人。父藤原氏。母惟宗氏。禱_三五台山曼殊像_一。夢_レ授_レ劍有_レ身。吉祥而誕。実丙子歳十一月十三日也云云。（建武三年条）

『仏智年譜』の冒頭部分である。絶海中津——法諱は中津、道号（字）は初めは要関であったが、後、季潭宗泐（全室和尚、一三一八〜九一）によって絶海に改められたという。要関という道号は、義堂の『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）のなかでしばしば確認することができるといえる。また、同年譜には、絶海は別に蕉堅道人とも称したとあるが、彼の詩文集もまた『蕉堅藁』という。「蕉堅」という語が『維摩経』方便品第二の「是の身は芭蕉のごとく、中に堅き有る無し」という一文に拠ることは、『湯山聯句鈔』や『玉塵抄』に記されている。

ところで、絶海は、建武三年（一三三六）十一月十三日に土佐の津野に生まれ、父は津野氏（藤原氏）、母は

惟宗氏の出身であるというが、彼の誕生日については異説があり、『日本名僧伝』（『続群書類従』第八輯下所収）では十一月三日となっている。

絶海中津。建武三年丙子十一月三日誕。土州津野人。父藤原。母惟宗。応安元年戊申。三十三歳。南遊寓杭。中竺依全室季潭。永和二年丙辰。師四十一歳。明洪武九年春正月。太祖高皇帝召見英武楼。問以法要。秦対称旨。又召至板房。指日本図。顧問海邦遺跡。熊野古祠。勅賦詩云々。御製賜和云々。又賜以僧伽梨鉢多羅茶褐襪櫛栗杖并宝鈔若干。詔許還国。（下略）

『日本名僧伝』の作者および成立については、山田昭全氏がつぎのように述べておられる。

〔作者〕冒頭の児孫沢庵なる者の注記によれば、実伝宗真の語るところを古獄和尚が書いたという。宗真の閲歴は未詳。〔成立〕同じく冒頭の注記に「永正初元五月九日」とあるのを信ずれば、成立は永正元年（一五〇四）となる。〔群書解題』第四上）

絶海の出生日を記したものは、現在のところ『仏智年譜』（十一月十三日）と『日本名僧伝』（十一月三日）の二書に限られるが、『延宝伝灯録』や『本朝高僧伝』の絶海に関する記載と同様に、『日本名僧伝』の記載も『仏智年譜』——なかでも建武三年条と永和二年条と応安元年条——に全面的に拠っているとと思われるので、「三日」は「十三日」の誤写ではないか、とわたくしは考えている。参考までに、『仏智年譜』の永和二年条を挙げておく。『日本名僧伝』への影響は明らかであろう。応安元年条については、問題点IVで再び取り上げるので、（二）では省略する。

永和二年丙辰。師四十一歳。大明洪武九年春正月。太祖高皇帝召見_二英武楼_一。問以_二法要_一。奏对称_レ旨。又召至_二板房_一。指_二日本图_一。顧問_二海邦遺跡熊野古祠_一。勅賦_レ詩。詩曰。熊野峯前云云。御製賜_レ和曰。熊野_一。又賜以_二僧伽梨・鉢多羅・茶褐襪・櫛栗杖・并宝鈔若干_一。詔許_レ還_レ国云云。按_二正覚国師碑銘序_一。其略云。洪武八年秋七月。日本国遣_二使者_一来。考功監丞華克勤奏曰。日本有_二高僧夢窓禪師_一。其入滅已若干年。而白塔未_レ有_レ勤_レ銘。其弟子中津法孫中巽。有_レ慕_二中華文物之懿_一。特因_二使者_一而求_レ之云云。宋濂為_二之文_一云云。

(永和二年条)

絶海の両親に關しても確認しておく。まずは父について。横川景三(一四二九〜九三〇)の『補庵京華続集』(『五山文学新集』第一卷所収)には、つぎのような文章がある。

土佐之國、山川孕秀、津野之保、草木識名、維公、承大中臣苗孫、差肩藤橘、而世奉細川氏英主、搥袂源平、風標玉立、節操氷清、出入有忠有孝、友愛難弟難兄、(中略)昔応永天子勅靈松祖受衣禁中、而公出其葭葦以執師資之礼、後普広相国命哦松翁賦詩席上、而公繼其箕裘以同父子之榮者也、(下略)

〔津野刑部侍郎像讚〕(文明十四年(一四八二)作)

これは、津野元藤が描かれている肖像に、横川が賛語を書き加えたものである。「昔、応永天子(称光天皇)、靈松祖(絶海中津)に勅して、衣を禁中に受く。而して、公、其の葭葦に出で、以つて師資の礼を執る」という記述から、津野元藤が絶海の遠い親戚に当たることがわかる。津野氏については、『姓氏家系大辞典』(角川書店)の「津野」の項を見ると、

2 在原氏族 土佐国高岡郡津野庄より起る。伝へ云ふ、在原朝臣經高、高岡郡の山中に移り、深山を伐り開きて里となし、椅原と号す。其の五代孫弥次郎高行、津野庄一円を領し津野氏と称す。(中略)その後、永禄中、津野勝興(勝興)に至り、長曾我部氏に亡されて、元親の三男親忠、遺跡を襲ひて、津野孫太郎と称す。(下略)

3 藤原姓 前項にも見ゆる如く、土佐の津野氏は在原姓と云へど、諸書に藤姓とするも多し。(下略)という記述がある。津野氏の系図は、『尊卑分脈』や『系図纂要』にも見当たらない。絶海の父が、長曾我部氏と並存した土佐の豪族津野氏の出身だった可能性は非常に高いが、津野氏が在原氏の流れを汲むのか、それとも藤原氏の流れを汲むのかは明らかではなく、室町時代の頃からすでに混同していたようである。『補庵京華続集』には「維おもふに、公(津野元藤)、大中臣の苗孫を承け、肩を藤橘ならに差さぶ」という記述が見られる。「大中臣の苗孫を承け」という箇所注目すると、藤原氏と理解しているようであるが、「肩を藤橘に差さぶ」という箇所注目すると、在原氏とも思われる。結局、横川は、藤原氏と在原氏を混同していたのだろう。ただし、『仏智年譜』は藤原氏、『延宝伝灯録』や『本朝高僧伝』、『日本名僧伝』も同じく藤原氏と理解している。正宗龍統(一四二九〜九八)の『禿尾長柄帚』上(『五山文学新集』第四卷所収)にも、

維津野氏、厥姓曰藤、文経通貫、武備兼能、忠肝磨三尺之水、詩肺鏤一条之氷、(下略)

という文章があるように、藤原氏とする諸書は少なくない。ちなみに津野氏の当主には代々詩文に優れたものが多く、京都五山と深い関わり合いを持っていた。なかでも津野之高は、「後、普広相国(足利義教)、哦松翁(津

野之高)に命じて、詩を席上に賦せしむ」という記述が見られるように、永享六年(一四三四)に六代將軍足利義教(一三九四—一四四一)の前で詩をつくり、その才能を誉め称えられたという話は、当時、評判になったよううで、『翰林葫蘆集』や『玉塵抄』にも収載されている。

つぎに母について。蔭木英雄氏は、『中世禅林詩史』(笠間書院)の「絶海中津」の項において、「高岡郡佐川邑乗台寺棟札」(『古事類苑』より引用)に、

貞治六曆丁未四年、惟宗次郎法師、大檀那惟宗師光、大願主惟宗信光、惟宗釜鶴丸、

とあることから、母の惟宗氏も土佐の豪族だったと指摘されている。後にいま一度触れるが、『日工集』応安元年(一三六八)十二月十七日条には、

十七日、津要関書至、亡母三十三忌過附_二商船_一渡海、(下略) (辻善之助氏『空華日用工夫略集』)

とある。九州で入明を間近に控えていた絶海が、関東の義堂に宛てた書簡のなかで、今まで渡航しなかったのは、亡母の三十三年忌が過ぎるのを待っていたからであるという旨を告白しているのだが、この時、絶海は三十三歳、よって彼の母は、彼を産んだ直後に亡くなったことになる。

三 問題点Ⅱ——建仁寺入寺と龍山徳見

文和二年癸巳。師年十八。掛錫於東山建仁。与信義堂怙先覚勲月舟寿天錫等。同慕龍山和尚之高風。往而依之。次大林和尚董東山席。俾師登侍薬職。師凡隸東山恰闕一紀。雖風雨寒暑未曾怠禅

誦。毎更_二主法住持_一。皆美而為_二精進幢_一爾。

(文和二年条)

この記事によると、絶海は、文和二年(一二三三)に義堂、先覚周怙、月舟周勛、天錫周寿等と建仁寺に掛錫し、龍山徳見(第三十五世)、『扶桑五山記』『五山歴代』による。一二八四(一三五九)に師事した。ついで、大林善育に随侍して湯薬侍者を勤めたという。絶海が義堂や天錫と同時期に建仁寺に入院したことは、『日工集』や『蕉堅藁』所収の「寿天錫を祭る文」(一六五、作品番号は蔭木氏『蕉堅藁全注』による)で確認することができるのだが、ここで、疑問が生じてくるのは、龍山が建仁寺に住していた期間についてである。玉村氏が指摘されているように、龍山の語録である『黄龍十世録』所収の「龍山和尚住山城州東山建仁禅寺語録」を見ると、観応元年(一二三〇)八月五日の入院から翌々年文和元年(一二三二)の達磨忌(十月五日)までで、上堂法語が途絶えているのである。そして、つぎの住山である南禅寺に入院するのが文和三年(一二三四)三月二十八日のことなので、『黄龍十世録』所収の「山城州瑞龍山太平興国南禅禅寺語録」、『扶桑五山記』、『五山歴代』、いったい龍山は、この一年半の間、どこに寓していたのであろうか。玉村氏「公帖考」(『日本禅宗史論集』下之二所収)によると、

さて、五山派官寺の住持の任期は三年二夏であるということが古くからいわれている。三年二夏とは、大概の場合、七月の解制後に住持の交替が行われ、それから足かけ三年、翌々年の七月の解制迄満二年在任し、その間に四月十五日結制から七月十五日解制まで、九十日間の安居(夏)を毎年一回、二年合せて二回、即ち二夏を勤めるといふことであるといわれたが、事実はそうではなく、二年一夏であったようである。(中略)

中々規定通りには行われていない。

とも、

ところが応仁乱後になると、五山派官寺の住持の任期が三十六月にとられている。こう採る方が本来の制らしい。三年という任期の意味を足かけではなく、満三年に採っているのである。それで諸山の公帖が出てから、同一人に十刹の公帖を出すのには、三十六月を経過しなければならぬとしている。十刹から五山までも同様である。これは、三十六月を官寺住持の任期と解しているからである。

(六三九頁)

とも記されている。実際のところ、絶海は、龍山の薫陶を受けたのであろうか――。

『建仁寺住持位次簿』（建仁寺大中院蔵・史料編纂所謄写本）で、絶海の後住の「大林善育」の項を見ると、三十六世 大林和尚 名善育。勅諭僧海禪師。嗣無象照。文和三年入寺。応安五年壬子十二月三日寂。

という記述がある（『扶桑五山記』、『五山歴代』には、大林が建仁寺に入院した年月日が記されていない）。つぎの住持である大林が入院したのが文和三年のことなので、絶海が入院した文和二年の頃は、知足院（建仁寺の塔頭）に退隠していたであろう龍山がいまだに住持的な役割を担っていたのではないだろうか、とわたくしは考えている。

四 問題点Ⅲ——東遊と報恩寺

貞治三年甲辰。是歳一策翩然有「関東之行」。万寿石室玖公以「偈餞」云。仲靈蚤歳出「鐔津」。五百年来間世人。

蠹簡陳篇消_二白昼_一。紙衾瓦鉢樂_二清貧_一。非_二唯_一広城海中宝_一。便是諸方席上珍。拓_二出_一東山左辺底_一。何妨侍者
続_二芳塵_一。建仁別源支公有_二送行偈_一。文繁不_レ録。到_二相州_一省_二法兄義堂信公於南陽_一。遂助_二化_一於建長法兄青
山和尚_一。次仏滿禪師大喜忻公視_二福山之篆_一。盛開_二法席_一。師在_二仏滿会下_一。以_二上流_一見_二賞異_一之。關東都
元師瑞泉寺殿。以_二法門昆仲_一厚礼遇_レ之。
(貞治三年条)

わたくしは、絶海の關東行を前後二度にわたって考えているが(本編第三章参照)、これはその初度の旅にあ
たる。この記事によると、貞治三年(一一三六四)、絶海が一念発起して京都から關東へ赴いた際、万寿寺の石室
善玖(一一二九四〜一三八九)や、建仁寺の別源円旨(一一二九四〜一三六四)が送行の偈を作ったという。『五山
歴代』を見ると、「万寿禪寺歴代」の項には、

二十八 石室善玖 嗣古林茂

とあり、「建仁禪寺歴代住持位次」の項には、

四十四 別源円旨 嗣東明日 貞治三年六月入寺 貞治三年甲辰十月十日寂塔定光 入牌 洞春庵

とある。石室は第二十八世、別源は第四十四世、別源は、貞治三年十月十日に住持のまま示寂しているので、絶
海が京都を離れたのは、その日より以前ということがわかる。

義堂が春屋妙葩(一一三二一〜一八八)の命を受けて關東に赴いたのは、延文四年(一一三五九)八月のことである
、『日工集』。絶海は關東に着くと、まず南陽山報恩寺の義堂の許を訪れたとあるが、ここで、また一つの疑問
が生じてくる。と、いうのは、『日工集』によると、その頃、報恩寺はいまだに創建されておらず、義堂は円覚

寺の後堂首座を勤めていたりしていたからである。『日工集』 応安四年（一二三七一）十月十五日条に、

十月十五日、余_三応_三上杉兵部謹公請、創_二一利於鎌倉城北_一、名曰_三報恩護国_一、山称_三南陽_一、關_レ基演唱訖、余先試把_レ鑊、開_レ土_三下_一、入_三實中_一而後、与_三檀那_一運搬一次、

とあるように、義堂が関東管領上杉能憲（一二三三三〜七八）に請われて報恩寺を建立したのは、七年後の応安四年十月十五日のことである。なお、『日工集』の内容について、玉村氏は以下のように述べておられる。

流布本の体裁 流布本の内容は、正中二年閏正月十六日、義堂の誕生より、嘉慶二年四月四日、その示寂に至る凡そ六十四年間に亙るが、それを大体次の四部分に分けて考え得る。

一、正中二年より暦応四年迄。義堂の手に成らざる部分。義堂を指して「師」といい、義堂一族を指して「其族」と言っている。義堂の逸事を記して詳かであり、古老よりの聞書と思われる箇所が多い。

二、康永元年より貞治五年迄。この部分は義堂の手に成る事は明かであるが、未だ日記体ではなく、自暦譜体の追憶記で、記事が甚だ簡単にして、殆ど日付に係けてない。

三、貞治六年より嘉慶二年三月十一日の條の前半迄。この部は義堂の真の日記であり、大体日々記し続けた、その病篤くして執筆不可能に陥る日迄に及ぶ記事の抄出である。但し同日の條中、日付が二箇所あったり、前後する兩日の記事の順序が転倒している等の不整頓もあり、年末巻末に追抄記事がある。

四、嘉慶二年三月十一日の條の後半より同年四月四日迄。この部は義堂危篤により、恐らくはその門弟が後に書加えたと思われる部分である。その後には葬送仏事・遺旨及び略伝の附記がある。

更に日記を終った後に、義堂が始終気に懸けていた、先師夢窓疎石の碑銘（宋濂撰）及び之が将来に關する緣由記を収めて卷末を飾っている。四卷四冊。

（「空華日工集考」、『日本禪宗史論集』下之一所収、七八頁）

ところで、『鎌倉九代後記』（『改定史籍集覽』第五冊所収）の「心安」の項には、

同四年十月、報恩寺供養、上杉能憲執行ス、養父伊豆守重能、去建武二年建立ニヨリテ也、

という記述が見受けられる。これによると、建武二年（一一三三）に、報恩寺の前身となる寺が、能憲の養父である上杉重能によつてすでに建立されており、その寺に義堂が住していたと解することもできようか。なお、『鎌倉九代後記』の著者や成立については未詳である（総目解題）。

さて、絶海は建長寺に籍を置いて、青山慈永（第三十八世、『扶桑五山記』による）や大喜法忻（第三十九世、『扶桑五山記』による）の会下にあつても、優秀な者として注目されていたようである。絶海には、関東管領足利基氏（一一三四〇〜六七）も親炙していた。

五 問題点IV——入明について

応安元年戊申。師三十三歳。大明洪武元年二月。航溟南遊。寓杭之中竺。依全室禪師。甚器重之。命俾作燒香侍者。後復又轉藏主。師登于靈隱。謁于道場。周旋於用貞良公清遠渭公之間。師嘗自謂曰。余入大明。最初依清遠於道場。以侍局命。辞不就。遂依中竺季潭和尚云。其後師未為中

竺藏司_レ前。良用貞引以_レ靈隱書記_一。辞而不_レ就。故了堂_一公賜_レ師偈。有_下展_二開_レ仏手_一伸_二出_レ驢脚_一之句_上。雖_レ不_レ就_レ職用_二黄龍南事_一。偈曰。展_二開_レ仏手_一。伸_二出_レ驢脚_一。露柱灯籠。築著磕著。特為_二此事_一。參尋布單。枉教_二壳却_一。一顆如来藏裡珠。日用靈光常烜赫。中竺津藏主決_二志_レ此道_一。袖紙徵_レ語。書_二前偈_一以賜云。前
天童芥室唯一。
(応安元年条)

応安元年(一一三六八)、三十三歳の時に絶海は入明した(一般的に中国に遊学することを「南遊」と言う。ただし、鄂隱慧叟の『南游稿』は、主として四国在住中の作品が収められている)。この年は、太祖洪武帝(高皇帝、朱元璋ともいう。一三二八〜九八)が元を倒し、明を建てた年でもある。『仏智年譜』をはじめとして、絶海は二月に中国に渡ったとする記事が諸書に見受けられるが、『日工集』応安元年十二月十七日条に、つぎのように記されている。

十七日、津要関書至、亡母三十三忌過附_二商船_一渡海、河南陸仁、字元良、称_二雪樵_一、蘇州教授、避_レ乱漂_二泊博多津_一、已_二兩三年矣_一、近聞、青巾一統、而江南兩浙稍安、將_レ帰、聖福和尚称_二賞_レ之_一、有_二錦屏詩_一、発津在_レ近云々、雪樵詩叙曰、戊申夏四月、余自_二博多_一至_二高瀬_一、將_下附_二海杭_一、_航帰_中潮西_上、適与_二要関上人_一会_二于永楽蘭若_一、遂相共周旋者数日、斯文之誼、雅可_レ尚也、且言_二相州錦屏山水之秀_一并索_二余賦_レ之_一、因想_二像其勝_一、作_二四韻一首_一、併簡_二義堂禪師_一、(下略)

陸仁の詩の叙によると、戦乱を避けて博多に漂泊していた陸仁は、応安元年の四月に高瀬(今の熊本県玉名市)に移り、絶海と邂逅したという。『蕉堅藁』所収の「寿天錫を祭る文」(一六五)にも「予、南遊するに_{およ}びて、

高瀬の津に寓す」と記されていることから、絶海は、当時、一般に中国渡航の出帆地とされていた豊前ではなく、肥後の高瀬を出発して中国へ向かったことがわかる。その時期については、絶海が義堂に宛てた書簡に、亡母の三十三年忌が過ぎるのを待ってから渡航したとあるので、十一月頃であろうか。よって、『仏智年譜』等に二月に中国に渡ったとするのは、中国に向けて京都を出発したという意に解するべきなのであろう。その際、同行した禅僧のなかには汝霖妙佐や如心中怒がいた（『延宝伝灯録』『本朝高僧伝』『日本名僧伝』）。

入明した後、絶海が最初に参じたのは、道場山の清遠懷渭（竹菴和尚）である。『蕉堅藁』の巻頭には、「流水、寒山の路、深雲、古寺の鐘」という句で有名な「真寂竹菴和尚に呈す」（一）という詩がある。同寺においては侍者に請われたのだが、辞退している。つぎに絶海が師事したのが、中天竺寺の季潭宗泐（全室和尚）である。同寺においても重んじられ、その会下に焼香侍者や蔵主を勤めたりしている。中天竺寺における生活体験がよほど印象的だったのであろうか、『蕉堅藁』には「三生石」（四）や「冬日、中峰の旧隠を懷ふ」（一一）という詩が見られる（「三生石」とは中天竺寺の名勝、「中峰」とは中天竺寺のことである。『扶桑五山記』による）。そして絶海は、靈隠寺、道場山とうつり、用貞輔良と清遠の間を周旋した。ちなみに用貞には、結局は固辞したのだが、中天竺寺の蔵主になる前に靈隠寺の書記に誘われていた。清遠には、二度目の参叩ということになる。季潭は、臨済宗大慧派に属した笑隠大訢（蒲室和尚、一二八四〜一三四四）の法嗣であり、清遠や用貞も笑隠の直弟で、季潭と同門であったため、絶海は彼らと交わることにより、大慧派の家風——禅林の実用文書作成に際して四六駢儷文体使用の徹底化と、貴族社会の社交手段、或は教養としての純文芸（詩文）の賞玩——を継承し、

日本に伝えたのである（玉村氏『五山文学』、九二―一〇六頁参照）。

六 問題点V——『仏智広照浄印翊聖国師年譜』の撰者

応永三十年癸卯秋八月日 小師妙析撰

この記述は、『仏智年譜』の巻末部分にある。玉村氏は、数多い絶海の弟子（小師）のなかに「妙析」という僧は見当たらないので、「（叔京）妙祁」の誤りではないか、と指摘されている。確かに叔京は、玉村氏『五山禅林宗派図』（思文閣出版）によると、高峰顕日——夢窓疎石——絶海中津という法系を承けており、正長元年〔二四二八〕には高峰顕日〔二二四一―二三二六〕の『仏国応供広済国師行録』を撰述するなど、文筆に長けた禅僧だったようである。が、しかし、今のところ他の記録類にこそ見られないが、「妙析」なる禅僧が実在した可能性も残っている²⁾ので、わたくしは、『仏智年譜』の撰者を叔京と断定するには少し抵抗がある。

おわりに

年譜・行実・行録の類は、正確さが第一に要求される。逆に言うと、もしも誤謬があつたならば、それは、年譜（行実・行録）にとって致命的な欠点と言えよう。翻って『仏智年譜』を見ると、従来から不審な点が色々と指摘されており、玉村氏をして「もし叔京妙祁という直弟が編したならば、何故こんな誤りを犯すか不思議な点がある」とか、「こんな義堂の経歴の大綱を、絶海の直弟叔京妙祁が知らないとか、勘違いするとは迂闊過ぎる

ではないか」と言わしめている。たとえば、至徳元年（一三三八）六月、絶海は三代將軍足利義満（一三五八—一四〇八）に直言してその意に逆らい、摂津、讃岐、阿波と隠棲したのであるが、彼の帰洛に纏わる経緯について、『仏智年譜』至徳二年条と、『日工集』至徳三年二月および三月条とでは齟齬を来たしており、いまだに決定的な見解は出ていない。また、応永八年条に一括されてしまった絶海の示寂（応永十二年四月五日）に関する記事には、明らかに欠落があるろう。本章によっても、『仏智年譜』、あるいは絶海の伝記を多少なりとも見直さなければならぬ必要性が出て来たかも知れない。今後とも調査を続けていくつもりである。

注

（1）玉村竹二氏は、年譜の出処として、「江戸幕府の儒官の林家」や『群書類従』の編纂家たる塙保己一家を想定されている（『絶海年譜』に就ての疑義）。

（2）「叔京妙祈」という禅僧を主張するならば、「祈叔京」という別称の意味を吟味する必要があるだろう。「叔京妙祈」を主張する玉村氏は、「祈叔京」という別称に関して、

「祈」が多大の意であるから、道号も「京」という兆の十倍の数をあらわす字を用いて、名字相応せしめている。

（『日本の禅語録』八、一二六頁）

と述べておられる。

【付記】

『仏智年譜』その他の本文の引用に際しては、印刷上の都合のため、漢字の字体など表記を私に改めた場合がある。

*

*

人物考証に関しては、玉村竹二氏の『五山禅僧伝記集成』（講談社、昭五八）や『五山禅林宗派図』（思文閣出版、昭六〇）を参考にした。禅僧の名前は、道号（字）二字と法諱二字から成り、どちらか一方が明らかならば、その禅僧の素性を知ることが、割と簡単である。しかし、法諱の下一文字しか明らかになっていない場合は、その禅僧を特定することは、かなり難しい。以下同じ。

第二章 『仏智広照浄印翊聖国師年譜』と『勝定国師年譜』との関係

はじめに

現在、絶海中津〔一三三六〜一四〇五〕には二種類の年譜が残されている。『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）と『勝定国師年譜』（以下、『勝定年譜』と略す）である。前者は、応永三十年〔一四二三〕に、「妙祈」なる禅僧によって撰述された。それに対して、後者の成立年代および撰者は、今のところ不明である。同年譜中では、後小松天皇〔一三七七〜一四三三〕が「太上皇帝」、称光天皇〔一四〇一〜二八〕が「今上皇帝」と表現されているので、少なくとも称光天皇が在位した応永十九年〔一四一二〕八月二十九日〔正長元年〔一四二八〕七月二十日の間に、この年譜は成立したことになる。葉貫磨哉氏は「あるいは仏智広照浄印翊聖国師年譜の成立後にこれら年譜の拾遺的な意味で門弟の間で撰述されたのかもしれない」（『群書解題』第四下）と指摘されている。

さて、わたくしの見得た範囲では、年譜・行実・行録の類が複数存する禅僧は、絶海を除いてあまりいない。たとえば、夢窓疎石〔一二七五〜一三五二〕には『夢窓正覚心宗普济国師年譜』の他に、『夢窓正覚心宗国師塔銘并序』と『夢窓正覚心宗普济国師碑銘』がある。『群書解題』第四下によると、『年譜』は、観応二年〔一二三五一〕に夢窓が示寂した後約十年して、高弟の春屋妙葩〔一二三一〜一八八〕が撰述したものである。『塔銘』に

ついでには、文和三年（一一三五四）に春屋が東陵永瑱の許を訪れ、天龍寺雲居庵（開山塔）に建てる塔銘を得るために、夢窓の行実を録して依頼したという。また、『碑銘』については、貞治五年（一一三六六）に夢窓の門人義堂周信（一一三二五〜八八）が入明する同門の絶海に目子（作文の素材を箇条書きにした目録）を託し、当時随一の文豪宋景濂に撰文を依頼させたという。また、一休宗純（一一三九四〜一四八一）にも『一休和尚年譜』と『一休和尚行実』がある。両書の成立年代および撰者は、いまだに明らかになっていないが、葉貫氏は「この行実の内容は東海一休和尚年譜を抜萃したもののようで、一休の門弟が本師の塔銘を依頼する目子として、年譜を抄録してこの行実を編したものと思われる」とも述べておられる。

両年譜はどのような背景をもって作成されたのか、また、互いにどのような関係にあるのか——。本章では、この点に注目しながら、『仏智年譜』と『勝定年譜』に関する私見を述べてみたい。

一 両年譜の本文比較

禅僧の年譜類を概観すると、大体、禅僧個人の生涯は、誕生・修行期・社会活動期・死没という四つの時期に分けられよう。煩瑣ではあるが、論を進めていく上で必要であると思うので、『仏智年譜』と『勝定年譜』の各本文（『続群書類従』第九輯下所収。『仏智年譜』は『大正新修大藏経』所収本、『勝定年譜』は『大日本仏教全书』所収本で誤植を訂正した）を右の四期に区分し、併記する。そして、両年譜の本文を比較しつつ、記事内容の傾向を考えてみたい。両年譜の類似した文章には——線を、一方の年譜にその履歴が記載されていない箇所に

は★印を私に施した。

二 区分I——誕生

○『仏智年譜』

建武三年丙子。師諱中津。字絶海。字乃全室和尚所命。自号蕉堅道人。土佐州津野人。父藤氏。母惟宗氏。

禱五台山曼殊像。夢授劍有身。吉祥而誕。実丙子歳十一月十三日也。

○『勝定年譜』

師母禱五台山文殊。夢授劍有身。吉祥而誕。

禅僧の誕生に関する記事には、出生日や出身地、両親の出自等が記されるのが一般的である。が、『勝定年譜』には、そのいずれの事柄も記されていない。『仏智年譜』にはすべて明記されている。絶海は、建武三年（一一三三）十一月十三日に土佐の津野に生まれ、父は藤原氏（津野氏）、母は惟宗氏の出身である。

なお、禅僧のみに限らず、高僧の誕生には、母が見る瑞夢（吉夢）が纏わることが多い。試みに禅僧の年譜類（『続群書類従』第九輯上・下所収）を見てみると、大まかではあるが、以下のような四つの型に、その瑞夢の内容を分類することができる。

A 天体に関するもの（日・月・明星・雷・光等）を呑んだり、懐に入れたり、感じたりする。

〔例〕『千光法師祠堂記』（明庵栄西）、『夢臆正覚心宗普济国師年譜』（夢窓疎石）、『真源大照禅師龍山和尚行

状』（龍山徳見）、『普明国師行業実録』（春屋妙葩）等

B 劍や珠を呑んだり、抱いたり、感じたり、授かったりする。

〔例〕『広智国師乾峰和尚行状』（乾峰土曇）、『月篷見禪師塔銘』（月篷圓見）、『別源和尚塔銘并序』（別源圓旨）、『岐陽自賛』（岐陽方秀）等

C 仏教に関するもの（般若心経・普門品・蓮花・鉢盂・袈裟等）を、僧侶・太士・大夫等から授かる。

〔例〕『南院国師規庵和尚行状』（規庵祖圓）、『大燈国師行状』（宗峰妙超）、『固山鞏和尚行状』（固山一鞏）、『太清和尚履歴略記』（太清宗渭）等

D その他

絶海の母は、五台山の文殊菩薩に祈り、劍を授けられる夢を見て、絶海を身籠もったという。ちなみに、絶海と同郷である義堂の『空華日用工夫略集』によると、義堂の母も、裸足で五台山に参詣し、文殊菩薩に百日間の祈禱を誓って、一筋の白いもやが、文殊堂から自分の懐のなかへ入って来る夢を見て、義堂を身籠もったという。絶海誕生に纏わる瑞夢は、両年譜に見られ、先に挙げた分類によると、B型に属することになる。義堂の場合はA型である。

三 区分Ⅱ——修行期①（土佐、京都、関東）

○『仏智年譜』

★貞和四年戊子。師年十三歲。烏頭而隸天龍籍。正覺移而養老于西芳精舍。師時々往持(侍)。適月夜勵声唔呬。正覺定起灯下呼來試之。師輒掩卷暗誦。琅々如壑水之奔注。正覺云。此兒他日必為禦侮之器者。宜在叢林文字徒。可使役于茲哉。師固請之曰。見性在文字哉。執侍左右素願也。正覺奇其言。

★觀応元年庚寅。師是歲剃髮作沙弥。正覺時在西芳寺。命雲居葩首座曰。俾童蒙可執侍左右者來。師在旁聞曰。某以執侍為幸也。乞自行。葩公許之。師又侍正覺於西芳寺。正覺一日講円覺經。講畢而諸衲在相詰問未決。師在旁敢告以正覺所引之釈。所講之義。不謬一字。如指掌。衲子驚告碧潭。潭驚甚。而白正覺。正覺於此召師驗之悅。師自是入室。凡每見徵詰。応答如響。云子他日能支臨濟者歟。厚自愛耳。

★二年辛卯。師年十六歲。為大僧。師在天龍。一夏百日之間。每日四更一点坐禪。後徒跪而詣法輪。燒香禮拜。雖風雨不怠之。蓋專祈進白業無魔事也。

★文和二年癸巳。師年十八。掛錫於東山建仁。与信義堂。帖先覺。勲月舟。寿天錫等。同時慕龍山和尚之高風。往而依之。次大林和尚董東山席。俾師登侍菓職。師凡隸東山。恰閱一紀。雖風雨寒暑。未曾怠禪誦。每更生法住持。皆美而為精進幢爾。

三年甲午。是歲師年十九。建仁東堂放牛和尚結制。冬至心先庚三日設齋。就八坂法觀寺請五頭首。逐一登座說法。差僧問禪。而牛立座下証明。歲以為常地(也)。一歲隨例亦然焉。不差問禪之人。唯師一人隨伴耳。及乎第一座之升座。放牛向師鞠躬問訊云。煩侍者俾問禪也。師辞不獲。出衆問話。機弁捷給。流輩改觀。次每回頭首之升座。放牛亦命之如前。師橫機無所讓。愈出愈奇。於是一衆靡不為之歎服。叢林喧伝以為日矣(也)。

★貞治三年甲辰。是歲一策翩然有関東之行。万寿石室玖公以偈餞云。仲靈蚤出罈津。五百年来間世人。蠹簡陳篇消白昼。紙衾瓦鉢樂清貧。非唯広城海中宝。便是諸方席上珍。拓出東山左辺底。何妨侍者続芳塵。建仁別源旨公有送行偈。文繁不録。到相州省法兄義堂信公於南陽。遂助化於建長法兄青山和尚。次仏満禪師大喜忻公視福山之篆。盛開法席。師在仏満会下。以上流見賞異之。関東都元帥瑞泉寺殿以法門昆仲。厚礼遇之。

★四年乙巳。師年三十歳。当此時忻公力革囂風。凡叢林職事。非徳不举。率試以提唱偈頌。特拔典蔵論。次以却来遷侍香。

○『勝定年譜』

★土州有円通寺。師先施財所創建。師八歳。依此寺剪髮。自誓曰。成荷法之器。衆異之。

師十九歳。掛錫於建仁。放牛和尚差師為秉扠。五頭首之問禪。師横機無讓。一衆歎服。

禅僧の修行期に関する記事には、出家に至るまでの過程、師承関係、開悟の状況等が主に述べられる。たとえば、中巖圓月（一一三〇～七五）が曹洞宗宏智派（東明慧日）から臨済宗大慧派（東陽徳輝）に嗣法を変えたので、宏智派の人々から危害を加えられたという話（『仏種慧濟禅師中岩見和尚自歴譜』）や、一休が夜、鴉の鳴き声を聞いて大悟したという話（『一休和尚年譜』）はよく知られている。絶海の両年譜を見てみる。『仏智年譜』によると、絶海は、十三歳で蓬髪のまま天龍寺に入り、十五歳で剃髪して沙弥となり、十六歳で具足戒を受けて大僧となった。天龍寺、建仁寺、建長寺と次々に掛錫して、夢窓や龍山徳見（一一二八四～一三五九）、青山慈永、大喜法忻等に師事したという。一方、『勝定年譜』には、日本における修行の様子は全くと言ってよいほど記さ

れていない。ただし、八歳の時、土佐の円通寺で剪髪したことは、『仏智年譜』には見受けられない。

四 区分Ⅲ——修行期②（中国）

○『仏智年譜』

宓安元年戊申。師年三十三歲。大明洪武元年二月。航溟南游。寓抗之中竺。依全室禪師。禪師甚器重之。命俾作燒香侍者。後復又轉藏主。師登于靈隱。謁于道場。周旋於用貞良公。清遠渭公之間。師嘗自謂曰。余入大明。最初依清遠於道場。以侍局命。辭不就。遂依中竺季潭和尚云。其後師未為中竺藏司前。良用貞引以靈隱書記。辭而不就。故了堂一公賜師偈。有展開仏手。伸出驢脚之句。雖不就職。用黃龍南之事。偈曰。展開仏手。伸出驢脚。露柱燈籠。築著碯著。特為此事。參尋布單。柱教壳却。一顆如來藏裡珠。日用靈光常烜赫。中竺津藏主決志此道。袖紙徵語。書前偈以賜云。前天童芥室唯一。四年辛亥。是歲登徑山。省全室和尚。延以後堂首座。師辭不就云々。

永和二年丙辰。師四十一歲。大明洪武九年春正月。大祖高皇帝召見英武樓。問以法要。奏對稱旨。又召至板房。指日本図。顧問海邦遺跡熊野古祠。勅賦詩。詩曰。熊野峰前徐福祠。滿山草木雨餘肥。只今海上波濤穩。万里好風須早皈。御製賜和曰。熊野峯高血食祠。松根琥珀也応肥。當年徐福求仙藥。直到如今更不皈。又賜以僧伽梨。鉢多羅。茶褐襪。櫛栗杖。并宝鈔若干。詔許還国云々。按正覺国師碑銘序。其略云。洪武八年秋七月。日本国遣使者。來貢方物。考功監丞華克勤奏曰。日本有高行僧夢窓禪師。其入滅已若干年。而白塔未

有勤銘。其弟子中津。法孫中巽。有慕中華文物之懿。特因使者而求之云云。宋濂為之文云々。

○『勝定年譜』

師卅三。航溟南遊。寓抗之中竺。依于全室。命為燒香侍者。又轉藏司。大明洪武元年。

★三十三歲五。 押永安塔。訪和靖旧姑蘇台。

三十六歲。 登徑山。有全室。延以后堂首座。師辭不就。

★三十八歲。 再參天界全室。清遠和尚作偈送之。序曰。云々。偈有東海扶桑樹。西天甘諸種之句。

四十一歲。 洪武九年。 太祖皇帝召見英武樓。指日本圖。顧問熊野古祠。勅賦詩。 御製賜和。 求正覺碑

銘於宋濂。濂製之文。

禪僧が中国留学の経験を持つ場合、その事實は必ず、彼の年譜類に記されよう。たとえば、雪村友梅（一二九〇〜一三四六）は、入元中に間諜（スパイ）容疑で斬罪に処せられそうになり、「乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風」という一偈を朗誦して刑を免れたという（『雪村和尚行道記』）。絶海が中国に遊学して、季潭宗泐（全室和尚）や清遠懷渭（竹菴和尚）等に師事し、明の太祖高皇帝（洪武帝・朱元璋）と詩を唱和したことは、兩年譜の記すところであるが、『勝定年譜』には、『仏智年譜』に見受けられない記事——三十五歳の時、永安塔を押し、姑蘇台や林和靖の旧宅を訪れたことや、三十八歳の時、天界寺の季潭を省したこと——もある。

五 区分Ⅳ——社会活動期

○『仏智年譜』

★康曆元年己未冬十月。法兄普明国師招師館于龜山雲居庵。性海見和尚主天龍席。十二月請師居第一座。至明年春美解。

★二年庚申。師歲四十五。春赤松氏將幡法雲聘師。举汝霖佐公代之。秋以鈞選。開法甲斐州乾德山惠林禪寺。九月初三日。就龜山雲居庵受請。十月八日入寺。凡在京師相州有名之英衲雲集。寺屋殆乎無所容。師不非之。孜孜誘掖也。学徒参叩。禅宴餘暇。請而講法華楞嚴円覺等。緇素聽衆汎溢矣。蓋師旺化權輿于此矣。

★至德元年甲子。師年四十九歲。師力任宗柄。議論公評刺拳無所避。適以直言忤相公之旨。師長揖而去。夏六月。隱于撰之錢原云々。

二年乙丑。師四月始到遷^手羚谷牛隱庵云々。是歲秋。伊土讚阿四州摠轄桂岩居士厚礼邀師。七月末到讚州。居士郊迎之。且安置于普濟院云々。居士於是將新創寺。偏巡邦内。相攸爽^燈。而獲之阿州。其為境殆乎天慳地秘之勝也。居士意嘉之。居士乃親躬搬土築基。其主山形似宝冠。因名寺曰宝冠。山曰大雄。請師為開山始祖云々。冬十月。准三后大相国悔往愆。而命慈氏和尚。發專使徵師。固辞以疾。十一月。大相国親製手書。賜四州摠轄。命以徵師。居士即命駕。夜到宝冠。諭大相国之命。涕泣曰。法門汚隆陋邦安危。係師之出處。師不獲已。而迺促裝而上道。前一日門人妙勤謂曰。昨日夢師跨紫色獅子王。運行天下。妙勤手把

其羈勒。翌日大相國請書至。十二月以鈞命董等持寺席。二十五日入寺。先是七日。讚州宇多津且過庵明了夢武州命曰。余嘗持觀音像在京師。汝往而取來。明了受命往。恍惚之頃。入一山川。四顧勝絕。岩窟中有白衣觀音儼坐。負其尊像皈奉武州。寤以為瑞夢。其翌日武州召明了。命以延師於撰之矜羊谷。了奉使到矜羊谷。則其境致與前所夢符焉。明了私意益異之。後往々謂之人。明了有道之柄也。

三年丙寅二月十二日。義持誕生。一日慈聖龍湫和尚陪師說法之席。湫感喜而不覺承睫云。先師說法体裁有之。遂將正覺國師法衣一頂贈之師。

★嘉_(慶)心二年戊辰春正月九日。師於三條官第。始講金剛經。到十九日講了。同二十三日。香巖芳林太夫人請師講。巴覺經。至月尾講了。皆鈞命也。

明德二年辛未。是歲七月十六日。退等持寺移住北等持院。以公命也。向在京師等持寺日。大相國適到師室內。親乞師所常著安陀衣而奉持之。是冬十二月晦日。藩臣謀反。戰於內野。官軍利。敵陣敗。朝野歡呼。大賀升平。禪林諸老俱入幕而賀焉。大相國著法服相見。以手拳眇衣。□□□云。亡敵乃衣之靈驗也矣。相公所以崇信師者可知。

★四年癸酉。是歲夏中。師於花御所日々講首楞嚴經。常光并諸尊宿伴講席。

★応永二年。一日大相國依十牛圖。請益宗旨。師云。宗門直指之旨。非紙墨言說所能也。然古德十牛之設。為中下機。強立無途轍中之途轍。而頭無功用中之功用也。說始自尋牛。終至人牛俱忘。及入羶垂手。師云。此是相公自己本地風光。非從人得。得後只是叩門瓦子而已云々。師肆弁引譬剗功也。不備錄。大相國頗得至訣。

遂請師。手書梁山廓庵十牛圖叙并偈。命工繪之所常居禪觀之室壁。貼叙偈於上。公暇覽之。乃為修禪之資。

★八年辛巳。師歲六十六。檀命強起。而復住相國寺。乃第三次也。七月十六日。就鹿苑院受請。以寺位陞為五山第一也。八月十一日入寺。兼領鹿苑院。按大周和尚同門疏序曰。寺乃以辛巳某月日。官命陞位于五山第一。而復起吾法兄前南禪絕海禪師於鹿苑以往持焉。視篆茲山。今當第三次。往歲再命之日。入大殿而有已說今說。當說還我広長舌相之語。吾輩竊相謂曰。禪師必當三扱悉兼席。敷演大教。代仏揚化。而今其言驗矣。抑亦此拳不是獨賢勞於禪師。欲增重其山也。內外相須者如此云々。

○『勝定年譜』

★四十八歲。永德三年。准三官創鹿苑院。請師始主之。師因從容謂之曰。相國叢爾小刹。如不契施設。爾請別創宏基。慶莫大焉。因議定大相國寺宏礎。門人夢師跨紫色獅子王。橫行天下。翌日大相國徵書至。又有僧夢武州桂岩命曰。余嘗所持觀音像在京師。汝往而取來。翠日武州命此僧。迎師於撰之羚羊谷。

五十一歲。一日龍湫和尚陪師說法之席云。先師說法体裁今猶存。遂將正覺國師法衣一頂贈之師。

★五十二歲。管領雪溪居士捐玉堂為寺。請師為開山。山曰金寶。寺曰玉泉。

★五十四歲。師伴相公有西州之行。武州謂師曰。管內土佐吸江庵廼正覺行道地也。廢者久。余欲興之。南南後增修培旧。請師主院事。宝坊一新。遂為勝定院附庸。

★明德元。師五十五歲。等持寺陞位為十刹之第一。蓋以厚師也。

五十六歲。大相國就師乞常所着安陀衣。冬十二月晦。奥州謀反。即伏誅矣。相國着德服。以告禪林諸老曰。

滅敵者衣之靈驗也。

★五十八歳。師住相国。半夏以後。延諸尊宿会于頌。年年効之。

★五十九歳。師退相国。居等持院。九月二十四日夜。相国回祿。師曰。昔祇園精舎罹此厄。大檀越於燎焰之中而議寺之再興。義引韋天。宣律。無準。理宗重新徑山等之事。相国回祿。頭密之徒競斥吾宗。加之庄園割不庭者地而販之仏陀。然猶握本券。以乘此時。助彼魔説。諸禅匠拱手。師奮而昌言。

★六十歳。二月二十四日。相国寺仏殿立柱。崇寿院天房立柱。

★六十一歳。崇寿照堂塔宇。師自助力。罄衣孟之資畢工。

★六十二歳。再住相国。兼領崇寿寺。始為十方院。於是相公議将来非正覺氏不可領住持事。故入院仏事曰。一門光華云々。

★六十八歳。為大將軍頭山相公講信心銘。乃為証孟子書。以判仁義云々。

禅僧の社会活動期に関する記事には、住持生活や講釈活動、寺院の建立等が主として述べられる。両年譜に記載されている、この時期の絶海の履歴には、ほとんど共通するところがない。

絶海は甲斐の恵林寺、等持寺、等持院、相国寺（三住）と数多くの寺院の住持を勤めたが（『絶海和尚語録』『延宝伝灯録』『本朝高僧伝』『扶桑五山記』『五山歴代』等）、『仏智年譜』には、相国寺に初住、再住した時の記事は見られない。『勝定年譜』に至っては、相国寺に再住した時の記事しかない。ただし、『仏智年譜』には見ることができない、相国寺に関する興味深い逸話——五十九歳の時（応永元年〔一三九四〕九月二十四日夜）、

相国寺が炎上し、その再興に尽力したこと等——がかなり記されている。

また、『仏智年譜』によると、康暦二年（一三三〇）～永徳二年（一三三二）に学徒に対して『法華経』『楞嚴経』『円覚経』等を講じたのをはじめとして、絶海は、足利義満（一三五八～一四〇八）、香厳芳林太夫人（渋川幸子）、空谷明応等に『金剛経』『円覚経』『首楞嚴経』『十牛図』等を講じている。『勝定年譜』を見ると、応永十年（一四〇三）に足利義持（一三八六～一四二八）に対して『信心銘』の講義をしたことしか記されていない。ここで、参考までに、『日工集』を見てみると、当時、種々の講義が行われていたことがわかる。義堂が講じた書物を確認しておく。

A 経書・史書の類

〔例〕『大学』、『中庸』、『論語』、『孝経』、『春秋左氏伝』、『呉子』、『貞観政要』等

B 経典・禅書の類

〔例〕『法華経』、『楞嚴経』、『楞嚴疏』、『円覚経』、『円覚経疏』、『金剛経』、『金剛経纂要』、『孟蘭盆経』、『孟蘭盆経疏』、『碧巖集』、『坐禅儀』、『百丈清規』、『日用清規』、『補教編』、『林間録』、『大慧書』、『大慧法語』、『大慧普説』、『中峰広録』、『東山（外）集』、『無文文集』、『貞和集』、『禅儀外文』、『羅湖野録』、『枯崖漫録』、『鐔津文集』等

C 詩文集の類

〔例〕杜甫詩、靈一詩、『唐賢三体詩法』等

また、『仏智年譜』には、至徳二年（一三三五）七月末、絶海は阿波の宝冠寺の開山となったとあり、『勝定年譜』には、嘉慶元年（一三三七）、斯波義将（一三五〇～一四一〇）は自邸を改めて玉泉寺とし、絶海を開山に迎えたとある。

なお、絶海が義満に逆らって、摂津、讃岐、阿波に隠棲したという事件については、『仏智年譜』にはその概要が記されているものの、『勝定年譜』にはその一部しか記されていない。しかも、絶海が細川頼之（一三二九～九二）に招かれて讃岐に移る際、ある僧（『仏智年譜』には「讃州宇多津の且（旦）過庵の明了」とある）が見たという瑞夢と、義満が前非を悔いて、絶海を京都に召喚させる際、ある門人（『仏智年譜』には「門人の妙勤」とある）が見たという瑞夢の記事だけなので、唐突の感を否めない。

六 区分Ⅴ——死没

○『仏智年譜』

★十二年乙酉。辞世頌曰。虚空落地。火星乱飛。倒打筋斗。抹過鉄圍。平日所常課者也。円覚。首楞嚴。師自謂。我嘗閱首楞嚴有失咲之分也。

○『勝定年譜』

★師滅後五年。太上皇帝諡曰仏智国師。又今上皇帝加以浄印翊聖国師。以師之僧伽梨。永留内殿以供粮云々。禅僧の死没に関する記事には、示寂した期日や場所、世寿、遺偈等が記されるのが一般的である。絶海は応永

十二年〔一四〇五〕四月五日、相国寺勝定院において、七十歳でこの世を去った。『仏智年譜』には、唐突に「十二年乙酉、辞世の頃に曰く」と遺偈が掲げられているので、玉村竹二氏は一行分の脱落を想定されている。²⁾『勝定年譜』には示寂の記事すらなく、没後、後小松天皇や称光天皇から諡号をおくられたことが記されている。

七 第三の年譜の存在

『仏智年譜』は不審な点も見受けられるが、絶海が誕生してから示寂するまでの履歴が、興味深い逸話を交えて程よく纏められている。一方、『勝定年譜』は誤謬は少ないが、記載されている絶海の履歴にかなり偏りが見られる。両年譜には類似した文章も多く、『仏智年譜』を簡潔にしたものが『勝定年譜』であるかのような印象を受けるが、一方の年譜に記載されている履歴が、他方の年譜には記載されていないこともあり、疑問が残る。『蔭涼軒日録』（『続史料大成』所収）の文明十七年〔一四八五〕六月三日、四日条には、つぎのような記事がある。

三日（中略）自_レ蟻（考・蟻恐蝮）川不白方_レ以_レ壬生官務記録_レ曰。如_レ此記録有_レ之。絶海和尚為_レ三會塔主_レ歟。貞宗不審可_レ問_レ予_レ之命有_レ之。檢_レ之曰。鹿苑院殿応永二年六月廿日卯刻。於_レ北御所_レ御得度。前太政大臣准三后御年三十八歳。御戒師国師。御剃手絶海和尚。六月三日。雅久。予答云。絶海和尚此時三會院為_レ塔主_レ歟不_レ知_レ之。乃遣_レ惊子於勝定院主喬年方_レ問_レ之。則乃檢_レ祖師年譜_レ以_レ可_レ校_レ之云々。

四日 早旦。喬年和尚携_レ広照国師年譜_レ来。視_レ之応永元年甲戌九月末。為_レ崇寿塔主_レ。同三年丙子崇寿造

功畢。由_レ是觀_レ之_レ。応永二年乙亥。勝定国師為_二崇寿塔主_一決矣。(後略)

応永二年(一二三九五)六月二十日の卯の刻ばかりに、三代將軍足利義満が、花の御所において出家した。時に三十八歳だった。その際、絶海は剃手を勤めたのであるが、当時、三会院(臨川寺の開山塔)の塔主であったか否かが、ここでは問題となっている。蔭涼軒主の亀泉集証は、勝定院主の宝松喬年の許へ惊子を遣わして尋ねさせたところ、翌朝、宝松は、「広照国師年譜」を携えてやって来た。これをみると、応永元年(一二三九四)九月末に相国寺が全焼した時、絶海は崇寿院(相国寺の開山塔)の塔主であり、同三年(一二三九六)、崇寿院を再建し終わったとあるので、応永二年に絶海は三会塔主ではなく、崇寿塔主を勤めていたことがわかった。

ここで、宝松が勝定院から持参したという「広照国師年譜」について考えてみたい。現存の『仏智年譜』には、応永元年条も応永三年条もないので、「広照国師年譜」と『仏智年譜』は同一のものではないだろう。一方、『勝定年譜』の応永元年条(二五十九歳。云々)には、絶海が相国寺を退いて等持院に住したこと、九月二十四日夜に相国寺が炎上したことなどは記されているが、「広照国師年譜」にあるように、絶海が崇寿院の塔主を勤めていたことには全く触れられていない。もともと、同年譜の応永三年条(六十一歳。云々)には、絶海が崇寿院の再建に努めたことが記されているが、「広照国師年譜」と『勝定年譜』は別物であろう。と、すれば、『仏智年譜』と『勝定年譜』の他にも、絶海には別系統の年譜が(彼の塔所である勝定院に)存在したということになる。このことは、後掲の史料から言うことができよう。

まずは景徐周麟(一二四四〇〜一五一八)の『翰林葫蘆集』(『五山文学全集』第四卷所収)を見てみる。『仏智

年譜』や『勝定年譜』に類似した文章がある箇所には——線を私に施した。

同年（応永元年、朝倉注）九月二十四日夜、相国寺災、台駕臨焉、到鹿苑院護之、広照師自北等持馳而会之、因進而謂曰、在昔祇園精舍罹此厄、南天王乘大願力重新焉、徑山亦遭此厄、理宗皇帝降聖旨、復重新焉、今日亦宜為之也、檀越勉旃、於是大勇而諾矣、同年十一月二十八日、仏殿山門立柱、彼賢于長者、道挿一茎草建梵刹竟者、理上興建也、不及公向事上、不歷時日、而一再起之者、其餘教苑講肆、無不一新、經所謂三世一切諸仏之大檀越者乎、（中略）

又与広照常光二師、道契不淺、嘉慶二年春正月九日、請広照於三條官第、講金剛經、至十九日講了、山竺謂、方今公武家、以正月為嘉節、忌僧徒往来、台靈独異是、可怪矣、考之於唐朝則貞觀元年正月、命京城僧、三七日、行道齋供、王公行香者在焉、（中略）

広照住京之等持、歳在明德辛未、公嘗入師室、乞師安陀衣而持去、同年冬十二月晦日、藩臣謀反、即日敗績矣、禪林諸老、入幕賀之、公被法服見之、以手拏衣曰、滅賊軍者、乃此衣之力也、守護国界主陀羅尼經、拏法衣十勝利、一者示現沙門相貌、見者歛喜、遠離邪心、乃至十者袈裟猶如甲冑、煩惱毒箭不能害、公之得勝利者、何疑之有哉、其後応永六年十二月、於泉州逆徒就戮、不亦法衣勝利耶、

又就師請益十牛圖、師云、宗門直指之旨、非紙墨所形也、然十牛之設、於無途轍中、強立途轍、從初尋牛得牛、至終人牛俱亡、尽是相公自己本地風光、非從人得、々後只是叩門瓦子耳、公頗得至訣、遂請師親書梁山廓菴之叙与偈、因命工繪之、貼于禪室之壁、以為修禪之資、敢問諸人、皮角在此、牛在何処、昔郭功

甫見端師翁、師問曰、牛純乎、曰、純矣、師叱之、功甫拱而立、師曰、純乎々々、南泉大滂無異此也、說甚南泉大滂、即今亦無異此也、

又一日謂広照曰、禪宗難証入、念仏欲兼修、如何、師答曰、相公一面鏡、為色像所映奪、大居士分上、心外求仏耶、不見道、有仏処莫住、無仏処急須走過、公言下領旨、大笑歎譎而退、(中略)

今日散忌、大功德主集苾芻衆、同音諷演梭廠神咒、此乃波斯匿王為父王諱日請仏當齋、々罷仏帰祇園、自頂上放百宝光、々中有化仏所演出也、吾徒有法事、散場必舉此呪、原乎清規也、吾百丈氏一夏九旬、設梭廠会、台靈明德年中、迎広照師於花御所、夏中日々講此經、昔年講席、今日齋筵、不隔毫端、不離当念、

即見儼然未散、

(第十四・「鹿苑院殿百年忌陞座 散説」)

足利義滿の百年忌の陞座法語(散説)である。陞座の法語は、時代がくだるとともに長大なものが好まれるようになり(玉村氏『五山文学』、一三二九頁参照)、義滿と同時期に活躍した絶海の履歴をたどるためには、彼の年譜類が必要不可欠だったはずである。『仏智年譜』や『勝定年譜』に類似した文章も所々見受けられるが、景徐は直接、『仏智年譜』や『勝定年譜』を目にしたわけではないだろう。なぜなら、両年譜よりも一つ一つの履歴が詳細に描かれているし、両年譜では知ることができない逸話——禅宗を専ら修行することに迷っていた義滿に対して、「仏有る処は住すること莫れ。云々」という趙州のことばを例に出して、如何なるものにも捉われるべきではないことを説いたという話——も見られるからである。絶海には、『仏智年譜』や『勝定年譜』とは別に、より綿密に纏められた年譜が存在していたのであろう。

つぎに『相国寺考記』（『相国寺史料』第一巻所収）から抜粹する。同書は『相国禅寺紀年録』とも、『萬山編年精要』、『萬年編年精要』とも言い、永徳二年（一三三二）～慶長十四年（一六〇九）の間における相国寺関係文献の抄録を収めた史料集である。原書名、編者、成立年代等はわかっていない（解題参照）。なお、「萬山」や「萬年」とは萬年山相国寺、すなわち義満が創建して、絶海が三住した京都五山第二位の寺院である。①～⑦の番号は私に施した。《》内は割注を示す。

① 此年等持寺陞位、為十刹之第一、于時絶海住等持蓋尊師也云云《見于絶海年譜》

（明徳元年（一三九〇）条）

② 七月十六日、絶海和尚退等持寺、移住等持院、以公命也、向在京師等持寺日、太相国適到師室内、親乞師、所常着安陀衣、而奉持之、是冬十二月晦日、藩臣謀叛、戰於内野、官軍利、敵陣敗、朝野歎呼、大賀升平、禅林諸老、俱入幕而賀、太相国着法服相見、以手拳眇衣云、凶敵乃衣之靈驗也、夫相公所以崇信絶海者可知

《見于絶海行実》

（明徳二年（一三九一）条）

③ 此年夏中相公召絶海師於花御所、日講首楞嚴經、常光并諸尊宿伴講席《見于絶海行録》

（明徳四年（一三九三）条）

④ 絶海和尚年譜又曰、相国回禄、頭密之徒、競斥吾宗、加之、割不庭者地而帰之仏陀、然猶握本券、乘此時、助彼魔説、諸禅匠拱手、師奮而昌言云云

（応永元年（一三九四）条）

⑤ 二月廿四日、相国寺仏殿立柱、崇寿院《旧之資寿院也》大房立柱《見于絶海年譜》

(応永二年〔一三九五〕条)

⑥是年一月太相国、依十牛図、請益宗旨云云《始末具見于絶海行実》

(応永二年〔一三九五〕条)

⑦八月十一日、絶海和尚重任相国《第三次也》

絶海年譜云、檀命強起、而復住相国寺、七月十六日、就鹿苑

院受請、八月十一日入寺、兼領鹿苑云云 按大周和尚同門疏序曰、寺乃辛巳某月日官命、陞位于五山第一、

而復起吾前南禅海翁大禅師於鹿苑、以住持焉、視篆本寺、今当第三次云云 抑亦此举不是独賢勞於禅師、欲

増重其山也云云《已上見于年譜》

(応永八年〔一四〇一〕条)

「絶海(和尚)年譜」から(相国寺に関連する事件を)引用したという箇所(①・④・⑤・⑦)について考えてみたい。先にその全文を掲げた『仏智年譜』および『勝定年譜』と比較してみると、①・④・⑤の文章はすべて、『勝定年譜』に確認することができるのだが、⑦の文章は『仏智年譜』に見られる。と、いうことは、少なくとも明徳元年、応永元年、同二年、同八年に限っては、両年譜の記事が混在している年譜が存在したことになるだろう。また、②・③・⑥に目を移すと、絶海には、年譜以外にも、行実や行録が存在していたことがわかる。近年(平成八年十二月二十日)刊行された『鹿苑院公文帳』(『史料纂集』所収)のなかで、今泉淑夫氏は、等持寺に関する新出の史料を紹介されている。相国寺慈照院所蔵の雑記一冊で、主に等持寺歴代が記されている。

「絶海中津」の項には、

八 絶海 中津 和尚 明徳改元庚午年当寺陞位為十刹之第一、于時絶海住持、蓋国師也、見于師年譜

明徳二辛未年七月十六日師退等持寺移住北等持院、見于師行実

とあり、「年譜」の文章は『勝定年譜』に確認することができる。また、ここでも、絶海に行実が存在したことが知られる。

おわりに

絶海には、『仏智年譜』や『勝定年譜』の他にも、現存はしていないが、別系統の年譜や行実、行録の類が存在していたようである。絶海ほどの著名な禅僧になると、何種類もの年譜類が作成されていたとしても不思議ではなく、これと同じことは、夢窓や一休にも言えるだろう。それらのなかで現在にまで伝わっているのが『仏智年譜』であり、『勝定年譜』であったのである。想像を逞しくすると、『仏智年譜』の不備を、より綿密に纏められた年譜で、簡潔に補ったものが『勝定年譜』であると言えるかも知れないが、両年譜の祖本の存在については、今後、さらに検討してみたい。

注

(1) 『勝定年譜』は『続群書類従』第九輯下「伝部」の他に、『大日本仏教全書』第六十九卷「史伝部八」にも活字化されて収録されている(『本朝僧宝伝』巻下に「絶海中津和尚年譜略」と題して収められている)。この『大日本仏教全書』所収本には、「五台山」の下に「土佐竹林寺」という注記があることから、絶海や

義堂の母が祈ったのは、五台山上にある竹林寺の本尊の文殊菩薩像だったことがわかる。なお、『本朝僧宝伝』については、著者は不詳、成立は江戸時代、それも『延宝伝灯録』（延宝六年（一六七八）成立）が撰述されるなどして、禅宗各派の法系・嗣承を明らかにする動きが禅界に起こった頃だろうと推定される。解題参照。

(2) 『絶海年譜』に就ての疑義（『日本禅宗史論集』下之二所収）。

第三章 絶海中津の関東再遊について

はじめに

絶海中津（一三三六～一四〇五）は、法兄の義堂周信（一三二五～八八）とともにその漢詩文を「五山文学の双璧」と称せられている。二人はともに、夢窓疎石（一二七五～一三五二）の弟子で、「五山文学」の最初の開花期である、南北朝時代から室町時代前期にわたって活躍した禅僧である。

絶海の伝記史料として最も基本的なものは、弟子の叔京妙邨が撰述したとされる『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）である。たとえば、古くは卍元師蛮の『延宝伝灯録』から、最近では玉村竹二氏の『五山禅僧伝記集成』（講談社、昭五八）に至るまで、「絶海中津」の項の記述はこの年譜に全面的に拠っている。が、この年譜に記載されている履歴をたどるだけでは、絶海の生涯を網羅したとは言えない。なぜなら、別系統の絶海の年譜である『勝定国師年譜』（以下、『勝定年譜』と略す）や、絶海の詩文集である『蕉堅藁』、義堂の日記である『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）等によって、絶海の新たな事跡を確認し得るからである。本章において取り上げた、絶海の関東再遊もその一つである。

一 関東再遊の事実

『仏智年譜』貞治三年（一一三六四）条に「是の歳、一策、翩然として関東の行有り」とあることから、絶海が入明前に京都から関東へ赴いたことを指摘する研究者は多いが、帰朝後に再び関東へ赴いていたことを指摘する人は誰もいない。しかし、『蕉堅藁』^{（一）}をつぶさに見ると、「竹隠上人の詩軸に跋す」（一四五）につきのような記述がある。

（上略）上人蚤入_二吾古天法兄室_一。而蒙_二慈氏天祐_一二老之賞識_一。可_レ謂_二士之有_レ遇者_一矣。予嘗自_レ甲往_レ相。

見_二上人於南陽寓所_一。竊喜_二其巖然風骨。卓_二絶于諸子之輩_一。且慶_二吾兄之有_レ兒_一。而不_レ能_レ忘_レ懷矣。今觀_二諸彦之詠_一。猶_二吾曩日之懷_レ感而不_レ已_一。於_レ是乎書以塞_二其請_一。

【注】「竹隠上人」については、蔭木英雄氏や梶谷宗忍氏^{（二）}が指摘される竹隠自巖ではなく、竹隠中簡のことではないか。本文中には「上人、蚤^{（と）}に吾が古天法兄の室に入りて」とあり、玉村氏『五山禅林宗派図』（思文閣出版、昭六〇）によると、竹隠自巖が大休正念——嶮崖巧安——容山可允——竹隠自巖という法統を承けているのに対し、竹隠中簡は夢窓疎石——古天周誓——竹隠中簡という法統を承けているからである。また、「古天法兄」とは古天周誓、「慈氏」とは義堂周信、「天佑」とは天佑蔵海のことである。なお、禅僧の法系・道号・法諱に関しては、以下も玉村氏・前掲書を参考にする。

絶海が、快川和尚の「心頭を滅却すれば火もまた涼し」ということばで有名な甲斐の乾徳山恵林寺に入寺したのは、康暦二年（一一三八〇）十月のことで（『仏智年譜』^{（三）}）、その後、彼が甲斐から関東へ再び赴き、「南陽の寓所」で竹隠上人と相見したことがわかる。『大日本地名辞書』や『日本地名大辞典』^{（四）} 14 神奈川県』（角川書店、

昭五九)や『神奈川県の地名』(日本歴史地名大系14、平凡社、昭五九)を見ても、相模国(神奈川県)に「南陽」という地名は存在しないので、「南陽の寓所」とは南陽山報恩寺のことであろう。そして、『日工集』によると、義堂が報恩寺を建立したのは応安四年(一二三七一)十月十五日のことなので、⁽⁴⁾諸書において絶海が関東に赴いたとされる貞治三年(貞治五年の間に、報恩寺で絶海と竹隠上人が対面することは不可能であると思われる。ただし、報恩寺の前身にあたる寺は、すでに建立されていたと考えられる。⁽⁵⁾

また、『臥雲日件録抜尤』⁽⁶⁾長祿元年(一二四五七)二月三日条には、

三日、齋罷、洪恩院主来、茶話之次、問下怡雲先師自大明帰朝之事上、答曰、雖帰朝尚在筑紫、普明国師聞之、遣使頻促帰洛、蓋意在法嗣也、時絶海同帰朝、欲直赴関東、時慈氏和尚在鎌倉、然国師命重、遂入京云々、(下略)

【注】「洪恩院主」とは竺峰周曇、「怡雲先師」とは汝霖妙佐、「普明国師」とは春屋妙葩のことである。

とある。この竺峰周曇の懐古談を見ると、永和三年(一二三七七)、汝霖妙佐とともに中国から帰朝した絶海は、ただちに関東に赴かんと欲している。と、いうのも、当時、義堂が鎌倉の報恩寺に在ったからであり、『日工集』、彼に依頼されていた夢窓の碑銘の件について報告しておきたかったのだろうと考えられる。その後、永和四年(一二三八)に京都でしたためた書簡にも、

(上略) 小弟夏秋之間。將有東行。枉道躬詣上刹請教。且金沙池畔。可恣旬日之盤旋也。維時春深。冀若時珍愛。不勝祝望之至。
〔与三金剛物先和尚書〕(一二四六)

【注】「物先和尚」とは物先周格のことである。また、「金沙池」とは金剛寺十境の一つであり、『空華集』
卷第七に、

伝聞西雲老人。過江金剛新寺。標其境而為之。曰雜華世界。曰毘盧宝閣。曰円通境。曰養正
齋。曰先照堂。曰金沙池。曰得月軒。曰甘醴亭。曰九里松。曰靈聖廟。蓋湖上之勝槩也。(下略)

〔五山文学全集〕第二卷。返り点は同書や蔭木氏『義堂周信』(日本漢詩人選集3、研文出版、
平一一)等を参考にして、私に施した)

という文章がある。

とあり、永徳二年(一一三八二)に甲斐でしたためた書簡にも、

茲承從者暫離伊豆。坐夏三川。雖未得面晤。以稍近為喜。老嬾日劇。世味淡然。独於故旧。
不能遣情。東望悵悵而已。幸因便風。以寄音塵。惟時春深。伏冀珍齋。

〔答久菴和尚書(二)〕(一一五二)

【注】「久菴和尚」とは久菴僧可のことである。

とあることから、絶海が依然として再び関東に遊学する意志を持ち続けていたことがわかる。

横川景三(一一四二九〜九三〇)の『小補東遊集』⁽⁸⁾には、

余在京師日、語桃源曰、乃祖勝定老師、曾遊大唐、道德文章、衣被南国、一朝來歸、東人化焉、
暇日招諸老鳴乎斯文者上、比辭對句、我曇仲老漢其一也、今也青衿、往々伝写其句、以為一集、

実希世玉宝也、老漢蓋乃祖老門生也、通家有_レ好、公何不_レ統_レ之乎、(下略)

【注】「桃源」とは桃源瑞仙、「勝定老師」とは絶海中津、「曇仲老漢」とは曇仲道芳のことである。

とあり、絶海の道徳および文章が中国の人々にも感化を与え、帰国後も「東人」が教化されたという。もしも「東人」が関東の人を意味するならば、絶海が帰朝後に関東に赴いていたことを示す根拠の一つとなるだろう。

二 関東再遊の時期

それでは、絶海が関東に再遊した時期について考えてみたい。恵林寺の住持としての任務を終えてからの行動を整理してみると、まず『日工集』永徳二年(一三三二)十一月三日条に、

十一月三日、昌勤至、出_二絶海書_一、乃審_下退_二恵林_一、今帰_二普同庵_一、為_中田地訟_上、

【注】「昌勤」とは心伝昌勤(慧勤)のことである。

とあり、永徳二年十一月三日の時点で、恵林寺の住持を退き、同寺の塔頭である普同庵に帰住していたことがわかる。また、『蕉堅藁』所収の「西胤上人の雨中唱和の詩の序」(一四三)には、つぎのような文章がある。

甲之為_レ州。環以_二群山_一。帯以_二衆川_一。而蔽_二乎大岳之陰_一。故山川之氣。交会鬱結。盛暑則雲雨騰作。候状不_レ恒。而我勝善練若。雖_レ当_二劇驂_一。無_二林木以為_二蔽障_一。則迥然孤村也。関西西胤上人。一日对_二孤村雨_一。望_二群山雲_一。詩以寓_レ思。從而和者若干。徵_二叙於余_一。(中略)今年癸亥夏。五月不_レ雨。逮_二于六月癸酉_一乃雨。及_レ信而止。己卯又大雨。弥_レ旬不_レ止。余則始而喜。終而憂。而思亦随_レ之何也。(下略)

【注】「西胤上人」とは西胤俊承のことであり、彼の詩は『真愚稿』に収められている。

雨中偶作

独坐孤村雨。高山四面雲。擁窓昏貝葉。侵砌長苔紋。唯合靜中賞。何堪愁裡門。願賓

天上日。万国豁妖氛。〔五山文学全集〕第三卷。返り点は私に施した

また、「癸亥」は永徳三年〔一三八三〕にあたる。

これによると、絶海は、永徳三年〔一三八三〕の五月から六月にかけて、甲斐の太平山勝善寺に滞在している。そして『日工集』永徳三年九月五日条に、

五日、絶海帰自甲州、蓋惠林住院紀満也、入洛館于大慈院、余往略叙久闊之意、

とあることから、永徳三年九月五日に、惠林寺住院の期間を終えて、甲斐より帰京したことがわかる。その際、義堂は、ただちに三會院（臨川寺の開山塔）の別院である大慈院に泊まっている絶海の許を訪れ、旧交を温めている。

こうして見ると、考えられる絶海の二度目の関東訪問は、永徳二年の十二月頃から翌三年の四月頃にかけてか、もしくは永徳三年の七月頃から八月頃にかけてか、ということになる。すなわち、前者の場合は甲斐惠林寺（十月三日）——**関東**——甲斐勝善寺（五月〜六月）——京都（九月五日）というコースを、後者の場合は甲斐勝善寺（五月〜六月）——**関東**——京都（九月五日）というコースを、絶海はたどったことになるのだが、『日工集』永徳三年九月五日条に「絶海、甲州より帰る」と記されていたことや、甲斐——**関東**——京都間の道のり、

関東における滞在期間などを考え合わせると、わたくしは前者の可能性がより高いように思う。先に挙げた「久菴和尚に答ふる書(二)」「(一五二)」に「老嬾、日に劇^{はげ}し。世味、淡然として、独り故旧に於いて、情を遣ること能はず。東に望みて悵々たるのみ」と記されていたが、絶海は、関東の旧知の人々に会うために、恵林寺の住持を退いてから京都に帰るまでの合間をねらって、甲斐からあまり離れていない関東の地を再び踏んだのではないだろうか。

もう一度、絶海と関東について、簡単にまとめておく。

○一度目(入明前)——貞治三年〔一三六四〕—貞治五年〔一三六六〕 (二十九歳—三十一歳)

○二度目(帰朝後)——永徳二年〔一三八二〕十二月頃—永徳三年〔一三八三〕四月頃 (四十七歳—四十八歳)

三 古河襟言五首

さて、絶海の生涯に「関東再遊期」を新たに認めることで、彼の詩文集である『蕉堅藁』の詩文の配列の解釈にどのような影響が齎されるであろうか。たとえば『日本古典文学大辞典』第三卷(岩波書店、昭五九)の「蕉堅藁」の項(名波弘彰氏執筆)に、以下のような記述がある。

【内容】全体は詩・疏・文から成り、詩は五言律詩二十六首・七言律詩六十七首・五言絶句十五首・四言四句四首(一首とする説もある)・四言十六句一首・七言絶句五十一首で、計一六四首。若干の未収載詩を

含めても、義堂周信の『空華集』の詩数（一九〇〇首余）の十分の一に満たない。疏は十三編。文は序四編・書八編・説二編・銘六編・祭文三編で、計二十三編。他に明の太祖、明僧清遠懷渭ら数人の次韻詩が載る。詩の大部分は制作時期が記されていないが、絶海の応安元年（一三六八）入明以後の作から成ると推定されている。ただ七言律詩の「古河雜言五首」は貞治四年（一三六五）春、常陸古河での制作と考えられる（異説もある）から、入明以前の作も含まれているようである。本集の詩は義堂詩の偈頌中心主義に対し、偈頌を『語録』に移して、偈頌とは異なる詩の世界をうち立てようとしたものであり、皎然・杜牧・貫休・林和靖といった晩唐詩風に強く影響されている。

（三四〇頁）

【注】本文中の異説に関しては、いまだに管見に入っていない。

義堂の『空華集』巻第八の「次韻賀靈姪住摠州安国」という詩に「古河東畔天平寺」、「乙巳春。予帰居天平」。歳歉。又上人回里」という詩に「帰来臥病古河浜」という句があることを援用して、従来の研究者は、絶海は貞治四年（乙巳）の春、天平山安国寺（現在は廃寺。今枝愛真氏『中世禪宗史の研究』（東京大学出版会、昭四五）、一一七頁参照）に病気で臥していた義堂を見舞うために古河（今の茨城県古河市。利根川流域にある）を訪れ、その際に詩（「古河雜言五首」）を詠んだと考えている。しかし、この年の絶海の行動については確証がない。『仏智年譜』⁽¹⁰⁾貞治四年条には、

四年乙巳。師年三十歳。当此時忻公力革露風。凡叢林職事非徳不挙。率試以提唱偈頌。特拔典蔵。次以却来遷待香。

【注】「忻公」とは大喜法忻のことである。また、「却来」という語は、『禪林象器箋』（無着道忠著）の第七類・職位門に「忠曰く。却来は洞家の挙唱なり。正位に向かふを向去と為す。正位より偏位に来たるを却来と為す」という記述があるように、職位が下がって勤めることをいう。

とあり、建長寺の大喜法忻の会下にあつて、藏主や焼香侍者を司つていただけがわずかに明らかである。ところで、絶海は、帰朝した直後に九州で詠んだ「人の相陽に之くを送る」⁽¹⁾（五一）という詩のなかで、「到る日、諸昆、もし我を問はば、倦懷、昔の清狂に似ず、と」と詠じている。入明する前に（京都や）関東で修行に明け暮れた青春の日々を思い起こして、かつての自身を「清狂」と評しているのである。「清狂」⁽²⁾という語は、『漢書』⁽³⁾武五子伝第三十三に、

清狂不惠（蘇林曰。凡狂者陰陽脈尽濁。今此人不レ狂似レ狂者）。故言清狂也。或曰。色理清徐而心不レ慧曰清狂。清狂如今白癡也。

という記述があるように、精神的には狂っていないのだが、その言行が狂者に似ているものを指して言うようである。あるいは、一途な禅道修行が周囲との妥協を許さない行動に彼を走らせていたのであるか、と思われる。このような精神状態にある時、果たして絶海は「古河雜言五首」を詠むことができたのであろうか。

結論から先に述べると、わたくしは、永徳三年の春、関東に再遊した時に「古河の襟言 五首」（六〇）を詠んだのではないかと考えている。以下に問題の六十番詩を掲げて、その理由を列挙してみたい。

①初來借_二宿古河涓_一。聞見令_二人事々疑_一。官渡呼_レ船招_レ手急。村春殷_レ榻得_レ眠遲。江雖_レ可_レ愛少_二奇石_一。花綻
堪_レ看多_二醜枝_一。宝樹宝池天上寺。春風春雨過_二歸期_一。

②杜陵不_レ唾_二青城地_一。風土如_レ斯豈復疑。蘆荻洲暄抽_レ筍早。參苓地瘦長_レ苗遲。病駒但仰新恩秣。倦鶴応_レ懷
旧宿枝。且待_二蓬萊清淺日_一。踏_レ鯨直欲_レ訪_二安期_一。

③柴門揜_二在水之涓_一。慣_レ看沙漚稍不_レ疑。香氣陰窓晨霧潤。棋声深院夕陽遲。翠楊烟暗藏_二鴉葉_一。紅杏花低掛
_二鳥枝_一。買_レ地刺栽_二松与_レ竹。願言長作_二歲寒期_一。

④嬾拙慚吾成_二性癖_一。休居幸免_二口時疑_一。薰炉茗盃招_レ人共。蒲薦松牀留_レ客遲。工部惟応_レ憐_二北嶮_一。贊公甘
欲_レ老_二西枝_一。溪山未_レ尽_二登臨興_一。江海誰同_二汗漫期_一。

⑤平生講_レ学知_二天命_一。造物小兒何用_レ疑。絶塞病時仍旅寓。荒村投処且栖遲。際_レ空埜色煙連_レ草。高_レ夜松声
月在_レ枝。千載九原如可_レ作。香盟応_下与_二遠持_一期_上。

まず第一首目の「帰期を過ぎす」ということばについて。「絶海が甲斐の勝善寺に帰るべき期日が過ぎた」と
解すると、『山梨県の地名』（日本歴史地名大系19、平凡社、平七）の「甲府市 勝善寺」の項に、

後屋町地区南部にある。太平山と号し、臨濟宗妙心寺派。本尊は木造釈迦如来。嘉慶元年（一三八七）

八月一九日の同像の胎内墨書銘によれば、貞和三年（一三四七）頃に浄土宗系寺院から禅宗寺院に改宗、

無量寿仏（阿弥陀仏）を焼失したため、勧縁比丘周亮が僧俗男女等に勧進して浄財を集め、大仏師増光を
招いて瑞雲庵で釈迦如来像を造り、勝善寺に安置した。同銘文にみえる住持比丘中津は臨濟宗夢窓派の高

僧絶海中津で、多数の僧侶とともにこの仏像の造像計画に深く関係していた。銘文の多くを占める勸進に
応じた者を書上げた人名・法名のうち法光は武田信成の法名、満春はその子布施満春、頼武は満春の子と
考えられ、武田一族の本尊造頭(マテ)への関与がうかがわれる。永禄年中(一五五八―七〇)に天観が中興した
と伝える(寺記)。(下略) (三九一頁)

という記述があることから、甲斐に帰らねばならない諸事情の一つとして、同寺の釈迦如来像の造像計画があつたのかも知れない。なお、詩中に「天上の寺」とあるのは、先にも触れたが、古河東畔——おそらくは現在の古河市付近にあつたと推定される安国寺のことであろうか。

つぎに第二首目の「病駒、但だ仰ぐ、新恩まぐさの秣まぐさ。倦鶴、まさに懐ふべし、旧宿の枝」という詩句について。蔭木氏や寺田透氏(15)も指摘されているように、「病駒」や「倦鶴」は絶海自身のことであろう。そして、甲斐でしたためられた「法華元章和尚に与ふる書」(一四九)に、

(上略) 幸甚。論下及数与二等持法兄一相会上。此老一団和氣。似レ坐三春風之中一。和尚与レ之周旋。必当二目擊而道存一。歆艶歆艶。多宝景德笑山無求。亦時時往来相会否。千里懷想。西望二德星之聚一而已。秋序方レ杪。惟冀為レ法自齋。以副二翹祝一。

【注】「元章和尚」とは元章周郁、「等持法兄」とは義堂周信、「笑山」とは笑山周念、「無求」とは無求周伸のことである。

というくだりがあることを考え合わせると、辺境の地と言っても過言ではない甲斐の恵林寺における約二年間の

住持生活を経て、精神的にも肉体的にも疲れ果てた絶海が、「旧宿」たる京都を恋しく思い、「新恩」たる公帖が発行されてそこに呼び戻されることを望んでいる、と解釈することはできないだろうか。

第四首目の「休居」という語は、『諸橋大漢和辞典』には「官職を辞して家に居る。致仕して家に居ること」と説明されており、『韓非子』⁽¹⁾十過や『商子』⁽²⁾譽令の用例が挙げてある。たとえば、前者の用例を見ると、

昔者齊桓公九合諸侯⁽¹⁾、一匡天下⁽²⁾、為三伯長⁽³⁾。管仲佐⁽⁴⁾之。管仲老、不能⁽⁵⁾用⁽⁶⁾事、休⁽⁷⁾居⁽⁸⁾於家⁽⁹⁾。

とあり、齊の桓公の補佐をしていた管仲は年老いて、仕事に堪えられなくなり、家に引き籠もって休んでいる。絶海は直前に恵林寺の住持を辞していたからこそ、この語を用いたのであると思われる。

第五首目の「学を講じて」ということばについて、蔭木氏は「修行に励んで」（『蕉堅藁全注』、一一五頁）と訳されているが、これはそのまま「学問の講義をして」と訳するのがよいのではなからうか。芳賀幸四郎氏『中世禅林の学問および文学に関する研究』（日本学術振興会、昭三二）によると、当時の禅僧がいかに多くの書物——經書・史書、經典・禅書、詩文集等——を読み、そして講じていたかがわかる。その様相は、たとえば義堂の『日工集』等を見ても、詳しく知ることができる。ちなみに義堂は、同書によると、応安元年（一三六八）八月二日、四十四歳の時にはじめて、諸子のために高僧靈⁽¹⁾の詩を講じている。⁽²⁾ここで、絶海の講釈活動について、知られている範囲で整理してみると、以下のようになる。

○康暦二年（一三八〇）〜永徳二年（一三八二）——（学徒に対して）『法華経』『首楞嚴経』『円覚経』等

「仏智年譜・本朝高僧伝」（四十五歳〜四十七歳）

○嘉慶二年〔一三八八〕正月九日〜十九日——〔足利義満に対して〕『金剛經』〔仏智年譜・翰林葫蘆集〕
(五十三歳)

○嘉慶二年正月二十三日〜晦日——〔渋川幸子に対して〕『円覚經』〔仏智年譜〕 (五十三歳)

○明徳四年〔一三九三〕夏——〔義満、空谷明応等に対して〕『首楞嚴經』〔仏智年譜・翰林葫蘆集〕
(五十八歳)

○応永二年〔一三九五〕——〔義満に対して〕『十牛図』〔仏智年譜・翰林葫蘆集・本朝高僧伝〕
(六十歳)

○応永十年〔一四〇三〕——〔足利義持に対して〕『信心銘』〔勝定年譜〕 (六十八歳)

貞治四年の春に「古河の襟言 五首」(六〇)を詠んだとすると、この時、絶海は三十歳である。また永徳三年の春に詠んだとすると、絶海は四十八歳である。絶海がどのような書物に関する講義を行なったのか、今となつては知る由もないが、少なくとも自らを「清狂」と評した三十歳の時に(講釈の)講師を勤めることは到底考えにくい。蔭木氏もこのことを考慮して、前掲のような解釈をされたのかも知れない。同様のことは、同じく第五首目の「天命を知る」ということばについても言える。「天命を知る」とは、天から自分に与えられた使命、乃至は天から人間に与えられた運命を素直に受容する——それは自己の生き方に迷い、感情の動揺に身を任せ、人生に絶望しての諦めではなく、言わば、自己の運命を明らかにし、自己の生き方を自分なりに位置づけ、自己の生きるべき道を自覚することであると思う。こうした生き方は、「清狂」という心境とは対極的なものと言え

るのではなからうか。『論語』為政第二に「五十にして天命を知る」とあるように、三十歳という若さで到達し得る境地ではないように思われる。

全体的にこの五首の詩のトーンは暗いものの、この一連の作に詠まれている季節は、春であると思われる。

四 『蕉堅藁』七言律詩の配列順序

『蕉堅藁』は絶海の生前に著わされたものなので、絶海自らによつて厳選され、推敲を重ねられたとされている⁽¹⁸⁾。入矢義高氏、⁽¹⁹⁾ 蔭木氏、寺田氏等)。たとえば七言律詩(二十三番詩く六十八番詩)を見ても、中国での作(二十三番詩く四十六番詩)、九州での作(四十七番詩く五十二番詩)、京都での作(五十三番詩く五十九番詩)とその配列がきちんと整理されている。そしてわたくしは、絶海は、永徳二年十一月に甲斐の恵林寺を退いて、翌三年五月に同国の勝善寺に入るまでの間に再び関東に遊学し、「古河の襍言 五首」(六〇)を作成し、それらの詩を一括して、京都での作の後に置いたと考えるのであるが、六十一番詩以降の七言律詩の詠作状況は、いったいどのようなになっているのであろうか。

まず六十二番詩を見てみる。

六二 次レ韻答ニ肇太初見レ寄 二首 太初時在ニ小山

①喜聞高駕此重還。邂逅何時慰ニ眼前。別夢依依迷ニ夜月。孤懷耿耿倚ニ春天。草蘆河上無ニ來客。桂樹小山多ニ隱賢。強擬ニ臨レ風歌ニ伐木。詩篇未レ得レ共ニ芳筵。

②憶昨逢_二君相水辺_一。粲如_三璠樹倚_二風前_一。千鈞筆力堪_レ扛_レ鼎。万丈文光欲_レ爇_レ天。陶陸_心三吾蓮社輩_一。山王不_二是竹林賢_一。只今室邇人還遠。灯火難_レ同_二一夕筵_一。

【注】「肇太初」については、一山一寧——雪村友梅——太清宗潤——叔英宗播の法統を承けた太初真肇のことではないだろう。年代的に合致しないからである。玉村氏も『五山禅僧伝記集成』のなかで、「太初真肇」の項とは別に、「太初□肇」の項を設けておられる。

詩題の下の自注に「太初、時に小山に在り」と記されているが、「小山」とは栃木県小山市のことで、古河から非常に近い距離にある。当時、ここには諸山に列せられた青原山大昌寺（現在は廃寺。『中世禅宗史の研究』、二四一頁参照）があつた。第一首目に「孤懷、耿々として春天に倚る」という句があり、季節も春であることから、六十二番詩は関東（古河周辺）での作である。六十番詩と六十二番詩の間に位置する「諒信元の至るを喜ぶ」（六一）もまた、関東（古河周辺か）での作と考えてよいだろう。蔭木氏も「脚韻から推測すると、やはり古河での作品であろう」（『蕉堅藁全注』、一一七頁）と指摘されている。「春風、暖かに動く、鶺鴒の草」という詩句があり、季節は春である。

つぎに六十三番詩を見てみる。

六三 次_二韻壺隱亭_一

諸生多是口談_レ天。壺隱高人愛_レ説_レ禪。竹径邀_レ僧鳴_レ履出。林亭遣_レ客枕_レ書_レ眠。花吹_二紅雪_一香浮_レ座。茗起_二霏雲_一春動_レ甃。還似退藏機未_レ密。已觀文彩映_二時賢_一。

関東に在住していた義堂の『空華集』巻第八にも「留題能叟居士壺隱亭」二首」という詩があり、この詩と同一の脚韻が用いられている。

留題能叟居士壺隱亭 二首

占得壺公小隱天。新開埜築寄逃禪。三春不作花前醉。六月偏宜竹下眠。每対高僧揮白塵。還嫌俗客流青氈。疎鐘細磬他年約。準擬栽蓮十八賢。

憑闌拳目眇青天。取樂何曾在四禪。客散亢龍楼上臥。吟餘司馬醉中眠。竹陰避暑風吹帽。梅畔尋春雪洒氈。不待休官林下去。高風已見一人賢。

この二首は諸注の指摘するところであるが、同じく『空華集』巻第一にはつぎのような詩がある。

苦熱。有懷小山竹間壺隱亭子。作此寄主人能叟居士。

三界炎炎火一團。就中誰復得輕安。壺公隨処天如許。一榻橫眠万竹寒。

詩題に「苦熱。有懷小山竹間壺隱亭子」とあることから、「壺隱亭」が小山に存在したことが知られる。

周囲には竹藪が生い茂っていたらしく、『蕉堅藁』六十三番詩には「竹徑に僧を邀へて履を鳴らして出で」、「空華集」には「六月偏宜竹下眠」「竹陰避暑風吹帽」「一榻横眠万竹寒」という表現が見られる。と、いうことは、この六十三番詩も関東（古河周辺）での作ということになる。季節も春である。なお、「能叟居士」については、関東武士ではなからうかとする説もある（『蕉堅藁全注』、一二〇頁）。

六十四番詩以降も、六十八番詩まで七言律詩が並んでいる。

六四 次韻栢樹心

老屋蕭條万境空。簷前鈴語響丁東。鬢絲嗟我莖々白。文錦觀君爛々紅。汗漫遨期游海上。風流王謝出僧中。欲將拙語攀中高唱上。一詠時号万竅風。

六五 送松上人歸綏州

東風望杏綵陽城。可忍忽々此送行。曉渚鳴鞭逢路熟。晴江解纜趁潮平。原情春淺鶴鴿急。山意雪殘鴻鴈驚。安得海天霞片々。為君裁作錦衣輕。

六六 送端介然上京

男兒志氣如君少。欲下躡雲梯叩帝閭上。碧海霞隨金錫轉。瑤京日映錦袍温。仲靈書奏天顏近。大覺詔歸師道尊。白髮回頭江上客。鵬程九万看騰鶩。

【注】「端介然」とは介然中端のことである。

六七 送復無已歸京

肝胆相知二十年。壯凶共著祖生鞭。暮容餘我客天外。高步羨君朝日邊。御苑桃花紅膩雨。官街柳色綠勻烟。長安如有故人問。白首垂綸碧海前。

六八 寄宥寬仲

我朋寬仲今詞伯。感此揚々意氣全。蛇吼匣中千載獄。鸞回筆下五雲牋。小齋螢雪愁同案。上苑鶯花醉共筵。已矣無由攀往事。想君尚聳作詩肩。

六十六番詩と六十七番詩が京都での作ではないことは明らかである。わたくしは、六十四番詩と六十八番詩もまた、関東（おもに鎌倉周辺）での作ではないか、と考えている。旧交を温めるために再び関東に赴いたにもかかわらず、古河周辺での作のみというのは不自然ではなからうか。絶海が老年期を迎えて、都から遠く離れた海のほとりで生活していたということは、たとえば六十四番詩の「鬢絲、我が茎々の白きを嗟なげき」、六十六番詩の「碧海の霞は金錫に随ひて転じ」や「白髪、頭かうべを回らす、江上の客」、六十七番詩の「長安、もし故人の間ふ有らば、白首、綸いとを碧海の前に垂る、と」等の表現からも推察することができる。季節は、六十五番詩、六十六番詩、六十七番詩、いずれも春である。六十四番詩と六十八番詩の季節はわからない。

寺田氏は、『義堂周信・絶海中津』（日本詩人選）のなかで、六十五番詩については、「東風、望香たり、総陽城」という詩句に注目して、「そうすると総州を東と言っているのを根拠に、作者がすでに西帰し、さらに四国に「逃遁」のち作ったものと見られよう。総陽が海路のかなたにあるとされている一点からも絶海の現在地は甲州ではない」（二五六頁）と指摘されている。また六十七番詩についても、「しかし詩の「長安もし故人の間ふあらば、白首綸を垂る、碧海の前」という句から、前作（六十五番詩、朝倉注）同様、至徳元年（一三八四年）以降絶海が阿波宝冠寺にあったときの作と見ることができ」（二五七頁）と言われている。たしかに阿波は海に面していて、上総や下総を東に望んでいるが、この地理的条件は、関東（とくに鎌倉周辺）にも当てはまる。わたくしは、この海浜での詠を、六十番詩から引き続き、関東（おもに鎌倉周辺）での作と考え、六十番詩と六十八番詩はすべて、絶海が関東に再遊している時に詠んだものであると考えるにいたっている。

おわりに

五山文学は、歴史学の分野では、史料として頻繁に援用されるにもかかわらず、文学の分野においては、ともすれば「傍流の文学」として敬遠される嫌いがある。禅僧が抄者である「抄物」は、専ら国語学の分野で活用されている。五山文学を明らかにするためには、禅僧特有の見方、考え方、感じ方を明らかにすることが求められよう。

今回の考察は、絶海中津に関する伝記研究の一環であり、彼の作品を読み解いていく上での、言わば基礎研究にあたる。今後は、絶海の生涯に注目しつつも、『蕉堅藁』の詩文（とくに七言律詩以外）の配列についても考え（後編第二章参照）、彼の作品世界へ入って行きたいと考えている。

注

- (1) 引用は五山版、作品番号は蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇）による。返り点は、江戸の版本（寛文十年版か無刊記本）等を参考にして、私に施した。句読点も私に施した。
- (2) 梶谷宗忍氏訳注『蕉堅藁 年譜』（相国寺、昭五〇）。
- (3) 『仏智年譜』康暦二年条に、

二年庚申。師歳四十五歳。春赤松氏將_レ法雲_ニ聘_レ師。挙_レ汝霖佐公_ニ代_レ之。秋以_レ鈞選_ニ開_レ法甲斐州乾徳山惠林禅寺_ニ。九月初三日就_レ龜山雲居庵_ニ受請。十月八日入寺。凡在_レ京師相陽_ニ。有名之英衲雲集。寺屋殆乎無_レ所容。師不_レ拒_レ之。孜孜誘掖也。学徒参叩。禅宴餘暇請而講_レ法華楞嚴円覚等_ニ。緇素聽衆汎溢矣。蓋師旺化權_ニ興于此_ニ矣。

【注】「汝霖佐公」とは汝霖妙佐のことである。

とある。なお、同書の引用は『大正新修大藏經』第八十卷「続諸宗部」による。返り点は同書を参考にし、私に施した。

(4) 『日工集』 応安四年十月十五日条に、

十月十五日、余応_ニ上杉兵部諱公_ニ請_レ、創_レ一刹於鎌倉城北_ニ、名曰_レ報恩護国_ニ、山称_レ南陽_ニ、闢_レ基演唱、余先試把_レ鑿、開_レ土三下、入_レ簣中_ニ而後、与_レ檀那_ニ運搬一次、

【注】「上杉兵部諱公」とは上杉能憲のことである。

とある。

(5) 『鎌倉九代後記』(『改定史籍集覽』第五冊所収)の「応安」の項には、

同四年十月、報恩寺供養、上杉能憲執行ス、養父伊豆守重能、去建武二年建立ニヨリテ也、

という記述があり、建武二年(一二三三)に、報恩寺の前身となる寺が、関東管領上杉能憲の養父重能によつて建立されたことがわかる。ただし、『日工集』 応安六年(一二三三) 十月一日条に「報恩寺今号_ニ南

陽山「故也」とあることから、同寺の山号が南陽山と称されたのは応安四年以後のことであろう。

(6) 引用は東京大学史料編纂所編『臥雲日件録抜尤』(大日本古記録、岩波書店、昭三六)による。返り点は『続史籍集覽』所収本を参考にして、私に施した。

(7) 『夢窓正覚心宗普濟国師碑銘』は『続群書類従』第九輯下「伝部」に収められており、その解題(『群書類題』第四下所収、玉村氏執筆)には、以下のように記されている。

(上略) この碑銘は、貞治五年(一三六六)夢窓の門人義堂周信(一三二五—一三八八)が、目子(作文の素材を簡条書にした目録)を入明する同門の絶海中津(一三三六—一四〇五)に託し、ひそかに当時随一の文豪宋濂に撰文を依頼せしめたが、当時倭寇等のことから、明の日本に対する感情が悪化し、宋濂は、これを憚って、撰文が延引されていた。絶海は、応安六年(洪武六年)来朝して帰明した天台僧無逸克勤(のち還俗して華克勤といい、宰相となる)を介して宋濂にそのことを催促した。よって洪武八年(永和元年、一三七五)、宋濂はその文を製した。しかし永くこの文は日本に持帰られなかった。応永十一年(一四〇四)、遣明使として入明した明室梵亮(龍湫の弟子)が帰朝する際に、出発の前日、名を告げないある者が、夜中に旅館をおとづれ、宋濂から遺囑され四十年来秘蔵して好便を待ったといつてこの碑銘を手渡したので、明室はこれを日本に齎しかえった。のち、絶海の法孫古邦慧淳が、土佐から巨石を運んで、三会院に、この碑文を刻して建てようと企てたが、運賃がかさむので、そのまま中止になった。(下略)

(一五〇頁)

『日工集』の巻末には、碑文将来の由来記が付されており、右の解説はそれによっている。

(8) 引用は『五山文学新集』第一巻による。返り点は私に施した。

(9) 横川の作品で「東人」という語を確認してみる。

I (上略) 故曰、子願即天下願也、不_レ其然_二乎、願_二此集中掛_レ名者、桃源為_レ首、而皆子故人也、已知_二子願_二乎、兼告_二予言_二可也、異日儻見_レ記省_レ焉、予將_三再遊赴_二東人之約_一、欲_レ留_レ之、豈可_レ得乎、与_二其旧業徒_二咲_二黍離_一、孰_三若随处暫宿_二桑下_一、其意亦宜乎、草木知_レ名、盍_レ敬_二此人_一、江山為_レ助、果得_二此集_一、爰徵_二后叙_一、拒而不_レ允、未如_レ之何、(下略)

〔『小補東遊集』后叙〕

【注】「桃源」とは桃源瑞仙のことである。

II 擗別以来、日久歳深、伏惟、尊候万福、景徐報_レ便而来、一咲折_レ屐、所以作_二此紙_一也、高駕入_レ東、

々人皆服_二其化_一、雖_レ失_二於此_一、而得_二於彼_一、歎羨々々、(下略)

〔『京花集』「与_二九万里_一書」〕

【注】「景徐」とは景徐周麟、「九万里」とは万里集九のことである。

I の文章は、『小遊東遊集』の後序からの抜粋である。『小遊東遊集』は、横川が応仁の乱を避けて、東方の地近江に遊んだ時に詠んだ作品を収めたもので、その序文は、横川の文学上の師にあたる瑞溪周鳳「二三九一〜一四七三」が記している(『五山文学新集』第一巻・解題)。同序によると、応仁二年(一四六八)夏、一旦、近江から京都に戻った横川は、東山今熊野の養源院で師兄龍淵本珠との再会を果たした後、北岩藏の慈雲庵に隠棲していた瑞溪の許を訪れ、『小遊東遊集』の序を請い受けた。瑞溪は、横川の突然の来訪

を喜び、再び近江に帰ることを快く思わなかったが、親友桃源瑞仙（二四三〇〜八九）が横川の帰りを待っていたので、やむなく東帰を許したという。「予將^{（全）}再遊赴^{（全）}東人之約^{（全）}、欲^{（全）}留^{（全）}之、豈可^{（全）}得乎^{（全）}」——この場合の「東人」は近江の人、具体的に言うとは、桃源あるいは外護者の小倉実澄のことを指しているか、と思われる。彼らとの約束は、『小補東遊後集』所収の「寄桃源詩并序」によると、百余日の間に近江に戻ることだった。

II の文章は、横川が万里集九（一四二八〜一五〇七？）に宛てた書簡の一節である。同書には「少雲・桃源今則亡」というくだりがある。少雲曇についてはよくわからないが、桃源の没年は延徳元年（一四八九）十月二十八日のことなので（『蔭涼軒日録』等）、「高駕入^{（全）}東、々人皆服^{（全）}其化^{（全）}」というくだりは、文明十七年（一四八五）、万里が、太田道灌（一四三二〜一四八六）に招かれて江戸に遊んだことを述べていると思われる。万里は、東遊する前から、道灌や上杉定正をはじめとした関東の武將たちと交流があり、東遊してからも、道灌が主催する詩歌会に出席したり、道灌の伯父にあたる叔悦禪憚に請われて黄山谷詩の講義をしたりしている。中川徳之助氏『万里集九』（人物叢書、吉川弘文館、平九）参照。この場合の「東人」は関東の人を意味している、とわたくしは解している。なお、景徐周麟（一四四〇〜一五一八）の『翰林葫蘆集』第十四所収の「鹿苑院殿百年忌陞座 散説」には（上略）吾朝築^{（全）}壇受^{（全）}戒者^{（全）}三処^{（全）}、其一者筑^{（全）}之觀音^{（全）}、便^{（全）}于西人^{（全）}也、其二者和之東大^{（全）}、便^{（全）}于中人^{（全）}也、其三者野之薬師^{（全）}、便^{（全）}于東人^{（全）}也、迨^{（全）}乎延曆戒壇之興^{（全）}、而野之薬師廃矣、故東人皆忍^{（全）}路難^{（全）}登^{（全）}比叡壇^{（全）}者、歳々為^{（全）}夥也、（下略）「や、（上略）伝聞前年円覚寺有^{（全）}靈

異事、一日有_二物降_レ自_レ天、視_レ之則舍利也、東人至_レ此者言_レ之、將_レ信_レ然乎、不_レ信_レ然乎、京師鎌倉兄弟之國也、(下略)「という文章があることを付記しておく。

(10) 引用は辻善之助氏『空華日用工夫略集』(太平洋社、昭一四)による。返り点は蔭木氏『訓注 空華日用工夫略集』(思文閣出版、昭五七)を参考にして、私に施した。

(11) 全文は以下の通りである。

五一 送_三人之_二相陽_一

西州雖_レ好戰塵黃。千里相陽歸興長。衣袂盛_レ花兼_三貝葉_一。軍持瀘_レ水掛_三紗囊_一。禪心慣_レ看海天月。客意初驚山路霜。到日諸昆如問_レ我。倦懷不_レ似_三昔清狂_一。

(12) 中国文学における用例を見ると、たとえば杜甫の「壯遊」という詩に、

(上略) 帰帆払_三天姥_一。中歳貢_三旧郷_一。氣劇屈賈壘。目短曹劉墻。忤下考功第。独辞京尹堂。放蕩斉趙間。裘馬頗清狂。春歌_三叢台上_一。冬獵_三青丘旁_一。呼_レ鷹阜樞林。逐_レ獸雲雪岡。射_レ飛曾縱_レ鞞。引_レ臂落_三驚鷗_一。蘇侯拋_レ鞍喜。忽如_レ携_三葛強_一。(下略)

(四部叢刊所収本。返り点は鈴木虎雄氏註解『杜甫全詩集』(日本図書センター、昭五三)を参考にして、私に施した)

とある。二十四歳の時、郷貢生として受験のために都(長安)へ送り出された杜甫は、あいにく落第してしまう。そして、その帰りがけに斉趙の地方(山東省と山西省)に気儘に遊び、輕裘肥馬、すこぶる清狂

の態を尽くすこと、かれこれ八、九年にも渡つたという。「春歌叢台上」以下に記されている杜甫の行動は、甚だ常軌を逸しているが、自らが意図して破天荒に振舞っているところに、彼の信念（主張）のようなものが見え隠れする。杜甫の「遣興五首」のうちの一首に、飲中八仙の一人である賀知章を詠じて、「賀公雅吳語。在位常清狂（下略）」とある。また、同じく杜甫の「遣悶呈路十九曹長」という詩に「（上略）晚節漸於詩律細。誰家數去酒杯寬。唯君醉愛清狂客。百遍相過意未闌」、陸游の「赴成都泛舟自三泉至益昌」。謀以明年下三峽」という詩に「詩酒清狂二十年。又摩病眼看西川」（下略）、晁補之の「次韻張著作文潛」。飲王舍人才元家。時坐客戶部李尚書公扈。光祿文少卿周翰。大理杜少卿君章。黃著作魯直」という詩に「（上略）妍歌聽黃子。不飲亦清狂」と詠じられているように、「清狂」という語に「酒」が関わってくるのも、竹林で酒を飲み、琴を弾じて、清談を行なったという「竹林の七賢」のごとく、俗世間から逸脱しつつも、自己の信念（主張）を貫き通そうとする強靱な精神力がそこに介在していたからであろう。

翻ってわが国の五山文学における用例を見てみると、今のところ、以下に挙げた六例しか見付けることができなかった。

○琉璃淨潔柱徽張。一曲山川舞飲光。若使無絃彈別調。忘瞿曇定引清狂。

（『濟北集』「琴」、『五山文学全集』第一卷）

○秋風鼓笛發清狂。哭一場兮笑一場。識得從來無實法。玄沙只是謝三郎。

『了幻集』「看_レ戯劇_一」、『五山文学全集』第三卷

○(上略) 天隱也者。聖賢者之所_二自而出_一也。友社所_レ稱。所_レ待_二於公_一之者。其在_レ茲歟。或玩。或苟。以官_二于朝_一。或遊。或処。以託_二于清狂清盲_一。或屠狗。或儉牛。或卜筮。或醫藥。以壳_二于市門里巷_一。隱之巧者也。或臞仙。或卓行。或任_二塗捷徑_一。以耕_二釣牧于樵南山之南北山之北_一。隱之高者。詭者也。皆人隱者也。(下略)

『業鏡台』「天隱字叙」、同右

○梅竹書堂古。琴樽引_レ興長。殘季從_二爛醉_一。万事_レ轉清狂。月影深窺_レ帳。春陰半擁_レ床。君恩猶到_レ此。一飯莫_二相忘_一。

『雲壑猿吟』「大賢居士紀公梅竹書堂詩」、同右

○為_レ法扱_レ才今相国、多將_二野服_一、厠朝行、紅塵拔_レ脚情何極、白日支_レ頤睡正長、諸老有_レ論傾_二介甫_一、清狂無_レ客似_二知章_一、薰風吹_レ轉繁華夢、付_二与庭梅_一滿意黃、

『雲巢集』「用_二前韻_一答_二無白_一・東日_一」(五首中一首)、『五山文学新集』第四卷

○醉帰袍袖_二沍_二香塵_一。芸閣題_レ詩彩筆新。莫_レ怪清狂_レ唯愛_レ酒。床頭長_一是一壺春。

『雲門一曲』「謹次_二日新敦菴上人見_レ示韻_一」、上村觀光氏藏・史料編纂所謄写本

「風狂」は一休宗純(一三九四〜一四八一)を形容する語として有名であるが、「清狂」は五山の詩文であまり見受けられない語である。五山文学における意味・用法も、中国文学におけるそれと変わらないようである。

(13) 引用は百納本二十四史所収本による。(〜)内は割注を示す。返り点は私に施した。

(14) 厳密に言うと、現存はしていないが、この時期に絶海の詩作の痕跡が認められないことはない。『空華集』巻第十一に、以下のような文章がある。

常陸之陽有_レ山。俗以_二築波_一呼_レ之。好_レ事者往往称_二竺山_一。蓋以_二其山也。偃蹇乎南北_一。靈異之攸_レ宅。煙雲出沒。卉木恣_レ龍。而氣藹如_上也。余嘗客_下其陰曰_二小玉村_一者_上。凡三載。以愛_二其山_一。矚_二于朝_一。睡_二于夕_一。而翫_レ之。遂与_二津絶海臨大照諸友_一。為_レ詩而歌_レ之矣。(下略)

【注】「臨大照」とは大照円臨(熙)のことである。

これによると、絶海は、義堂や大照円臨らと共に筑波山(茨城県中央部にある)を訪れ、詩を吟詠したという。『空華集』巻第九には、「次_二韻津絶海詠_二竺波山_一」という詩があり、この時に義堂が詠じたものと思われる。この筑波山行の経緯は、今となっては知る由もないが、義堂と唱和した絶海詩が、『蕉堅藁』(や『絶海和尚語録』(以下、『絶海録』と略す))に収録されていないことも、それ以上に気にかかるところではある。

(15) 寺田透氏『義堂周信・絶海中津』(日本詩人選24、筑摩書房、昭五二)。

(16) 引用は四部叢刊所収本による。返り点は竹内照夫氏校注『韓非子』上(新釈漢文大系11、明治書院、昭三五)を参考にして、私に施した。

(17) 『日工集』応安元年八月二日条に、

八月二日、為_二諸子_一講_二高僧靈一詩_一、按_二靈一_一、僧伝所謂_二三宣_一也、三_一三者会稽曇一・閩州懷一・慶雲

靈一也、

とある。

(18) 『蕉堅藁』(や『絶海録』)に収められていない詩文が、他書に見受けられることがある。

○建仁寺兩足院藏『東海瑠華集(絶句)』 『五山文学新集』第二卷)

漫書芭蕉

幻質從來不自持。區々保爾復胡為。題名未必留千歲。大小秋風一任吹。

謝人惠蕉苗

遠採蕉苗為我分。義情高薄万層雲。秋來若有崇眠雨。一片愁心却恨君。

破衣

百結懸鶉肩下垂。春風幾度着心吹。七零八落似何処。窗外芭蕉秋暮時。

竹之贊

叢々夏玉此篔簹。風影參差午每涼。遙想退朝耽楚趣。湛園渭畝在高堂。

○相国寺長得院藏『拾遺記』 (梶谷宗忍氏訳注『絶海語録』二(思文閣出版、昭五二))

一節 叢藏主

現在当院

絶海和尚

古人云。万般存此道。一味信前縁。這十字実可為終身之警策者也。老拙旧疾未愈。移居件々不レ便。左右又無使令者。悪情惊不レ言可レ知也。雖然餘喘無レ幾。一切只以如幻之観消遣(遺)

之耳。勿_レ煩_二憂念_一。僧去。忙不_レ尽_レ所_レ言。 五月六日

二節 初寒遊_二古寺_一 絕海和尚

古寺來遊七尺藤。初寒山霧着衣凝。殘僧一箇頭如雪。深殿猶挑白日灯。

三節 春遊 絕海和尚

隴麥雉鳴由_二水流_一。得_レ為_二閑客_一只閑遊。千山未_二必看皆好_一。傍_二此風烟_一暫可_レ留。

四節 悼_二制侍者_一 絕海和尚

九旬聖制未_レ終_レ期。急々轉_レ身何処歸。案上誦殘書尚_レ在。孤螢依_レ旧入_レ窓飛。

五節 一春瑞功禪定門。今茲夏五。俄然逝矣。文成侍者尤厚_二于平日_一。哀慕之余。凶_レ之以示。造

次不_レ忘焉。予亦滴_二老淚_一。以染_レ筆云 絕海和尚

生季十七一男兒。短世悲哉長別離。衣袖難_レ乾今日淚。不_レ凶復覩旧威儀。

六節 文淵藏主作_二禪詩_一悼_二孝岳居士_一。予亦和_レ之以助_二一哀_一云 絕海和尚

此行何料在_二今年_一。鐵馬遲々鞭不_レ前。寄_二語諸人_一捲_レ簾看。遠山盛雪餞_二齋筵_一。

七節 盆蘆 絕海和尚

分_レ根遠自_二大江頭_一。移在_二盆中_一意最幽。借問胡僧歸去後。狂風疎雨幾回秋。

○『中華若木詩抄』 (岩波・新日本古典文学大系。抄文は省略する)

生来不_レ説_二世興亡_一。風雨蓑衣兩鬢霜。只合_二蘆花深处夢_一。一竿釣莫_レ到_二文王_一。

一九八 惜_レ春

万般春色看成_レ空。多少飛花暮雨中。黃鳥數声人寂々。柳絲無_レ力_レ繫_二東風_一。

○『翰林五鳳集』卷第四十八（『大日本仏教全書』第九十卷）

画馬障子二首

憶昔開元全盛時。殿前奉_レ詔舞_二權奇_一。君恩一夢馬官語。沙苑晚風吹_二蒺藜_一。
伯樂難_レ逢馬易逢。風愁霧鬣為_レ誰容。一鳴騎出長楸暮。十二天閑無_二此龍_一。

画

春江西過綠_二於菖_一。四面窻扉快意開。晨鵲楂々無_二浪証_一。果有_二詩客策_レ驢來_一。

【注】前詩二首は、横川の『小補東遊集』にも収録されている。

これらの詩がどのような経緯を経て他書に収められたのかはわからないが、『蕉堅藁』（や『絶海録』）定稿時に除かれた作品である可能性もあるだろう。

(19) 入矢義高氏校注『五山文学集』（新日本古典文学大系48、岩波書店、平二）。

※引用本文については、旧字体や異体字を私に改めた箇所がある。また、傍線や文字囲は、私に施した。

【付記】

本稿は平成十年度広島大学国語国文学会秋季研究集会（十一月二十二日）における口頭発表を加筆修正したものである。

*

*

最近、早稲田大学大学院生の野川博之氏から、『新編鎌倉志』巻之八（大日本地誌大系二十一）の「太寧寺（横浜市金沢区片吹町）」の項に、絶海作として「題太寧寺六首」という詩が掲載されていることをお教え頂いた。詳細な検討はこれからであるが、同詩が後人の偽作などではなく、絶海本人の作ならば、詩中に「老矣」「老来」「白頭」という語があるので、絶海が関東に再遊したことを裏付ける有力な史料の一つになるだろう。

第四章 日記類に見る絶海中津——「坦率の性」に注目して——

はじめに

平成十一年十月に刊行された『国文学 解釈と鑑賞』第六四卷一〇号には、特集「中世文学（南北朝室町期）にみる人間像——その生と愛、そして死」が組まれており、堀川貴司氏が「絶海中津」の項を担当された。氏の話題は「明で学んだ文雅的詩文」という副題のもと、絶海が明の太祖高皇帝（洪武帝・朱元璋。一三二八〜九八）と詩を唱和したことに終始している。

絶海中津（一三三六〜一四〇五）の人物評については、夙く玉村竹二氏がつぎのように述べられている。¹⁾

絶海は義堂と同郷同門で、五山文学の雄と並称され、その影響をうけ、相互に敬愛しながら、その性格には正反対のものがあつた。義堂が常識円満な協調の人であるのに対して、絶海は狂狷不羈にして、感情に激し、妥協性に乏しく、異常の正義感をもつ詩人肌であつた。そのために足利義満と相忤うことも再三であり、隠遁癖と流浪性も相当に強かつた。（下略）

この評言はすでに定着していると言えよう。が、たとえば、絶海が晩年、足利義満（一三五八〜一四〇八）と親密な間柄にあつたことや、霊松門派（勝定門派とも言う）の派祖となつてゐることなどは、右の絶海像からは想像しにくいのではないだろうか。稿者は、右の絶海像が、弟子の叔京妙邨が撰述したとされる『仏智広照浄印

翊聖国師年譜』(以下、『仏智年譜』と略す)に引きずられての評価ではないか、と考えている。以下に『仏智年譜』⁽²⁾の記事本文を抄出し、絶海の「狂狷不羈」なるさまを確認してみたい。①②③の番号は私に施した。なお、「狂狷」という語は、『論語』⁽³⁾子路第十三の「子曰わく、中行を得て之れと与にせずんば、必ずや狂狷乎。狂者は進み取る。狷者は為さざる所有者也」による。『正法眼蔵』⁽⁴⁾第六十六・三昧王三昧には「応に是の如く坐すべし。或いは外道の輩、或いは常に翹足して道を求むる、或いは常に立ちて道を求むる、或いは荷足して道を求むる、是の如きの狂狷心は邪海に没す、形安穩ならず」という用例があり、並はずれて志が高く、その志を遂げんとする意志の堅いことを言うようである。

①文和二年癸巳。師年十八。掛錫於東山建仁。与信義堂。怙先覺。勲月舟。寿天錫等。同慕龍山和尚之高風。往而依之。次大林和尚董東山席。俾師登侍業職。師凡隸東山。恰閱一紀。雖風雨寒暑。未嘗怠禪誦。每更主法住持。皆美而為精進幢爾。

【注】「信義堂」は義堂周信、「怙先覺」は先覺周怙、「勲月舟」は月舟周勲、「寿天錫」は天錫周寿、「龍山和尚」は龍山徳見、「大林和尚」は大林善育のことである。

*

*

②(康曆)二年庚申。師歳四十五歳。春赤松氏將法雲聘師。举汝霖佐公代之。秋以鈞選開法甲斐州乾徳山恵林禪寺。九月初三日就龜山雲居庵受請。十月八日入寺。凡在京師相陽。有名之英衲雲集。寺屋殆乎無所容。師不拒之。孜孜誘掖也。学徒参叩。禅宴餘暇請而講法華楞嚴円覺等。緇素聴衆汎溢矣。

蓋師旺化權_ニ興于此_一矣。

【注】「汝霖佐公」は汝霖妙佐のことである。「赤松氏」については、『延宝伝灯録』や『本朝高僧伝』に記されているように赤松義則のことである。

*

*

③至徳元年甲子。師四十九歳。師力任_ニ宗柄_一。議論公評刺_レ拳無_レ所_レ避。適_ニ以_ニ直言_一忤_ニ相公之旨_一。師長揖而去。夏六月隱_ニ于撰之錢原_一云云。

【注】「相公」は足利義満のことである。

絶海は文和二年（一一三三）、建仁寺に掛錫し、貞治三年（一一三六）に關東に赴くまでの約十二年間、同寺において修行をしたのだが、風雨といえども、寒暑といえども、坐禅、誦経を怠らず、住持（龍山徳見等）が替わるごとに絶海のことを「精進幢」と称さないものはいなかったという①。また、康暦二年（一一三八）に甲斐の恵林寺に入寺した絶海の許には、京都や相模の有名な僧が大勢集まり、寺内に收容し切れないほどだったが、絶海は拒むことなく彼らを教化し、坐禅の余暇には『法華経』『首楞嚴経』『円覚経』等の講義をした②。至徳元年（一一三四）六月には義満に直言してその意に逆らい、撰津の錢原（大阪府茨木市）に隠棲したという③。これらの記述には、直情径行的で、かつ脱俗的な絶海の姿の一面が描かれていると言えよう。

禅僧の年譜類を概観すると、禅僧個人の誕生・修行期・社会活動期・死没といった、言わば外的（公的）な部分_⑤が主として記されている。また、今泉淑夫氏も言われているように、年譜というものは、総じて、弟子が師匠

の履歴を記述するという性格上、時には事実を省略し、時には事実を誇張するものである。こうした状況のなかで、稿者が注目するのが、絶海が活躍した当時の日記類である。絶海自身は日記を残していないが、法兄義堂周信（一三三五〜八八）の『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）や『臥雲日件録拔尤』（以下、『拔尤』と略す）等に彼はしばしば登場し、⁶日常生活の様々な場面において内的（私的）な部分を露呈している。本章では、特に日記類に登場する絶海に注目して、いま一度、絶海の人間像について考え、彼の作品世界へ入っていく契機としたい。

一 日記類に見る絶海中津——『日工集』貞治五年〔一三六六〕七夕条——

まず『日工集』⁷貞治五年七夕条を引用する。

七夕、無外・大照五六人來遊聯句、々未レ央、聴レ売レ瓜声¹、乃命²侍衣³令⁴買⁵之、少頃出謂、瓜太半熟損、不能⁶取⁷之、句訖客去、侍衣曰、初取⁸茗以⁹浴具¹⁰、亦無¹¹質可¹²買¹³瓜、是以謂¹⁴之熟損、余咲曰、真箇薄福住山矣、

【注】「無外」は無外円方、「大照」は大照円臨（熙）のことである。

内容に入る前に、本文中の「侍衣」すなわち衣鉢侍者に関する人物考証を行っておきたい。朝倉尚氏「禪林聯句略史——義堂周信とその前後——」⁸では、これを絶海中津として論が展開されているが、他書（蔭木英雄氏『訓注 空華日用工夫略集』等）には全く指摘がない。なお朝倉尚氏も、論の進行上、充分な考察を加えておられな

い。ここで、直前の記事を引用する。

五月二十二日、善福公帖至矣、余以_レ府命嚴_レ、固辞不_レ獲、乃領_二寺事_一、津侍者時在_二室中_一、掌_二吾衣鉢簿_一、六月一日、入院、蓋先国師戡化之後、余遠來_二于海東_一、都元帥左武衛將軍、以_二法門昆仲_一、法義甚厚、遊從朝夕、互忘_二形骸_一、故特下_二鈎帖_一、開堂演法、津侍者号_二要関_一、告_レ別將_レ游_二江南_一、余草_二先国師行状_一而付_レ之曰、蓋聞大明之朝、有_二文人宋景濂者_一、呈_レ此以求_二碑文并銘詞_一、夏末、余亦謝_二寺事_一、

【注】玉村氏や蔭木氏は「夏末、余亦謝_二寺事_一、」というくだりを改行されていたが、「六月一日、入院、」との対応関係や、つぎに七夕条が記されていることなどを考慮して改行しない。内閣文庫本でも、六月一日条に記されている。

「津侍者」「要関」は絶海（要関）中津、「先国師」は夢窓疎石、「都元帥左武衛將軍」は足利基氏のことである。

『仏智年譜』によると、絶海が京都から関東へ赴いたのは、貞治三年のことである。その後、絶海は建長寺に籍を置いて、青山慈永（第三十八世）や大喜法忻（第三十九世）の許で修行していたのだが、この年の五月二十二日に義堂が海雲山善福寺（鎌倉市由井に位置していたが、現在は廢寺）の公帖を受け、六月一日に入院したのに随って、同寺において衣鉢侍者を勤めたという。ここで確認しておきたいのが、絶海が善福寺に滞在した期間である。五月二十二日条に「津侍者、時に室中に在り、吾が衣鉢簿を掌る」とあり、六月一日条に「津侍者、要関と号す。別れを告げて、まさに江南に遊ばんとす。云々」とあるが、絶海は六月一日に、実際に善福寺を退い

たわけではなく、将来的に中国に遊学する意志があることを義堂に告げただけであろう。さもなければ、義堂が善福寺に住持として入ったと同時に、絶海は衣鉢侍者を勤めることなく、同寺を退いたことになるからである。後年、義堂は義満に向かつて、「絶海と余と里閨を同じくし、少き^{わか}より床席を共にす。嘗て関東に在ること幾年、余、善福に住す。余が為に衣鉢閨に侍す」(『日工集』永徳二年十月廿九日条)と述懐しているし、実際に絶海が入明したのも、二年後の応安元年(一一三六八)のことなので(『仏智年譜』)、絶海は、義堂が退院する頃まで同寺に滞在したのではないだろうか。なお、『日工集』には「夏末、余、亦寺事を謝す」とあり、夏安居の解制(七月十五日)の頃に義堂が退院したかのように記されているが、同じく義堂の『空華集』⁽⁹⁾巻第三には「丙午冬。暫出¹⁰海雲。游¹¹于京師。有¹²作」という詩があり、巻第十二には、

余丙午冬出¹³海雲。游¹⁴于京輦。館¹⁵于六角大慈精舍。始識¹⁶玉岡於主人物先格公之右。時也玉岡年方十六七。

(下略)

〔玉岡唱和詩序〕

【注】「玉岡」は玉岡如金、「物先格公」は物先周格のことである。また、「丙午」は貞治五年にあたる。

という文章がある。玉村氏も指摘されているように、⁽¹⁰⁾『日工集』の康永元年から貞治五年までの記事は、明らかに義堂が記録したものであるが、いまだ日記体ではなく、自歴譜体の追憶記で甚だ簡潔なので、今見てきたような曖昧な記述も生じたのだろう。したがって、以下に「侍衣」を絶海中津と特定して、先に挙げた貞治五年七夕条を見ていくことにする。

この日、義堂の許に、無外円方や大照円臨をはじめとして、五、六人の僧が遊びに来て、聯句に興じていたと

ころ、外から瓜売りの声が聞こえてきた。早速、義堂は衣鉢侍者である絶海に、瓜を買ってくるように命じたのであるが、しばらくして絶海が戻ってきて言うことには、瓜の大半は熟損していたので、買うことができなかつたとのこと。実のところは、先に茶を買うために浴具を質に入れてしまったため、もはや善福寺には、瓜を買うために質に入れるものさえ残っておらず、絶海は機転をきかせて、急場を凌ぐために熟損の所為にしたのである。句会が終わり、客人が去った後、絶海から舞台裏を知らされた義堂は、「善福」に「薄福」をかけて、寺の貧乏を笑ったという。この逸話からは、絶海の機知に富んだ一面と、繊細で思いやりのある一面とが窺われる。絶海は他人の前で寺の台所事情を話し、住持である義堂に恥を搔かせたくなかつたため、気の利いた嘘をついたのだろう。

二 『日工集』至徳三年（一三三六）十月廿九日、晦日条

先に少し触れたが、絶海は至徳元年六月、義満に逆らつて彼の怒りを買ひ、摂津の銭原に隠棲した。その後は、摂津有馬の羚羊谷（牛隠庵）、讃岐の普濟院、阿波の宝冠寺と住居を転々としたのだが、義満の度重なる帰京要請もあつて、翌二年十二月二十五日に帰洛し、等持寺に入寺した（『仏智年譜』。ただし、『日工集』では至徳三年三月八日に帰洛したことになっている）。こうした絶海と義満の關係の経緯を踏まえた上で、『日工集』至徳三年十月廿九日、晦日条を引用してみたい。

廿九日、本院請_二府君_一、為_二紅葉会_一也、是日、府君面_下責播・柱_二侍者不_二請暇_一夜_二宿雲門_一之罪_上、擯_二出相

国寺ニ云々、

晦日、余往ニ等持一、將レ謝ニ府君昨日之臨駕一、府君不レ赴ニ仏事会一、蓋為下絶海昨於ニ常在院一救レ播・柱ニ侍者上也、余参府、々君告レ余以下今日不レ赴ニ等持仏事一之趣上、又曰、等持長老不ニ来謝ニ云々、余復再往ニ等持一、詳説ニ府君不レ来之事一、絶海急参府、謝ニ官旆不ニ入寺一也、

【注】「本院」は後円融上皇、「府君」「官旆」は足利義満、「等持長老」は絶海中津、「播侍者」は叔英宗播のことである。「柱侍者」については未詳。

二十九日、義満は、播侍者（叔英宗播）と柱侍者が無断で雲門庵（太清宗渭が南禅寺山内に建立した塔頭）に宿泊したことを面責して、二人を相国寺から追い出したという。『禅林象器箋』（無著道忠著）によると、「請暇（假）」とは、私用のために許可を得て外出することで、その期限は、古規では十五日以内とされていた。義堂も『日工集』のなかで、「請暇せずして他寺に宿するは、叢規を凌侮するなり」（嘉慶元年九月十三日条）と言って、弟子たちを諫めている。播侍者と柱侍者については、太白真玄（一三五七〜一四一五）の『峨眉鴉臭集』^{（一）}につぎのような文章がある。

源相君。吐握餘暇。推ニ誠仏氏之道一。而相ニ收^{（修）}於王舎城北一。鼎建一大精舎一。額曰ニ相国一。寔金碧輪奐之美尽矣。丙寅冬。陞レ寺。齒^{（修）}諸西山甲下。東山乙上^{（修）}。且拔^{（修）}取大方名緇二百枚一。而安^{（修）}焉。吾門曰^{（修）}播。曰^{（修）}柱。持在^{（修）}其首選一。蓋夫以。二人者。歲僅弱冠。而高才美誉過^{（修）}人也遠矣。（下略）

【注】玉村氏『五山禅林宗派図』（思文閣出版、昭六〇）によると、

一山一寧 ——— 雪村友梅 ——— 太清宗滑

太白真玄

叔英宗播

とある。また、「丙寅」は至徳三年にあたる。

義満は相国寺を建立するにあたって、広く禅林にその人材を求めた。そして、選りすぐった二百人もの名の聞こえた僧のなかで「首選」にあつたのが、播侍者であり、柱侍者であつたのである。当然、義満はこの二侍者に目をかけていたことであろう。

話は『日工集』に戻る。晦日、義満が等持院忌（足利尊氏の月忌）を欠席するという。と、いうのも、昨晚、等持寺の住持である絶海が、義満に相国寺を追い出された例の二侍者を常在光院に泊めてやったからである。義満が処罰した二侍者を助けるということは、義満の意志に対して叛意を表わすということになる。まして絶海には義満に逆らつた前歴があり、義満が激昂するのも尤もである。一方、絶海が、玉村氏の言う「異常の正義感」をもつて義満に背いたかと言うと、義堂が義満欠席の詳細を説明するや否や、彼は急いで参府して謝罪しており、それは考えにくいのではないだろうか。二侍者が義満に相国寺を追い出されたという認識が絶海にあつたかどうかはわからないが、この話も、彼の持つやさしさが窺える逸話と言えよう。

三 『抜尤』宝徳元年〔一四四九〕七月十一日条

『抜尤』⁽¹²⁾ 宝徳元年七月十一日条を引用する。

十一日、一中正蔵主来、因曰、公府特搆_二一室_一、命_二諸老_一作_二画障詩_一、便出示_二画本_一、蓋觀瀑図也、為_レ之進_二点心_一、茶罷閑話、及_二往事_一者多矣、曰、昔日常光国師、居_二鹿苑_一時、招_二闔寺兄弟_一點心、与_二絶海・太岳_一等_二相謀_一、出_二数十題_一、続_二句成篇_一、先裂_二播牋_一作_二両枚_一、各於_二其端_一書_レ題、置_二之大盆中_一、命_二人々_一取_レ之題_レ句、々已題了、又依_レ旧置_二于盆中_一、別人取_レ之、对_二其句_一、蓋皆七言八句也、間有_二人不_二对得_一者上、絶海・太岳_一、檢出_レ对_レ之成_レ篇、就中有_二詠_レ鴉詩_一、其句曰、莫_レ貪_二臭肉_一窺_レ中市_上、絶海謂_レ某曰、此觀中句歟、醜_二於其面_一也、某曰、太年_一句也、太年_一有_二慚色_一、絶海亦以為_二言_一、失_一、蓋絶海於_二觀中_一、毎々戲言、尔汝相忘、絶海命_二觀中_一对_二此句_一、觀中曰、好入_二垂楊_一送_二夕暉_一、絶海以為_レ美矣、又以_レ紙為_レ題、詩有_二千杵砧中如_二白雪_一之句_上、无_二对_レ此者_一、絶海命_二太岳_一对、々以_二一揮毫_一下勝_二青筠_一、絶海亦為_レ善矣、如_レ此之事、近时无_レ聞、可_レ慨也、一

【注】「中正蔵主」は仲方中正、「公府」は足利義政、「常光国師」は空谷明応、「太岳_一」は大岳周崇、「観中」は観中中諦、「太年_一」は大年祥登のことである。

仲方中正の懐古談によると、昔日、空谷明応が鹿苑院において、絶海や大岳周崇等とともに探題对句の詩会を催した。「鴉を詠ず」という詩題の時、大年祥登の「臭肉を貪り、城市を窺ふこと莫れ」という句を、絶海は観中中諦が付けたと勘違いし、「此れ観中の句か。其の面よりも醜し」と言ったので、大年は恥ずかしがるし、絶海もまた、事実を知つてことばを失つたという。この逸話からは、絶海の機知を愛する一面と、案外不用意な一面とが窺われる。絶海と観中は冗談を言い合える親密な間柄だったらしく、絶海の『蕉堅藁』にも「まさに近県

に往かんとして、観中外史に留別す」(五三二)⁽¹⁴⁾や「観中を懐ふも至らず」(八六)という詩が見られる。また、観中の『青嶂集』を見ても、頻繁に絶海と詩を贈答、唱和したことが窺える(後編第五章参照)。絶海はその後、観中に句を付けるように命じ、観中の付けた「好し、垂楊に入りて、夕暉を送らんに」という句を誉めたたえている。この詩会の場の雰囲気は和氣藹々としており、絶海も違和感なく融け込んでいるようである。

四 坦率の性

今回は紙幅の都合で、以上の三例しか詳細に見ることができないが、絶海の機知に富んだ一面や、繊細でやさしい一面、また意外に思慮の足りない一面などが窺われた。『日工集』は同郷同門である義堂の日記なので、絶海は頻繁に登場する。前掲箇所のほかにも、甲斐の恵林寺入院を前にして、建仁寺の義堂の許を訪れ、夜通し話をしたこと(康暦二年九月十四日条)、甲斐から帰洛した後、義堂が義満と交渉した結果、書簡で住居(鹿苑院)が決まったことを告げると、わざわざ等持寺の義堂の許まで来てお礼を述べたこと(永徳三年九月十六日条)、義堂の臨終に際して、最後まで病床で看病したこと(嘉慶二年四月三日条)などが記されている。一方、『抜尤』は、現在は散佚している瑞溪周鳳(一三九一〜一四七三)の原日記を、惟高妙安(一四八〇〜一五六七)が抜粋したものである。瑞溪は(絶海の)法弟無求周伸の弟子なので、絶海が『抜尤』に登場するのは、懐古(回顧)談においてである。前掲箇所のほかにも、義堂と「釣を罷め、帰り来たりて、船を繋かず」(『三体詩』「江村即事」司空曙)という句について論じたこと(享徳元年八月九日条)、仲方円伊(一三五四〜一四一三)に招かれ

て、大岳や觀中等と今熊野の永安院を訪れ、東福寺の楞嚴頭である迪元普慶の破題で聯句をしたこと（享徳二年二月十七日条）、つねに太白の疏語を添削していたこと（寛正三年十二月五日条）などが語られている。

さて、これまで日記類に見てきたような絶海の性格は、いったいどのようなことばで形容されるのが適當だろうか。結論から先に述べると、稿者は「坦率」という語に注目している。その典拠は『日工集』至徳三年二月三日条にある。なお、傍線は私に施した。以下同じ。

二月三日、（中略）又話及_二絶海事_一、府君謂_レ余曰、絶海在_二下国_一、居处身事果如何哉、余曰、或人伝、絶海今在_二海国村院_一、寂寞枯淡、然於_二道学禅誦_一、無_一所退倦、君曰、在国既及_二一兩年_一、上_レ京其可也、余曰、絶海性坦率、而忤_二君旨_一、暫置_二田里_一、要_レ有所懲、君笑曰、是乃和尚老婆心也、早欲_レ和尚以_二專使_一喚_上、余曰、諾矣、飯并茶罷、府君還駕、相揖曰、明日礼謝参府、必可_下佩_二吾带_一来_上云々、

これは義堂が住持を勤める南禅寺で催された和漢聯句会の席上で、義満の話題が、絶海に及んだ場面である。

義満は義堂に対して、阿波（宝冠寺）における絶海の近況を尋ねたり（「絶海、下国に在り。居处、身事、果たして如何ぞや」）、その帰洛を許可しており（「在国、既に一兩年に及ぶ。京に上らば、其れ可なり」）、明らかに絶海の上京を早急に望んでいる様子である。それに対して義堂は、義満の気持ちを殺がないように、そして絶海の帰洛が叶うように、前者の問いには「或る人伝ふ、絶海、今海国の村院に在り。寂寞枯淡、然れども、道学禅誦に於いて一も退倦する所無し、と」、後者の問いには「絶海、性、坦率にして、君の旨に忤_{（むか）}ふ。暫く田里に置き、懲らしむる所有るを要す」と答え、義満の様子をうかがっている。結果、義満は、「是れ乃ち和尚の老婆心

なり」と冗談を交えながら、絶海の召喚を決定した。

義堂は、絶海が義満に逆らった例の事件を振り返って、義満に「絶海、性、坦率にして、君の旨に忤ふ」と述べている。義堂が実際、義満に対して言ったことはそのまま日記『日工集』に記したかどうか、いささか疑問ではあるが、それだけにかえって客観的な絶海評価とも考えられよう。稿者は「坦率」という語の用例を、今のところ、この箇所以外に、抄物類は別として、わが国の文献に見出し得ていない。⁽¹⁵⁾ 中国の文献には史書の類や、杜甫、蘇軾、陸游の詩などに確認することができる。①～⑩の番号は私に施した。

① 『晋書』⁽¹⁶⁾ 列伝第四十三・庾亮

亮在武昌、諸佐吏殷浩之徒、乘秋夜往共登南樓、俄而不覺亮至、諸人將起避之。亮徐曰、諸君少住、老子於此處興復不淺。便掘胡牀与浩等談詠竟坐。其坦率行己、多此類也。

② 『北史』列伝第七十一・文苑・李広

広雅有鑑識、度量弘遠、坦率無私、為士流所愛、(下略)

③ 『旧唐書』列伝第八十一・李勉

勉坦率素淡、好古尚奇、清廉簡易、為宗臣之表。(下略)

④ 『宋史』列伝第二百三十八・世家二・西蜀孟氏・歐陽迥

迥性坦率、無檢操、雅善長笛。太祖常召於偏殿、令奏数曲。(下略)

⑤ 『遼史』列伝第三十・耶律棠古

大康中、補本班郎君、累遷至大將軍。性坦率、好別白黑、人有不善、必尽言無隱、時号強棠古。
(下略)

⑥『分門集註杜工部詩』卷十一

將適吳楚留別章使君留後兼幕府諸公。得柳字

我來入蜀門。歲月亦已久。豈惟長兒童。自覺成老醜。常恐性坦率。失身為杯酒。近辭痛飲徒。
折節万夫後。(下略)

⑦『集註分類東坡詩』卷四

次韻定慧欽長老見寄、八首 (第三首目)

羅浮高万仞。下看扶桑卑。默坐朱明洞。玉池自生肥。從來性坦率。醉語漏天機。相逢莫相問。我不記
吾誰。

⑧『集註分類東坡詩』卷十八

次韻答王鞏

我有方外客。顏如瓊之英。十年塵土窟。一寸冰雪清。竭來從我遊。坦率見真情。顧我無足恋。恋
此山水清。新詩如彈丸。脫手不暫停。(下略)

⑨『集註分類東坡詩』卷二十

初別子由

我少知_二子由_一。天資和而清。好_レ学老益堅。表裏漸融明。豈獨為_二吾弟_一。要是賢友生。不_レ見六七年。微言誰
与_レ賡。常恐坦率性。放縱不_二自程_一。會合亦何事。無言對_二空杯_一。使_二人之意消_一。不善無_二由萌_一。(下略)

⑩『劍南詩稿』卷之十三

昼寢夢一客相過。若_二有_レ旧者_一夷粹可_レ愛。既覺。作_二絶句_一記_レ之

夢中何許得_二嘉賓_一。對_二影胡牀_一岸_二幅巾_一。石鼎烹_レ茶火煨_レ栗。主人坦率_レ客情真。

これらの用例を見ると、「坦率」とは、私欲に捉われたり、世間的な義理立てを守る気持ちがなく、さっぱりとして飾るところがない、素朴で素直な性格を言うようである。『辞海』(中華書局刊)は「坦白真率也」として①の用例を挙げており、『辞源』(商務印書館刊)は「謂坦易真率也」として②の用例を挙げている。また、杜甫の詩に「常に恐る、性、坦率にして、身を失ふは、杯酒の為ならむことを」(⑥)、蘇軾の詩に「從來、性、坦率、醉語、天機を漏らす。相遭ひて、相問ふこと莫れ、我、吾の誰なるかを記せず」(⑦)、「常に恐る、坦率の性、放縱、自ら程_はらざるを」(⑨)とあるように、「坦率」であるが故に、場合によっては、周囲を顧みることなく自分の思い通りに行動し、失敗してしまうこともあるようである。『四河入海』(卷第四之四には、⑦の詩に関して「坦率 白(天下白)云、短慮之義也」「坦率ハ短慮ニシテ、率爾聊爾ナルヲ云歟」、同じく『四河入海』卷第二十之四には、⑨の詩に関して「坦率 白云、續翠(江西龍派)曰、坦言平坦、率言倉率也。每事作平坦看、不涉思慮也」「常一放一 坡言ハ、我稟_レ性_{コト}カ坦率ニ、坦平々ニシテ、倉率ナ程ニ、今時ノ人ノ心ニ曲節ノ有ルヲモ不_レ知シテ、平々トマツスクナト心得テ、(下略)」という注が付されている。義堂の見解による

と、多少は義満へのご機嫌取りの気味もあつたのであろうが、絶海が義満に逆らつたのも、絶海の「坦率」に起因する。玉村氏は絶海の性格を「狂狷不羈」と評し、彼がはつきりした主体性の持ち主であると見なしておられたが、絶海は「坦率」であつたからこそ、義満と一旦反目し合つても、そのことに深く拘泥せず、再び交渉を持つようになったのであろうし、多くの後輩僧たちが絶海の周りにつどつたのではないだろうか。

義堂が「坦率」という語を用いたことについて付言しておきたい。芳賀幸四郎氏『中世禅林の学問および文学に関する研究』（日本学術振興会、昭三二）等を見ても、当時の禅僧が、多くの漢籍——經書・史書、經典・禅書、詩文集等——に精通していたことがわかる。それは義堂に関しても同様で、たとえば『日工集』を見ても、字説を作成する際に『晋書』に用例を求めたり（康暦二年九月十日条）、杜詩の講義をしたりしている（応安五年七月三日条・永徳二年正月九日条）。彼はそのような過程において「坦率」という語を知り、自身の語彙体系のなかに組み入れていたのであろう。したがって、その意味・用法は、中国の文献におけるそれに近いように思われる。

おわりに

ある人間の人間像を考える場合、その人のどの部分に注目するかによって、幾通りもの人間像が形成されると思われる。絶海においても、堀川氏の言われるように明の高皇帝と詩を唱和した人間、玉村氏の言われるように將軍義満に反抗した人間、その他、禅道修行に精進した人間、弟子の育成（講釈活動も含む）に心血を注いだ人

間、詩会や聯句会に参加した人間等々である。ただし、絶海が禅僧であると同時に、「坦率の性」の持ち主であったということを見失うと、各々の絶海像は一人歩きしてしまい、たとえば作品解釈などに誤解が生じかねないと思われる。絶海の詩文集『蕉堅藁』には「山居十五首」(三四)をはじめとした隠逸詩もあれば、送別詩や哀悼詩もかなり含まれている。道衍は『蕉堅藁』の詩風を「清婉峭雅にして、性情の正より出づ」(序)と評しているが、わたくしは今後、この評言と、今回考察した絶海の「坦率の性」⁽²⁾との関わり合いについて考えながら、絶海の作品世界に入っていきたいと考えている(結章第一節参照)。

注

- (1) 玉村竹二氏『五山文学』(日本歴史新書、至文堂、昭三〇)、一八九〜一九〇頁。
- (2) 引用は『大正新修大藏経』第八十卷「続諸宗部」による。返り点は同書を参考にして、私に施した。
- (3) 引用は吉川幸次郎氏『論語』中(中国古典選4、朝日新聞社、昭五三)による。
- (4) 引用は寺田透氏・水野弥穗子氏校注『道元』下(日本思想大系13、岩波書店、昭四七)による。
- (5) 今泉淑夫氏『一休和尚年譜』1・2(東洋文庫641・642、平凡社、平一〇)、あとがき。
- (6) 『大日本史料』第七編之七・応永十二年四月五日条を参考にすると、この二書のほかにも、『兼宣公記』(広橋兼宣著)、『康富記』(中原康富著)、『満濟准后日記』(満濟著)、『看聞日記』(後崇光院著)、『薩戒記』(中

山定親著)、『建内記』(万里小路時房著)、『蔭涼軒日録』(季瓊真藥・龜泉集証著)、『大乘院寺社雜事記』(尋尊著)、『碧山日録』(太極著)、『蔗軒日録』(季弘大叔著)、『鹿苑日録』(景徐周麟・梅叔法霖・有節瑞保等著)等に絶海の名前が見える。

(7) 引用は辻善之助氏『空華日用工夫略集』(大洋社、昭一四)による。返り点は蔭木英雄氏『訓注 空華日用工夫略集』(思文閣出版、昭五七)を参考にして、私に施した。

(8) 朝倉尚氏「禅林聯句略史——義堂周信とその前後——」(『抄物の世界と禅林の文学』所収、清文堂、平八)。

(9) 引用は『五山文学全集』第二巻による。返り点は同書を参考にして、私に施した。

(10) 玉村氏「空華日工集考」(『日本禅宗史論集』下之二所収、思文閣出版、昭五四)には、『日工集』の体裁について、以下のように纏められている。

流布本の体裁 流布本の内容は、正中二年閏正月十六日、義堂の誕生より、嘉慶二年四月四日、その示寂に至る凡そ六十四年間に亙るが、それを大体次の四部分に分けて考え得る。

一、正中二年より暦応四年迄。義堂の手に成らざる部分。義堂を指して「師」といい、義堂一族を指して「其族」と言っている。義堂の逸事を記して詳かであり、古老よりの聞書と思われる箇所が多い。

二、康永元年より貞治五年迄。この部分は義堂の手に成る事は明かであるが、未だ日記体ではなく、自暦譜体の追憶記で、記事が甚だ簡単にして、殆ど日付に係けてない。

三、貞治六年より嘉慶二年三月十一日の條の前半迄。この部は義堂の眞の日記であり、大体日々記し続けて、その病篤くして執筆不可能に陥る日迄に及ぶ記事の抄出である。但し同日の條中、日付が二箇所あつたり、前後する両日の記事の順序が転倒している等の不整頓もあり、年末卷末に追抄記事がある。

四、嘉慶二年三月十一日の條の後半より同年四月四日迄。この部は義堂危篤により、恐らくはその門弟が後に書加えたと思われる部分である。その後には葬送仏事・遺旨及び略伝の附記がある。

更に日記を終つた後に、義堂が始終氣に懸けていた、先師夢窓疎石の碑銘（宋濂撰）及び之が将来に關する緣由記を収めて卷末を飾っている。四卷四冊。

（七八頁）

（11）引用は『五山文学全集』第三卷による。返り点は私に施した。

（12）引用は東京大学史料編纂所編『臥雲日件録抜尤』（大日本古記録、岩波書店、昭三六）による。返り点は『続史籍集覽』所収本を参考にして、私に施した。

（13）『常光国師行実』（天章澄叅著）には、

（上略）（永徳）三年癸亥。准三宮天山相公留禪空宗。勅建相国宝坊。追請正覚為之開山。智覚国師以第二世視事。未幾請老焉。相公顧慈氏信禪師。求一好漢可任重寄。信蚤与師同学。得其為人。因薦師曰。方今多士如林。惟才德兼全。堪妙選者。莫過此郎。相公即日召見府中。親賜鈞帖。令試手洛下等持。至徳甲子也。明年遷鹿苑。三年丙寅。五十九。領相国命。

小春廿六日開堂。一香為_レ仏慈供_一。相公遣_二出_三會信衣_一。守塔者以_レ師為_レ孫。執欲_レ無_レ与。故師拈云。信心已熟。衣不_レ復伝_一。大小祖師不_レ知_二機權物論_一。伏_二其知言_一。師行_二叢規_一僅_二三霜_一。飛樓湧殿幻_二出夜摩觀史_一。辞_レ滿休_二居鹿苑_一。(下略)

〔統群書類従〕第九輯下。返り点は私に施した)

【注】「准_二三官天山相公_一」は足利義満、「正覚」は夢窓疎石、「智覚国師」は春屋妙葩、「慈氏信禪師」は義堂周信のことである。

とあり、空谷明心が至徳二年〔一三八五〕と、相国寺を退いた嘉慶二年〔一三八八〕四月十五日直後の二度、鹿苑院主を勤めたことがわかる。

(14) 作品番号は蔭木氏『蕉堅藁全注』(清文堂、平一〇)による。

(15) 管見の範囲では、東沼周曦の『流水集』二(『五山文学新集』第三卷所収)に、「某、学海汪洋、機輪坦卒」〔初先天住_二雲龍山神心_一〕という用例がある。

(16) 史書類の引用は百衲本二十四史所収本による。返り点、句読点は私に施した。

(17) 引用は四部叢刊所収本による。返り点は続国訳漢文大成本を参考にして、私に施した。

(18) 引用は四部叢刊所収本による。返り点は続国訳漢文大成本を参考にして、私に施した。

(19) 引用は『陸放翁全集』(中華書局)による。返り点は私に施した。

(20) 引用は中田祝夫氏編『四河入海』(抄物大系別巻、勉誠社)による。

(21) 『人国記』巻之下には、以下のような文章がある。

土佐国

土佐の国の風俗、成程なるほどまこと真にして、氣質すなほなる国風なり。これ都てすべ士・町人・百姓に至るまでかくの如くなり。別して土佐・長岡・吾川あかわの郡こほりかくの如くなり。

さればその氣質は鳥獣にも備はるものか、猿もこの国の猿は別して仕付けよきなり。されども遠国にして、その言舌卑しきなり。心底形かたの如く直すなおなり。
(岩波文庫)

絶海が「坦率の性」を形成するにあたり、武士（津野氏）の出身であることや、仏道修行に錬磨したことなどもその要因として考えられるが、土佐の津野に生まれ、幼年期を土佐の風土に育まれながら過ごしたことも見過ごすことはできないだろう。

※引用本文については、旧字体や異体字を私に改めた箇所がある。

【付記】

後日、堀川貴司氏にうかがったところ、『国文学 解釈と鑑賞』における絶海のテーマは、編集部からの依頼によるものであったという。

*

*

『日本国語大辞典 第二版』には、新たに「坦率」項が設けられていた。『日工集』至徳三年二月三日条と『晋書』庾亮伝の用例（既出）のほか、中江兆民『一年有半』の「邦人特性和易にして放漫に流れ易く、坦率にして狎瀆に陥り易し」という用例が挙げてある。

付 章 絶海和尚略年譜

絶海中津（一三三六—一四〇五）の略年譜は、寺田透氏『義堂周信・絶海中津』（日本詩人選）、玉村竹二氏『日本の禅語録』八（講談社）、蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂）の巻末にそれぞれ付載されているが、寺田氏のは義堂周信、玉村氏のは義堂、中巖円月、虎関師鍊、雪村友梅の記事も併記されている。絶海の記事が簡略にされ過ぎたり、中には誤謬も含まれているので、それらを補足・訂正する意味で、ここに、新たに絶海の略年譜を作成した次第である。

凡 例

一、最初に、年号・干支・西暦・絶海の年齢を記す。ただし、年号は北朝、南朝の順で、南朝は（ ）内に記す。

二、つぎに、絶海の履歴の説明と、その出典を記す。履歴に疑問が残る場合は△印、絶海に深く関連する出来事（人の死没等）には●印を付して他と区別する。通常は○印である。出典は「」内に記すが、その略称は、以下の通りである。

仏智年譜——仏智広照浄印翊聖国師年譜、勝定年譜——勝定国師年譜、延宝録——延宝伝灯録、高僧伝——本朝高僧伝、名僧伝——日本名僧伝、絶海録——絶海和尚語録、日工集——空華日用工夫略集

建武三年（延元元年） 丙子 一三三六 一歳

△十一月三日、土佐の津野に生まれる。〔名僧伝〕

△十一月十三日、土佐の津野に生まれる。〔仏智年譜〕

康永二年（興国四年） 癸未 一三四三 八歳

○土佐の円通寺で剪髪する。〔勝定年譜〕

貞和四年（正平三年） 戊子 一三四八 十三歳

○天龍寺の喝食（僧童）となる。時折、西芳寺の夢窓疎石に随侍する。〔仏智年譜・延宝録・高僧伝〕

貞和五年（正平四年） 己丑 一三四九 十四歳

△剃髪して驅烏沙弥となる。〔延宝録・高僧伝〕

観応元年（正平五年） 庚寅 一三五〇 十五歳

△剃髪して沙弥となる。常時、西芳寺の夢窓に随侍し、『円覚経』の講義を聞く。〔仏智年譜〕

観応二年（正平六年） 辛卯 一三五二 十六歳

○具足戒を受けて大僧となる。天龍寺での一夏百日の間、毎日、法輪寺の文殊堂に参詣する。〔仏智年譜・延宝録・高僧伝〕

●九月晦日、夢窓疎石示寂〔七十七歳〕。

文和二年（正平八年） 癸巳 一三五三 十八歳

○義堂周信、先覚周怙、月舟周助、天錫周寿等と建仁寺に掛錫し、龍山徳見に師事する。ついで大林善育に随侍して湯薬侍者となる。〔仏智年譜・延宝録・高僧伝〕

文和三年（正平九年） 甲午 一三五四 十九歳

○法観寺で建仁寺の放牛光林に代わって五頭首に問禪する。〔仏智年譜・勝定年譜・延宝録・高僧伝〕

貞治三年（正平十九年） 甲辰 一三六四 二十九歳

○関東に赴く。万寿寺の石室善玖、建仁寺の別源円旨の送行の偈有り。報恩寺の義堂を省し、建長寺の青山慈永の教化を助ける。ついで大喜法忻の会下に在り。また、足利基氏の帰依を受ける。〔仏智年譜・延宝録・高僧伝〕

貞治四年（正平二十年） 乙巳 一三六五 三十歳

○大喜法忻の会下に在って蔵主を司り、却来して焼香侍者を勤める。〔仏智年譜〕

貞和五年（正平二十一年） 丙午 一三六六 三十一歳

○五月二十二日、善福寺の義堂の衣鉢侍者となる。〔日工集〕

○六月一日、義堂から夢窓の碑銘を宋景濂に求めるように頼まれる。〔日工集〕

応安元年（正平二十三年） 戊申 一三六八 三十三歳

○十一月中旬以降、汝霖妙佐、如心中恕等と同船で入明する〔大明洪武元年〕。中天竺寺の季潭宗泐に依り、焼香侍者、蔵主と転ず。靈隠寺、道場山に歴遷し、用貞輔良と清遠懷渭との間を周旋する。〔仏智年譜〕

勝定年譜・延宝録・高僧伝・名僧伝〕

応安三年（建徳元年） 庚戌 一三七〇 三十五歳

○永安塔を拝し、姑蘇台、林和靖の旧宅を訪れる〔洪武三年〕。〔勝定年譜・蕉堅藁〕

応安四年（建徳二年） 辛亥 一三七一 三十六歳

○徑山の季潭を省す〔洪武四年〕。〔仏智年譜・勝定年譜・蕉堅藁〕

応安六年（文中二年） 癸丑 一三七三 三十八歳

○十二月二十日、真寂山中にて清遠、見心来復、易道夷簡と唱和する〔洪武六年〕。〔蕉堅藁〕

○天界寺の季潭を省す。清遠の送行の偈有り。〔勝定年譜・蕉堅藁〕

永和二年（天授二年） 丙辰 一三七六 四十一歳

○正月、金陵の英武楼にて太祖高皇帝（洪武帝、朱元璋）に謁見し、法要を問われる〔洪武九年〕。勅命によつて熊野三山の詩を作り、御製の和を賜わる。また、帰国を希望し、承諾される。〔仏智年譜・勝定年譜・延宝録・高僧伝・名僧伝・中華若木詩抄等〕

永和三年（天授三年） 丁巳 一三七七 四十二歳

○春、帰国して筑前の箱崎にある広嚴寺に憩う。〔蕉堅藁〕

永和四年（天授四年） 戊午 一三七八 四十三歳

○二月十五日、大疑宝信、和山贊礼と帰京する。〔蕉堅藁〕

○春、近江金剛寺の物先周格に書簡をしたためる。〔蕉堅藁〕

●五月十四日、夢窓派（春屋妙葩、古劍妙快等）、幕府に臨川寺を五山から十刹に復位させるように提訴する。

〔日工集〕

○六月下旬に宇治に客居し、冬頃、近江の杣庄に隠遁する。〔蕉堅藁〕

○冬、佐々木高秀に書簡をしたためる。〔蕉堅藁〕

康暦元年（天授五年） 己未 一三七九 四十四歳

○四月七日、報恩寺の義堂から書簡が届き、直後に返信する。〔蕉堅藁〕

○夏、椿庭海寿に書簡をしたためる。〔蕉堅藁〕

○十月、春屋に招かれ、雲居庵に住す。〔仏智年譜・蕉堅藁・延宝録・高僧伝・日工集〕

○十二月、性海靈見に請われて天龍寺の前堂首座になる。〔仏智年譜・延宝録・高僧伝〕

康暦二年（天授六年） 庚申 一三八〇 四十五歳

○春、天龍寺の前堂首座を退く。赤松氏から播磨の法雲寺の住持に招かれるが、汝霖妙佐に譲る。〔仏智年譜・延宝録・高僧伝・日工集〕

○三月十七日、柏庭清祖、物先周格等と義堂の入洛を迎える。〔日工集〕

○四月一日、観持庵で義堂の建仁寺入寺の儀式について一関妙夫と相談する。〔日工集〕

○五月三日、斯波義将の齋会に赴く。官伴は斯波義種、一色範光等、僧座は春屋、性海靈見、太清宗渭等。

〔日工集〕

○秋、枢玄極が金剛日山に答える詩の序文を作製する。〔蕉堅藁〕

○秋、幕命により、甲斐の恵林寺に住す。九月三日、雲居庵にて受請し、十月八日、入寺する。『法華経』『楞嚴経』『円覚経』等を講ず。〔仏智年譜・絶海録・延宝録・高僧伝・日工集〕

○十月中旬以降、「東宮秋月」詩を詠じる。〔蕉堅藁・空華集・日工集〕

○十一月、天錫周寿に祭文を作製する。〔蕉堅藁〕

永徳元年（弘和元年） 辛酉 一三八一 四十六歳

○春、器之令篋、来参する。〔絶海録〕

○秋、久菴僧可に書簡をしたためる。〔蕉堅藁〕

○秋、等持寺法華堂の元章周郁に書簡をしたためる。〔蕉堅藁〕

永徳二年（弘和二年） 壬戌 一三八二 四十七歳

○春、松間居士の枕流亭の諸作を見てその詩に和韻する。〔蕉堅藁〕

○春、甲斐の清白寺で花見をする。夢窓の偈に和韻する。〔絶海録〕

○春、久菴に書簡をしたためる。〔蕉堅藁〕

○三月初旬、菊上人が京都に行くのを送る。〔蕉堅藁〕

○秋、円覚寺の椿庭に書簡をしたためる。〔蕉堅藁〕

○十月二十九日、足利義満の命令により、甲斐から召喚されることになる。〔空華集・日工集〕

○十一月三日、恵林寺を退き、普同庵に帰住する。〔空華集・日工集〕

永徳三年（弘和三年） 癸亥 一三八三 四十八歳

○春、関東に再遊する。〔蕉堅藁・小補東遊集・臥雲日件録抜尤〕

○六月頃、甲斐の勝善寺に滞在する。〔蕉堅藁〕

○九月五日、甲斐から帰京する。大慈院に居す。〔日工集〕

○同六日、義満と初対面する。〔日工集〕

○同二十日、鹿苑院主となる。〔勝定年譜・日工集〕

至徳元年（元中元年） 甲子 一三八四 四十九歳

○正月九日、義堂が来参し、年始の挨拶をする。〔日工集〕

○同二十五日、等持寺の義堂、義満を接待する。斯波義将、春屋、太清宗渭等と座伴する。〔日工集〕

○二月三十日、等持寺香雪亭で義満、二条良基、義堂等と和漢連句に興じる。〔日工集〕

○六月、義満に直言してその意にさからい、摂津の銭原に隠居する。〔仏智年譜・延宝録・高僧伝・日工集〕

○八月二十六日～三十日、勝尾寺、箕面寺、神呪寺、鷺林寺、西宮神社に赴く。その間、大岳周崇、来参する。

他日、清溪通徹も来参する。〔蕉堅藁〕

至徳二年（元中二年） 乙丑 一三八五 五十歳

○四月、撰津有馬の羚羊谷（牛隱庵）に移る。〔仏智年譜・勝定年譜〕

○七月末、細川頼之に招かれ、讃岐の普濟院に住す。ついで阿波の宝冠寺の開山となる。大亨妙亭、来参する。

〔仏智年譜・蕉堅藁・延宝録・高僧伝〕

△十月、義満、前非を悔いて、慈氏院の義堂に命じて絶海を召喚させようとする。絶海、疾を以って辞す。

〔仏智年譜・延宝録・高僧伝〕

△十一月、義満、再度、細川頼之に命じて絶海を召喚させようとする。絶海、やむなく了承する。〔仏智年

譜・延宝録・高僧伝〕

△十二月二十五日、等持寺に入寺する。〔仏智年譜・延宝録・高僧伝〕

至徳三年（元中三年） 丙寅 一三八六 五十一歳

△二月四日、義満に召喚される。〔日工集〕

△三月八日、帰洛して大慈院に居し、ついで等持寺に住す。〔日工集〕

△同十七日、義堂に華瑞の額を書く。〔日工集〕

○七月十三日、南禅寺（住持は義堂）、五山之上に陞す。その齋会の義満に太清と相伴する。〔日工集〕

○十月二十六日夜、鹿苑院の僧堂で義満、義堂、無求周伸と座禅をする。〔日工集・翰林葫蘆集・鹿苑日録〕

○十月晦日、義満の機嫌を損なう。義堂、義満と絶海の間を奔走する。〔日工集〕

○龍湫周沢から夢窓の法衣を贈られる。〔仏智年譜・勝定年譜・延宝録・高僧伝・仏惠正統国師鄂隱和尚行録〕

嘉慶元年（元中四年） 丁卯 一三八七 五十二歳

○七月二十日、義堂、太清、無求周伸等と義将の新第に招かれる。〔日工集〕

○九月十五日、義満、常在光院の義堂を尋ねる。太清と座伴する。〔日工集〕

○十月十四日、義堂、日野宣子の一品忌に赴く。太清、空谷明応、義将等と座伴する。〔日工集〕

○斯波義将、自邸を改めて玉泉寺とし、絶海を開山に迎える。〔勝定年譜〕

嘉慶二年（元中五年） 戊辰 一三八八 五十三歳

○正月九日～十九日、義満に『金剛経』を講ず。〔仏智年譜・翰林葫蘆集〕

○同二十日、義満、常在光院の義堂を訪れる。座伴は絶海のみ。〔日工集〕

○同二十三日～月末、渋川幸子（香厳芳林太夫人）に『円覚経』を講ず。〔仏智年譜〕

○三月九日、有馬温泉の義堂を迎えに行くが、摂津の太田の駅で出会う。〔日工集〕

○同十四日、義堂から『貞和集』の刊行を依頼される。〔日工集〕

○四月二日、義堂から掩土仏事の法語の作製を遺囑される。〔日工集〕

○同三日、終日、義堂の病床に侍す。〔日工集〕

●同四日、義堂周信示寂〔六十四歳〕。

○秋、義満、絶海の法衣を乞う。〔延宝録・高僧伝〕

○十二月二十八日、紀良子に代わつて智泉尼聖通に祭文を作製する。〔蕉堅藁〕

康応元年（元中六年） 己巳 一三八九 五十四歳

○三月四日〜二十六、七日、義満に従つて西国（厳島）に赴く。〔勝定年譜・鹿苑院殿厳島詣記〕

○頼之に請われて土佐の吸江庵を復興する。〔勝定年譜〕

明德元年（元中七年） 庚午 一三九〇 五十五歳

△等持寺（住持は絶海）、十刹（全国）の第一位となる。〔勝定年譜・等持寺住持位次〕

明德二年（元中八年） 辛未 一三九一 五十六歳

○七月十六日、等持寺を退隠して等持院に移住する。〔仏智年譜・等持寺住持位次〕

○十二月晦日、内野合戦、幕府軍の勝利。義満、絶海の法衣の靈験を感謝する。〔仏智年譜・勝定年譜・翰

林胡蘆集・明德記〕

明德三年 壬申 一三九二 五十七歳

●三月二日、細川頼之示寂〔六十四歳〕。

○秋、相国寺に住す。八月晦日、等持院にて受請し、十月三日、入寺する。太白真玄、「住相国道旧疏」を作製する。〔絶海録・峨眉鴉臭集・扶桑五山記・五山歴代・相国寺前任籍〕

○十二月二十七日、義満の命令により、高麗に答える書をしたためる。〔善隣国宝記〕

明德四年 癸酉 一三九三 五十八歳

○夏、花の御所で毎日、『首楞嚴経』を講ず。空谷明応等、講席に伴う。〔仏智年譜・翰林葫蘆集〕

○半夏以後、相国寺に禅僧を集めて頌会を催す。その後、年中行事となる。〔勝定年譜〕

○九月六日、愚中周及、絶海に書をしたためる。〔非餘集〕

応永元年 甲戌 一三九四 五十九歳

○相国寺を退き、等持院に居す。〔勝定年譜〕

○九月二十四日夜、相国寺炎上。相国寺の再興に努力する。〔勝定年譜・翰林葫蘆集・武家年代記・東寺王

代記・如是院年代記〕

○九月末、崇寿院の塔主となる。〔蔭涼軒日録〕

△十一月二十八日、相国寺の仏殿および山門を立柱する。〔翰林葫蘆集・武家年代記〕

応永二年 乙亥 一三九五 六十歳

△二月二十四日、相国寺の仏殿および崇寿院の大房を立柱する。〔勝定年譜・東寺王代記・如是院年代記〕

○六月二十日、義満の剃髪の剃手となる。〔蔭涼軒日録〕

○義満に『十牛図』を説く。〔仏智年譜・翰林葫蘆集〕

応永三年 丙子 一三九六 六十一歳

○崇寿院の照堂および塔宇の再建に尽力する。〔勝定年譜・蔭涼軒日録〕

応永四年 丁丑 一三九七 六十二歳

○春、相国寺に再住する（崇寿院を兼務する）。二月十六日、崇寿院にて受請し、二月二十八日、入寺する。

義満、同寺を十方院から度弟院にする。太白真玄、「再住相国寺諸山疏」を作製する。〔勝定年譜・絶海

録・峨眉鴉臭集・扶桑五山記・五山歴代・相国寺前住籍〕

○鹿苑寺（金閣寺）の余材で杖を作る。〔半江暇筆〕

応永五年 戊寅 一三九八 六十三歳

○閏四月二十五日、門前塔頭の制度に関して円覚寺に書状を送る。〔円覚寺文書〕

○六月二十五日、鹿苑院の三重塔を慶賛する。〔絶海録・翰林葫蘆集〕

○八月、義満に代わって大内義弘に書簡をしたためる。〔善隣国宝記〕

○十二月八日、凍死した鳥を鹿苑寺の北林に埋める。〔蕉堅藁〕

応永六年 己卯 一三九九 六十四歳

○六月二十三日、足利義持に法衣を授ける。〔臥雲日件録抜尤・足利家官位記〕

○十月二十七日、和泉の堺に下向し、大内義弘を説得する。〔応永記・鎌倉管領九代記・寺門事条々聞書〕

応永八年 辛巳 一四〇一 六十六歳

○秋、相国寺に三住する（鹿苑院を兼務する）。七月十六日、鹿苑院にて受請し、八月十一日、入寺する。義満、相国寺を五山の第一位に陞せる。大周周裔、「三住相国同門疏」を作製する。〔仏智年譜・絶海録・

扶桑五山記・五山歴代・相国寺前住籍〕

応永九年 壬午 一四〇二 六十七歳

○秋、相国寺で天倫道彝、一菴一如と再会する。〔蕉堅藁〕

応永十年 癸未 一四〇三 六十八歳

○足利義持に『信心銘』を講ず。〔勝定年譜〕

応永十二年 乙酉 一四〇五 七十歳

○四月五日、勝定院で示寂する。〔延宝録・高僧伝・峨眉鴉臭集・扶桑五山記・五山歴代・相国寺前住籍〕

後
編

作
品
研
究

第一章 『蕉堅藁』の諸本概観

長らく、唯一の『蕉堅藁』翻刻本として利用されてきた上村觀光氏の『五山文学全集』所収本（明三九）の解題には、つぎのような記述がある。

蕉堅稿は相国寺第六世絶海中津禪師の遺稿なり。この稿。応永の末年。門人鄂隱慧叡（相国寺十九世）始めて之れを編次して上梓し。後ち寛文十年に至りて再版せり。今時世に伝ふる所の者。多くはこの後版なり。今爰に収むるに当り。古版並に寛文版の二本に拠りて校訂を加へたり。

要するに、『五山文学全集』所収本は、底本や校訂本を特に定めず、五山版と寛文十年（一六七〇）版を相互に利用して、本文を校訂したという。玉村竹二氏も¹指摘の如く、おそらく当時の学問の風潮が反映しているであろうが、同本の書誌学上および校勘技術上の処理の不徹底さを、このまま放置しておくわけにはいかないだろう。また、『蕉堅藁』の注釈書類の本文に関しては、序章第一節で記したので、ここであえて繰り返さないが、各書によつて校訂方法は区々である。したがつて、いま一度、『蕉堅藁』の伝本を整理して、諸本間の関係を明確にし、同書に適した本文校訂の方法を明示したい。

『国書総目録』によると、『蕉堅藁』の伝本には、版本が三系統、写本が三本あり、『古典籍総合目録——国書総目録統編』によると、さらにもう一本、写本を付け加えることができる。以下にその概要を記す（番号は私

に施した。以下同じ)。なお、蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』(私家版、昭五二)の巻末の「解題」にも、一部の伝本の書誌が記されている。

①室町初期版(五山版) 国立国会図書館蔵 WA6-79、詩文二〇八一 一冊

この版本に関しては、『国立国会図書館所蔵 貴重書解題』第一巻(昭四四)や、川瀬一馬氏『五山版の研究』上巻(日本古書籍商協会、昭四五)に解説がある。前者のものから抜粹する。

中津著。室町時代刊。五山版。表側にのみ金茶色の当代の表紙を存し、題簽も同時代であるが、「蕉堅」のみ存して以下破損。体裁は別記「日本国絶海津禅師語録」に詳記。小口書「蕉堅」。

大きさ二六×一八センチメートル。紙数序二・本文五六・跋二丁。通し丁付であるが、第三三丁表には、巻頭と同じく「蕉堅藁」と書名を刻し、「疏」から始まっている。巻次の標示はないが、二巻の体裁である。匡部左右双辺。郭内二〇・七×一四・一センチメートル。有界。一〇行二〇字(詩序は一〇行一七・九字、詩跋は八行×一五・七字。朝倉注)。版心は「蕉(丁数)」(序・跋は「詩序(丁数)」)、「詩跋(丁数)」(朝倉注)、上下魚尾、小黒口(序・跋は白口、朝倉注)。全巻朱点が施され、第四七・五〇・五六丁に書入がある(第一七・四五・五一丁にもある。朝倉注)。最終葉白紙の表に、永樂二年、源道義の朝鮮王国朝鮮に奉る書を書写している。

印記、善慧軒(墨印) 表紙・巻頭

鳳岡 首葉（下部が少し裁断されている）

首葉上部に印文未詳の白印一個あり。

著者中津（一三三六〜一四〇五）は、字絶海、号蕉堅道人。三度相国寺に住す。五山詩僧中、義堂周信と並び称せられた。「蕉堅稟」は、中津の入明当時からの詩文を編録したもので、道衍の序に、詩禅一味を絶賞している。編者鄂隱慧叡は、相国寺十九世、天竜寺六十一世。中津の門人である。

土肥鶚軒・三井文庫旧蔵本。（図版一六頁）

蔭木氏は、同じく国会図書館蔵の五山版『絶海和尚語録』（以下、『絶海録』と略す）の題簽が「蕉堅師語録 上」（三・二×一六・五）とあるので、おそらく「蕉堅師語録 下」とあつた題簽の「師」文字以下が破損したのであろう、と指摘されている。「善慧軒（院）」とは、現在も東福寺山内にある、彭叔守仙が創建した塔頭である（『扶桑五山記』）。また、『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、平一一）の「土肥鶚軒」の項（井坂清信氏執筆）には、「明治・大正・昭和期の医学者。東京帝国大学医科大学教授。名は慶蔵、鶚軒と号す。（中略）多分野にわたつた旧蔵書は、没後三井文庫の蔵するところとなつたが、戦後の同文庫解体に伴い、医学関係書は東京大学へ、漢詩文関係書は国会図書館へ、他はカリフォルニア大学バークレー校へ分散。蔵書印は「鶚軒文庫」等数種」という記述がある。なお、当該版本の詩序に「永樂元年／倉龍癸未十一月既望僧録司左善世道衍序／印 印 印」、詩跋に「大明永樂元年癸未臘月天竺 如蘭／印 印 印」とあることを付記しておく。

②寛文十年〔一六七〇〕版 梶谷宗忍氏訳注『蕉堅稟 年譜』三（相国寺、昭五〇）所収 影印

梶谷氏によると、この版本は、寛文十年版『絶海録』の一部としか解説されていないので（「凡例」）、表紙、外題、料紙、寸法等は不明である。内題（端作題）は「蕉堅稟」。また、本文第三三丁表には、端作題と同じく「蕉堅稟」とあり、疏から始まっている。詩序には「永樂元年／倉龍癸未十一月既望僧録司左善世道衍序／印 印 印」、詩跋には「大明永樂元年癸未臘月天竺 如蘭（印ナシ）」とあり、「寛文十年庚戌秋九月／銅駝坊書林平樂寺／村上勘兵衛刊行」という刊記がある。つまり、本書は寛文十年九月に、村上勘兵衛によって刊行されたものである。『日本古典籍書誌学辞典』によると、村上勘兵衛とは「京都の書肆で、日蓮宗学書を中心とする仏書を根幹とし、諸分野の書物を扱う。代々、勘兵衛と称し、平樂寺と号する。元和年間（一六一五―二四）に創業し、明治に村上氏が井上氏に店舗を譲り、平樂寺書店として現存する」（「村上勘兵衛」の項、和田恭幸氏執筆）という。蔵書印や書入は、特に見当たらない。本書の紙数は、詩序二丁、本文五六丁、詩跋二丁。詩序は一〇行一七〇九字、本文は一〇行二〇〇字、詩跋は八行一五〇七字。訓点アリ。有界。匡郭は四周单边。版心は、詩序は「詩序（丁数）」、上下魚尾、黒口、本文は「蕉（丁数）」、上下魚尾、小黒口、詩跋は「詩跋（丁数）」、上下魚尾、黒口。

③刊年不明版 国立国会図書館蔵 詩文二〇八三 二冊




後代のものと覚しき紺色の帙アリ（左肩に「蕉堅稟 附録共二冊」という題簽があり、右上と背に鶉軒文

庫のラベルが貼つてある。第一冊の外題は「蕉堅稟」、第二冊の外題は「蕉堅稟 付録」(ともに題簽は双边)。二冊とも、表紙はやわらかい黄色。表紙右上に、鶯軒文庫のラベルが貼付されるところに、「共二冊」と墨書きされている。また、右下には「念佛庵藏書」という墨書がある。大きさは、二六・〇×一七・五センチメートル。

第一冊について。内題(端作題)は「蕉堅稟」。見返し(あざやかな赤色)には「絶海國師編

西山招

慶禪院藏版(双边)」「(右)、「蕉堅稟」(中央)、「京都 文求書堂發兌」(左)とあり、左上に鶯軒文庫の

ラベルが貼られている。奥付の左上にも、同様のラベルが貼つてある。すなわち、本書の蔵版は西山招慶院で、版元(書肆)は京都の文求堂、明治時代初期に刊行されたものと思われる。「招慶院」とは、天龍寺山内にあつた、絶海の創建した塔頭である(天龍寺金剛院住職、加藤正俊老師のご示教による)。詩序には「永樂元年／倉龍癸未十一月既望僧録司左善世道衍序」   とある。蔵書印は、詩序第一丁表の右下に鶯軒文庫、本文第一丁表の右上に土肥の朱印が捺されている。本書は詩序二丁、本文三二丁から成る(丁度、全詩が収められている)。詩序は一〇行一七〇九字、本文は一〇行二〇〇字。訓点アリ。有界。匡郭は四周单边。版心は、詩序は「詩序(丁数)」、上下魚尾、小黒口、本文は「蕉(丁数)」、上下魚尾、小黒口。書入はない。

第二冊について。内題(端作題)は「蕉堅稟」。見返し右上に、鶯軒文庫のラベルが貼られている。詩跋には「大明永樂元年癸未臘月天竺 如蘭」(印ナシ)とあり、招慶院の蔵版印がある。奥付には、『評本絶

句類選』『杜詩評鈔』『尊攘堂藏版并書籍目録 文求堂發兌唐刻書目』など、文求書堂（京都市下京区寺町通四条北、田中治兵衛）の新刊広告を付載する。また、左上に鶯軒文庫のラベルが貼つてある。蔵書印は、本文第一丁（第三三丁）表の右上に土肥、右下に鶯軒文庫の朱印が捺されている。本書は本文二四丁、詩跋二丁から成る。ただし、本文第一丁の柱記には「蕉 三三三」とあり、疏から始まっている。これは、本書が、あくまでも第一冊の付録であることを表わしている。本文は一〇行二〇字、詩跋は八行一五〇七字。訓点アリ。有界。匡郭は四周单边。版心は、本文は「蕉（丁数）」、上下魚尾、小黒口、詩跋は「詩跋（丁数）」、上下魚尾、小黒口。書入はない。

④写本Ⅰ（寛政十年〔一七九八〕書写） 国立国会図書館蔵 詩文二〇八二 一冊

後代のものと覚しき紺色の帙アリ（左肩に「蕉堅藁」という題簽があり、右上と背に鶯軒文庫のラベルが貼つてある）。やわらかい黄色の表紙に題簽はなく、左肩に直接、「蕉堅藁」と書き込まれている。また、表紙の右上には、鶯軒文庫のラベルが貼られている。見返し右上、奥付左下にも、同様のラベルが貼つてある。大きさは、二三・四×一五・四センチメートル。内題（端作題）は「蕉堅藁」。第三五丁表にも、端作題と同じく「蕉堅藁」とあり、疏から始まっている。詩序には「永樂元年（麟平）倉龍癸未十一月既望僧録司／左善世道衍序」（傍注や振り仮名は原本通り）とあり、奥付には「寛政十蒼龍（戊午）春正月書寫于燕都午門蔭涼山中／石陽散人釋謙為溪」（「壬」字の上から、朱筆で「戊」字に訂正している）という識語がある。つまり、

本書は寛政十年正月に、石陽散人と号した釋謙為溪なる人物によって書写されたことが知られる。書写本文には所々、単なる写し間違いや、脱字、脱文などの誤写が目立つ。また、墨筆や朱筆による傍注（時に欄外に記されている）や訂正、朱引きなども多数、確認できる。なお、奥付には、「序文の永樂元年は明太祖時代にして大正二年より／五百十一年前也／又本著中／康曆二年は（北朝）後龜山天皇時代にして五百三十二年前也／嘉慶二年（北朝）同上時代にして五百二十八年前也」という朱色の万年筆によるメモ書きも残っており、名もない大正時代の蔵書家の姿が偲ばれる。蔵書印は、特に見当たらない。本書の紙数は、詩序二丁、本文五六丁の計五八丁である（詩跋ナシ）。詩序は一〇行一七字、本文は一〇行一八〜二二字。訓点ナシ。有界。匡郭は四周単辺。版心は、上のみ魚尾があり、「涼山藏書」と記されている。

⑤写本Ⅱ 大阪天満宮藏（嘉永二年〔一八四九〕書写） 近四七―二 一冊

薄墨色の表紙の左肩に「蕉堅稟 全」という題簽（双边）があり、右上と右下に整理ラベルが貼つてある。大きさは、二六・七×一九・〇センチメートル。内題（端作題）は「蕉堅稟」。また、第四七丁表には、端作題と同じく「蕉堅稟」とあり、疏から始まっている。詩序には「永樂／元年倉龍癸未十一月既／望僧録司左善世道衍序」、詩跋には「大明永樂元年癸未臘月天／竺 如蘭」とあり、「嘉永二年孟秋／書寫摂州岱嶽 嶽山／維那寮東窓下印／戊戌春首 南州外史閱過（朱筆）」という識語がある。すなわち、本書は嘉永二年の孟秋に、摂州岱嶽嶽山（未詳）の維那寮の東窓下で書写され、明治三十一年〔一八九八〕の初春に、南州

近藤元粹翁が同書を調査したことがわかる。書写本文は比較的、誤謬が少なく、誤写は、近藤南州が朱筆で訂正している。また、これも南州によるのだが、朱引きや読点（朱筆）や傍点も施されている。『大阪天満宮御文庫国書分類目録』（昭五二）によると、近藤南州とは、氏地北区旅籠町に猶興書院を営んでいた漢学者で、翁の蚩雪軒藏書二万余巻は、大正十一年（一九二二）、翁の没後に門人らから天満宮に寄進され、猶興書院文庫として書庫一棟に納められたという。天満宮御文庫は、天保八年（一八三七）二月の大塩平八郎の乱で烏有に帰し、一時的に荒廃していたのだが、この献本で再建の目処がついた。印記は、第一丁表右下に「猶興書院圖書」「蚩雪軒珍藏」（ともに朱印）とある。なお、第一丁表右上には、「振衣千仞岡濯足萬里流」（典拠は左思）という朱印が捺されているが、詳細不明。本書は詩序五丁、本文六三丁、詩跋三丁から成る。特に第三六丁表から第四六丁裏にかけて、『絶海和尚語録』所収の真讀および自讚全作品が挿入されていることが注目される。詩序は五行八〜一五字、本文は一〇〜一一行二〇字、詩跋は五行一〜一四字。訓点アリ。

⑥写本Ⅲ 国立公文書館内閣文庫蔵（書写年不明） 和一五三七六 一冊

薄墨色の表紙に題簽はなく、左肩に直接、「蕉堅稟 全」と書き込まれている。また、表紙の右上には、昌平坂学問所の黒印が捺されており、中央には、内閣文庫のラベルが二枚、右下には、昌平坂学問所のラベル二枚の上に、内閣文庫のラベルが貼ってある。見返しの右上には、「□廣無文（以下剥落）」という題簽

が貼つてある。大きさは、二六・三×一七・七センチメートル。内題（端作題）は「蕉堅稟」。第三五丁表にも、端作題と同じく「蕉堅稟」とあり、疏から始まっている。詩序には「永樂元年倉竜癸未十一／月既望僧録司左善世道衍序」、詩跋には「大明永樂元年癸未臘月天竺 如蘭」とある。書写本文は比較的、誤謬が少なく、詩序と詩跋には、朱引きや読点（朱筆）が施されている。印記は、第一丁表の右上に「林氏藏書」「日本政府圖書」、右下に「淺草文庫」、第五九丁裏の左上に「昌平坂學問所」、左下に「内閣文庫」とある。本書の紙数は、詩序二丁、本文五六丁、詩跋一丁。詩序、本文、詩跋、ともに一〇行二〇字。訓点ナシ。

⑦写本IV 彰考館蔵（書写年不明） 辰五 一冊

この写本は現在、彰考館が業務停止中のため、閲覧不可能である。よって、蔭木氏のものを全文、引用したい。

薄墨色の表紙に「蕉堅稟 全」の題簽があり、右上に「辰五」の整理ラベルが貼付。大きさは、二八・五×二〇・五センチメートル。初葉と尾葉は白紙で墨付五六丁。この本には「序文」がない。郭内二三・〇×一五・五センチメートルで卦なく、他の諸本と同じく一〇行二〇字で、版心に丁数が打つてある。第三六丁才まで朱点が入っているが、それ以後はない。奥書きなく書写年代不明である。印記は、第二丁（墨付の一才）の右下に、瓢箪形の中に「彰考館」の文字の入った朱印がある。

以上が、『蕉堅藁』の諸本の概観である。ただし、三系統の版本(①・②・③)は、国会図書館や梶谷氏の注釈書以外でも見ることは可能であるが、本章の目的と照らし合わせると、現段階では、その逐一を確認する必要はないと思われるので、すでに確認したものに限って、文中で触れる程度にした。先に述べておくが、『蕉堅藁』の諸本は、未見の⑦彰考館蔵写本を除いて、詩文の取捨による異同も無く、同一系統である(蔭木氏の解題によると、⑦彰考館蔵本にも目立った異同はないと予想される)。つぎは、諸本間の関係について述べる。

まずは三系統の版本(①・②・③)について。『蕉堅藁』の諸本の中で最も古い伝本は、言うまでもなく①の五山版である。ただし、九十三番詩の四句目「黄昏和月看横斜」に、「黄昏一作夢魂」という注記があることは注目され、例えば、五山版以前に草稿段階の写本が存したことなどが想像される。②の寛文十年版は、①の五山版と、詩序と本文に限っては、行数や文字数、行換えや欠字部分(六十番詩第四首目の二句目「休居幸免■時疑」、八十番詩Bの序文「(上略) ■■壬午秋余使日本国一見萬年山中沐以舊遊為懷教相詢慰。(下略)」)は欠字部分を示す)に至るまで全く同じである。例えば、①五山版および②寛文十年版の本文第二三丁表、七言絶句の巻頭部分は、以下の通りである。

□七言絶句

□□應

制賦三山

□熊野峰前徐福祠満山藥草雨餘肥只今海上波

□ 濤穩萬里好風須早帰

御製賜和 大明 太祖 高皇帝

熊野峯高血食祠松根琥珀也應肥當年徐福求僊

藥直到如今更不帰

□ 鹿苑絶海和尚曩遊中華卓錫于龍河時當□□

大明洪武九年之春也

(□は一字分の空欄を示す)

ただし、②寛文十年版には訓点が付されているが、このことに関しては、序章第二節でも引用した、つぎの川瀬一馬氏のご指摘で解決すると思う。

また室町時代は南北朝よりも開版が盛んではないが、室町時代の傾向として注意すべきは、五味禅・臨濟録・碧巖集・聚分韻略等、特定の禅籍類が各地で頻繁に印行せられる様になったことである。これは一には種々な禅録が五山版の印行で行き互ったといふこともあるかもしれないが、——(事実、それらを師弟相伝して大切に譲り伝へてゐる。すべての禅籍に悉く訓点注解等の書入が詳密であつて、十分に読解せられ、読みこなされてゐた跡は、現存遺品が何よりよくこれを示し、それだけ禅の理念は全体として行き互り、よく消化されて来たことを、物語つてゐる。それがそっくり次の江戸初期に附訓刻本として出版されたのである。)

——実は室町時代に於ける禅僧の修行法が前代とは変化をしてゐる事実を示すものとも考へられるのであ

る。

〔五山版の研究〕上巻、二三頁。傍線は私に施した

要するに、②寛文十年版は①五山版をもとにして、それに訓点を付して刊行したものである。しかし、厳密に見ると、両書に些細な異同も見受けられる。

作品番号	①五山版	②寛文十年版
(a) 二十三番詩第一首目	山 海 空 環 舊 版 圖	小 海 空 環 舊 版 圖
(b) 三十四番詩第九首目	卷 中 欣 對 古 人 面	卷 中 欣 對 古 人 面
(c) 三十六番詩	溪 路 重 開 雪 滿 松	溪 路 重 開 雲 滿 松
(d) 八十三番詩	永 青 山 癡 寺 ／ 永 青 山 裏 古 禪 林	永 青 山 癡 寺 ／ 永 青 山 裏 古 禪 林
(e) 九十三番詩	題 畫 梅 二 首	題 畫 梅 一 首
(f) 九十五番詩	永 德 壬 戌 春	永 德 壬 戌 春
(g) 百二十三番詩	此 身 如 在 白 雲 鄉	一 身 如 在 白 雲 鄉
(h) 百四十二番序	光 耀 間 里 者	光 耀 間 里 者
(i) 百四十八番書	就 列 于 百 十 人 之 下 已	就 列 千 百 十 人 之 下 已
(j) 百五十四番書	以 極 旬 月 之 歡 焉	以 極 宜 月 之 歡 焉

大部分は彫師(刻工)の彫り誤りと思われるが、(k)の「蕉堅集」(①五山版)が「蕉堅藁」(②寛文十年版)になっているのだけは、前以って意図的に訂正されていたのではないか、と思う。②寛文十年版の詩跋は、詩序や本文とは違って、①五山版と行換えが異なっていたり、字体の異同もまた少なくない。如蘭の印も無い。ちなみに②寛文十年版の異同箇所は、以下のように大きく分類することができる。

○明らかな誤り：(b) (d) (e) (f) (h) (j)

○結果的に意味は通じるもの：(a) (c) (g) (i) (k)「著」↓「着」

○訂正：(k)「集」↓「藁」

さて、③の無刊記本は、②の寛文十年版と内容が同一である。すなわち、②寛文十年版を覆刻したものである。当該版本(③)の蔵版は西山招慶院、版元(書肆)は京都の文求堂であるが、稿者の管見の範囲では、版元が松月堂(刈谷市中央図書館村上文庫蔵)や聖華房(東洋大学蔵)や貝葉書院(架蔵本A)のものも存在する。ここにおいて注目されるのは、『絶海録』の諸本である。『絶海録』の版本の中には、「文化十二季乙亥臘月八日」という識語と、招慶院の蔵版印を持つものがあり、それと、招慶院の蔵版印を持つ『蕉堅藁』を、「絶海録 上(下)」という外題のもとに合集した版本を、稿者は所蔵している(架蔵本B)。想像を逞しくすると、③無刊記本は、文化十二年「二八一五」刊の明治初年印本ではないだろうか。少しく話が横道に逸れるが、招慶院は、明治初年

に神戸の日蓮宗の寺院に売却され、その時に一旦、『蕉堅藁』の版木も神戸に移動したという。そして明治の末頃、慈濟院出身の高木龍淵管長が、日蓮宗寺院の中で絶海の木像が粗末に扱われているのを見て、それを慈濟院に引き取り、同時に版木も戻ってきたようである（加藤老師のご示教による）。すなわち、『蕉堅藁』の版木は現在、天龍寺山内の慈濟院にあり、それはまさしく、村上文庫蔵本や東洋大学蔵本や架蔵本Aを印刷した版木そのものである。²⁾ 版木には、『蕉堅藁』とともに『絶海録』の題簽も彫られており（現在、同塔頭に『絶海録』の版木は残っていないという）、招慶院の蔵版印を持つ、『蕉堅藁』の³⁾無刊記本は、『絶海録』とともに文化十二年に刊行されたのではないか、という稿者の推測も、あながち的外れではないかも知れない。

つぎは四本の写本（④・⑤・⑥・⑦）について。④の国会図書館蔵本と⑤の大阪天満宮蔵本は、ともに江戸時代に書写されたものである。したがって、書写状況（時期や祖本の流通等）を考えてみても、また、実際に行数や字数、行換えなどを見てみても、両者が江戸の版本（②か③）に依拠したことは、容易に想像されるだろう。試みに、先に対照表として掲げた、①五山版と②寛文十年版の異同箇所について、⑥の内閣文庫蔵本も加えた三本の写本（④・⑤・⑥）がどのように書写しているか、を見てみたい。記号は私に施した。

作品番号	④国会図書館蔵	⑤大阪天満宮蔵	⑥内閣文庫蔵
(a) 二十三番詩第一首目	小(②)	小(②)	山(①)

(b) 三十四番詩第九首目	面 (①)	面 (①)	面 (①)
(c) 三十六番詩	雲 (②)	雲 (②)	雪 (①)
(d) 八十三番詩	氷 (②) / 氷 (②)	氷 (②) / 永 (①) *	永 (①) / 永 (①)
(e) 九十三番詩	二 (①)	二 (①)	二 (①)
(f) 九十五番詩	氷 (②)	永 (①)	永 (①)
(j) 百二十三番詩	一 (②)	一 (②)	一 (②)
(h) 百四十二番序	間 (①)	間 (①)	間 (①)
(i) 百四十八番書	千 (②)	千 (②)	于 (①)
(j) 百五十四番書	宜 (②)	宜 (②)	旬 (①)
(k) 詩跋	ナシ	藁 (②) / 着 (②)	集 (①) / 著 (①)

【注】* 加藤南州が朱筆で、「永」字を「氷」字に訂正している。

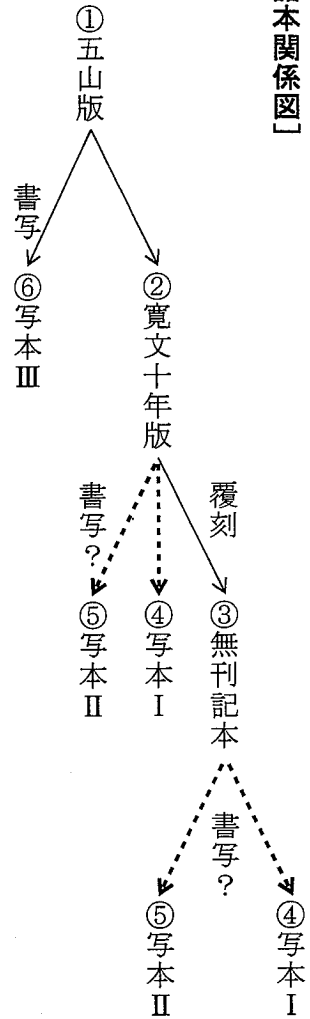
④国会図書館蔵本と⑤大阪天満宮蔵本は、殆ど同じ様相を呈している。(b)(e)(h)に関しては、両書の書写者が、①五山版を参考にするまでもなく、彼らの判断で江戸の版本(②か③)の本文に訂正を加えたのだから。⑤大阪天満宮蔵本の書写者が、(d)の一方を「永」字にしたのは単なる誤写(加藤南州が「氷」字に訂正している)、(f)を「永」字にしたのは自身の判断によるだろう。逆に「氷徳」を「永徳」と言う年号の誤ま

りと気付かない、④国会図書館蔵本の書写者の見識のほどが疑われる。江戸の版本(②か③)の(b)(d)(e)(f)(h)は、いずれも「明らかな誤り」であり、また、これら以外の誤謬箇所(j)の存在に気付いていないことから、両写本(④・⑤)が、①五山版を参照していないことは明らかである。(a)(c)(g)(i)、すなわち「結果的に意味は通じるもの」に関しては、いずれも江戸の版本(②か③)と一致し、このことも、両書がそれらに依ったことを示す一証左となろう。なお、⑤大阪天満宮蔵本には訓点が付されているが、さすがに訓点にいたるまで、全面的に江戸の版本(②か③)に依存しているわけではなく、書写に際して版本に付されていない箇所にも施されていたりする。

両写本(④・⑤)に比べて、異なった様相を呈しているのが、⑥内閣文庫蔵本である。これは、明らかに①五山版に依拠しているだろう。訓点も付されていないし、本文の行数、字数、行換えなどは、殆ど同じである。(j)に関しては、書写者が文字を見誤ったのではないだろうか。実際に①五山版の「此」字は、刷り具合によっては、「一」字に見えなくもなく、現に②寛文十年版の彫師は彫り誤っている。

最後に『蕉堅藁』の本文校訂の方法について考えてみる。現在のところ、『蕉堅藁』の諸本は同一系統で、すべて①五山版から派生しているので(次頁の「諸本関係図」を参照されたい)、底本は①五山版にすべきである。また、たとえ他本との間に文字の異同があったとしても、それらはすべて、彫師の彫り誤りや、書写者の誤写に起因するものと考えられるので、他本で校合する必要はない。訓読に関しては、序章第二節で述べた通り、基本的には、江戸の版本(②か③)に従うのが妥当ではないか、と思う。

〔諸本関係図〕



注

(1) 玉村竹二氏「上村観光居士の五山文学研究上の地位及びその略歴」(『五山文学全集(復刻版)』別巻所収)。

(2) 稿者は加藤正俊老師のご厚意のもと、平成十三年二月三日に同版木を調査する機会を得た。版木は桜材で、

寸法は縦二一・二く三×横七五・五く七六・四×厚さ一・五センチメートル。版本の二丁を一面として、両

面を用いているので(四丁がけ)、詩序二丁、本文五六丁、詩跋二丁に題籤分も含めて、合計一六枚である。

保存状況は良好。本文第六丁に割れ目、第四五丁および第五二丁の匡郭に傷があるが、いずれの痕跡も、国

会図書館蔵本(③)、村上文庫蔵本、東洋大学蔵本、架蔵本Aで確認することができる。埋木(入木)は、

特に見当たらなかった。

(3) 『絶海録』の題籤は、二枚分彫られており、当初は「絶海録 上」「絶海録 下」であったと思われる。

現在は「上」字、「下」字部分が削り取られている。『蕉堅藁』に関しては、とくに何も気付かなかった。

【付記】

資料の閲覧および撮影をお許し下さった国立国会図書館、国立公文書館内閣文庫、大阪天満宮、天龍寺慈濟院ならびに関係者の方々に、記して厚くお礼申し上げます。

第二章 『蕉堅藁』の作品配列について

○ 緒言

五山の作者、その名今に徴すべきもの、百人に下らず。しかして絶海、義堂、その選なり。次は則ち太白、仲芳、惟忠、謙岩、惟肖、（魯） 鄴隱、西胤、玉畹、瑞岩、瑞溪、九鼎、九淵、東沼、南江、心田、村庵の徒、枚挙に堪へず。

絶海、義堂、世多く並称し、以て敵手と為す。余嘗て『蕉堅藁』を読み、又『空華集』を読む。二禪の壁墨を審かにす。学殖を論ずれば、則ち義堂、絶海に勝るに似たり。詩才の如きは、則ち義堂、絶海の敵に非ず。絶海の詩、ただ古昔中世敵手無きのみならず。近時の諸名家と雖も、恐らくは甲（よろひ）を棄てて宵に遁れん。

（下略）

現在我々が絶海中津（一三三六〜一四〇五）と義堂周信（一三二五〜八八）の漢詩文を以って「五山文学の双壁」と称するのは、結局、ここに挙げた江村北海（一七一三〜八八）の『日本詩史』¹⁾における評言によると思われる。また、絶海の『蕉堅藁』や義堂の『空華集』の作品評価も、いまだに江戸時代の評価からあまり出ていないと言っても過言ではない。しかし、近年、蔭木英雄氏によって前掲二書の注釈が相次いで刊行され、²⁾両書が正当に評価される日もそれ程遠くはないように思われる。

さて、わたくしは今まで、絶海の伝記を追究してきたのだが（前編参照）、彼の漢詩文を正確に解釈するためには、その作品の詠作状況（時期・場所等）もまた、明らかにされなくてはならないだろう。つまり、『蕉堅藁』の作品配列の様相を明らかにしなくてはならないのではないだろうか。『蕉堅藁』全体は、

・蕉堅藁序（道衍）

・五言律詩（一〇二二）

・七言律詩（二二三〇六八）

・五言絶句（六九〇七九）

・七言絶句（八〇〇二二八）

・疏（二二九〇一四一）

・序（一四二〇一四五）

・書（一四六〇一五四）

・説・銘（一五五〇一六三）

・祭文（一六四〇一六六）

・書蕉堅藁後（如蘭）

から構成されている。なお、『蕉堅藁』の引用は五山版、作品番号は蔭木氏『蕉堅藁全注』による。返り点は、江戸の版本（寛文十年版か無刊記本）等を参考にして、私に施した。句読点も私に施した。また、人物考証に関

しては、玉村竹二氏の『五山禅僧伝記集成』（講談社、昭五八）や『五山禅林宗派図』（思文閣出版、昭六〇）を参考にした。

○ 絶海中津の生涯

各作品の検討に入る前に、絶海の生涯のあらましについて確認しておく。利用した主な史料は、『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）、『勝定国師年譜』（以下、『勝定年譜』と略す）、『蕉堅藁』、『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）である。

○誕生——建武三年（一三三六）十一月十三日（一歳）

○京都修行期——貞和四年（一三四八）～貞治三年（一三六四）（十三歳～二十九歳）

○関東修行期——貞治三年（一三六四）～応安元年（一三六八）（二十九歳～三十三歳）

○中国留学期——応安元年（洪武元年、一三六八）～永和三年（洪武十年、一三七七）（三十三歳～四十二歳）

○九州静養期——永和三年（一三七七）～永和四年（一三七八）（四十二歳～四十三歳）

○近江隠遁期——永和四年（一三七八）～康暦元年（一三七九）（四十三歳～四十四歳）

○甲斐恵林寺住持期——康暦二年（一三八〇）～永徳二年（一三八二）（四十五歳～四十七歳）

○関東再遊期——永徳二年（一三八二）～永徳三年（一三八三）（四十七歳～四十八歳）

○撰津・讃岐・阿波隱棲期——至徳元年（一三八四）～至徳三年（一三八六）（四十九歳～五十一歳）

○輦寺（等持寺・等持院・相国寺）住持期——至徳三年（一三八六）～応永十二年（一四〇五）（五十一歳～七十歳）

○示寂——応永十二年（一四〇五）四月五日（七十歳）

【注】絶海は近江、甲斐、撰津にそれぞれ赴く直前にも、短期間ながら京都に滞在していた。また、中国に渡る前も、一旦関東から帰洛していたと思われる。

絶海が中国から帰国した時期については、いまだに統一的な見解は出されていないようである。と、いうのも、『仏智年譜』は、洪武九年（永和二年）正月に金陵（南京）の英武楼において太祖高皇帝（洪武帝、朱元璋。一三二八～九八）に謁見し、帰国の許しを得た後、康暦元年十月、春屋妙葩（一三一～八八）に招かれて雲居庵（天龍寺の開山塔）に住するまでの記載がなく、『勝定年譜』は、永徳三年まで記事を欠くからである。『日工集』永和四年四月廿三日条によると、この日、絶海から義堂に帰京の報告があったという。

ところが、『蕉堅藁』所収の「繁全牛の和山上人の関西に帰るを送る詩の序」（一四二）には、以下のような文章があるのである。

丁巳春。余自南国回首。謁管崎之広嚴精舎。其主人大疑老人。以余剽劫之餘謀。生無聊。而廿年之素館。余平寢。自处偏室。以憩奔走。而全餘喘焉。其德曷可忘也。

これによると、絶海が帰朝したのは、永和三年（丁巳）の春頃ということになる。絶海は「剽劫」の結果、博

多で困窮していたところを、箱崎（福岡市東区）にある広厳寺の住持大疑宝信に助けてもらい、同寺においてしばらく手厚い保護を受けたようである。絶海がどのような体験を指して「剽劫」と表現したのか、現在記録が残っていないため、よくわからないが、「さきに南山の盜賊、山を阻つ。横行し、良民を剽劫す」（『漢書』王尊伝。傍線は私に施した。以下同じ）や「城を攻め、邑を襲ふ。剽劫、虜掠す」（『論衡』答佞篇）などの用例を見ると、帰国の途次に海賊に襲撃されたりでもしたのであるうか。中巖圓月（一三〇〇〜七五）の『東海一漚集』（『五山文学新集』第四卷所収）には、

歳在壬申夏四月、予帰自江南、時罹病、息于博多、秋八月、病愈、遙跋故里、東海渺漫途脩、無有為援者而止、借榻神山間房而臥、有客來問曰、卿見行有與大喝道而東者、曰、其人使江南所獲旅犬、獻於閩東某州某官、昇之而進、道傍過者、辟而遠望、不敢近視、子亦江南而來、其為利于國、不若之犬也哉、（下略）

（「胡為乎賦并序」）

という文章がある。元弘二年（壬申、一三三二）四月、絶海よりも約半世紀前に入元した中巖も、長旅の疲労が出たのであろうか、帰朝した直後に博多で病を患い、静養している。「贈珣白石」詩に「兄自江南來、弟欲江南往、相逢管崎西、共聽万松響、（下略）」という句があることから、万松山承天寺（福岡市博多区）で療養したと思われる。そして同八月、中巖は病も癒え、東上の旅を援助してくれる者を待ちながら、神応山顕孝寺（福岡市東区多々良地区）の閑房で時を過ごしていた。その間、闘犬好きの北条高時（一三〇三〜三三三）のために、中国から輸入した犬が、同じく中国から帰国した中巖に先立って、輿に担がれて東行していく光景にも遭遇してい

る。参考までに、玉村氏『五山文学』（日本歴史新書、至文堂、昭三〇）には、つぎのような記述がある。

この筑前・豊後の地は、中国と京都とを連ねる交通の要衝であり、中国渡航の中継地として重要な地位を占めていた。鎌倉時代中期以来、日本よりの渡海僧の数は漸く増加したので、これら幾十幾百の入宋入元僧が、或は便船を待ち、或は帰朝後の休養をとるのは、すべてこの地であった。よって蔣山万寿寺・顕孝寺、殊に筑前多々良の顕孝寺は、これらの禅僧の寄寓地となった観があった。（七三頁）

なお、『蕉堅藁』所収の「金剛の物先和尚に与ふる書」（一四六）に、

小弟閑遊外邦。遭時孔艱。苟活而帰為幸而已。事業荒陋可_レ知也。賤跡以三月望。方到輦下。

という文章があることから、絶海が帰京したのは、翌四年の二月十五日頃であろう。

関東に再遊したことについては、前編第三章を参照していただきたい。

○ 『蕉堅藁』の成立過程

現在においても、五山文学（禅林の文学）の作品集の成立に関する論考はあまり見受けられない。草稿本系統の諸本の成立・発展については、玉村氏が『五山文学新集』第一巻「解題」において、横川景三（一四二九〜九三）の場合を例に挙げて論を展開されている。同解題のなかには、

横川景三は、生前既にその文名が一世を風靡していたらしく、単に会下^{えか}に在って、文筆の練磨をしようとする人があつたばかりではなく、遠く地方から上洛して、一定の期間、横川の許に寄宿して、特に請うて、

その稿本を書写し、以て国にかえてから後、何かにつけて制作の手本にしようとする僧があつた。(中略)したがって、生前から、幾通りもの写本を生んだことは、容易に想像出来る。しかし以上の例でもわかる如く、これらの人々は、自己の作文の模範として手写して行くのであるから、大部分は、その人の旨好つまみによる摘録が多かつたであろうから、横川生前にはその稿本の完全な複本は、他人の手によつては出来なかつたと見られよう。(下略)

(九九一頁)

とか、

即ち一々の作品を一紙々々に書いて、人に与えるが、その控が必ず手許にとられたであろう。それがある程度たまると、自己の全集を編録する目的で、大略制作年代順に冊子に筆録することを、横川自らが絶えず行っていたのではないか。したがって手録中に、別のひらめきが生ずると、既に用済になつて人手にわたり公表されてしまった作品に、訂正を加えるのである。(下略)

(九九二頁)

などのように、示唆に富んだ意見が見られる。

翻つて『蕉堅藁』の成立過程について確認したい。『国書総目録』や『古典籍総合目録——国書総目録続編』によると、『蕉堅藁』の諸本には写本——国会図書館蔵(寛政十年(一七九八)書写、跋文ナシ、訓点ナシ、頭注・傍注アリ)、大阪天満宮御文庫蔵(嘉永二年(一八四九)書写、『絶海録』所収の真贋および自贋全作品を含む、訓点アリ)、内閣文庫蔵(書写年不明、訓点ナシ)、彰考館蔵(未見)——のほか、室町初期版(五山版、訓点ナシ)、寛文十年(一六七〇)版(訓点アリ)、無刊記本(訓点アリ)の三系統の版本があり、未見の彰考

館本を除いて、諸本間に大きな異同は見られない。⁽³⁾ただし、九十三番詩第一首目の四句目「黄昏、月に和して、横斜を看る」に、「黄昏は一に夢魂と作る」という注記があることは注目される。

『蕉堅藁』（鄂隱慧叢編）の序には「永樂元年倉龍癸未十一月既望。僧録司左善世道衍序」、その跋には「大明永樂元年癸未臘月。天竺如蘭」、「絶海和尚語録」（鄂隱・西胤俊承・叔玠慧瓏編。以下、『語録』と略す）の序には「大明永樂元年歲次癸未冬十有二月既望。武林淨慈禪寺住山四明釈道聯撰」、その跋には「永樂二年正月望日。径山比丘心泰書。時年七十有九」という記述がある。永樂元年は応永十年（一四〇三）、永樂二年は応永十一年（一四〇四）にあたり、絶海の没年は応永十二年（一四〇五）なので、『蕉堅藁』と『語録』は絶海の生前に一応の体裁を整えていたことになる。『蕉堅藁』の跋文に、「椿庭和尚に答ふる書」（一五二）に見られる「然りと雖も、時々山水幽勝の処に逢ひて、衣を披ひらき、策を散じて、猿鳥雲樹の趣きに陶冶し、悠然として物化の元に遊ぶが如し」という文章が引用されていることから、実際に作品集がある程度纏められた後、序や跋が記されたことがわかる。

また、『蕉堅藁』に、

○禅師平生所為詩。凡若干篇。其徒等聞。聚為一帙。題曰蕉堅藁。来求余序其卷首。（蕉堅藁序）

○今觀絶海之著作。則旧遊風景。俱在目前。其徒等聞上人。又為之請。輒贅語於卷末云。（書蕉堅

藁後）

とあり、『語録』⁽⁴⁾に、

○永樂元年冬。沙門等聞偕_二天龍住山密堅中者_一。奉_レ使來_二皇朝_一。還_レ國過_レ門。展_レ禮以_二其師絕海禪師四會語錄_一求_レ序。予以_二不文_一辭不_レ獲。(序)

○日本絶海禪師初住_二甲州恵林_三住_二相国承天_一四會語錄。其弟子等聞請_レ跋。予以_レ老辭_レ之不_レ獲。(跋)
とあることから、応永十年(永樂元年)に絶海の弟子である龍溪等聞が『蕉堅藁』と『語録』を携帯して、天龍寺の堅中圭密(第三十六世)を使者とする遣明使一行に随行し、両書の序や跋を請い受けたことが知られる。『語録』卷下には「聞蔵主を送る」(二七七)という壮行偈がある。

送_二聞蔵主_一

等聞蔵主謹愨通敏篤_二志於道_一。蓋後進之中巖然秀出者也。今春欽承_二国命_一將_下随_二堅中禪師_一入_中朝大明国_上。求_レ語。乃為警策率述_二一偈_一。以勉_二其行_一云

万里南游随_二使臣_一。觀光正際太平辰。石城虎踞山河壯。易水龍飛氣象新。撥草尋_レ師先哲軌。皇華報_レ国丈夫身。公私事辨帰須_レ速。措_レ背他年切要人。

「公私の事、辨じて、帰ることすべからく速やかなるべし」という句を見ると、絶海が龍溪に言う「公私の事」のなかには、『蕉堅藁』と『語録』の序や跋を中国僧に求めるといふ用件が含まれていたのかも知れない。このことは、蔭木氏も指摘されている。こうして見ると、『蕉堅藁』や『語録』に収められている作品は、絶海自らによつて厳選され、推敲を重ねられた可能性が高いだろう。現に『蕉堅藁』に未収録の詩が、他書に見受けられることもあるし、同一詩の詩題が、『蕉堅藁』と他書とで異なっていることもある。ただし、『語録』には、先

に挙げた「聞蔵主を送る」詩（二七七）に和韻した「蕉堅大士の韻に同じくし奉りて、就きて龍溪知蔵の日東に還るに贈る 中印峰の間叟如蘭」（二七八）という偈がある。『蕉堅藁』の跋文を記した明僧如蘭が、日本に帰る龍溪に贈ったものであるが、この壮行偈が『語録』に収められているということは、龍溪の帰朝後に『語録』が若干、増補された可能性を残していよう。

なお、『蕉堅藁』や『語録』の編者の一人である鄂隱慧叡は、応永二十四年（一四一七）九月五日に天龍寺（第六十一世）、翌二十五年（一四一八）六月十二日には鹿苑院（相国寺の檀那塔）をそれぞれ退院し、急遽土佐に逐電した。足利義持（一三八六〜一四二八）との間に不和が生じたためである（『仏慧正統国師鄂隱和尚行録』『看聞日記』『満濟准后日記』）。したがって、『蕉堅藁』や『語録』の編集が確定されたのは、この出来事よりも以前ということになるだろう。

注

- (1) 引用は大谷雅夫氏他校注『日本詩史 五山堂詩話』（新日本古典文学大系65、岩波書店、平三）による。
- (2) 蔭木英雄氏『義堂周信』（日本漢詩人選集3、研文出版、平一一）、同氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇）。
- (3) 諸本間に詩文の取捨による異同はなく、配列順序も全く同じで、寛政本には多少の誤脱が見られるもの、行換えや欠字部分（六十番詩第四首目の二句目「休居幸免□時疑」、八十番詩Bの序文「（上略）□□壬午

秋余使日本国一見万年山中沐以旧遊為懷數相詢慰。(下略)も同じなので、今のところ『蕉堅藁』の諸本は同一系統であると言えよう。後編第一章参照。

(4) 引用は『大正新修大藏經』第八十卷「統諸宗部」、作品番号は梶谷宗忍氏訳注『絶海語録』二(思文閣出版、昭五一)による。

(5) 蔭木氏「義堂周信・絶海中津」(『仏教文学講座』第三卷「法語・詩偈」所収、勉誠社、平六)。

(6) 建仁寺両足院蔵『東海瑠華集(絶句)』(『五山文学新集』第二卷所収)には、作者惟肖得巖の先輩五山文学僧——義堂周信、絶海中津、無求周伸、雲溪支山、観中中諦、中巖圓月等——の七言絶句が百七首挙げられている。絶海に関しては二十二首採られているが、そのなかには、『蕉堅藁』に見受けられないもの(「漫書芭蕉」「謝人惠蕉苗」等)や、『蕉堅藁』とは詩題が異なっているもの(例えば「答義堂和尚見寄」)、『蕉堅藁』では「九七 銭原にて清溪和尚の韻に和す」、詩句の文字に異同があるものが含まれている。玉村竹二氏はこの両足院本に関して、「この本は、江戸初期の写本であるが、その親本となった本は、或は惟肖の草稿本であったかとも思われる」「義堂・絶海等の詩は、作品がいずれも惟肖に関係の深い人のものばかりであるから、惟肖が先輩の作品を勉学のために抜萃して座右に備えたものと考えられないこともない」「解題」と指摘されている。

第一節 五言律詩の場合

はじめに

本節では、とくに五言律詩（一）（二）に注目して、可能な限りその詠作状況を明らかにし、配列順序について考えてみたい。

一 『蕉堅藁』一番詩〜十三番詩

便宜的に全体を四区分し、考察を加えていく。一番詩〜十三番詩の詩題を掲げる。

- ・「真寂の竹菴和尚に呈す」(一)
- ・「和す(豫章の老謬懷渭)」(一A)
- ・「和す(豫章の蒲菴来復)」(一B)
- ・「和す(延陵の夷簡)」(一C)
- ・「湛然静者に呈し、并せて画を謝す 三首」(二)
- ・「絶海の為に画き、并せて賦す(湛然静者惠鑑)」(二A)
- ・「良上人の雲間に帰るを送る」(三)

・「三生石」(四)

・「友人を期するも至らず」(五)

・「北山の故人の房に宿る」(六)

・「宝石寺の簡上人に寄す 二首」(七)

・「古寺」(八)

・「文煥章、姑蘇に帰る」(九)

・「来上人、姑蘇に帰りて覲省す」(一〇)

・「俊侍者の呉興に帰るを送る」(一一)

・「冬日、中峰の旧隠を懷ふ」(一二)

・「早に発つ」(一三)

まずは、「流水、寒山の路、深雲、古寺の鐘」という句で有名な巻頭詩を見てみる。

一 呈真寂竹菴和尚

不堪_レ長_レ仰止_二。渚上寄_二高踪_一。流水寒山路。深雲古寺鐘。香花巖_二法会_一。冰雪老_二禪容_一。重獲_レ霑_二真葉_一。

多生慶_二此逢_一。

この詩には、清遠懷渭(竹菴和尚)、見心来復(蒲菴和尚)、易道夷簡が唱和しているが、清遠の詩の序文には「予、真寂に帰老し、特に存慰を_ま柱げらる。まさに江東に遊ばんとし、詩を留めて別れを為す。日ふ有り、流

水、寒山の路、深雲、古寺の鐘、と。(中略)遂に次韻して、用つて答ふ、詩後の自注には「洪武六年、歲癸丑に在り、冬十二月廿日、真寂山中に書す」とあり、絶海と清遠の詩の応酬が洪武六年(応安六年、一三七三)十二月二十日、真寂山(し)において行われたことがわかる。また、易道の詩の序文に「まさに上国に遊び、人物衣冠の盛んになると、夫の吾が宗の碩德禅林の衆(おほ)きをを觀んとし、詩有りて竹菴に留別す。菴、喜びて之に和す。茲(こゝ)に示さるるを承り、復た予に徵む。遂に一首を次韻して、雅意に奉答すと云ふ」とあることから、見心や易道も、清遠が次韻した後まもなくして、絶海詩に次韻したと思われる。なお、詩題や序文からも明らかのように、これらの詩は、絶海が中国に留学している時に詠まれたものである。

つぎに卷頭詩以外の作品にも目を向けてみると、その詩題から判断して、二番詩、三番詩、四番詩、七番詩、九番詩、十番詩、十一番詩、十二番詩はすべて、中国での作である。「湛然静者(惠鑑)」とは松源崇岳——無得覚通——虚舟普度——虎岩淨伏——独孤淳朋の法統を承けた仲銘惠鑑のことである。「文煥章」については、了菴清欲の法嗣天彰文煥を指摘する意見(入矢義高氏・梶谷宗忍氏⁽²⁾)もあるが、「天彰煥」や「煥天彰」ではなく、「文煥章」とあるので、少しく疑問を持たざるを得ない。「雲間」とは現在の上海市松江区、「三生石」とは中天竺寺の名勝(『扶桑五山記』)、「宝石寺」とは西湖北岸に聳える宝石山中に位置した禅院、「中峰の旧隠」とは中天竺寺のことである。「姑蘇」とは江蘇省の東南部、「吳興」とは浙江省の北部を言う。

八番詩や十三番詩に関しても、「断碑、歳月無く、唐宋、竟(つひ)に尋ね難し」や「天迴(はる)かにして、長河没し」「首を回らせば、樽桑の日、還(ま)た萍実の朱きが如し」という詩句があることから、中国での作であろう。とくに十三

番詩には、望郷の念を胸に秘めながらも、中国大陸を行脚して禅道修行に精進する、当時の（青年）留学僧たちの真摯な姿を見ることが出来る。

一三 早発

冬行苦^二短日^一。蓐食戒^二長途^一。雪暗関河遠。風吹鬢髮枯。荒山雖^レ可^レ度。積水若為逾。岸転橋何在。沙危杖屨扶。漁簞残^二近渚^一。僧磬徹^二寒蕪^一。楚興潜中動。袁容頗外蘇。破衣江上歩。円笠月中孤。天迴長河没。曙分群象殊。寒烟人未爨。野樹鳥相呼。回^レ首樽桑日。還如^二萍実朱^一。

なお、五番詩と六番詩の詠作状況は、その詩題や詩句からでは判然としないが、前後の作品が中国で詠まれたものなので、中国での作であろう。六番詩の詩題の「北山」は、中国五山第二の北山景德^{りんにん}靈隱禅寺のことかも知れない。

二 十四番詩および十五番詩

・「野古島の僧房の壁に題す」（一四）

・「山水の図に賦して、無外の瑞鹿に帰るに贈る」（一五）

十四番詩について。「野古島」は博多湾の中央にあり、明との交通の要衝だったようである。鉄菴道生の『鈍鉄集』（『五山文学全集』第一巻所収）には、博多人景の一つとして「野古帰帆」が詠まれている。したがってこの詩は、絶海が中国から帰国して、九州で静養している時に詠まれたものである。

十五番詩について。「無外」とは無外円方（？）一四〇八、「瑞鹿」とは瑞鹿山円覚寺のことである。確かに無外は円覚寺の住持（第六十世、『扶桑五山記』による。ただし、入院した年月日は記されていない）を勤めているが、彼が同寺に帰った時期、動機、目的等は明らかではなく、その詩句を見ても、この詩の詠作状況を詳らかにすることは難しい。

三 十六番詩と十九番詩

・「東宮の秋月 二首」(一六)

・「菊上人の京に入るを送る」(一七)

・「出塞の図」(一八)

・「光侍者を送る」(一九)

十六番詩の本文を挙げる。

一六 東宮秋月 二首

①秋夜関山月。高懸細柳宮。中軍嚴下令。万馬肅無声。寒影旌旗湿。斜光睥睨明。何人横槊賦。愁殺老書生^一。

②南国秋新霽。東宮月正中。光寒凝^二列戟^一。弦上學^二彎弓^一。連^レ海風雲慘。振^レ山金鼓雄。安能永^二良夜^一。一照万方同。

『空華集』卷第十三の「大慈寺八景詩歌集の叙」に、

日州大慈精舎。其地蓋負_レ山而臨_レ海。一目万里。実九州山川第一偉觀也。好事者。采_二其景最絶者八_一。而目_レ之。曰_二大慈八景_一。其曰_二龍山春望_一。言_レ宜_二乎春_一也。曰_二古寺緑陰_一。言_レ宜_二乎夏_一也。曰_二漁浦帰舟_一。以_レ詠_二漁父_一也。曰_二桮市炊烟_一。以_レ樂_二市隱_一也。曰_二橋辺暮雨_一。示_レ防_二卒暴_一也。曰_二江上夕陽_一。示_レ迫_二桑榆_一也。其山城宜_レ月者。曰_二東宮秋月_一。所_レ以_レ警_レ夜也。其宜_レ雪者。曰_二西寨夜雪_一。所_レ以_レ戒_二不虞_一也。

（『五山文学全集』第二卷）

とあるように、「東宮秋月」は日向の大慈寺八景の一つである。大慈寺八景の成立の経過を同叙に見てみると、九州探題として西国の平定を任されていた今川了俊（一三二六く？）が、龍興山大慈寺（鹿児島県曾於郡志布志町志布志）に八景があることを知り、瞬菴宗久なる道人を上洛させて、八景を題にして公卿には和歌を、禅僧には漢詩をそれぞれつくらせたという。『日工集』康暦二年（一三八〇）七月十八日条に「（柏庭）清祖侍者の求めの為に八景目を改む。けだし日向州龍興山大慈寺の境地なり」、同廿七日条に「雲居庵に往き、普明国師（春屋妙葩）と説話す。即ち大慈八景龍山春望詩を出示せらる」とあることや、大慈寺八景の全作品が収録されている『雲巢集』（『五山文学新集』第四卷所収）を見ると、絶海の「東宮秋月」詩（第一首目のみ所収）に「慧林住持 絶海 中津」と記されていることなどから、この十六番詩は、康暦二年十月八日に絶海が甲斐の恵林寺に入寺した後まもなくして、同地において詠まれたと思われる。さて、十七番詩の序文にはつぎのようである。

菊上人甲産也。蚤游_二上国_一。從_レ師隸_レ業。孜孜不_レ倦。而温乎其容確乎其志寔後進之秀也。壬戌春。謁告來寧訪_二予林下_一游_二從于茲_一兩月矣。三月首自_レ京書來。勅還卒_レ業。上人聞_レ命。翌日登_レ塗。略無_二難色_一。臨_レ行請曰。幸得_二一言_一。以為_二再參之獻_一。其請亦勤矣。上人乃吾月舟老兄之子。而視_レ予叔父也。於_二今行_一其可_レ無_二言乎_一。力作_二小律一首_一。少答_二盛意_一。且求_二月舟老兄之教_一云。

甲斐出身の菊上人は、早くから京都に遊学していたが、永徳二年（壬戌、一三八二）の春、郷里である甲斐の絶海の許を訪れ、二ヶ月ほど滞在した。そして三月の初めに京都に戻るといので、絶海は送行の詩（偈）、すなわちこの十七番詩を作ったのである。菊上人については未詳であるが、「上人は乃ち吾が月舟（周勲）老兄の子にして、予を視ること叔父たり」とあるように、月舟周勲の弟子である。『仏智年譜』文和二年（一三五三）条には「師、年、十八、錫を東山建仁に掛く。信義堂、怙先覺（先覺周怙）、勲月舟、寿天錫（天錫周寿）等と同じく、龍山（徳見）和尚の高風を慕ふ」とあり、建仁寺の龍山徳見（第三十五世）に月舟が師事した際、絶海も後輩の同参だったようである。傍線は私に施した。

また、十九番詩の序文には、

明絶上人暫如_二相陽旧隱_一專訪_二月潭師_一。詩以祖_二行色_一。時明絶家兄在_レ軍。故末語及_レ此。

とある。詩題の「光侍者」と序文の「明絶上人」とは同一人物で、明絶□光のことである。ちなみに「明絶侍者の雪中の韻に次す」詩（九六）の「明絶侍者」もこの人であろう。また、「月潭師」とは月潭中円のことである。

玉村竹二氏『五山禅林宗派図』（思文閣出版、昭六〇）によると、法系は夢窓疎石——義堂周信——月潭中円

——明絶□光とある。「相陽の旧隱」とは、詩中に「新寺は南陽の塙」とあることから、南陽山報恩寺のことである。

『蕉堅藁』所収の「円覚の椿庭和尚に与ふる書」(一五三)には「夏間に(明絶)光侍者の職事を以つて、虚中(梵亮)に私す。計らずも輒ち尊聴に徹し、卒かに能く侍香をして職せしむ。甚感甚荷」や、「茲に光侍者の帰参に因りて、草々に修布す」という文章がある。第四節で検討するが、この書簡は甲斐でしたためられたと考えられるので、明絶は、甲斐で絶海に従事した学徒のうちの一人だったのであろう。『仏智年譜』³⁾康暦二年条には、

凡在京師相陽。有名之英納雲集。寺屋殆乎無所容。師不拒之。孜孜誘掖也。学徒参叩。禅宴餘暇請而講法華楞嚴円覚等。緇素聴衆汎溢矣。蓋師旺化權輿于此矣。

とあり、当時、惠林寺に入院した絶海の許には、京都や相模の有名な僧(菊上人や明絶を含む)が大勢集まり、各々が求道精神を燃焼させていたことがわかる。そして明絶がしばらく報恩寺の月潭を尋ねて行くというので、絶海は送行の詩(偈)、すなわちこの十九番詩を作ったのである。序文に「時に明絶の家兄、軍に在り」とあり、詩中に「四郊、戎馬の塵」とあるが、この当時、関東では、小山氏が反乱を起こしていた(小山氏の乱、一三八〇〜九七)。ちなみに、これも第四節で検討するが、甲斐でしたためられたと考えられる「法華の元章和尚に与ふる書」(一四九)には、「今夏、州兵、東征し、軍須、百端、民戸、之が為に騒然たり」という文章もある。なお、十八番詩の詠作状況は、この詩が題画詩ということもあり、詳らかにすることは難しいが、前後の作品が

甲斐で詠まれたものなので、甲斐での作であろう。絶海は小山氏の乱を念頭に置いて、この「出塞の図」詩（一八）を詠じたのかも知れない。

四 二十番詩〜二十二番詩

・「千里明月の画軸に題して、濡侍者に寄す」（二〇）

・「白雲山房の画軸に題す」（二二）

・「巧拙叟、親を省す」（二二）

二十番詩の本文を挙げる。

二〇 題千里明月画軸寄濡侍者

隔千里兮共明月。是蓋謝希逸愬皓月而詠懷者歟。千載之下諷之詠之使_レ人愴然。龍山天休濡上人遠游江東而未還。洛社諸彦詠謝氏之旧歌。以寓懷焉。懷而不已。輒命_二繪事_一。以罄_二縣縣裝潢_一。

寄以徵_二予詩_一。予老矣而廢_レ詩久如。迫_二于諸彦之督責_一。遂_二弘_二拭筆研_一。率然而作云。

京華与_二江表_一。相別又相望。唯有_二九霄月_一。共_二茲千里光_一。山空還独夜。水闊更殊方。顧_レ影徒延佇。不堪_二清漏長_一。

序文によると、瑞龍山南禅寺の「天休濡上人」が遠く「江東」に遊学していまだに帰らないので、京都のすぐれた同志たちは謝希逸の旧歌——「美人邁_ゆきて音塵闕_たゆ。千里を隔てて明月を共にす」（『文選』卷第十三「月

賦」を詠じて思いを寄せた。そしてその尽きせぬ思いを詩に詠み、画工に命じて表装してもらい、絶海の許に持参して詩を求めたので、絶海も詩とその序文を書いたという。

なお、「天休濡上人」については、島田修二郎氏⁴も指摘されているように、惟忠通恕の『雲壑猿吟』(『五山文学全集』第三卷所収)に「題千里明月図寄東濡侍者」という詩があることから、天休東濡なる禅僧のことであろう。天休に関する履歴は、現在まで全く知られていないが、絶海や惟忠、さらには惟肖得巖等が詩を題した詩画軸(「千里明月図」)を贈られており(贈り主は不明)、当時の彼の宗教活動ならびに文学活動が大いに偲ばれる。また「江東」に関しては、長江の東と解する説(入矢氏・梶谷氏)と、近江の東と解する説(蔭木英雄氏)とに分かれている。寺田透氏は、関東とされているが、⁵それは明らかに誤りであろう。

さて、序文に「予は老いたり」とあるように、この二十番詩は、絶海が晩年、京都で大寺院の住持を勤めている時に詠まれたと考えられる。したがって、つぎの二十一番詩、二十二番詩の詠作状況は、その詩題や詩句からでは判然としないが、やはり京都での作になるだろう。なお、「白雲山房」とは円覚寺山内の白雲庵、「巧拙叟」については未詳である。

おわりに

以上のように、今回は『蕉堅藁』の五言律詩(一〇二二)を見てきた。なかにはその詠作状況が判然としないもの——五番詩、十五番詩、十八番詩、二十一番詩、二十二番詩——も含まれていたが、絶海自身が作品を厳選、

推敲したこと、前後の作品との関係などを勘案すると、一番詩く十三番詩は中国での作、十四番詩は九州での作、十五番詩は九州、近江、甲斐のいずれかでの作、十六番詩く十九番詩は甲斐での作、二十番詩く二十二番詩は京都での作というように、その配列は詠作年代順に整理されているように思われる。ただし、巻頭詩に限っては、作者絶海の自信作が採られた可能性もある。第二節でも引き続き、今回の結果を踏まえながら、『蕉堅藁』の五言律詩以外の作品配列を見ていくつもりである。

注

(1) 諸書が挙ってその所在を不明とする中、西尾賢隆氏は、つぎのような指摘をされている。

洪武六年（一三七三）絶海は、清遠が退居している杭州の真寂山中に訪ねている。ここは「笑隠訶公行道記」（『蒲室集』巻一五付）、「鳳皇山禅宗大報国寺記」（『金華黄先生文集』巻一一）、それに清遠の碑銘からすると、笑隠（大訶、朝倉注）・清遠ともかつて住持であった報国寺（甲刹）における笑隠門下が、師の遺齒爪髪を奉じて鳳皇山に塔した地を梁渚とっていて、ここに庵居して真寂といったものといえる。

『中世の日中交流と禅宗』、吉川弘文館、平一一、二一六頁

(2) 入矢義高氏校注『五山文学集』（新日本古典文学大系48、岩波書店、平二）、梶谷宗忍氏訳注『蕉堅藁年譜』（相国寺、昭五〇）。

(3) 引用は『大正新修大蔵経』第八十卷「統諸宗部」による。

(4) 島田修二郎、入矢義高氏監修『禅林画賛 中世水墨画を読む』（毎日新聞社、昭六二）。

(5) 寺田透氏『義堂周信・絶海中津』（日本詩人選²⁴、筑摩書房、昭五二）。

(6) 前の十四番詩が九州での作、後の十六番詩が甲斐での作なので、『蕉堅藁』所収の五言律詩の配列が詠作年代順になっていると仮定すると、「山水の図に賦して、無外の瑞鹿に帰るに贈る」詩（一五）の詠作場所としては、九州、甲斐、そして近江の場合が考えられる。無外の履歴については、『延宝伝灯録』『重続日域洞上諸祖伝』『日工集』等を見ても、その大略しか知り得ない。武蔵の出身で、東明慧日——不聞契聞——無外円方という法統を承けた、いわゆる曹洞宗宏智派わんしに属しており、肥前の水上寺に出家した後、浄智寺、円覚寺（第六十世）、建長寺（第七十六世）と歴住し、大隅の宝寿寺の開山にもなっている。義堂とも親交が深く、主として関東周辺で活躍していたようであるが、九州にも足を伸ばしており、この十五番詩は九州での作なのか、それとも甲斐での作なのか、判別することは難しい。近江で詠じられた可能性もあながち否定できない。

※ 中国の地名に関しては、和泉新氏編『現代中国地名辞典』（学習研究社、昭五六）や『中華人民共和国

政区劃簡冊 二〇〇〇一』（中華人民共和國民政部編、中国地圖出版社）を参考にした。

第二節 七言律詩の場合

はじめに

本章は、とくに七言律詩（二二三～六八）に限って、可能な限りその詠作状況を明らかにし、配列順序について考えてみたい。ただし、六十番詩～六十八番詩に関しては、前編第三章で言及したので、今回はその詩題と結論とを記すだけにとどめておきたい。

一 『蕉堅藁』二十三番詩～四十六番詩

論の進行上、便宜的に全体を五区分し、考察を加えていく。二十三番詩～四十六番詩の詩題を掲げる。

- ・「錢唐の懐古、韻を次す」〔二首〕（二二三）
- ・「中竺の全室和尚、京師より山に還る。詩を作りて以つて献ず」（二二四）
- ・「春日、北山の故人を尋ぬ」（二二五）
- ・「定静庵に寄す」（二二六）
- ・「耿郎中の菓を謝す」（二二七）
- ・「永安塔を拝す」（二二八）

- ・「徑山の全室和尚の京に入ると聞きて作る」(二二九)
- ・「祚天元の京師の書至る。喜びて寄する有り」(三三〇)
- ・「歳暮の感懐、寧成甫に寄す」(三三一)
- ・「南山の新居に故人の筍茗を持して贈らる。遂に之を留めて宿せしむ」(三三二)
- ・「新秋に懐ひを書す」(三三三)
- ・「山居十五首、禅月の韻に次す」(三三四)
- ・「郷友志大道、金陵にて病ひに臥す」(三三五)
- ・「趙魯山々人の錢唐より越中の旧隠に帰るを送る」(三三六)
- ・「岳王の墳」(三七七)
- ・「姑蘇台」(三八八)
- ・「多景楼」(三三九)
- ・「雲上人の錢唐に帰るを送る」(四〇〇)
- ・「迪侍者の天台に帰るを送る」(四一一)
- ・「四明の館駅にて龍河の猷仲徽に簡す」(四一二)
- ・「簡上人を悼む」(四二三)
- ・「端侍者を悼む」(四四四)

・「元章の日本に帰るを送る」(四五)

・「戒壇の無溢宗師に寄す 二首」(四六)

先に結論から述べると、ここに挙げた詩はすべて、絶海が中国に留学している時に詠まれたものであろう。

まず詩題から判断できるものを見てみる。二十三番詩、二十四番詩、二十九番詩について。二十三番詩は、季潭宗泐(全室和尚、一三一八〜九一)の「錢唐懷古」二首」詩(『全室外集』¹卷之下所収)に次韻したものである。文字圏は私に施した。以下同じ。

二三 錢唐懷古次韻 (第一首目)

絶海中津

天目山崩炎運^往。東南王氣委^平蕪。鼓聲声震三州地。歌舞香消十里湖。古殿重尋芳草合。諸陵何在断雲孤。百年江左風流尽。山海空環旧版^圖。

錢唐懷古 (第一首目)

季潭宗泐

欲識錢塘王氣^往。紫宸宮殿入青蕪。朔方鏖騎飛天璽。師相樓船宿裡湖。白雁不知南国破。青山還傍海門孤。百年又見城地改。多少英雄屈霸^圖。

『仏智年譜』や『勝定年譜』²を概観すると、

○応安元年戊申。師年三十三歳。大明洪武元年二月。航^レ溟南游。寓^二抗^三之中竺^一。依^二全室禪師^一。禪師甚器^二重^一之。命俾^レ作^二燒香侍者^一。後復又轉^二藏主^一。(中略)師嘗自謂曰。余入^二大明^一。最初依^二清遠於道場^一。以^二侍局^一命。辭不^レ就。遂依^二中竺季潭和尚^一云。(下略)

○(宓安) 四年辛亥。是歲登徑山。省全室和尚。延以後堂首座。師辭不就云々。

(以上、『仏智年譜』)

○三十八歳。再參天界全室。清遠和尚作偈送之。序曰。云々。偈有東海扶桑樹。西天甘諸種之句。

(『勝定年譜』)

という記事があり、絶海が在明中、中天竺寺や徑山、天界寺に住した季潭に師事したことがわかる。³⁾したがって、これら三首は、中国での作であろう。⁴⁾絶海は大慧派の季潭らと交わることによって、大慧派の家風——四六駢儷文体(蒲室疏法)の使用の徹底化と、純文芸(詩文)の賞翫——を継承し、日本に伝えた。⁵⁾「錢唐」とは浙江省の杭州市地方、「中竺」とは中天竺寺、「徑山」とは、中国五山第一の徑山興聖万寿禅寺のことである。

二十八番詩と三十八番詩について。「永安塔」は靈隱寺(中国五山第二)の永安院の傍らにあり、『輔教篇』を著した明教契嵩(一〇〇七〜七二)が祭られている。「姑蘇台」は吳王夫差が西施と遊んだ所である。『勝定年譜』には、

三十三歳。拜永安塔。訪和靖旧姑蘇台。

という記事があり、絶海が洪武三年(宓安三年、一三七〇)に兩名所を訪れ、詩を吟詠したことがわかる。

三十五番詩と四十五番詩について。「志大道」とは大道得志、「金陵」とは江蘇省の南京市、「元章」とは元章周郁のことである。『日工集』⁶⁾を見ると、

○九日、如龍・如進二侍者来、出業子建書、々中説、寿椿庭回自唐、志大道在天界寺、津要関杭之中竺、

端介然臥病明州翠峯^一、

(応安六年正月九日条。傍線は私に施した。以下同じ)

○(上略)大明開国、僅十一年、天下雜道諸寺觀、太半遭^レ火未^レ復、兩浙五山、徑山・靈隱火後淒涼、徑山尤甚、居僧不^レ滿^二百人^一、得志侍者患^レ是逃販、路遭^二官禁^一、束縛追捕歸^二王城^一、至^二杭州^一而死、江西廬山南北仏舎殘破、百無^二一存者^一、(下略)

(永和三年九月廿三日条)

とあり、大道が洪武六年(応安六年、一三七三)頃、天界寺(建康府、南京)に在ったこと(その時、絶海は中天竺寺)、洪武十年(永和三年、一三七七)頃、火事で荒廢した徑山(杭州臨安府)から逃れ帰ろうとして、政府の禁令により束縛追捕され、王城(南京)に送られる途中、杭州にて客死したことがわかる。⁽⁷⁾ また、同日記によると、元章は応安四年(洪武四年、一三七二)五月一日に京都、永和元年(洪武八年、一三七五)七月廿五日に近江金剛寺にそれぞれ所在を確認することができるので、絶海の留学期間を考え合わせると、その間か、応安四年五月一日以前に、入明し、帰国したことになるだろう。玉村竹二氏は、「入元の後、主として絶海中津と行動を共にし(或は入元も同時であつたかとも想像する)、云々」(『五山禅僧伝記集成』、講談社、昭五八)と記しておられる。

その他、三十六番詩、三十七番詩、四十番詩、四十一番詩、四十二番詩、四十六番詩も、詩題から中国での作と判断できる。「天台」とは浙江省の東部、靈江の支流である始豊溪の上流域を言い、「四明」とは浙江省寧波市の南西を言う。「龍河」とは大龍翔集慶禪寺(天界寺)のことである。なお、「四明」の近くの寧波(浙江省の東部沿海)は、遣明勘合船の来航地で、四十二番詩周辺の詩が、絶海が中国から帰国する間に作られたもの

であることが推測される。「岳王の墳」は西湖の畔にあり、中国歴史上の民族的英雄、南宋の岳飛が祭られている。「趙魯山」「雲上人」「迪侍者」「猷仲徽」については未詳。

つぎに詩句から判断できるものを見てみる。二十六番詩は「於越の晴峰、翠は螺を作し、錢湖の新水、碧は波を生ず」、三十番詩は「南京の書札、中峰に到る」「楚水吳山、幾万重」、三十一番詩は「百万、已に収む、燕北の馬」「長江、水冷たくして、魚龍伏し」、三十九番詩は「千年の城壘、孫劉の後、万里の塩麻、吳蜀通ず」、四十四番詩は「吳地の諸山、遊錫遍く、鄞江に一たび病みて、寄音遙かなり」、四十六番詩は「錢唐十里、香風起くる」という句があるので、明らかに中国での作である。「錢湖」とは錢塘湖、「中峰」とは中天竺寺、「孫劉」とは吳の孫權と蜀の劉備、「鄞江」とは寧波市鄞県の東北を流れる江名である。ここで、江蘇省の北固山中（鎮江市の北東にあり、南・中・北の三峰がある）に位置した甘露寺の高楼を詠んだ三十九番詩を見てみる。神田喜一郎氏をして「わが国に漢詩あつて以来、古今未曾有の名什」とまで言わしめた詩である。

三九 多景楼

北固高楼擁梵宮。楼前風物古今同。千年城壘孫劉後。万里塩麻吳蜀通。京口雲開春樹緑。海門潮落夕陽空。英雄一去江山在。白髮殘僧立晚風。

三十二番詩の「床を対して話し尽くす、十年の事、迢遞たる郷関、夢、迷はんと欲す」や、三十三番詩の「遠遊は好しと雖も、人をして老いしむ、季子嫌ふことを休めよ、二頃の田を」という句には、在明生活も十年近くに渡る絶海の、故郷日本やそこで修行する後輩僧たちを思いやる心情が読みとれよう。蔭木英雄氏は三十三番詩

に関して、「書を封じて曾て附す、安期の鶴、歳を隔てていまだ還らず、徐福の船」という句に注目して、「蓬萊山（日本）に行つたまま帰らぬ安期生や徐福を詠うのは望郷の念からであろう」（六〇頁）と指摘されている。

「二頃の田」という語は、『史記』蘇秦伝第九に基づき、ある程度安定した生活を送ることができる田の面積をいう。四十三番詩は「同郷、豈に復た斯の人有らんや」という句から、異国で同郷の人（簡上人、伝未詳）の死を悼んだ作であることが知られる。なお、各詩の詩題に見られる「定静庵」「祚天元」「寧成甫」「端侍者」「無溢宗師」については未詳である。⁽⁹⁾

二十五番詩と二十七番詩の詠作状況は、その詩題や詩句からでは判然としないが、前後の作品が中国で詠まれたものなので、中国での作と考えてよいだろう。二十五番詩の詩題の「北山」は、六番詩と同様、北山景德靈隱禅寺のことであろうか。二十七番詩の「歌郎中」についてはよくわからない。また、三十四番詩に関しても、前後の作品との関係から中国での作と考えられるが、異説もあり、十五首連作で、『蕉堅藁』の作風や絶海の心境（禅境）を考える上で非常に重要になってくると思われるので、つぎに詳しく検討してみたい。

二 「山居十五首、禅月の韻に次す」（三四）

三十四番詩はその詩題にも記されているように、禅月大師（徳隠貫休、八三二〜九一二）の「山居詩并序」詩（『禅月集』⁽¹⁰⁾ 卷第二十三所収。二十四首連作）のなかから十五首を選んで、各詩に次韻したものである。その様相を表に纏めると、以下のようなになる。

絶海山居詩	第一首目 第二首目 第三首目 第四首目 第五首目 第六首目 第七首目 第八首目 第九首目 第十首目 第十一首目 第十二首目 第十三首目	禪月山居詩	第一首目 第二首目 第五首目 第八首目 第十首目 第十二首目 第十四首目 第十五首目 第十六首目 第十七首目 第十九首目 第二十首目 第二十二首目	韻 字	難・山・間・潺・攀（上平十五刪） 頭・遊・樓・流（下平十一尤） 兼・簾・嫌・厭・織（下平十四塩） 夷・垂・枝・池・之（上平四支） 通・風・中・東（上平一東） 馨・苓・餅・寧（下平九青） 紗・霞・槎・花・麻（下平六麻） 扉・帰・暉・稀（上平五微） 冥・青・経・靈・醒（下平九青） 休・鷗・頭・柔（下平十一尤） 畦・西・斉・啼・溪（上平八齊） 諧・塔・崖・乖（上平九佳） 滔・濤・高・袍（下平四豪）
-------	---	-------	---	--------	---

「次韻」とは「和韻」の一種で、他人の詩と同じ韻字をその順序通りに用いて詩を作ることである。なお、絶海の禅月山居詩に次韻した理由、禅月詩に次韻する際、二十四首から十五首を選んだ基準等の問題については、別の機会に譲りたい（本編第四章、第五章参照）。

さて、三十四番詩の詠作時期については、中国留学期説（鈴木虎雄氏、川口久雄氏・寺田透氏・佐々木朋子^{〔1〕}氏等）のほかに、蔭木氏が撰津隠棲期説を提唱されている。中国留学期説の根拠は、とくに提出されていない。稿者も前者の立場を採っているのだが、まず蔭木氏の根拠を検証した上で、七

第十四首目	第二十三首目	前・年・眠・天（下平一先）
第十五首目	第二十四首目	同・宮・空・窮（上平一東）

言律詩の配列順序に注目する以外に、二、三の根拠を提出してみたい。

絶海は至徳元年（一三八四）六月、

足利義満（一三五八〜一四〇八）に直言してその意に忤い、摂津の銭原（大阪府茨木市）や有馬の羚羊谷（牛隠庵）に隠棲したのだが（『仏智年譜』）、蔭木氏がこの時期に三十四番詩を詠作したとする、その主たる根拠は、第二首目にあるようである。以下に本文を引用するが、その際、この詩が次韻した禅月の原詩（本韻詩）も列挙する。

三四 山居十五首、次「禅月韻」（第二首目） 絶海中津

放歌長嘯傲王侯。矮屋誰能暫俯頭。碧海丹山多入夢。湘雲楚水少同遊。濛々空翠沾經案。漠々寒雲滿石樓。幸是芋香人不愛。從教菜葉逐溪流。

山居詩（第二首目） 禅月

難是言休便即休。清吟孤坐碧溪頭。三間茆屋無人到。十里松門独自遊。明月清風宗炳社。夕陽秋声庾公樓。修心未到無心地。万種千般逐水流。

蔭木氏は、首聯の「放歌、長嘯、王侯に傲り、矮屋、誰か能く暫くも頭を俯せん」について、「冒頭の『王侯』が足利義満をさすのなら、『矮屋』は羚羊谷の牛隠庵であろう」（六二頁）と指摘されている。また、尾聯の「幸ひに是れ芋香は人、愛せず、さもあらばあれ、菜葉、溪を逐ひて流るるを」には、懶瓚和尚（明瓚）に関する故

事——唐の肅宗が、衡山（湖南省）の石室に隠居していた懶瓚の徳望を聞き、使者を遣わして呼び寄せようとしたのだが、懶瓚は牛糞で焼いた芋を鼻水を垂らしながら食べるだけで、ついに答謝しなかったという（『碧巖集』第三十四則等）——と、龍山和尚に関する故事——洞山和尚（洞山良价）が行脚して龍山（湖南省）を通りかかった時、谷川に菜っ葉が流れてくるのを見て、上流に道人が住んでいることを察し、山深く分け入って龍山和尚に会い、その教えを受けたという（『五灯会元』卷第三等¹²）——とが踏まえられているが、前者の故事引用に関して、「絶海が足利義満の召喚を拒絶する意図が読みとれる」（二六七頁）と指摘されている。ただし、厳密に言うと、義満が絶海を再三召喚したのは、彼が羚羊谷に隠棲している時ではなく、阿波の宝冠寺に移住して後のことである（『仏智年譜』『日工集』）。瑞溪周鳳の『温泉行記』（『五山文学新集』第五卷所収）によると、羚羊谷（掛角菴・鎌倉谷・仏ヶ谷）には、絶海の隠棲した「牛隠（庵）」も含めて、六境——古劍妙快によって「千仞壁」「一葉溪」「鑄仏岩」「龍山」「牛隠」「振鷲瀑」と命名された——があつたらしい。古劍の『了幻集』（『五山文学全集』第三卷所収）には、「仏谷六境」という偈頌がある。蔭木氏はそのなかで「一葉溪」に注目して、第八句目はこれに基づくと考え、三十四番詩が羚羊谷での作であるという推測の有力な傍証とされている。

山居詩とは「山のなかに隠棲すること」を詠んだ詩を言うが、初期の禅僧の作品には比較的よく見られる詩材である。道元（一一〇〇〜五三）や夢窓疎石（一二七五〜一三五二）の例を見ると、¹³作者（禅僧）は実際に山居して、詩（偈頌）を詠じたようである。山居詩の内容の傾向としては、山中における自身の心境（禅境）を表出した、いわゆる偈頌の類が多いが、また一方で、俗世間の煩わしさと山中の閑けさを対照的に描き、山居生活

を賛美したのも見受けられる。蔭木氏は、絶海の山居十五首の背景に、義満との軋轢を読み解こうとされているが、第二首目以外を見ても確固たる根拠はなく、今のところその推定には同意できないでいる。

さて、繰り返し述べてきたように、稿者が三十四番詩を中国での作と見なすのは、『蕉堅藁』の七言律詩の配列順序によるところが大きい。それ以外では、第十一首目の「此の葛洪丹井の西を愛す」という句に特に注目している。蔭木氏は、葛洪が丹砂の産地である交趾（ベトナム北部。トンキン、ハノイ地方）に向かう途中、その西方にある羅浮山（広東省東江の北岸、増城・博羅・河源三県の間にある）に登って鍊丹と著述とに専念したことに注目し、「葛洪丹井の西」を羚羊谷の仙境と解しておられる。ただし、葛洪が掘ったという井戸は中国各地に存在したらしく、たとえば顧況の「山中」詩（『三体詩』¹⁴）所収。あるいは「越州雲門六首」と題する。『全唐詩』では朱放の作とし、「山中聴子規」と題する）という詩には「野人、自ら山中の宿を愛す。況んや是れ、葛洪が丹井の西なるを」という句があり、絶海が主に活動した吳越地方（江蘇省と浙江省）、なかでも越州（浙江省紹興市）に存したことが知られる。この詩は蔭木氏も指摘されているが、『扶桑五山記』一・「大宋国諸寺位次」によると、じつは、絶海が禅道修行に精進した中天竺寺にも「葛洪丹井」という名勝があつたようである。

『釈氏稽古略』¹⁵卷三の「三生石」の項には、「果於杭州西山下天竺寺前葛洪井畔聞。云々」という記述があり、許渾には「天竺寺題葛洪井」（『全唐詩』卷五百三十所収）という詩も見受けられる。こうして見ると、絶海は実際、葛洪の井戸を目の前にして、この第十一首目を詠出したのではないだろうか。「此の」という語にも注目される。そして道元が越前永平寺、夢窓が甲斐恵林寺でそれぞれ山居詩を詠んだことを考え合わせると、¹⁶絶海が

中天竺寺で山居詩を詠んだ可能性はかなり高いように思われる。

また、第五首目の「憶ひ得たり、蓬萊碧海の東」という句にも注目している。「蓬萊」は『列子』湯問第五に、
革曰、渤海之東、不知幾億万里、有大壑焉。(中略) 其中有五山焉。一曰、岱輿。二曰、員嶠。三曰、方壺。四曰、瀛洲。五曰、蓬萊。其山、高下周旋三万里。其頂、平処九千里。山之中間、相去七万里、以爲
二鄰居焉。其上台觀皆金玉、其上禽獸皆純縞。珠玕之樹皆叢生、華實皆有滋味、食之、皆不老不死。
所居之人、皆仙聖之種、一日一夕、飛相往來者、不可數焉。

とあるように、渤海(山東半島と遼東半島とに囲まれている)の東にあつて、不老不死の仙人が住むとされた靈山である。『中華若木詩抄』⁽¹⁸⁾に採られている絶海の「98—1 制に応じて三山を賦す」詩(『蕉堅藁』では八十番詩)には、

徐福ガ事ハ、書ニヨリテ変リアリ。義楚六帖ニ載セタリ。義楚六帖、大唐ノ書也。其ノ載ヤウハ、「日本王城ヨリ東北千余里ニ山アリ。富士ト名ク。又ハ其山ヲ即チ蓬萊トモ云ゾ。其山高シ。三面ハ海也。山ノ頂ヨリ烟ガ日中ニ立ツゾ。上ニ諸宝アリ、昼ハ下ヘ下リ、夜ハ上ヘ上ル。常ニ音楽ノ声ヲ聞ゾ。徐福ガ此山ニ止ルゾ。ソレニヨリテ蓬萊ト云。徐福ガ子孫、今ニ秦氏ト云」ゾ。(下略)

とか、

一二之句、熊野ハ、三山也。蓬萊ヲ三山トモ三島トモ云ゾ。蓬萊、方丈、瀛州、コノ三ツ也。三山ヲ仙山ニ比シテ云ゾ。(下略)

という注記が見られ、始皇帝の命令で東海に不老長寿の仙薬を求めた徐福が、わが国に渡来していたという話が、中国においても流布していたようである。確かに中国から見てわが国は渤海の東に位置しており、「蓬萊」と同一視する発想が生まれても、別段不思議ではないだろう。こうして見ると、絶海は中国に滞在していたからこそ、「蓬萊碧海の東」という表現を用いたのではないだろうか。そして「憶ひ得たり」とあるのも、「蓬萊」が想像上の国ではなく、母国日本を指していたからかも知れない。なお、桂庵玄樹（一四二七～一五〇八）の『島隠集』⁽¹⁹⁾序には、「日本国在東海之東」という記述がある。

その他、同じく第五首目の「茉莉花前、細々たる風」という句について。「茉莉」はモクセイ科の常緑低木で、いわゆるジャスミンの一種である。原産地はアラビアからインドにかけての地域であるが、早くから中国に移植され、現在では世界の栽培面積の三分の二を占めている。花を早朝に摘んで乾かし、お茶に混ぜて飲まれている。主な産地は、福建、浙江、江蘇、広東の諸省である。⁽²⁰⁾したがって絶海が、白い茉莉花が、芳しい香りを漂わせながら風にそよぐ風景を目の当たりにしたのは、やはり中国に遊学していた時であろう。

三 四十七番詩～五十二番詩

- ・「笑山侍司の土州に還りて、親を省するに贈る」(四七)
- ・「古心蔵主の天草の旧隠に帰るを送る」(四八)
- ・「済上人の天草に之くを送る」(四九)

・「桂上人の旧隠に帰りて、諸昆を起居するを送る」(五〇)

・「人の相陽に之くを送る」(五一)

・「赤間関」(五二)

四十六番詩で一連の中国での作が終わり、四十七番詩からは日本での作である。五十二番詩の本文を挙げる。

五二 赤間関

風物眼前朝暮愁。寒潮頻拍赤城頭。恠岩奇石雲中寺。新月斜陽海上舟。十万義軍空寂々。三千劍客去悠々。英雄骨朽干戈地。相憶倚欄看白鷗。

「赤間関」は山口県下関市の古称で、源平の古戦場としても有名である。ちなみに中巖円月の『東海一漚集』一には「檀浦」という詩がある(この詩は、横川景三撰『百人一首』にも採られている)。詩中の「新月斜陽、海上の舟」「相憶ひて欄に倚りて白鷗を見る」という句は、この詩が、九州から京都へ向かう船中での作であることを示している。その航海の様子は、『蕉堅藁』所収の「繁全牛の和山上人の関西に帰るを送る詩の序」(四二)に、

明年上人從叔父_二赴_レ京。余亦同_レ舟而行。吟_二夜雨於篷底_一。賦_二明月於柁樓_一。泝_二平雲濤之渺瀰_一。凌_二蛟鱓之飛涎_一。以壯_二一時之懷_一。快哉。

と記されている。と、いうことは、五十二番詩以前の詩は、絶海が九州で静養している時に詠まれたと考えることができる。

五十番詩は「冷泉津口の古蘭若」という句があるので、九州での作である。「冷泉津」は福岡県博多市の古称、「(阿)蘭若」は寺院、具体的に万松山承天寺を指摘する意見もある(蔭木氏)。前節でも触れたが、筑前や豊後は、中国渡航の出発地として重要であり、鎌倉中期以来、聖福寺(筑前)、承天寺(筑前)、万寿寺(豊後)、顕孝寺(筑前)等が林立していたので、禅僧の往来も非常に盛んであった。このような事情を背景にして、四十番詩と五十番詩の送別(贈別)詩は詠じられたのであろう。なお、四十七番詩には「諸昆、若し南遊の事^もを問はば」という表現が見られ、絶海が帰国して間もない頃に作られたものであることが推測される。「南遊」とは、一般的に中国に遊学することを言う。

また、五十番詩は「西州は好しと雖も、戦塵黄なり」という句があるので、九州での作である。当時の九州の情勢は、九州探題として任地に赴いた今川了俊と、菊池氏・少弐氏・島津氏等との対立が激しく、四十九番詩の「覇国の提封、旧日に非ず」や、五十番詩の「幾般の人事、兵前に改む」という表現も、九州における南北朝の争乱を目的にしての詠出であろう。

「古心蔵主」「桂上人」については未詳。「笑山侍司」とは笑山周念のことであろうか。「済上人」に関しては、鉄舟徳濟(？く一三六六)を指摘する意見(蔭木氏・入矢義高氏・梶谷宗忍氏等²²)もあるが、鉄舟の没年が貞治五年なので、この時期に絶海が彼に詩を送ることは不可能である。やはり法諱の下一文字から禅僧を特定するのは、聊か無理があるだろう。

四 五十三番詩

・「まさに近県に往かんとして、観中外史に留別す 時に臨川復位の訴へに因りて、宇治より江州に如く」(五三二)

『蕉堅藁』には「観中を懐ふも至らず 時に臨川復位の訴へに因りて、宇治に客居す」(八六)、『絶海和尚語録』⁽²³⁾卷下には「まさに近県に往かんとして、韻を次して元章和尚に別れ奉る」(二八三)という詩(偈頌)もある。夢窓派は南禅寺事件(一三六七〜六九)を境にして、龍湫周沢を中心として細川頼之(一三二九〜九二)と結んだ一派と、春屋妙葩を中心として斯波義将(一三五〇〜一四一〇)と結んだ一派とに分裂した。ちなみに絶海は春屋一派に属していた(『日工集』)。そして永和三年(一三七七)、頼之が臨川寺を「十刹」から「五山」に昇位させたので、春屋一派は、同寺が夢窓派の「度弟院」^(つちえん)(特定の門派のみが住持を独占する制度)から「十方刹」(住持を迎える際、門派や法系等を問うことなく、天下の名僧を自由に招聘する制度)になる恐れがあるとして、これに激しく反対し、「十刹」に復位させるように幕府に提訴したのである。⁽²⁴⁾

さて、夢窓派(春屋一派)が臨川寺の復位を幕府に提訴したのは永和四年(一三七八)五月十四日(『日工集』)、絶海が雲居庵(天龍寺の開山塔)に寄宿したのは翌康暦元年(一三七九)十月のことなので(『仏智年譜』)、その間、彼は宇治に客居し、近江に隠遁したことになる。詩中に「冬日暖かなり」「自ら春陰を恋ふ」という表現が見られるので、絶海は永和四年の冬頃、宇治から近江に行かんとして、その際に五十三番詩を詠んだのではないだろうか。『日工集』永和五年正月十四日条には、

十四日、(中略)三会回書同来日、中津蔵主今在江州柚云処、中諦書記未詳在処、(下略)とある。なお、「観中外史」とは観中中諦のことである。

五 五十四番と五十九番詩

- ・「海棠を賦して西山の故人に寄す 溪の一字を得たり」(五四)
- ・「勝侍者の四州に之くを送る」(五五)
- ・「無文章侍者に贈る」(五六)
- ・「薰自南の新居に詩有りて寄せらる。聊か其の韻を用ひて之に答ふ」(五七)
- ・「希南上人の信陽に帰りて、親を省するを送る」(五八)
- ・「列侍者を送る」(五九)

五十四番詩について。惟忠通恕の『雲壑猿吟』にも「賦海棠寄故人 得柯字」詩があり、絶海や惟忠が、京都の某所で行われた詩会において、抽籤によつて韻脚の文字を与えられ、即席に海棠の詩を詠んだことが知られる。「西山」とは洛西の嵯峨の辺りを言うが、具体的には天龍寺、あるいは西山西禪寺のことであろうか。五十五番詩の序文にはつぎのようにある。

古幢勝上人嘗奉左相府之旨。来従レ余而遊。精修通敏篤学不レ倦。比有會祖母就養四州一年登期頤。痛念上人心不レ少釈。故以嚴君元戎公之召。往而寧焉。夫仏氏之道尚レ孝固具矣。今之行也豈曰世礼乎。

於是作唐詩一章以壯其行色云。

詩題に「勝侍者」とあり、序文に「古幢勝上人」とあるのは古幢周勝（一三七〇～一四三三）、「左相府」とは足利義満、「元戎公」とは細川頼之のことである。古幢は京都の清水谷家の出身で、管領細川頼之の猶子である。以前義満の命令で絶海の許で修行したことがあったのだが、この度、四国で養生している百歳近くの曾祖母が、甚だ古幢に会いたがっているというので、父頼之の命令もあつて、里帰りして安心させることになった。したがつて、絶海は送行の詩（偈）、すなわちこの五十五番詩を作成したのである。ところで、義堂周信（一三二一～一三八八）にも「勝侍者を送る」詩（『空華集』⁽²⁵⁾ 卷第十所収）があり、その詩後の自注に、

山中周勝侍者。言別將往四州。蓋以赴總管府公桂嚴大居士之招也。一時英納輩咸榮其行為歌詩贈焉。上人本貫京師。天資沈靜寡言。慈聖老人字曰古幢。以去歲秋侍予客。應對進止可觀焉。今以其請切。勉為禪詩贈別祝其速歸云。至徳丙寅春住御前南禅義堂。

と記されている。文末に「至徳丙寅春」とあるので、絶海が五十五番詩を作ったのも同時期で、等持寺の住持を勤めていた頃ではないか、と思われる。「総管府公桂嚴大居士」とは細川頼之、「慈聖老人」とは龍湫周沢、「至徳丙寅」は至徳三年（一三八六）にあたる。

また、五十九番詩の序文には、

俊列書狀將還甲州。求語以為途中之警。蓋以親老兄亡。其行不可式遏也。老漢懼夫宴安廢業往而忘歸。於是勉成一語。惜其去而趣其來云。

とある。詩題に「列侍者」、序文に「俊列書状」とあるのは、絶海の法嗣星岩俊列（一三七八〜一四五二）のことである。書状侍者である星岩が、親が年老いたか、兄が亡くなったかの理由で、甲州に帰るといふ。したがって、絶海は送行の詩（偈）、すなわちこの五十九番詩を作成した。星岩が絶海に仕えていたのは、星岩の生年や、詩中に「白髪」「老境」という語が用いられていることなどを考慮すると、絶海が晩年、京都で大寺院の住持を勤めていた頃であろう。おそらくは相国寺に住していた頃ではないだろうか。

五十六番詩、五十七番詩、五十八番詩の詠作状況は、その詩題や詩句からでは判然としないが、五十五番詩と五十九番詩が京都で詠まれたもので、その間に位置する三首もまた、京都での作と考えてよいだろう。「無文章侍者」とは無文梵章、「薰自南」とは自南聖薰、「希南上人」については未詳である。

六 六十番詩〜六十八番詩

- ・「古河の襟言 五首」(六〇)
- ・「諒信元の至るを喜ぶ」(六一)
- ・「韻を次して肇太初の寄せらるるに答ふ 二一首 太初、時に小山に在り」(六一)
- ・「韻を壺隠亭に次す」(六三)
- ・「韻を栢樹心に次す」(六四)
- ・「松上人の総州に帰るを送る」(六五)

・「端介然の京に上るを送る」(六六)

・「復無已の京に帰るを送る」(六七)

・「宥寛仲に寄す」(六八)

最初に述べたように、稿者は前編第三章で、六十番詩く六十八番詩の詠作状況について追究した。その結果、絶海が永徳二年(一三八二)十一月に甲斐の恵林寺を退いて、翌三年五月に同国の勝善寺に入るまでの間に関東に再遊し、六十番詩く六十三番詩は古河(茨城県古河市)周辺で、六十四番詩く六十八番詩は鎌倉周辺でそれぞれ詠んだということを指摘した。「端介然」とは介然中端、「諒信元」「肇太初」「栢樹心」「松上人」「復無已」「宥寛仲」については、『空華集』に名前が見られる禅僧もいるが、よくわからない。

おわりに

以上のように、今回は『蕉堅藁』の七言律詩(二三く六八)を見てきた。前節同様、二十五番詩、二十七番詩、五十六番詩、五十七番詩、五十八番詩等のように、その詠作状況が判然としないものも含まれていたが、絶海自身が作品を厳選、推敲したこと、前後の作品との関係などを勘案して、二十三番詩く四十六番詩は中国での作、四十七番詩く五十二番詩は九州での作、五十三番詩は近江(宇治)での作、五十四番詩く五十九番詩は京都での作、六十番詩く六十八番詩は関東での作と結論付けるにいたった。なかでも「山居十五首」(三四)を中国、それも中天竺寺での作と限定することができたことは、今後絶海研究を進めていく上でも、かなり有意義であるよ

うに思われる。なお、五言律詩が詠作年代順に整理されていたのに対して、七言律詩は詠作場所によっては整理されているものの、京都での作（五四～五九）と関東での作（六〇～六八）との間に、詠作時期が前後する作品があることが注意される。次節でも引き続き、『蕉堅藁』の作品配列を見ていくつもりである。絶海の作品配列に対する意識に関しても、追々明らかにしていきたい。

注

- (1) 引用は建仁寺兩足院蔵本（寛文九年刊）による。
- (2) 両書の引用は『続群書類従』第九輯下「伝部」による。
- (3) 兩足院蔵『全室和尚語録』巻中によると、季潭宗泐が中天竺寺に入院したのは洪武元年（応安元年、一三六八）四月十五日のことである。そして洪武四年（応安四年、一三七二）正月二十五日に径山、翌五年には、太祖の勅命によって天界寺に住した。

- (4) 駒沢大学図書館編『新纂禅籍目録』（日本仏書刊行会、昭三七）によると、『全室外集』の諸本には、室町時代覆明刊本（五山版）も存在する。川瀬一馬氏『五山版の研究』上巻（日本古書籍商協会、昭四五）には、

「全室外集」（九卷二冊）は明刊本を覆刻しているが、その版式から推して南北朝極末期と思われる。

さすれば、本書などは新渡の明刊本を直ちに覆刊したということになる。 (下略) (一九五頁)

という記述がある。したがって二十三番詩が、『全室外集』がわが国に将来されて後に詠まれた可能性も考
え得る。が、同詩が『蕉堅藁』の七言律詩の冒頭にあり、それ以後、中国での作が続くことから、中国で詠
まれたと考えてよいだろう。

(5) 玉村竹二氏『五山文学』(日本歴史新書、至文堂、昭三〇)、九二―一〇六頁参照。

(6) 引用は辻善之助氏『空華日用工夫略集』(太平洋社、昭一四)による。返り点は蔭木英雄氏『訓注 空華日用工夫
略集』(思文閣出版、昭五七)を参考にして、私に施した。

(7) 『日工集』永和三年九月廿二日条に、

廿二日、道可藏主至、近回_レ自_二江南_一、説云、近年大明禁_二日本僧行脚_一、皆集在_二天界寺_一、不_レ許_二妄出
入及看_二俗書等_一、

とあり、当時、中国では日本僧の行脚が禁止され、天界寺に集められていたことがわかる。

(8) 神田喜一郎氏「禹域に於ける絶海」(山地土佐太郎氏編『絶海国師と牛隠庵』所収、雅友社、昭三〇)。

(9) 四十六番詩の詩題の「戒壇」を河北省宛平県にある山名と解する説(蔭木氏)もある。

(10) 引用は四部叢刊所収本による。

(11) 豹軒老人「絶海和尚の文藻(二二)」(『禅文化』第二卷第五号、昭三一・七)、川口久雄氏「禅林山居詩の
展開について——道元山居十五首と絶海山居十五首——」(『国学院雑誌』七二―一一、昭四六・一一)、寺

田透氏『義堂周信・絶海中津』（日本詩人選24、筑摩書房、昭五二）、ささきともこ氏「五山文学」（『研究資料日本古典文学』第十一卷「漢詩・漢文・評論」、明治書院、昭五九）。

(12) 蔭木氏は、雪峰義存が徳山宣鑑に参じようとした時、谷川に菜っ葉が流れてくるのを見て、上流にある徳山の道場は物を粗末にするので、つまらないと思ひ込み、一旦帰りかけたのだが、一人の僧がその菜っ葉を追いかけてきたので、思い返して徳山に師事したという故事を指摘されているが、稿者の管見には入っていない。なお、『湯山聯句鈔』には「²⁷⁰ 危橋、丁字小さし、剩水、菜花流る」という句に対して、「菜葉ノ從レ流ト云ハ、溪河ナンドニ、山ノ奥ニ寺アリトハ知ラズシテ、水ニ菜ノ葉ガ浮イテ流時、サテハ奥ニ有レ寺ト知ルゾ。菜花モ、菜葉ノ心ゾ」という注記が付されている。

(13) 道元の「山居十五首」（『永平広録』卷第十所収）は、第十首目に「越州にて九度、重陽を見る」という句があるので、永平寺の住持を勤めている時に詠まれたものである。また、『夢牕正覚心宗普濟国師年譜』（春屋妙葩編）の元弘二年条には、

春。又往恵林。和古航韻作山居偈十首。其一曰。青山幾度變黄山。浮世紛紜総不干。眼裏有塵三界窄。

心頭無事一牀寛。餘見本録。（下略）（『続群書類従』第九輯下）

とあり、夢窓の「山居韻十首 贈古航和尚」（『夢窓国師語録』卷下所収）が、元弘二年（一二三二）の春、甲斐の恵林寺に再住した時に詠まれたものであることがわかる。

(14) 引用は村上哲見氏『三体詩』一（中国古典選29、朝日新聞社、昭五三）による。

- (15) 引用は『卍統編輯 史伝部』三(新文豊出版公司印行)による。
- (16) 注(13)参照。
- (17) 引用は小林信明氏校注『列子』(新釈漢文大系22、明治書院、昭四二)による。
- (18) 引用は大塚光信氏・尾崎雄二郎氏・朝倉尚氏校注『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』(新日本古典文学大系53、岩波書店、平七)による。
- (19) 引用は『続群書類従』第十二輯下「文筆部」による。
- (20) 『日本大百科全書』11(小学館、昭六一)参照。
- (21) 川添昭二氏『中世九州の政治と文化』(文献出版、昭五六)、一五六〜七〇頁参照。
- (22) 入矢義高氏校注『五山文学集』(新日本古典文学大系48、岩波書店、平二)、梶谷宗忍氏訳注『蕉堅藁 年譜』(相国寺、昭五〇)。
- (23) 作品番号は梶谷氏訳注『絶海語録』二(思文閣出版、昭五一)による。
- (24) 玉村氏『夢窓国師』(サーラ叢書、平楽寺書店、昭三三)、三〇四〜二〇頁参照。
- (25) 引用は『五山文学全集』第二巻による。

※ 中国の地名に関しては、和泉新氏編『現代中国地名辞典』(学習研究社、昭五六)や『中華人民共和国

政区劃簡冊 二〇〇〇一』（中華人民共和國民政部編、中国地圖出版社）を参考にした。

【付記】

資料の閲覧に際してご厚情を賜った建仁寺兩足院住職の伊藤東文老師に厚くお礼申し上げます。

第三節 五言絶句、七言絶句の場合

はじめに

前々節および前節では、絶海中津（一三三六～一四〇五）の『蕉堅藁』の、主に律詩の作品配列について言及した。本節では絶句を見ていくが、『蕉堅藁』も含めて、わが国の禅僧が作成した絶句には題画詩が多く、詠作状況を判断しかねる場合もまた少なくない。今回は五言絶句（六九～七九）と七言絶句（八〇～一二八）について、可能な限りその詠作状況を明らかにし、配列順序について考えてみたいと思う。そして、今回で『蕉堅藁』の詩作品をすべて考察したことになるので、今までの成果を踏まえながらそれらを概観し、総括的な意見を述べてみたい。なお、『五山文学全集』は『全集』、『五山文学新集』は『新集』と略す。

一 八十番詩～八十五番詩

論の進行上、先に七言絶句から見ていきたい。便宜的に全体を六区分し、考察を加えていく。八十～八十五番詩の詩題を掲げる。

- ・「制に応じて三山を賦す」（八〇）
- ・「御製、和を賜ふ（大明太祖高皇帝）」（八〇A）

・「和す(道藝)」(八〇B)

・「和す(会稽の一如)」(八〇C)

・「趙文敏の画」(八一)

・「行人至る」(八二)

・「永青山の廃寺」(八三)

・「杜牧集を読む」(八四)

・「和靖の旧宅」(八五)

まず八十番詩と、それに和韻した明の太祖高皇帝(洪武帝・朱元璋。一三二八〜九八)の詩(八十番詩A)とを挙げる。

八〇 応_レ制賦_三三山_一

絶海中津

熊野峰前徐福祠。満山薬草雨餘肥。只今海上波濤穩。万里好風須_三早帰_一。

八〇―A 御製賜_レ和

大明太祖高皇帝

熊野峯高血食祠。松根琥珀也_レ応_レ肥。当年徐福求_三僊薬_一。直到_三如今_一更不_レ帰。

『仏智年譜』¹⁾ 永和二年条に、

永和二年丙辰。師四十一歳。大明洪武九年春正月。太祖高皇帝召_三見英武楼_一。問以_三法要_一。奏対称_レ旨。又召至_三板房_一。指_三日本図_一。顧問_三海邦遺跡熊野古祠_一。勅賦_レ詩。詩曰。熊野峯前云云。御製賜_レ和曰。熊野_一。

又賜以僧伽梨・鉢多羅・茶褐襪・櫛栗杖・并宝鈔若干。詔許還國云云。(下略)

という記事があることから、絶海が永和二年(洪武九年、一三七六)、金陵(南京)の英武楼において高皇帝に謁見し、徐福の熊野渡来に関する詩を唱和したことがわかる。絶海のこの出来事は広く流布していたらしく、彼が「蒲室疏法」を将来して、わが国の四六文の作法を定着させたことと並んで、度々他の禅僧の詩文集——例えば『補庵京華前集』(横川景三著)、『翰林葫蘆集』(景徐周麟著)等——に指摘されている。両詩は『中華若木詩抄』にも採られており、絶海詩には、

此詩ハ、絶海和尚渡唐アリテ、大明太祖高皇帝ノ御前ニテノ詩也。此時ハ洪武九年ノ春也。高皇帝英武楼へ召レテ、日本国ノ使僧津絶海ニ御対面アリテ、日本ノ風土ヲ御尋アリ。其次^{ついで}デニ、「信^{まこと}ヤ、日本ニ三山アリ、ソコニ徐福ガ祠アリト云ハ。若^{もしまこと}実ナラバ、ソレニ就テ詩ヲ献ゼヨ」トアル処デ、賦ニ此詩也。天子勅感アリテ御制、尊和ヲ下サル、也。名誉ノコト也。総ジテ、日本ニ名僧ヲ御賞翫アルハ、コノ為也。(下略)

という抄文が付されている。絶海と高皇帝の詩の応酬は、絶海自身のみならず、本朝禅僧の名誉事として受け止められていたようである。なお絶海詩は、横川編『百人一首』の巻頭にも配されている。

中国僧の天倫道彝と一菴一如の和韻詩(八十番詩B・C)については、その序文につきのように説明されている。

鹿苑絶海和尚曩遊^ニ中華^一。卓^ニ錫于龍河^一。時当^ニ大明洪武九年之春^一也。太祖高皇帝召見^ニ英武楼^一。顧問^ニ海邦遺跡熊野古祠^一。勅令^レ賦^レ詩。欣^ニ蒙賜^レ和。未^レ幾東還。宝藏珍護積有^レ年矣。□□壬午秋余使^ニ日本国^一

見万年山中、沐以旧遊、為懷數相詢慰。一日捧示御製詩軸、幸獲欽覽。既而徵次嚴韻、執筆未敢。辭固弗容。謹拜頓首書其末云。

「壬午」は応永九年（一四〇二）。この年の秋、明使天倫は一菴と来日し、万年山相国寺で絶海と再会した。以来二人は、屢々旧交を温め合ったのだが、ある日、天倫は高皇帝自作の詩軸を拜見する機会を得、一菴とともに同詩に次韻したという。ちなみに天倫らが入浴したのは応永九年九月五日、明の建文帝の詔書（二月六日付、『善隣国宝記』卷中所収）を足利義満（一三五八〜一四〇八）に届けるのが目的であった。翌十年二月十九日、天倫らは京都を出発して帰国の途についたのだが、その際、義満の命を受けて、天龍寺の堅中圭密（第三十六世）を使者とする遣明使一行が、絶海が作成した外交文書（『善隣国宝記』卷中所収）を携えて、彼らと同船で入明している（『吉田家日記』『翰林葫蘆集』等）。本章の最初でも触れたが、その一行のなかには、絶海の弟子である龍溪等聞も含まれており、彼は『蕉堅藁』と『絶海和尚語録』の序・跋を中国僧に請い受けに行くところであった。

つぎに八十三番詩と八十五番詩について。「永青山の廃寺」については、入矢義高氏や梶谷宗忍氏が、『西湖志』卷三に見られる永清塙の永清庵を参考に挙げられているが、『扶桑五山記』一・「大宋国諸寺位次」によると、絶海が季潭宗泐（全室和尚、一三一八〜九一）について禅道修行に励んだ中天竺寺の名勝の一つに「永青山」とある。また、「和靖」とは、北宋の詩人である林和靖（林逋、九六七〜一〇二八）のことである。錢唐（浙江省杭州市）の出身で、字は君復、諡は和靖、博学で詩や書にも秀でており、梅と鶴とを愛し、西湖（浙江省の杭

州市街の西にある)の孤山に隠れて、生涯、官職につかなかつたという(『宋史』等)。わが国の五山文学僧が最も敬愛する詩人のうちの一人である。『勝定年譜』⁵⁾には、

三十五歳。拜永安塔¹⁾。訪和靖旧姑蘇台¹⁾。

という記事があり、絶海が洪武三年(応安二年、一三七〇)に永安塔や姑蘇台、西湖の畔にある和靖の旧宅を訪れたことが知られる。

ところで、如心中恕の『碧雲稿』(『統群書類従』第十二輯上所収)には、「永青山麁寺」(五言律詩)や「和靖旧宅」(七言絶句)という詩が認められる。後者は絶海の八十五番詩と同一詩であるが、『翰林五鳳集』巻第六十一を見ると、この詩は絶海作とある。『碧雲稿』には約三百首収められているが、詩題の下に「在唐作」という注記がある場合があり、「永青山麁寺」や「和靖旧宅」は中国での作とされている。如心(夢窓疎石——古劍妙快——如心)は筑紫の出身で、応安元年(洪武元年、一三六八)に絶海や汝霖妙佐とともに入明(『延宝伝灯録』『本朝高僧伝』『日本名僧伝』、『碧雲稿』に「足下政在妙年奮發之秋。又得津蔵主猷侍者諸勝友為侶。宜切磋琢磨。以成事業。(中略)癸丑九月八日 竹菴道書 中恕侍者収」とあるように、その後も絶海らと行動を共にしたと思われる⁶⁾。そのことが、彼の詩文集に八十三番詩と同じ詩題の詩があつたり、八十五番詩が混入した原因になつたのではないだろうか。なお、『碧雲稿』の伝本は、内閣文庫に写本が二本——『碧雲藁』(和書番号一八三五〇、江戸初期書写)・『碧雲詩集』(和書番号一八三七八、書写年不明)——残っている。両書とも未だに詳細な調査は行なっていないが、前者は統群書類従本と同系統のように思われる。後者は明らかに系統が異

なっており、「在唐作」という注記もほとんどない。七言絶句の部には、絶海作の「永青山廃寺」も見受けられる。

八十一、八十二、八十四番詩の詠作状況は、その詩題や詩句からでは判然としないが、前後の作品が中国で詠まれたものなので、中国での作と考えてよいだろう。「趙文敏」とは趙孟頫（一二五四～一三二二）のことである。

二 八十六番詩

・「観中を懐ぶも至らず 時に臨川復位の訴えに因りて、宇治に客居す」（八六）

この詩に関しては、第二節で少しく触れたので、ここでは詳述しない。夢窓派（春屋一派）が臨川寺の復位を幕府に提訴したのが永和四年（一二七八）五月十四日（『日工集』）、絶海が雲居庵（天龍寺の開山塔）に寄宿したのが翌康暦元年十月（『仏智年譜』）、そして詩中に「秋前の白雁」ということばが見られることから、絶海は永和四年の夏頃、宇治に客居し、この八十六番詩を詠んだのではないだろうか。ちなみに同年の冬頃、絶海は宇治から近江に行かんとして、その際に五十三番詩を詠んだと思われる。「観中」とは観中中諦、彼の『青嶂集』には「七四 絶海和尚の韻に和す」と題し、八十六番詩に和韻した詩が収録されている。

三 八十七番詩く九十四番詩

・「後醍醐廟にて梅を見る 廟は龜山の多宝院に在り」(八七)

・「梅花の帳」(八八)

・「蘭を移す」(八九)

・「春夢」(九〇)

・「花下に客を留む」(九一)

・「折枝の芙蓉」(九二)

・「画梅に題す 二首」(九三)

・「寒江独釣の図」(九四)

八十七番詩について。「龜山」とは靈龜山・天龍寺、詩題の下の自注にも記されているように、「多宝院」は後醍醐天皇(一二八八〜一三三九)を祀った塔頭である。このことは、『扶桑五山記』三・「天龍寺 諸塔」においても確認できる。『仏智年譜』康暦元年条に、

康暦元年己未。冬十月法兄普明国師招レ師館于龜山雲居庵。性海見和尚主天龍席。十二月請レ師居第一座。至明年春美解。

とあるように、絶海は近江から帰京した後、康暦元年十月に春屋妙葩(普明国師、一三一〜一八八)に招かれて天龍寺の雲居庵に住し、同年十二月、住持の性海靈見(第十七世)に請われて同寺の前堂首座(第一座)になった。その後、翌二年(一三八〇)の春頃に前堂首座を退き、同年十月八日には甲斐の恵林寺に入寺するのである。

が、ここで先に結論から述べると、八十七番詩を含めて、ここに挙げた詩群は、絶海が天龍寺に滞在している頃、あえて言えば、康暦元年の冬頃から翌二年の春頃にかけて詠まれたと見て差し支えないのではないかと、とわたくしは考えている。と、いうのも、後述するように、続く九十五、九十六番詩は甲斐での作である。また、八十七、九十、九十一番詩の季節は明らかに春であるし、八十八番詩や九十三番詩も、季節が春であるが故に詠じられたのではないだろうか。八十九番詩に関しては、春蘭と秋蘭とが考えられる。九十二番詩は、詩中に「残粧の影落つ、玉屏の中」という句があり、屏風に描かれた芙蓉を詠じたと思われるが、「佩はを鳴らし帰り来たれば、秋淡」という句も見受けられる。九十四番詩の詠詩の季節は断定できない。

島田修二郎、入矢義高氏監修『禅林画賛 中世水墨画を読む』（毎日新聞社、昭六二）には、九十三番詩の第一首目が記された梅花図（作品番号¹³³、筆者不詳、題詩・絶海中津、一三八〇年代、紙本墨画、一二九・〇×三五・四cm、正木美術館）が収録されている。

九三 題二画梅 二首（第一首目）

孤山曾訪中庸子。照_レ水梅花処士家。 馭使不_レ伝南国信。 黄昏和_レ月看_二横斜_一。 黄昏一作_二夢魂_一

星山晋也氏は解説のなかで、

○この題詩は、絶海の詩文集『蕉堅稿』に他の墨梅詩一首とともに載せられている。（中略）その記載内容からみても本図は本来は双幅であったものの一幅（他は現存しないが雪中の上り梅であった可能性があるのであつたと考えることができる）。

（三九九頁）

○いずれにせよ、晩年の筆跡ではない。相国寺蔵の絶海筆「十牛頌」と比べても、それよりやや早い頃のものに思われる。(四〇〇頁)

と興味深い指摘をされている。なお、梅花図の筆者に関しては、詩後の自注に、

作_二右画_一者不_レ顯_二姓名_一。只号_二九州狂客_一。余嘗見_二之途中_一。躬_レ荷友_レ牀而行。遇_二勝景_一。則輒靠_レ此以嘯吟出_レ語頗異。蓋善_レ画而隱_二于狂者也。然其用_レ筆失_二於瘦硬不_レ滿_二人意_一。故後詩以解_レ嘲云。

とあり、ただ「九州の狂客」と号したことしか明らかになっていないが、星山氏は如拙の可能性を示唆されている。絶海は中国から帰国した後、しばらく九州で静養していたので、その時に筆者と邂逅したのかも知れない。

四 九十五番詩および九十六番詩

・「永徳壬戌の春、松間居士の枕流亭の諸作を拝観す。前韻に追和して、楮尾に贅すと云ふ」(九五)

・「明絶侍者の雪中の韻に次す」(九六)

九十五番詩について。「永徳壬戌」とは永徳二年(一二三二)にあたり、この年の春、絶海はすでに恵林寺に住していた(『仏智年譜』)。「松間居士の枕流亭」に関しては、諸書では不明となっているが、天岸慧広(？)一三六二の『東帰集』(『全集』第一巻所収)に、「松澗居士の枕流亭の韻に次す」詩も見受けられる。天岸もまた、恵林寺に住していた(『東帰集』『夢窓国師語録』等)。

九十六番詩について。「明絶侍者」とは明絶□光のことであり、甲斐で絶海に従事した学徒のうちの一人であ

る。彼に關しては、以前に言及したので、ここでは省略する。

以上のことから、ここに挙げた二首は、絶海が甲斐の恵林寺の住持をしている時に詠まれたものである。

五 九十七番詩と九十九番詩

・「錢原にて清溪和尚の韻に和す」（九七）

・「前韻に和して崇大岳に答ふ」（九八）

・「宝冠精舎にて大亭西堂の訪はるるに次韻す」（九九）

『仏智年譜』によると、絶海は至徳元年（一三八四）六月、義満に直言してその意に逆らい、撰津の錢原（大阪府茨木市）に隱棲した。そして、翌二年四月に撰津有馬の羚羊谷（牛隱庵⁸）に移り、七月末には、細川頼之（一三二九〜九二二）に鄭重に招かれて、讃岐の普濟院に住し、ついで阿波の宝冠寺の開山になった。したがって、九十七番詩は撰津での作、九十九番詩は阿波での作である。

九七 錢原和清溪和尚韻

世事從來多_二變態_一。当初早悟有_二如今_一。青山高臥茅簷下。不_レ許白雲知_二此心_一。

「世事、從來、變態多し」——これは、義満との衝突を背景にしての詠出だろう。「当初、早に悟る、如今有るを」以下の句からは、絶海の宗教家らしい一面が窺われると思う。なお、九十七番詩は、建仁寺兩足院藏『東海瑠華集（絶句）』（『新集』第二卷所収）にも採られており、そこでは「答義堂和尚見寄」という詩題になって

いる。⁶⁾

九十八番詩も撰津での作である。その詠作状況は、序文で詳しく知ることができる。

拙者八月廿六日乗_レ涼出遊。州中名山曰_二勝尾_一。曰_二箕面_一。曰_二神呪_一。曰_二十輪_一。窮_レ奇探_レ勝興_レ寄浩然。遂詣_二西宮之社_一。所謂劍珠者。蓋絶世之奇觀也。凡_二經_二四日_一而歸_二錢原之寓所_一。乃知高駕來臨等_レ余不_レ遇而帰也。珙童口_二誦見留之作_一。厥韻琅々然也。於_レ是_レ不能_レ無_二社燕秋鴻之歎_一。修書之次、輒依_二芳押_一。以答_二来意_一云。

絶海は、至徳元年の八月二十六日から約四日間、涼しさに誘われて、州中の名山である勝尾寺、箕面寺、神呪寺、鷲林寺に遊んだり、西宮神社に参詣したりした。ところが、あいにくその間に、大岳周崇が絶海の寓居を訪れ、待ちわびて、詩を残して帰って行ったという。絶海は大岳に書簡をしたためるついでに、彼の詩に和韻して、来てくれた友情に答えたのである。

「清溪和尚」とは清溪通徹、「崇大岳」とは大岳周崇、「珙童」とは元璞慧珙、「大亨西堂」とは大亨妙亨のことである。『延宝伝灯録』卷第二十四の「大亨妙亨」の項には、

京兆万寿大亨妙亨禅師。自_レ稟_二証明_一周_二旋法席_一。(中略)居_二土州吸江庵_一。元弘_中間武州太守源頼之(細川氏)。以_二阿之光勝院_一聘招。国务之暇。屢到問_レ法。崇信日篤。(下略)

【注】本文には「元弘」とあるが、南朝の元弘年間は一三三二〜三三三年に当たり、その時期に細川頼之はまだ生まれていないので(元徳元年(一三二九)生まれ)、同じ南朝の年号でも、「元中(一三八四〜九

一)「の誤りではなからうか。

という記述があり、大亭が、元中年間に細川頼之に招聘されて、阿波の光勝院（鳴門市大麻町萩原）に住していたことがわかる。四者とも、絶海と同じく、夢窓派である。

六 百番詩〜百二十八番詩

- ・「画鶴」(一〇〇)
- ・「春夜、月を見る」(一〇一)
- ・「伏見親王の画軸に題す」(一〇二)
- ・「帰田の図に題す」(一〇三)
- ・「相府の深心院殿を悼む雅詠を拝観して、謹んで一絶を呈し奉り、情を詞に見あらはす」(一〇四)
- ・「菊苗を移す 琴字を得たり」(一〇五)
- ・「緑陰 三字分韻」(一〇六)
- ・「江天暮雪の図に題す」(一〇七)
- ・「春雨 羊字を得たり」(一〇八)
- ・「雨後、楼に登る」(一〇九)
- ・「扇面の画に題す 三首」(一一〇)

- ・「察侍者の韻に和す」(一一一)
- ・「山家 以下五首は相府席上の作なり」(一一二)
- ・「旧を懐ふ」(一一三)
- ・「山」(一一四)
- ・「鐘声近し」(一一五)
- ・「河上の霧」(一一六)
- ・「新居に松を植う」(一一七)
- ・「謹んで相府の鈞旨を奉じて、資寿の無求老兄の戯たはむるる有るに次韻す」(一一八)
- ・「海図の障子」(一一九)
- ・「輦寺に花を見る」(一二〇)
- ・「蕨を採る」(一二二)
- ・「人日、劍童の韻に和す」(一二三)
- ・「靉童の韻に和す」(一二三)
- ・「梅花野処の図に題す」(一二四)
- ・「盆蘆」(一二五)
- ・「餅新戒の韻を用いて、儼藏主の甲に帰りて親を省するを送る。兼ねて邦君の幕下に束し、以って意を致す

と云ふ」(一二六)

・「允修小生の歳旦の韻に次す」(一二七)

・「鵲」(一二八)

先に結論から述べると、ここに挙げた詩はすべて、絶海が晩年、京都で大寺院の住持を勤めていた時に詠まれたものであろう。

先に述べたように、絶海は一旦義満と対立したが、その真価を理解されるにつれて、義満の信頼を得るようになり、等持寺・等持院・相国寺(三住)と次々に住した。義満に『金剛経』『首楞嚴経』『十牛図』の講義をしたこともあるし、彼に従って西国(厳島)に遊んだり、彼の命令で応永の乱の調停に乗り出したこともある。義満の剃髪の戒師を勤めたのも絶海である(『仏智年譜』『勝定年譜』『蔭涼軒日録』『鹿苑院殿厳島詣記』『応永記』『扶桑五山記』等)。したがって、このような晩年の絶海と義満の親密な間柄を勘案すると、百四番詩、百十二く百十六番詩、百十八番詩は、京都での作と見て差し支えないだろう。「深心院殿」とは近衛道嗣、彼が死没したのは至徳四年(一二三八)三月十七日のことなので、百四番詩は、絶海が阿波から帰京して約一年たった後に作られたと推測される。「無求老兄」とは無求周伸、「資寿(院)」は相国寺の開山塔で、後に崇寿院と改称された(『扶桑五山記』)。「日工集」至徳三年十月廿六日条には、「是の夜、府君(足利義満)・等持絶海(中津)・資寿無求(周伸)泊および余(義堂周信)は、同じく鹿苑の僧堂に帰り、十二の道人に陪して坐禅す」という記述がある。

さて、絶海が輦寺に住したのは、老年期を迎えてからである。彼の身边には、少年僧（ずんなん「童行」）、「新戒」「小生」等）がつどい、住持（絶海）の世話をしたり、修行や勉学に励んでいたことであろう。百二十二、百二十三、百二十六、百二十七番詩は、詩題からこの時期の作品と思われる。特に百二十二番詩の「老懐、芳辰を競ふに意無し。忽ち喜ぶ、劍童の詩句の新なるを」、百二十三番詩の「老懐、案頭の巻を了するに嬾し。愛す、爾が書を攤きて床に満たしむるを解するを」という表現からは、詩作や学問に耽る少年僧をやさしく見守る老僧絶海の姿を想像することができる。百一番詩や百十三番詩も、「良宵、何ぞ必ずしも衰齡に負かん」や「白頭、簡を授く、華堂の下」という詩句があることから、この時期に詠じられたものであろう。なお、「華屋」という語は、百十九番詩にも「近く華屋に來たりて、居は氣を移す」という用例があり、相国寺などの大寺院を指しているのではないだろうか。傍線は私に施した。「劍童」「霑童」「併新戒」「儼藏主」「允修小生」は未詳。「邦君」に関しては、蔭木英雄氏は「武田信成か」（二八四頁）と指摘されている。

百十七番詩、百二十番詩について。百十七番詩の「松を栽ゑて為に万年の枝を護る」という詩句は、この詩が万年山相国寺での詠出であることを示しているよう。百二十番詩に関しても、詩題に「輦寺」とあり、詩中に「寺は皇居に近くして」とあることから、相国寺で詠じられたものであろう。蘭坡景菴の『雪樵独唱集』絶句ノ一（『新集』第五卷所収）には「和万年旭岑試筆」詩に「寺近皇居氣色新」、天隱龍沢の『默雲藁』（『新集』第五卷所収）には「和万年檀溪韻」詩に「寺近皇居氣象饒」という句が見られる。

その他、百二番詩について。本文を挙げる。

一〇二 題「伏見親王画軸」

江天落日弄「新晴」。雪後峰巒万玉清。好在梁園能賦客。何時起「草直」承明。

島田、入矢氏監修『禅林画賛 中世水墨画を読む』（毎日新聞社、昭六二）には、この詩が記された山水図（作品番号89、伝張遠筆、題詩・絶海中津、十四世紀末—十五世紀初期、紙本墨画、三四・五×九四・九cm、相国寺）が掲載されている。大西広氏は解説の中で、以下のように説明されている。

○ 本図は京都・相国寺に伝来した品であるが、絶海中津（一三三六—一四〇五）が題詩を付したと思われる明德から応永にかけての時期（一四〇〇年前後）には、皇族の伏見宮家の所蔵であったことが、絶海の詩文集『蕉堅稿』によつてわかる。伏見宮といえは誰もがまず思いうかべるのは、有名な『看聞御記』の筆者で書画の收藏家でもあった後崇光院・伏見宮貞成（一三七二—一四五六）の名であろう。がしかし、ここにいる伏見宮とはその貞成ではなく、彼の父・栄仁親王（一三五二—一四一六）であつたらうと思われる。（中略）栄仁は、持明院統の崇光天皇の第一皇子として生まれながら、南北両朝の確執に翻弄され、ついに皇位にはつげず悲運のうちに一生を送つた人である。文字どおり子の貞成に受け継がれてゆく風雅の家系を代表する人物でもあり、絶海や空谷明応などをはじめ、五山の文学僧とのあいだにも親交があつたことが知られている。

そうした背景から見て、本図で興味ぶかいのは、絶海の題詩に、心なしかその栄仁親王の境涯への個人的な思い入れが籠められているように感じられることである。絵そのものは、雪景山水に行旅の人を点景とし

て添えるといった図柄で、一般に群峰雪霽図とか関山行旅図などと呼ばれていたものの一類であり、何かここにそれ以上の特殊な主題があるとは考えられない。それに対し詩の方は、絵にとられない自由な想像によつて、内容として漢の司馬相如の故事をうたいこんだものになっている。むろんこうしたこと自体は題画詩にはよくあることであるが、一般に題画詩にその傾きが強いときには、絵の主題だけでなく、題画の背後情況との関わりを考へてみるべきであろう。(下略) (二八一頁)

○ このようにさまざまな想像をかきたてる本図であるが、面白いことに絵そのものは日本でかかれたものではない。中国画説あり朝鮮画説あり、その鑑識が歴史上、二転、三転してきたという点でも、本図はじつはたいへん興味ぶかい一作なのである。(下略) (二八二頁)

この詩群には、画図や扇面に題した、いわゆる題画詩や、題詠詩が多いため、百番詩、百三番詩、百五〇百十番詩、百二十一番詩、百二十四番詩、百二十五番詩、百二十八番詩と、詠作状況が判然としないものも間々あるが、前後の作品が京都で詠まれたものなので、京都での作と考へてよいだろう。「察侍者」とは鑑溪周察のことであろうか。なお、百五番詩は、希世靈彦の『村庵集』(建仁寺兩足院蔵。『新集』第二卷所収)にも採られている。兩足院本には、他にも絶海の作品が見受けられるが、玉村竹二氏の解題には、多少の疑問が残る。¹⁾

七 六十九番詩〜七十九番詩

最後に五言絶句を見ていく。詩題を掲げる。

- ・「雲間の口号」(六九)
- ・「長門の怨」(七〇)
- ・「鴈」(七一)
- ・「四皓の図に題す」(七二)
- ・「西湖帰舟の図」(七三)
- ・「扇面の画に題す 七首」(七四)
- ・「扇面の竹」(七五)
- ・「乾杜多が韻に和す」(七六)
- ・「梅竹軒 高麗僧に贈る」(七七)
- ・「画に題す 〔四首〕」(七八)
- ・「玉腕外史の扇に題す」(七九)

どうしてこの詩型を後回しにしたかと言うと、題詠詩や題画詩ばかりで、いずれも詠作状況が判然とせず、僅かな手掛かりと、今までの傾向を参考にして、論を進めなくてはならないからである。

六十九番詩の「雲間」とは現在の上海市松江区、「口号」とは詩題の一つで、文字に書かずに、心に浮かんだ通り吟詠することを言うので、同詩が中国での作ということとは、まず動かないだろう。

さて、七十番詩から七十五番詩までは、題詠詩と題画詩が続き、七十六、七十七番詩を置いて、七十九番詩ま

で、また題画詩が続く。七十六番詩の本文を挙げる。

七六 和_二乾杜多韻_一

昌期帝載熙。法運中興時。喜見詩多_レ態。晴空百尺絲。

絶海は一方で天皇（後小松天皇か）の治世や、仏教（禅宗）の時勢を賛美し、一方で乾杜多の詩作を喜んで見ている。臨川寺事件を経て、近江や甲斐でしたための書簡の中には、「邇来、法道古ならず、目を挙ぐれば、悽然たり」（百四十八番書）とか、「某、進みて危機を避けず、退くも亦た高尚の節を失ふ。冥頑無識、宗門を玷汗す」（百五十二番書。「法門を汗辱す」という用例は、『蕉堅藁』に二例ある）と、仏法の現状を危惧したり、仏者としてのおのれの行動を戒めたりしていたが、この詩には、時代の流れ（南北朝合一）や、彼を取り巻く環境の変化（大寺院の住持歴任）を感じる。また、「杜多（頭陀）」とは修行僧のことである。詩作に興じる乾杜多をやさしく見守る絶海の眼差しには、先に見た百二十二番詩や百二十三番詩に通ずるものがある。よって、晩年の京都での作と位置付けてよいのではなからうか。なお、「乾杜多」に関して、蔭木氏は「春屋妙葩（普明国師）の嗣の用健周乾か」（一三五頁）と指摘しておられる。

高麗僧に贈ったという七十七番詩も、「三年、日域に遊び、高興、帰歎を促す」という詩句があるので、日本（京都）での作と考えてよいだろう。なお、寺田透氏は、この高麗僧に覚鎚の可能性を示唆しておられる。¹²

さて、六十九番詩は中国での作、七十六、七十七番詩は京都での作と特定したが、問題はここからである。今までの傾向を振り返ると、『蕉堅藁』の五言律詩や七言律詩の作品配列は、大体、詠作年代順に整理されていた。

このことを、五言絶句にも採用したい。七十番詩の本文を挙げる。

七〇 長門怨

寂寞長門夜。昭陽歌舞來。妾身若殘燭。淚尽寸心灰。

この詩は、武帝の寵愛を失い、長門宮に退いた陳皇后の悲しみを詠じたものであるが、全くの艶詩である（代表的な詩の総集である以心崇伝（一五六九）一六三三）他編『翰林五鳳集』では、卷第六十二・恋に収録されている）。艶詩は、五山文学史上、室町時代後期の特徴の一つと考えられているが、絶海詩におけるそれは、その濫觴（発芽）と思われる。よって、この詩は、晩年の京都での作ではなからうか。ちなみに蔭木氏も、つぎのよう指摘されている。

筆者は 119 の「近く華屋に來れば、居は氣を移す」の句の通り、花の御所に近い大伽藍に住持する絶海が、

長門宮の悲恋の絵画を見て、時流に抗し得ずして作った五絶であると解するのである。（一二八頁）

七十番詩が京都での作ということになると、それ以降の作品も、七十六、七十七番詩も含めて、絶海が晩年、京都の大寺院に住していた時に詠まれたものということになって来よう。推測の域を出ていないかも知れないが、稿者が現段階で追究できるのは、ここまでである。

「(商山) 四皓」とは、秦末に世乱を避けて、商山に隠れた四人の鬚眉が白い老人——東園公・夏黄公・甬里先生・綺里季——を指し（『漢書』王貢伝等）、五山禅僧が好んで用いた詩の素材の一つである。『翰林五鳳集』卷第五十九・支那人名部には、「商山四皓図」「扇面四皓」「四皓囲碁図」等の詩が見られる。また、「西湖」の

孤山には、北宋の詩人である林和靖（林逋、九六七～一〇二八）が隠れていた。先に触れたように、絶海は実際に和靖の旧宅を訪れており（『勝定年譜』）、七十三番詩を詠出する際には、当時のことを思い起こし、きつと感慨深かったことだろう。なお、和靖も五山禅僧によく詠まれ、『翰林五鳳集』巻第六十一・支那人名部には、「和靖像」「読和靖詩」「和靖放鶴図」「和靖回棹図」等の詩が見られる。「玉畹外史」とは玉畹梵芳のことである。

おわりに

以上のように、今回は五言絶句（六九～七九）と七言絶句（八〇～一二八）を見てきた。対象が絶句なので、考察の手掛かりが少なく、解釈の不充分を恐れるが、現在のところ、六十九番詩は中国での作、七十～七十九番詩は京都での作、八十番詩、八十番詩A、八十一～八十五番詩は中国での作、八十番詩B、Cは京都（相国寺）での作、八十六番詩は宇治での作、八十七～九十四番詩は京都（天龍寺）での作、九十五、九十六番詩は甲斐での作、九十七、九十八番詩は摂津での作、九十九番詩は阿波での作、百～百二十八番詩は京都での作と結論付けるに至った。七言絶句の部の巻頭に八十番詩が配されているのは、同詩が有名であったことが多分に影響しているだろう。大方のご批正を乞いたい。

*

*

冒頭で述べた通り、『蕉堅藁』の詩作品の配列に関して纏めてみたい。まず、各詩の詠作状況をもう一度、振り返ってみる。

○五言律詩他（一〜二二。計三〇首、他作四首を含む）

・一〜十三番詩：中国での作

・十四番詩：九州での作

・十五番詩：九州か、近江か、甲斐での作

・十六〜十九番詩：甲斐での作

・二十〜二十二番詩：京都での作

○七言律詩（二三〜六八。計六七首）

・二十三〜四十六番詩：中国での作

・四十七〜五十二番詩：九州での作

・五十三番詩：宇治（近江に向かう途中）での作

・五十四〜五十九番詩：京都での作

・六十〜六十八番詩：関東での作

○五言絶句（六九〜七九。計二〇首）

・六十九番詩：中国での作

・七十〜七十九番詩：京都での作

○七言絶句（八〇〜一二八。計五五首、他作三首を含む）

・八十番詩、八十番詩A：中国での作

・八十番詩B、C：京都（相国寺）での作

・八十一〜八十五番詩：中国での作

・八十六番詩：宇治（近江に向かう途中）での作

・八十七〜九十四番詩：京都（天龍寺）での作

・九十五、九十六番詩：甲斐での作

・九十七、九十八番詩：摂津での作

・九十九番詩：阿波での作

・百〜百二十八番詩：京都での作

上記の如く、『蕉堅藁』の詩作品の配列は、その種類ごとに、大体、詠作年代順に整理されていた（ただし、中国での作や京都での作など、それぞれの詩群の中での配列は、必ずしも年代順にはなっていない。例えば、各詩型の巻頭詩には、絶海の自信作や、思い入れのある作品が採られている。一番詩は、「流水、寒山の道、深雲、

古寺の鐘」という詩句が人口に膾炙していたし、二十三番詩は、中国で師事した季潭宗泐（全室和尚、一三二八～九一）に次韻したものである。八十番詩は、明の太祖高皇帝（洪武帝・朱元璋。一三二八～九八）と唱和したもので、これに関連したエピソードは広く流布していた。横川景三編『百人一首』の巻頭詩でもある。が、一部に順序の乱れも認められる。例えば、その顕著なものとして、六十～六十八番詩が挙げられる。これらの詩は、絶海が関東に再遊した時に詠まれたもので、京都での作（五四～五九）との間に、詠作時期が前後する作品があるのである（七言律詩は、詠作場所別に見ると、整理されている）。また、八十番詩B、Cは、中国僧の天倫道彝らが後年、機会を別にして八十番詩に和したものである。基本的に各作品が年代順に配列される『蕉聖藁』において、両詩がここに位置しているということは、作者の絶海（もしくは編者の鄂隠慧叟）が、その詠作状況を考慮して、確固たる配列意識（意図）を有していたことを示す一証左となるだろう。六十～六十八番詩にも、絶海（もしくは鄂隠）の意識（意図）が作用していたかと思われるが、現段階では判然としない。

さて、五山（禅林）詩は、室町時代中期以降になると、七言絶句が目立ってくる。玉村氏は、『五山文学』（日本歴史新書、至文堂、昭四一）の「第八章 五山文学の変質と衰頹」において、つぎのように述べておられる。

嘗ては賦・離騷より古詩・七言五言の律詩・七言五言の絶句というようにあらゆる詩形に亘っていたものが、次第にその種類を減じて行った。しかし絶海・義堂の頃は、まだ律詩が多く作られ、五言詩も多かった。それがこの時代になると、律詩さえも数が少くなり、専ら絶句である。それも五言は影を潜め、七言絶句が、最も一般化して、圧倒的な数に上ってしまった。横川景三が撰んだ『百人一首』や、文挙契選の撰んだ『花

上集』(花という字の上の方即「廿」は「廿」で、二十人集ということを表わす)も皆七言絶句のみをとっている。いずれも文明前後の成立をもつ書であるから、如何に室町時代中期には、既に表現形式が減少し、単一化されてしまったかを知る事が出来る。(後略)

(二七三〜四頁)

『蕉堅藁』の詩の総数は、一七二首(他作七首を含む)である。確かに玉村氏のご指摘の如く、『蕉堅藁』において、律詩の総数(九七首、他作四首を含む)は、その半数以上を占める。ただし、詠作時期別に見てみると、律詩が、中国での作が六〇首(他作四首を含む)、京都での作(晩年)が九首と減少しているのに対して、絶句は、中国での作が七首(他作一首を含む)、京都での作(晩年)が三一首と増加している。さすがの絶海も、時代の趨勢には逆らえなかつたのであろうか。なお、『中華若木詩抄』にも、中国の詩人と、日本の五山詩僧の七言絶句ばかり、交互に二百六十首収められている。

次節からは、『蕉堅藁』の疏や書簡の作品配列を見ていくつもりである。詩作品を考察するだけでは気付き得ない絶海(もしくは鄂隱)の配列意識が、新たに明らかになることが期待される。

注

(1) 引用は『大正新修大蔵経』第八十卷「統諸宗部」による。

(2) 引用は大塚光信氏・朝倉尚氏他校注『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』(新日本古典文学大系53、岩波書店、

平七)による。

(3) 『絶海和尚語録』卷下には、「韻に和して天寧の天倫禪師と上竺の一庵講師の過訪を謝す」(二七六)という偈がある。作品番号は梶谷宗忍氏訳注『絶海語録』二一(思文閣出版、昭五一)による。

(4) 入矢義高氏校注『五山文学集』(新日本古典文学大系48、岩波書店、平二)、梶谷氏訳注『蕉堅藁 年譜』(相国寺、昭五〇)。

(5) 引用は『大日本仏教全書』第六十九卷「史伝部八」による。

(6) 『碧雲稿』には「奉寄絶海和尚」や「春夜看月寄蕉堅老人」のほかに、「送絶海津蔵主帰日本在唐作」という詩もあり、如心が絶海の帰国後も、中国に滞在したことがわかる。なお汝霖に関しては、『日本名僧伝』につきのような逸話が伝わっている。彼も高皇帝に謁見したのだが、絶海が即座に絶句を作り、御製の和を賜ったのに対し、汝霖は律詩を作ることができず、絶海の光栄を羨んでいたらしい。このため、絶海と同船で帰国する途中、太祖が次韻した宸筆を、絶海から奪い取って海中に棄ててしまったという。ただし、『蕉堅藁』所収の「佐汝霖の宝幢に住する諸山疏 序有り」(一一三三)の記述は好意的であるし、康暦二年(一一三八〇)に絶海は播磨の法雲寺(兵庫県赤穂郡)の住持を汝霖に譲っている(『仏智年譜』)。

(7) 作品番号は梶谷氏訳注『観中録・青嶂集』(相国寺、昭四八)による。

(8) 太白真玄の『峨眉鴉鳥集』には、「遊鎌倉溪牛隱寺序」という文章があり、当時の牛隱庵の様子を窺い知ることができる。

庚午春。余治脚疾於撰之温泉。居無何。疾有間。偶携二三友生。游山西鎌倉之溪。路徑村居。行無十里之遠。而至其境。乃崇山複嶺。仙岩斗起。青松夾徑。白石圉流。漸過独木橋。而闌牛隱之門。珍不名花。繡于面背。繪于左右。宛如遊神仙佳境。風骨冷然。不覺疾之在脚。不亦一奇哉。(下略)

〔全集〕第二卷

(9) 兩足院本には、作者惟肖得巖の先輩にあたる五山文学僧——義堂周信・絶海中津・無求周伸・雲溪支山等の七言絶句が百七首挙げられており、玉村竹二氏は「義堂・絶海等の詩は、作品がいずれも惟肖に関係の深いものばかりであるから、惟肖が先輩の作品を勉学のために抜萃して座右に備えたものと考えられないこともない」(「解題」)と指摘されている。

(10) 引用は『大日本仏教全書』第六十九卷「史伝部八」による。なお、()内は割注を示す。

(11) 『新集』第二卷・「希世靈彦集」の編集方針は、内閣文庫蔵『村庵藁』を底本として全文掲載し、その末尾に「希世靈彦作品拾遺」として、他の校訂本に見える逸文を収集している。『蕉堅藁』の百五番詩以外にも、八十九番詩と九十二番詩が、兩足院蔵『村庵集』から「拾遺」に収められているが、おそらく玉村氏は、絶海の作と気付かれていなかったと思われる。兩足院蔵『村庵集』の解題から抜粹する。

この本は、表紙裏の注記に「正元老僧手書村庵集壹册乃歸寂之日所遺寄也、」とあるにより、『延宝伝灯録』『本朝高僧伝』の著者美濃盛徳寺の正元師蛮の自筆書写にかかるとあることを知る。七言絶句二百六十五首、七言律詩二十八首を収めた後、心田清播の作品『心田詩藁』の一部が攙入している。

即ち「愛晚菊寄故人」から「贈無文章侍者」「賦海棠寄西山故人」「梅先生詩」「立秋書懷」の六首が七言律詩、「寄北隣梅丈人」「伝日棠棟廐則兄弟歌、伐木廐則朋友缺」云々の題のある詩の二首が五言律詩で、合計八首ある。しかるのち、再び希世の作に戻り、五言絶句八十一首を収めて終っている。この本の内容は別に『村庵藁』を上廻る佚文などはない。ただ局部的にはその誤字を訂すべきものはある。

ただ卅元手写という点に興味がある。(下略)

(一一二六四〜五頁)

結論から言うと、この記述にも誤りがある。玉村氏は、心田の作品の混入を指摘されているが、「贈無文章侍者」詩と「賦海棠寄西山故人」詩に限っては、絶海の作である(本文は確認済み)。「蕉堅藁」の五十六番詩と五十四番詩に当たる。残りの詩は心田の作品で、いずれも『心田詩藁』『新集』別巻一所収)に確認することができる。なお、兩足院本に絶海や心田の作品が混入した経緯に関しては、今後、追究してみたい。

(12) 寺田透氏『義堂周信・絶海中津』(日本詩人選²⁴、筑摩書房、昭五二)。

(13) 今泉淑夫氏は、「僧某が建仁寺の少年僧文學契選のために編んだ」とし、「通説でこの集が文學自身の編とするのは一考を要する」とされている。『花上集』について(『東京大学史料編纂所報』第十八号、昭

五八) 参照。

※ 中国の地名に関しては、和泉新氏編『現代中国地名辞典』（学習研究社、昭五六）や『中華人民共和国 行政区划簡冊 二〇〇〇一』（中華人民共和國民政部編、中国地図出版社）を参考にした。

【付記】

資料の閲覧に際してご厚情を賜った建仁寺両足院住職の伊藤東文老師に厚くお礼申し上げます。

*

*

稿者は最近、福岡国際大学の愈慰慈氏から、玉稿「日中文化交流史的基礎研究」《扶桑五山文学原典箋注係列》第一種——絶海中津《蕉堅藁》箋注（I）〜「同（IV）」（『福岡国際大学紀要』第一〜四号、平一一・三〜平一二・七）を賜ったのだが、稿者は未見で、色々と勉強させていただいた。同論文は全文中国語で、各詩が「留（在）明之作」か「帰国後之作」か、判別されており、所によっては稿者との意見の相違も認められるのだが、残念ながらその根拠までは記されていない。例えば、今回の考察範囲に限ると、七十〜七十五番詩が「留明之作」となっている。確かにこれらの詩の中には、中国の地名も出てくるが、このことは、「留明之作」の根拠にはならないだろう。と、いうのも、各詩とも題詠詩や題画詩で、その地名は、詩材に伴って詠まれたと思われるからである。例えば、「鴈」詩（七一）には「玉塞」（西域地方と内地との境に設けた関門。玉門関。甘肅省河西回廊の西部にある）が出てくるが、勿論、絶海が実際に当地を訪れたはずはないし（絶海の主な活動範囲は、江蘇

省と浙江省)、『全唐詩』などを見ても、「鴈」と「玉塞」をともに詠み込んだ詩を、何例か確認することができ
る(李嶠・「奉和幸望春宮送朔方総管張仁亶」詩、楊衡・「征人(一作思婦)」詩、翁綬・「関山月」詩等)。稿者
は、艶詩や絶句が、五山文学史上、室町時代中期以降に流行したことに鑑みても、その影響が『蕉堅藁』にも見
られると思うので、七十〜七十五番詩は、やはり絶海が晩年、京都で詠んだと考えたい。

第四節 書簡の場合

はじめに

前節で『蕉堅藁』所収の詩作品の配列をすべて考察し終えたので、本節では書簡類（一四六～一五四）の執筆状況を可能な限り明らかにし、配列順序について考えてみたい。書簡は全部で九通しか収められていないので、逐一考察して行く。

一 「金剛の物先和尚に与ふる書」（一四六）

「金剛」とは景福山金剛寺（近江八幡市金剛寺町、現在は廃寺。今枝愛真氏『中世禅宗史の研究』（東京大学出版会、昭四五）参照）、「物先和尚」とは物先周格（一三三一～九七）のことである。この書簡は、書中に「小弟、外邦に閑遊して、時の孔艱に遭ふ。苟かりそめにも活きて帰るは、幸ひたるのみ」「賤跡、二月望を以つて、方に輦下に到る」とあるので、絶海が中国から帰国して、一旦九州で静養した後、帰京した頃にしたためたものである。『蕉堅藁』所収の「繁全牛（全牛中繁）の和山（賞礼）上人の関西に帰るを送る詩の序」（一四二）に「丁巳の春、余、南国より首を回めぐらし、箱崎の広嚴精舎に謁す」「明年、上人、叔父（大疑宝信）に従ひて、京に赴く。余も亦た舟を同じくして行く」とあることから、絶海が帰国したのは永和三年（一三七七、丁巳）の春、帰

京したのは翌四年の二月十五日のことである。書簡には「維の時、春深し」ともある。なお、書中には「模堂・陽谷の如く、数年の間に喪亡するもの、二十人に幾し」というくだりが見られるが、模堂周楷が示寂したのは応安四年（一三七二）九月二日、陽谷周向が示寂したのは応安二年（一三六九）五月十七日のことである。玉村竹二氏『五山禅僧伝記集成』（講談社、昭五八）参照。

二 「光禄相公に与ふる書」（一四七）

「光禄相公」とは、ばさら大名で有名な近江守護佐々木高氏（道誉、一二九六～一三七三）の三子、京極高秀（一二二八～九一）のことである。書中には「凶らずも閣下、固陋を識察して、録問を枉げるを辱くす」や、「来たりて内を治むるに速びて、上野、日に清化に沐し、民物康阜にして、邑に夜吠の犬無し。矧んや龍興新寺は、乃ち妙喜翁行化の地、四海学者の矜式する所にして、高風遺烈、凜乎として猶ほ在り」というくだりがある。「上野」とは現在の滋賀県甲賀郡甲南町新治、「龍興新寺」とは中巖円月（妙喜翁、一三〇〇～七五）が貞治三年（一三六四）冬十一月、近江の杣庄（飯道山の東麓から杣川流域に沿い、現在の甲南町北部一帯と水口町南西の一部）に建立した寺（『仏種慧濟禅師中岩和尚自歴譜』、よってこの書簡は、臨川寺事件が原因で、絶海が近江に隠遁していた時にしたためたものである。稿者は第二節で、絶海が永和四年の冬頃、宇治から近江に行かんとして、五十三番詩を詠んだのではないかと指摘したが、書中に「辰下嚴寒」とあるので、この書簡も同時期の執筆と見て差し支えないだろう。なお、本書簡の中には、

某遠託_二鴻麻_一。息影此地_一。晨禪夜誦。一遵_二旧規_一。暇則倚_レ軒嘯傲。以陶_二写乎雲樹猿鳥之趣_一。

という文章があり、絶海の近江における生活態度の一端を窺い知ることができる。彼は、朝は座禪、夜は読経というように、一途に古くからの規則を遵守していた。そして、暇ができると、軒端に寄り掛かって超然とし、雲樹猿鳥の様子に心を楽しませていたという。

三 「報恩の義堂和尚に答ふる書」(一四八)

「報恩」とは南陽山報恩寺(鎌倉市西御門)、義堂周信(一二三二五〜八八)が応安四年(一二三七一)十月十五日、関東管領の上杉能憲に請われて建立した寺である(『日工集』)。冒頭に「旧冬十二月七日、賜はりし所の教字、今夏四月七日に及びて、方に江州甲賀縣の寓所に到る。拝読して数を_{さかのぼ}沝るに、已に百二十日を_{ぐだ}距つ」とあるので、本書簡も近江での作である。蔭木英雄氏は「江州甲賀縣の寓所」を龍興寺とされているが(『蕉堅藁全注』、二二三頁)、稿者には、少しく疑問が残る。と、いうのも、後に近江での作と結論付ける百五十二番書に「是れを以つて遁逃してより已_{このかた}還、一たび歳月を_{めぐ}周らし、六たび茅舎を移す」とあり、絶海が近江で住居を転々としていたことが知られるからである。執筆の時期は、(絶海が近江に滞在した期間を勘案すると、)必然的に康暦元年(一二三七九)の四月七日直後ということになるだろう。書中には「伏して承るに、重ねて事を黄梅に領す、と」というくだりがあつて、義堂が黄梅院(円覚寺の塔頭)の事を再領したのは、『日工集』によると、永和四年十一月二十九日のことである。また、「小弟、丙辰の春、金陵を離れて前に_{つまづ}跋き、後へ_{しり}に_{たふ}憲れて、此に四年なり」

というくだりもある。絶海が高皇帝（洪武帝、朱元璋とも言う。一三二八〜九八）に金陵（南京）の英武楼に招かれたのは、洪武九年（永和二年（一三七六）、丙辰）の春のことであり（『仏智年譜』）、正確に言うと、それから四年目の夏頃に、この書簡をしたためたことになる。この他、臨川寺事件に関して、

向者臨川告状。衆説紛紜。某但得_レ拱_レ手就_レ列于百十人之下_一已。毫髮不_レ為_レ主張_一。幸垂察焉。

という文章も見られる。臨川寺の訴えについては、いろいろな意見が乱れ飛んでいますが、わたしは、両手を拱いて、皆様の後に付いていくだけです。まったく主張は致しません、と絶海は義堂に述べているのだが、この事件がもとで近江に隠遁したと思われる絶海にしては、まことに控え目な意見と言えよう。

四 「法華の元章和尚に与ふる書」（一四九）

「法華」とは等持寺の法華堂、「元章」とは元章周郁（一三二一〜八六）のことである。『蕉堅藁』には「元章和尚の天龍に住する諸山疏」（一三三二）、『絶海和尚語録』（注）巻下には「まさに近県に往かんとして、韻を次して元章和尚に別れ奉る」詩（二八三）も見られる。書中に「今夏、州兵、東征し、軍須、百端、民戸、之が為に騒然たり」とあるのは、関東で小山氏が反乱を起こしたためであろう（小山氏の乱、一三八〇〜九七）。この時、絶海は甲斐の恵林寺の住持を勤めていたと思われる、「細務、猥雑、日に懊惱を以つてす」という記事も見受けられる。彼が同寺に入院したのは康暦二年（一三八〇）十月八日（『仏智年譜』）、書中に「今夏、州兵、東征し」や「秋序、杪あたに方る」とあり、後述するが、百五十、百五十一、百五十三番書も甲斐での作で、これらの書簡と

の兼ね合いもあるので、本書簡の執筆時期は、永徳元年（一三八一）の秋の終わりであろう。なお、書簡中の「等持の法兄」とは義堂のことで、『日工集』によると、康暦二年十月十七日に同寺に入院したことがわかる。

（注）作品番号は梶谷宗忍氏訳注『絶海語録』二（思文閣出版、昭五一）による。

五 「久菴和尚に答ふる書（一）」（一五〇）

「久菴和尚」とは久菴僧可（？～一四一七）のことである。すでに直前でも述べたが、稿者は、この書簡を甲斐での作と考えている。論拠は乏しいのであるが、第一に「前年、東府の管領、前後相継いで捐館し、しかのみならず、信越の二守、或いは以って傾逝し、或いは以って俗を厭ふ」という箇所注目する。前年、相継いで逝去した関東管領とは、上杉能憲（永和四年四月十七日没、『日工集』『鎌倉九代後記』等）と憲春（康暦元年三月七日没、『花宮二代記』等）のことであろう。絶海は、久菴が上杉氏出身（憲将の息）ということもあつただろうが、同時期に（関東十カ国の一である）甲斐に滞在していたからこそ、このような話題を出したのではないだろうか。なお、一人が逝去し、一人が出家したという「信越の二守」に関して、蔭木氏は「貞治六年七月十三日に越後守護斯波高経が死に、斯波氏経は嗟峨に出家遁世した」（二二八頁）という注を付されているが、斯波高経は、越前もしくは越中の守護である。少しく疑問が残る。信濃の守護は上杉朝房、越後の守護は上杉憲栄を指しているのではないか、とわたくしは推測している（『新潟県の歴史』『長野県の歴史』『国史大辞典』参照）。

この他、「而して独り管領公泊および中書侍中の二公、今諸軍の率と為り、僭偽を削定す」というくだりがあり、上

杉憲方（管領公）と朝宗（中書侍中）が、諸軍を率いて、官位を偽り領国を侵すものを征伐する、その具体的な内容として、蔭木氏は「ここは小山義政の反乱を治めること」と指摘されている。執筆の時期に関しては、書中に「残暑、伏して惟んみれば、保愛せんことを」とあり、つぎの書簡（百五十一番書）との兼ね合いもあるので、永徳元年の秋の初めを考えている。なお、本書簡には、絶海の病気に関する記事が見受けられる。

小弟比患痢疾。旬日間。殆不識人。兩日前。方復小康。昏睡中。獲拜手書并越燭。喜甚。疾読脱然不覺沈痾之去體也。

絶海は下痢で、十日ばかり人と会わなかったという。彼には元々、持病があり、南北朝の争乱や臨川寺事件に巻き込まれて、疲れ果て、今にも息絶えてしまいそうな人の如く、生気を失った状態に陥ったこともあったという（百四十八番書）。そう言えば、『蕉堅藁』の詩作品には、菓草（黄精、紫參、紅棗、朮苗等）など、薬に関するものが頻出する。総じて、彼はあまり体が強い方ではなかったのかも知れない。

六 「久菴和尚に答ふる書（二）」（一五一）

この書簡と、前の書簡（百五十番書）は、五山版や江戸の版本を見ても、行換えを施して、一応区切つてはいらぬもの、「答久菴和尚書 二」という題のもと、一纏めにして収められている。と、いうことは、これも百五十番書と同時期に、甲斐でしたためられたと考えてよいのではないか。書中には「茲に承従者、暫く伊豆を離れて、三川に坐夏す。いまだ面晤を得ずと雖も、稍近きを以って喜びと為す」というくだりがある。甲斐と三河と

は、間に駿河を挟んでいるが、割と近い距離にある。書簡の執筆時期は、「教上人來たる。二月廿二日の書を惠まる」「惟の時、春深し」とあるので、永徳二年の春の終わりであろう。なお、この時の久菴の所在に関して、蔭木氏は、百五十番書は、文面から察して越後の聖寿山至徳寺（上越市東雲町、現在は廃寺。久菴が開山）、本書簡は、久菴の祖父の上杉憲顕が無礙妙謙（久菴の師）を開山として建立した、伊豆葦山（静岡県田方郡葦山町）の天長山国清寺を指摘（註）されているが、両書簡の体裁や執筆の時期などを勘案すると、少なくとも同じ場所に住んでいたように思われる。このことは、つぎの百五十二、百五十三番書を見るにつけても、一層強く思われる。

（注）蔭木氏は「茲に従者より承るに、暫らく伊豆を離れて夏を三川に坐すと」（原漢文、茲承従者。暫離伊豆坐夏三川）と訓読し、久菴が伊豆から三河に移ると、従者から聞いた、と解されているが、「茲に承従者、暫く」と訓み、承従者が三河に移るとも解せる。

七 「椿庭和尚に答ふる書」（一五二）

「椿庭和尚」とは椿庭海寿（二二一八〜一四〇一）のことである。百四十九番書から甲斐での作が続いているが、稿者はこの書簡を、近江での作と考えたい。とは言え、決定的な証拠は無く、状況証拠に頼らざるを得ない。例えば、「某、以つて巖穴に竄伏して」とか「是れを以つて遁逃してより已還、一たび歳月を周らし、六たび茅舎を移す」というような生活を、絶海が送るとすれば、それは、近江に隠遁した時を描いて他には考えられない。修行時代や住持時代においては、到底、無理であろう。また、

雖_レ然時時逢_二山水幽勝之処_一。披_レ衣散_レ策而陶_二治於猿鳥雲樹之趣_一。悠然如_レ遊_二乎物化之元_一。

という文章もある。絶海は、山水の静かで美しい景色に出会うと、くつろいだ格好をして散策し、雲樹猿鳥の生
態に共感して、ゆったりと物の変化の根源で遊んでいるような感覚を覚えたというが、この生活態度は、先に百
四十七番書で見た、絶海の近江におけるそれと相通するものがあるように思われる。なお、書簡の執筆時期であ
るが、「溽暑、正に酷に及ぶ」というくだりがあるので、康暦元年の夏であろう。

八 「円覚の椿庭和尚に与ふる書」(一五三)

椿庭が円覚寺に入院したのは、永徳元年の冬のことである(第四十七世、『円覚寺史』附録〈住持世代〉によ
る)。この頃、絶海は、すでに恵林寺の住持を勤めており、この書簡は、甲斐でしたためられたものである。
書中に「夏間に光侍者の職事を以って、虚中(梵亮)に私す」「茲に光侍者の帰参に因りて、草草に修布す」と
見える「(明絶)光侍者」については、『蕉堅藁』の十九番詩や九十六番詩を考察する際にも触れたように、甲
斐で絶海に従事した学徒のうちの一人である。執筆の時期は、「即晨、秋深し」とあり、絶海と椿庭、各々の住
持期間を勘案すると、永徳二年の秋の終わりにならうか。なお、本書簡と前の書簡(百五十二番書)は、宛名は
同じだが、執筆の時期や場所が異なり、また、宛先も異なると思われるので、百五十、百五十一番書のように一
括するのではなく、項を改めて収めたのであろう。

九 「常光の古剣和尚に答ふる書」(一五四)

「常光」については、諸書では不明とされているが、近江には大慶山常光寺（甲賀郡甲賀町大原上田）という臨濟宗妙心寺派の寺院がある。「古剣」とは古剣妙快（一三二八〜？）のことである。

じつはこの書簡の執筆状況が最も判然としない。まずは論の進行上、古剣の臨川寺事件以降の履歴を確認しておく（『五山禅僧伝記集成』の「古剣妙快」項から抜粋、一九二頁）。

（上略） ついで古剣は、永和初年（一三七五？） 崇光法皇の院旨により、伏見の大光明寺に移ったが、その頃、龍湫周沢を中心とする一部の夢窓門徒の画策により、幕府を動かして、従来同門同徒の大切な甘棠道場（一派の本拠地たる門徒養成の場）であつた十刹臨川寺を五山に昇位させ、十方住持（夢窓派を含めて、その外のあらゆる門派も、住持として任命され得る制度）の大方叢林（全く公的な大禅院）にされた。古剣は之に強く反対し、之を十刹の旧位に復し、夢窓派独占の門徒弁道の為の道場に戻さんとして、激越な言詞を以て訴状を作成し、同門の連署を集めて、幕府に訴えた。当初は中々その意見を容れなかったが、遂に幕府も折れて、康暦元年（一三七九）、臨川寺を十刹に降位した。古剣はその功によつてか、一門に推されて、同寺に住した。そして永徳二年（一三八二）八月、建仁寺（五山）（第五十八世）に昇住、その後、建長寺（五山）（第六十一世）に遷住。晩年は京都に還り、西山に寿光院を創めて退隠したが、その寂年は詳かにしない。寿光院に塔した。（下略）

さて、書簡本文には、つぎのようなくだりがある。

向在_二田里_一。竊謂幸不_レ為_レ時容_一。巖穴余樂也。春秋二時。乘_レ閑拉_二一_二二_一納子_一。一舸北_レ渡_レ拜_レ謁_レ林下_一。参

学之暇。登_レ山臨_レ水。陶_ニ治乎雲鳥之趣_一。以極_ニ旬月之歛_一焉。今不幸而為_レ時霸綫。池魚籠禽之思。不_レ足_レ為_レ喻也。蓋業縁使_レ然也。

絶海は以前（「向」字を「サキニ」と訓んだ）、「田里」に在って、「巖穴は余が楽しみなり」とひそかに思ったり、「参学の暇に、山に登り、水に臨みて、雲鳥の趣きに陶冶し、以って旬月を極む」といった生活を送っていたという。蔭木氏は「田里」を、絶海が足利義満（一三五八〜一四〇八）に逆らって隠棲した、摂津有馬の羚羊谷牛隠庵とされている。その理由は、引用文の中に「春秋の二時には、閑に乗じて、一、二の衲子を拉して、一舸、北に渡り、林下に拝謁す」と記されていたが、古剣と有馬の羚羊谷の結びつきは強く、かなり頻繁に訪れていたとしてもおかしくはないからである。『臥雲日件録抜尤』享徳元年（一四五二）四月十六日条によると、古剣はかつて摂津鎌倉谷（羚羊谷）の清寥庵にいたという。また、羚羊谷（掛角菴・鎌倉谷・仏ヶ谷）には、絶海が隠棲した「牛隠（庵）」も含めて、六境（「千仞壁」「一葉溪」「鑄仏岩」「龍山」「牛隠」「振鷲瀑」）があったらしく、それを命名したのが古剣その人である。古剣の『了幻集』（『五山文学全集』第三卷所収）には、「仏谷六境」という偈頌が収められている。しかし、実際に絶海が牛隠庵に滞在したのは、至徳二年（一三八五）の四月から七月末にかけての、わずか三、四ヶ月の間なので（『仏智年譜』）、「春秋の二時」という表現に齟齬を来たすのではないだろうか。よって、稿者は、蔭木氏の摂津説には賛同できない。そして、新たに近江説を提示したい。先に百四十七番書や百五十二番書で見えてきたように、巖穴（の如き住居）に住んだり、修行の合間に雲樹猿鳥の様子を楽しんで、その生命や性質に共感したりするのは、絶海の近江における生活態度の特徴の一つで

ある。『日工集』永和五年（康暦元年）正月十四日条には「三会の回書、同じく来たりて曰く、『中津蔵主、今江州の杣と云ふ処に在り。中諦書記、いまだ在処を詳かにせず。』と」という記事があり、絶海の他にも、観中中諦が、臨川寺事件に際して行動を起こしていたことが推察される。古剣は臨川寺を、五山から十刹に復位させるのに尽力し、その結果、同寺の住持も勤めたが、同時期に何等かの理由があつて、近江で絶海と邂逅する機会を持ったのであろう。百五十二番書には「茲に古剣兄の住所を問及するを承る。今、備州の荒山（註）の中に在り」というくだりもある。

さて、「幸ひに時の為に容れられず」という近江隱遁期に対して、「今、不幸にして時の為に覇綬せらる」という本書簡の執筆状況は、いったい如何なるものであつたのであろうか。どこかの住持を勤めていたのであろうか。決定的な証拠は無いが、わたくしは、絶海が晩年、京都で大寺院の住持を勤めている時にしたためられたものではないか、と考えている。と、いうのも、絶海は引用文中において、「池魚籠禽の思ひも、喩えと為すに足らざるなり」とまで述べており、恵林寺の住持の時に比べて、明らかに多忙で、自由が利かなくなっていると思われるからである。それに、「所居、僻陋にして、世と接せざること知りぬべし」（百四十八番書）とか、「居処、僻遠にして」（百五十二番書）といった類の表現が見当たらないことも、その傍証とはならないだろうか。翻つて古剣の動静であるが、彼は臨川寺の住持を勤めた後、永徳二年八月に建仁寺、その後、建長寺とうつり、晩年は京都に戻ってきたようである。おそらく、その頃、近江の常光寺に赴く機会があつたのであろう。古剣は、絶海よりも十八歳も年長に当たるので、その寂年は不明だが、年齢的なことを考慮すると、両者に書簡のやり取り

があつたのは、絶海が等持寺の住持を勤めている頃ではないだろうか。季節は、「正月、梁蔵主の往くとき、書を奉じて敬を致す」や「茲に遜侍者到り、正月廿六日の書を出し示す」というくだりがあるので、春である。なお、蔭木氏は「池魚籠禽の思ひ」に対して、「束縛されて自由でない譬え」「ここは等持寺住持になったこと」「二二六頁」という注を付されている。

(注)「荒山」に関して、蔭木氏は、所在不明とされているが、「荒れ果てた山」という普通名詞の可能性もあるだろう。百五十番書に「幸ひに荒山僻郡の中に在りて」という用例がある。傍線は私に施した。

おわりに

以上、今回は『蕉聖藁』の書簡類(一四六～一五四)を見てきた。いま一度、その執筆状況を確認する。

- ・「金剛の物先和尚に与ふる書」(一四六) ……京都での作、永和四年(一三七八)の春
- ・「光祿相公に与ふる書」(一四七) ……近江での作、永和四年(一三七八)の冬
- ・「報恩の義堂和尚に答ふる書」(一四八) ……近江での作、康暦元年(一三七九)の夏
- ・「法華の元章和尚に与ふる書」(一四九) ……甲斐(恵林寺)での作、永徳元年(一三八一)の秋の終わり
- ・「久菴和尚に答ふる書」(一五〇) ……甲斐(恵林寺)での作、永徳元年(一三八一)の秋の初め
- ・「久菴和尚に答ふる書」(一一五二) ……甲斐(恵林寺)での作、永徳二年(一三八二)の春の終わり
- ・「椿庭和尚に答ふる書」(一一五二) ……近江での作、康暦元年(一三七九)の夏

・「円覚の椿庭和尚に与ふる書」(一五三)：甲斐(恵林寺)での作、永徳二年(一三八二)の秋の終わり

・「常光の古剣和尚に答ふる書」(一五四)：京都(等持寺)での作、至徳三年(一三八六)以降の春

こうして見ると、詩作品の場合と同様、大体、執筆年代順に整理されているようである。例外は、百五十番書と百五十二番書である。前者は、前後の書簡(百四十九、百五十一番書)と同じく甲斐での作で、執筆時期が少し乱れているだけである。対して、近江でしたためられた後者は、甲斐での作が続く中(百四十九～百五十一、百五十三番書)、何故か一通だけ混入し、しかも執筆時期もかなりずれている。いったいこれらの事態を、どのように説明すればよいのだろうか。

ここで稿者は、例外の両書簡(百五十、百五十二番書)の直後に、それぞれもう一通、宛名が同じ書簡(百五十一、百五十三番書)が位置していることに注目する。畢竟、絶海(もしくは編者の鄂隠慧蔵)の配列意識(意図)として、基本的には執筆年代順であるが、宛名が同じ書簡が二通ある場合は、執筆時期の早い方を、遅い方の直前に配列させて、二通セットにするという意識(意図)があったのではないか、ということである。このようなパターンは、詩作品を考察する際には見受けられなかったが、今回の結果も踏まえながら、今後も疏(二二九～一四二)、序(二四二～一四五)、説・銘(一五五～一六三)、祭文(一六四～一六六)を見ていきたい。

第三章 絶海中津の自然観照

はじめに

五山禅僧は『三体詩』を愛読し、初心者向けの作詩参考書として講義をしたり、「抄物」を作成した。『三体詩』（南宋・周弼編）は、七言絶句・七言律詩・五言律詩という二つの詩型に分けられ、さらに、「虚」の句と「実」の句の配置によって、各詩型が細かく分類されている。これは、言い方を換えると、周弼が詩を、「虚」の句と「実」の句から成ると考えていたことになるのではないだろうか。ここに言う「虚」「実」であるが、周弼自身は「虚」を「情思」、「実」を「景物」としている（五言律詩「四実」および「四虚」の序文による）。稿者は、今のところ「外界の客観的、具象的な存在を描くものが「実」であり、感情、思考すなわち作者の胸中を写し出すものが「虚」であると考えてよかろう」（中国古典選29『三体詩』一、朝日新聞社、昭五三）という村上哲見氏の説に従っている。

さて、わたくしは、絶海中津（二三三六―一四〇五）の作品世界の中核に切り込んでいく手立てとして、今回は実験的に、彼の詩（偈頌）作品の「実」の句、特に自然を描写した句に注目して、考察を進めてみたいと思う。なお、ここで言う「自然」とは、山水や、風雲月露花草禽獸といった自然現象や自然物を指している。

一 絶海中津の文学とその実践

「不立文字」「教外別伝」を標榜する禅僧にとって、文学とは元来、戒められるべき存在である。にもかかわらず、わが国の禅僧は、詩文を作成した。彼らをして詩文に走らしめた外的契機について、芳賀幸四郎氏は「大陸禅林における詩文流行の影響」「禅僧にとって文学的才能が禅の道力以上に重要な資格、少くも名声をあげる重要な条件となってきたこと」「支那や朝鮮との国交が恢復したため、文字の力のある彼等が外交を管掌し国書を作成し、使節の任にあたり或いは彼の使節との応酬接待の任にあたるようになったこと、或いは彼等があたかも江戸幕府における林家の場合の如く、室町幕府の文化上の顧問となったこと」¹⁾の三点を指摘しておられる。禅僧の文学観を通時的に見ると、学道が第一義ならば、文章も容認する（決して本末転倒してはならない）という考え方から、詩禅一致論への流れを、大まかに想定することができる（芳賀氏・前掲書）。絶海の文学観は、如何なるものだったのだろうか——。本論に入る前に、まず確認しておきたい。ただし、実際、絶海は自身の文学観を、直接説いてはいないので、彼の作品や年譜からそれを読み取る以外に方法はない。『仏智広照浄印翊聖国師年譜』²⁾（以下、『仏智年譜』と略す）の貞和四年（一一三四八）条の本文を挙げる。

貞和四年戊子。師年十三歳。烏頭而列¹⁾天龍籍²⁾。正覚移而養³⁾老于西芳精舎⁴⁾。師時時往侍⁵⁾之。適月夜励⁶⁾声
唔⁷⁾。正覚定起燈下呼来試⁸⁾之。師輒掩⁹⁾卷暗誦琅琅。如¹⁰⁾壑水之奔注¹¹⁾。正覚云。此兒他日必為¹²⁾禦侮之器¹³⁾者。
宜¹⁴⁾在¹⁵⁾叢林文字¹⁶⁾。徒¹⁷⁾可¹⁸⁾使¹⁹⁾役于茲²⁰⁾哉。師固請曰。見性在²¹⁾文字²²⁾哉。執²³⁾待左右²⁴⁾素願也。正覚奇²⁵⁾其言²⁶⁾。

【注】「正覚」とは夢窓疎石。天龍寺第二世の無極志玄の『無極和尚伝』貞和三年条（『統群書類従』第九輯下所収）にも、「国師（夢窓）、時に西芳精舎に在り」という記述があり、同寺の開山である夢窓が、西芳寺に隠棲して、老後を養っていたことがわかる。

絶海は十三歳の時、天龍寺の喝食（僧童）となり、時折、西芳寺の夢窓疎石（一二七五—一三五二）に随侍していた。ある月夜の晩、絶海は大声を出して本を読んでいた。夢窓は禅定を終えた後、灯下に絶海を呼び寄せて試問をしたところ、驚くほどの確に暗誦していた。夢窓が「此の児、他日、必ず禦侮の器と為る者なり。よろしく叢林の文字に在るべし。徒に茲に使役すべけんや」と言うと、絶海は「見性は文字に在らんや。左右に執侍するは素願なり」と答え、夢窓を感心させたという。ここで注目すべきは、当時、十三歳の絶海が、夢窓の学問奨励に対して、見性成仏（自己の本性をさとって仏に成ること）は学問にあらうか、とそれを拒絶し、夢窓の側に執侍することを望んでいることである。この逸話を文字通りに解釈するならば、年少期の絶海は、仏道修行に専心し、文学や学問に心を乱されることもなく、禅の宗旨に違わない生活を送っていたことが窺われる。ただし、前編で縷述したように、『仏智年譜』は、絶海の弟子である叔京妙祁が撰述したもので、ある程度、誇張して記されている可能性があり、そのことを差し引いて考えなければならぬかも知れない。

『蕉堅藁』所収の、「維れ康暦二年、歳、庚申に次る、冬十月十八日、天錫座元寿公禪師、洛の西山に示寂す。越えて十一月十八日、訃至る。甲州惠林禅寺住持法弟比丘中津、虔んで香茗菲薄の奠を具えて、昭らかに法兄の靈に告げて曰く」にはじまる「寿天錫を祭る文」（一六五）には、「余、年十八、移りて東山に隸す。公も亦た

随ひ至る。同じく艱辛を嘗む。鋭志講習し、斯文を研磨す。觚を操りて、月夕風晨を詠賞す」という文章がある。これによると、絶海は十八歳の時（文和二年（一一三三））、天錫周寿らと建仁寺に掛錫し、一生懸命に勉強し、また儒道を研磨した。また、文章を作り、月夕風晨を詠じ賞したという。『仏智年譜』によると、この時、絶海は龍山徳見（第三十五世、一二八四～一三五九）の高風に触れ、彼から元朝系の古林派（金剛幢下）の思潮を学んだと思われる。なお、金剛幢下の家風に関して、玉村竹二氏は「高雅勁直」の四字に尽きるとして、如何にも誇張がなく、しかも貴族的な風韻を存し、決して繊弱に流れず、頽廢に墮せず、正統的な健全さを有しながら、凡俗な常識を遙かに超えている。その風を表わす最も端的なものは、墨跡である。

（日本歴史新書『五山文学』、至文堂、昭四一、八三頁）

と説明されている。また、その作品の表現形式は、殆ど「偈頌」の域を出なかつたらしい。

『蕉堅藁』の「真寂の竹菴和尚に呈す」詩（一）から抜粋する。

（Ⅰ）絶海蔵主力究ニ本参一。禅燕之餘間事ニ吟詠一。吐レ語輒奇。予帰ニ老真寂一。（下略）

（Ⅱ）絶海蔵主。嘗依ニ今龍河全室宗主一。於ニ中天竺室中一参ニ究禅学一。暇則工ニ於レ詩。又得ニ楷法於西丘竹菴禅师一。故出レ語下レ筆俱有ニ準度一。

洪武六年（応安六年、一三七三）十二月二十日、真寂山（4）において、これから江東地方（金陵）へ赴かんとする絶海は、清遠懷渭（竹菴和尚）に留別詩（一番詩）を贈呈し、対する清遠は、見心来復や易道夷簡とともに送別詩（一番詩A・B・C）を唱和した。（Ⅰ）は清遠、（Ⅱ）は易道の和韻詩の序文からの一節である。（Ⅰ）に「絶

海蔵主、力めて本参を究め、禅燕の餘りに、まま吟詠を事とす、(II)に「絶海蔵主、嘗て今の龍河の全室宗主に依りて、中天竺の室中に禅学を参究し、暇あるときんば、則ち詩を為るに工なり」とあるように、絶海が中国留学中、禅道修行の余暇に作詩していたことが知られる。なお、(II)にも記されているように、中国における絶海は、季潭宗泐(全室和尚、一三一八〜九一)や清遠に師事し、彼らから当世風(元朝系の大慧派)の思潮を受けた。この派の特質は、同じく玉村氏によると、「禅林の実用文書作成に際して四六駢儷文体使用の徹底化と、貴族社会の社交手段、或は教養としての純文芸(詩文)の賞玩」(九二頁)の二点にあるという。

『蕉堅藁』を読んで気付くのは、詩名が高い同輩僧を賞讃したり、少年僧の詩作や学問を喜ぶ詩句が散見することである。例えば、前者の用例としては、「本是れ詩を能くする天上の僊」(四十六番詩第二首目)、「千鈞の筆力は鼎を扛ぐるに堪へ、万丈の文光は天を熱かんと欲す」(六十二番詩第二首目)、「我が朋寛仲は今の詞伯」(六十八番詩)等、後者の用例としては、「喜び見る、詩の態多きを」(七十六番詩)、「忽ち喜ぶ、劍童の詩句の新なるを」(百二十二番詩)、「愛す、爾が書を攤きて満床に解するを」(百二十三番詩)等が挙げられる。とくに後者のは、絶海が晩年、大寺院(等持寺・等持院・相国寺)の住持を勤めている時に詠まれたものである(本編第二章第三節参照)。この他、『蕉堅藁』には「某、徳性温良、語言簡遠、吟は禅林の風月に老い、眼は仏国の乾坤に空す」(百三十一番疏)、「楓陛に赴きて三山の詩を賦し、茶盃を蕩かして以つて万乗の上に対す」(百三十三番疏)、「和尚、徳は中に蘊み、文行は外に顕著なり」(百四十八番書)、『絶海和尚語録』(以下、『絶海録』と略す)巻下には「天資英邁にして、文思博贍なり」(二百七十三番詩)等と、他の禅僧の作品や文学活動

を賛美する表現が見受けられる。

こうして見ると、絶海は、特に年齢を重ねることに、文学や学問に理解を示すようになったと言えるかも知れない。『仏智年譜』や『勝定国師年譜』（以下、『勝定年譜』と略す）を見ると、絶海は晩年、足利義満（一三五八〜一四〇八）や渋川幸子などに『金剛経』、『円覚経』、『十牛図』等の講義をしているし、『勝定年譜』によると、明徳四年（一三九三）、絶海が半夏以後、相国寺に禅僧を集めて頌会を催したところ、それがその後、年中行事になったという。勿論、両年譜を繙くと、修行に関する記事は散見する。これは、一つには、行雲流水の修行僧から大寺院の住持へと環境が変化し、交流範囲の拡大が齎した結果と考えることもできるだろう。例えば、五山文学作品には、和韻詩が非常にたくさん見受けられるが、その大部分は、社交友誼の手段として作成されたものである（本編第五章参照）。当時、禅林社会の中核的な立場に在った夢窓や春屋妙葩（一三一〜一八八）や義堂周信（一一三二〜一八八）には、特に和韻詩が多い。義堂に至っては、全詩（偈頌）作品中、半数以上が和韻詩である（義堂の詩〈偈頌〉作品は『空華集』⁶に収められており、総数一八九六首中、和韻詩は九五八首〈約五〇・五％〉である）。ただし、絶海は、文学や学問に捉われてはいないと思う。と、いうのも、義堂に比べて格段に和韻詩が少ないし（絶海の詩作品は『蕉堅藁』、偈頌作品は『絶海録』に収録されている。前者は総数一七二首中四〇首〈約二三・三％〉、後者は総数一二〇首中三六首〈三〇・〇％〉が和韻詩である）、何よりも独自の文学論を展開していないからである。この推論が正しいか否かは、絶海の自然描写や自然観を見るうちに、自ずから明らかになって来るだろう。

二 絶海中津の自然描写（概観）——『蕉堅藁』を中心に——

さて、いよいよ本論に入る。まずは『蕉堅藁』における自然描写を見ていきたい。ただし、厳密に言うと、「自然を中心にした描写」である。『蕉堅藁』の巻頭詩である。

一 真寂の竹菴和尚に呈す

不堪長仰止 長く仰止するに堪へず、

渚上寄高踪 渚上、高踪を寄す。

流水寒山路 流水、寒山の路、

深雲古寺鐘 深雲、古寺の鐘。

香花嚴法会 香花、法会を嚴にし、

氷雪老禪容 氷雪、禪容老ゆ。

重獲霑真藥 重ねて真藥に霑うるほふを獲て、

多生慶此逢 多生、此の逢を慶ぶ。

これは、第一節でも触れたが、絶海が清遠に贈呈した留別詩である。頷聯の「流水、寒山の路、深雲、古寺の鐘」に着目する。首聯では、いつまでも仰ぎ慕うだけでは我慢できず、渚のほとりの和尚の会下に身を寄せました、と清遠への追慕を語り、頷聯では、清遠の住処（寺庵？）の周りの（真寂山の）様子が描かれている。ここ

で、『三体詩』の「齊山人を送る」詩（韓翃）に、「柴門、流水、依然として在らん。一路、寒山、万木の中」という句があることに着目したい。『三体詩素隠抄』（博文叢書第四冊。以下、『素隠抄』と略す）には、

●柴門……サテ山人ノ帰り去ラルル処ハ、イカヤウナル地ゾト云ヘバ、モトカラ棲ミナレシ処ノ柴門ノ前ニ、流水ガ一筋アルガ、ソレガ、チツトモカハラズシテ、旧キニヨツテ、依然トシテアルゾ、ソノアリ処ハ、如何ナル処ゾト云フニ、万木ノシゲリ合フタル中ニ、路ガ只ダ一筋アルゾ、誠ニ人跡絶エテ、真ノ仙境ト云フベキ境界ゾトホメタゾ、コノ山人ノ居処ノ體ヲ、韓翃ガ推量シテ云フタゾ、サルホドニ、依然トシテアラント、^(マ)點ヲヨンダガヨイゾ

という抄文が付されており、これによると、齊山人のものと住処の柴門の前には、依然として一筋の流水が在り、そこへは、多くの木々が繁り合っている中を、ただ一筋の路が通っているだけである。それは、真の仙境と言うのに相應しい境界という。翻って、『蕉堅藁』巻頭詩の三句目であるが、清遠の住処の様子は、齊山人のそれと、「流水」と「路」の配置が少し違うだけで、他はあまり変わらないように思われる。清遠が住む物寂しい山には、谷川沿いに路が通じている。韓翃が二句で表現した風景を、一句で遜色無く表現し得ている、絶海の詩人としての力量は、やはり評価されるべきであろう。そして、そこに、深雲のあたりにある古寺から鐘の音が聞こえて来るのである。この一句によって、閑寂な風景に、空間的な広がりや、奥床しさが加わっている。古来、この頷が人口に膾炙したのも、頷けるような気がする。頸聯以降も見ておく。頸聯において、絶海の視点は、清遠の住処の周囲から、彼の法会や容貌へとさらに注視され、尾聯において、清遠に逢えたことを素直に慶んでいる。

つぎは『蕉堅藁』の十三番詩の本文を挙げる。

一三 早あしたに発たつ

冬行苦短日 冬行、短日に苦しみ、

蓐食戒長途 蓐食、長途を戒む。

雪暗関河遠 雪暗くして、関河遠く、

風吹鬢髮枯 風吹きて、鬢髮枯る。

荒山雖可度 荒山、度わたるべしと雖も、

積水若為逾 積水、若いか為かにか逾こえん。

岸転橋何在 岸転じて、橋は何いづくにか在る。

沙危杖屢扶 沙危くして、杖、屢々たす扶く。

漁箒残近渚 漁箒、近渚に残り、

僧磬徹寒蕪 僧磬、寒蕪に徹す。

埜興潜中動 埜興、潜かに中に動き、

衰容頗外蘇 衰容、頗る外に蘇る。

破衣江上歩 破衣、江上に歩み、

円笠月中孤 円笠、月中に孤なり。

天廻長河没

天廻ほろかにして、長河没し、

曙分群象殊

曙分かれて、群象殊なる。

寒烟人未爨

寒烟、人いまだかし爨がず、

野樹鳥相呼

野樹、鳥、相呼ぶ。

回首樽桑日

首を回らせば、樽桑の日、

還如萍実朱

還また萍実の朱きが如し。

この詩からは、絶海が中国大陸を抖擻行脚する様子が窺い知れる。一、二句目によると、冬の旅は、日が短くて苦勞するので、(寢床の中で)朝早く食事を済ませて、長旅に備えたい。けれども、このような過酷な旅の中にあっても、「雪暗くして、関河遠く」(三句目)、「荒山、度るべしと雖も、積水、若為にか逾えん」(五、六句目)、「岸転じて、橋は何くにか在る」(七句目)、「漁簞、近渚に残り」(九句目)と、絶海の視線は、眼前に広がる風景全体から、彼が進行する方向へと向けられている。それは、十一句目に「埜興、潜かに中に動き」とあるように、旅を続けるうちに、原野の眺めを楽しもうとする心が、密かに躍動したためであろう。「首を回らせば、樽桑の日、還た萍実の朱きが如し」(十九、二十句目)——夜が明けると、あらゆる物が姿を現わし、人々はまだ朝食の準備をしておらず、鳥が互いを呼び合う中、絶海は、日本のある東の方角から上ってくる真っ赤な太陽を見つめている。稿者はここに、絶海の望郷の念と、異国での修行を貫徹しようとする前向きな気持ちとを読み取りたい。なお、十五、十六句目の「天廻かにして、長河没し、曙分かれて、群象殊なる」は、非常に

スケールの大きな表現で、日本においては、決して詠出することはできなかったであろう。

ところで、中巖円月「二三〇〇〜七五」にも、中国大陸行脚の作品が見られる。その一つ、「武夷山に遊ぶ」詩（『東海一漚集』⁷）を掲げる。

4 武夷山に遊ぶ

群峯簇簇没煙靄 群峯、簇簇として、煙靄に没し、

天柱独拔青天外 天柱、独り抜く、青天の外。

手援鉄索登雲梯 手に鉄索を援きて、雲梯を登る。

眼眩股戰心將退 眼は眩み、股は戦きて、心はまさに退かんとす。

仙翁縦臯上上頭 仙翁に縦臯されて、上頭に上れば、

别有世界窮深幽 別に世界の深幽を窮むる有り。

下視下方如按図 下方を下視すれば、図を按ずるが如く、

九曲縞帶清溪流 九曲の縞帯、溪流清し。

天下洞天三十六 天下の洞天、三十六。

何縁縮在我双目 何に縁りてか縮まりて我が双目に在る。

白石鑿鑿草菲菲 白石は鑿鑿として、草は菲菲たり。

物物無不仙種族 物物、仙種の族ならざる無し。

向使秦皇曾一来　　もしたとひ秦皇をして曾て一たび来たらば、

徐生不可尋蓬萊　　徐生、蓬萊を尋ぬべからず。

吾家万里青海外　　吾が家、万里、青海の外。

到此郷念消如灰　　此に到りて、郷念、消えて灰の如し。

「武夷山」は福建省崇安県の県城南西約十キロメートルのところにある。赤色砂岩でできた低山で、福建省第一の名山。その昔、神人武夷君がここに住んでいたという。三十六峰、三十七岩、九曲溪、桃源洞等の名勝古跡がある。峯々は群がり生じて、煙霞の中に没しており、ひとり天柱の如き武夷山だけが、青天の外へ抜きん出ている。眼は眩み、股は震え、心では引き返したく思いながらも、中巖は鉄の鎖に掴まって、雲の梯子を登って行った。ところが、一旦、頂上に辿り着くと、そこには別天地が開けており、幽邃な世界がそこにあった。中巖は感激のあまり、「もしたとひ秦皇をして曾て一たび来たらば、徐生、蓬萊を尋ぬべからず」(十三、十四句目)とか、「吾が家、万里、青海の外。此に到りて、郷念、消えて灰の如し」(十五、十六句目)と詠じており、ここにひとりの、絶海とはタイプを異にした、遅しい留学僧の姿を見ることができるともいえる。なお、「徐生」とは徐福のことである。徐福は始皇帝の命令で、童男童女各三千人を率いて、不老長寿の仙薬を求めて海上に入ったのだが、ついに帰ることはなかったという(『史記』淮南衡山列伝等)。

『蕉堅藁』の四十二番詩の本文を挙げる。

四二 四明の館駅にて龍河の猷仲徹に簡す

十年寄跡江淮上 十年、跡を寄す、江淮の上。

此日還郷雨露餘 此の日、郷に還る、雨露の餘り。

客路扁舟回首処 客路、扁舟、首を回らす処、

離愁滿幅故人書 離愁、滿幅、故人の書。

謀生空擬一丘貉 生を謀りて、空しく一丘の貉に擬し、

学道深慚千里魚 道を学びて、深く千里の魚に慚づ。

浩蕩所思向誰説 浩蕩たる所思、誰に向ひてか説かん。

旅亭風雨夜燈疎 旅亭、風雨、夜燈疎かなり。

この詩は、約十年間にも及ぶ修行生活に区切りを付けて、今日、帰国せんとする絶海が、市舶司所管の四明（寧波）の宿駅で、天界寺（大龍翔集慶禪寺）の猷仲徽（伝未詳）に向けて詠んだものである。尾聯の「浩蕩たる所思、誰に向ひてか説かん。旅亭、風雨、夜燈疎かなり」について考察する。「浩蕩たる所思」は、頷聯や頸聯にあるように、別れの悲しみに溢れる猷仲徽の手紙を目にしたり、自己の空しい留学生生活を省察したことから沸き起こってきたものだろう。そして、この取り留めのない気持ちに誰に話したらよいのか、という問いに対して、旅の宿に風雨は繁く、夜灯もまばら、と続くのであるが、稿者が問題にしたいのは、七句目と八句目との間にある休止（ポーズ）である。どうも論理展開に断絶があるような気がするのである。蔭木英雄氏は、

中国大陆での十年間の修行を終るに当り、絶海の胸中はまさに浩蕩。古人の歩んだ道を信奉して兀々として行じ、

千里の魚に恥ずかしいほど徒勞の修行を続けたと告白するのを、吾人は短絡的凡知で受け取ってよいであろうか。告白は即ち脚下照顧であり、見性である。夜燈が疎らなのは、法燈を護持し宣揚する同志同行の少ないのを歎く、心象風景のように思えてならない。

〔蕉堅藁全注〕、清文堂、平一〇、八七頁

と、八句目を絶海の心象風景と見なし、前後の展開を説明されているが、わたくしはここに、禅問答や偈頌に見るが如き、表現の超論理的展開の可能性を指摘したい。禅問答や偈頌は、禅僧が個々の心境（禅境、悟境）を直接的に表出したものなので、我々には象徴的で、理解不能なものが多い。「詩とは要するに、一つ一つの存在を、それぞれの個性を充実させた形で、つまり一応他と断絶した形できわだたせた上、断絶を連続にもちきたす仕事」と定義付けられたのは吉川幸次郎氏であるが、「偈頌」は、表現形式においては詩と全く変わらないのだが、「断絶を連続にもちきたす仕事」がない。例えば、『絶海録』巻下に、つぎのような偈頌がある。

一七一 香巖擊竹

南陽塔下颺博時 南陽塔下に博を颺ぐる時、

一撃声前忘所知 一撃、声前、所知を忘す。

近代叢林無此作 近代の叢林、此の作無し。

満山脩竹碧参差 満山の脩竹、碧参差たり。

「香巖擊竹」とは、香巖智閑が悟した時の因縁である。その逸話は、以下の通りである。

鄧州香巖智閑禪師青州人也。厭俗辞親觀方慕道。在三百丈一時、性識聡敏、参禅不_レ得。泊_二丈遷化_一、遂

參瀉山^一。山問、我聞、汝在^二百丈先師處^一、問^レ一答^レ十問^レ十答^レ百。此是汝聰明靈利。意解識想、生死根本。父母未生時、試道^二一句^一看。師被^二一問^一、直得^二茫然^一。歸^レ寮、將^二平日看過底文字^一、從^レ頭要^下尋^二一句^一酬對^上。竟不^レ能^レ得。乃自歎曰、画餅不^レ可^レ充^レ飢。屢乞^二瀉山說破^一。山曰、我若說^二似汝^一、汝已後罵^レ我去。我說底、是我底、終不^レ干^二汝事^一。師遂將^二平昔所^レ看文字^一燒却曰、此生不^レ學^二仏法^一也。且作^二箇長行粥飯僧^一、免^レ役^二心神^一。乃泣辭^二瀉山^一、直過^二南陽^一、觀^二忠国師遺跡^一、遂憩^二止焉^一。一日芟^二除草木^一、偶拋^二瓦礫^一、擊^レ竹作^レ声。忽然省悟。遽歸、沐浴、焚香。遙礼^二瀉山^一、讚曰、和尚大慈恩、逾^二父母^一。當時若為^レ我說破、何有^二今日之事^一。乃有^レ頌曰、一擊忘^二所知^一。更不^レ假^二修持^一。動容揚^二古路^一。不^レ墮^二悄然機^一。処処無^二蹤跡^一。声色外^二威儀^一。諸方達道者。咸言上上機。瀉山聞得、謂^二仰山^一曰、此子徹也。

〔五燈会元〕卷第九、琳琅閣書店)

【注】「百丈」とは百丈懷海、「瀉山」とは瀉山靈祐、「南陽」とは南陽慧忠。

要するに、香巖が、文字や知識に依るのではなく、ある日、草木を取り除いていた時、偶々瓦礫を投げ飛ばすと、それが竹を直撃し、その響きに、忽然と悟ったという話である。絶海の偈頌は、この話を題材にして、自身の心境（禅境、悟境）を詠出したものである。起句や承句に、香巖が南陽（河南省の西南部）の武当山に入り、慧忠国師の遺跡に庵居して大悟に至ったことや、大悟の後に詠じた頌の一句を踏まえていることは明らかであるが、転句でいきなり最近の叢林を難じ、「満山の脩竹、碧参差たり」と結んでいる。「香巖撃竹」から「満山の脩竹」を連想したのであるが、山全体に生える長い竹は、緑色が入り交じって見えるという状態は、いったい

何を意味しているのだろうか（今のところ、典拠は見付からない）。香巖の真摯な修行態度に比べて、最近の禅僧のくつろいだ有様を、象徴的に表現したのかも知れないが、畢竟、絶海の真意を知ることができまい。ただし、彼の観念裡に渺茫と広がる悟りの世界の存在だけは、氣付くことができる。

以上のことから、『蕉堅藁』四十二番詩の八句目は、一方で深遠なる悟境の世界を象徴化したものではないか、と考えている。ただし、その具体的な表現効果や、訳出の方法などは、今後の課題である。もしかしたら、結果的には、前出の蔭木氏の解釈から一步も出ていないのかも知れないが、今のわたくしには、蔭木氏のそれは知的に思えてならず、「不立文字」や「以心伝心」を標榜する禅僧の、ある意味、主観的、感覺的な一面を生かした解釈の可能性を示唆しなかったのである。とは言え、従来注目され、いまだにその実態が解明されていない禅宗の精神美などに関して、如上の問題提起が、新たな局面を切り開く契機になるのではないか、とも思っている。さて、ここまでは、絶海の中国留学中の作品を三首採り上げてきたが、以下は、日本に帰国してからの作品を見ていく。まずは『蕉堅藁』の四十八番詩の本文を掲げる。

四八 古心蔵主の天草の旧隠に帰るを送る

金鰲背上岌神山　金鰲の背上、神山岌たり。

満地瑤華照紫烟　満地の瑤華、紫烟を照らす。

島樹深遮僊洞路　島樹、深く遮る、僊洞の路、

海潮直到寺門前　海潮、直に到る、寺門の前。

徹雲僧磬清寒殿　雲に徹する僧磬、寒殿に清く、

隔岸漁篝明夜船　岸に隔つる漁篝、夜船を明るくす。

此日送君帰絶境　此の日、君が絶境に帰るを送る。

青鞋布襪興飄然　青鞋布襪、興、飄然たり。

これは、絶海が帰国して九州に静養している時、古心蔵主（伝未詳）⁹が天草の旧隠（修行時代を過ごした寺）に帰るのを送って詠んだ詩である。絶海は、肥後の高瀬（熊本県玉名市）を発津して中国へ向かったので（百六十五番祭文）、その時、天草諸島を目にしたに違いなく、当時から異郷の地というイメージを抱いていたのである。首聯から同島を仙山に見立てて、詩を展開している。首聯は、島の全景の描写である。「金鰲」とは金色の大スッポンで、海中に住み、神仙の住処である蓬莱山を背負っているとされていた（『海録碎事』等）。「瑤華」や「紫烟」は、仙境の景物である。頷聯は、島の内部の描写である。島の木々は、仙人の住処へ通ずる路を深く遮り、海潮は、真つ直ぐ寺（古心の旧隠）の門前まで押し寄せる、という。頸聯においては、一旦、その物寂しい寺に焦点を当てた後、再び目を外に向けて、対岸の漁り火や夜船に注目している。このあたりの絶海のカメラワークは絶妙で、島の様子が、ありありと鮮明に眼前に浮かんで来よう。なお、「僧磬」には空間的な広がり、「漁篝」や「夜船」には時間的な推移を表わす効果があると思われる。

つぎは『蕉堅藁』の百七番詩の本文を掲げる。

江天日暮雪灑々　江天、日暮、雪灑々。

客路湘南魂易消　客路、湘南、魂も消え易し。

罷釣漁舟有何意　釣を罷むる漁舟、何の意か有る。

氷生埜渡嬾移橈　氷は埜渡に生じて、橈を移すに嬾し。

この詩は、絶海が晩年、京都で詠作したものである。詩題にあるように、瀟湘八景（中国湖南省の洞庭湖の南にある瀟水と湘水付近の佳景八箇所）の景目の一つである「江天暮雪」の画図に題したもので、転句や結句によると、この画図には、漁舟も描かれていたのであろうか。起句では、夕暮れの江天に雪が盛んに降っている、と画図全体を見渡し、承句になると、湘南の客路に気力も失せてしまいそうだ、と画図の中に作者（絶海）が入り込んでいいる。そして作者（絶海）の興味は、転句において、釣をやめた漁舟に移り、氷が渡し場に生じて櫂を漕ぐのも面倒くさい、と船主と一体化して、この詩を結んでいる。

瀟湘八景の画図および賛詩は、わが国の禅林社会でかなり流布し、例えば『中華若木詩抄』にも、天隠龍沢（二四二三〜一五〇〇）の「江天の暮雪」詩（二二二）が採られている。詩の大意は、抄文を参照されたい。

二二二　江天の暮雪　天隠

江天欲暮雪霏々　江天暮れんとして、雪霏々。

罷釣誰舟傍釣磯　釣を罷めて、誰か舟ぞ釣磯に傍う。

沙鳥不飛人不見　沙鳥飛ばず、人見えず。

遠村只有一簑帰　遠村、只だ一簑の帰る有り。

一二ノ句、江天ノ暮ントスル時ニ雪ガ霏々ト降ルゾ。日暮ト云イ雪ト云イ、漁人モ釣ヲ罷テ舟ヲ磯ヘ寄スルゾ。三四ノ句、マツ黒ニナリテ雪ガ降ルホドニ、沙鳥モ寒ニ閉ヂラレテ不_レ飛得_一。人モ見エヌゾ。遠村ヲ見ワタセバ、簑ガ一ツ帰ルマデ也。人ハ見エヌ、簑バカリガ帰ルトセラレタルガ、妙也。画中ノ景ヲ宛然トアリクシク云イ出ダサレタル也。天隱ハ、賛ガ取り分け上手也。

(岩波・新日本古典文学大系)

本詩は、抄文に「画中ノ景ヲ宛然トアリクシク云イ出ダサレタル也」と記されているように、絶海の詩とは異なり、画中の風景や人物と自己を一体化、同一化することもなく、画中の風景を、目の前に在るように詠出している。

最後は『蕉堅藁』の百二十五番詩である。

一二五　盆蘆

一掬盆蘆涼露浮　一掬の盆蘆、涼露浮かぶ。

軽風吹送小颼颼　軽風、吹き送る、小じて颼颼。

因思十歳繫舟处　因りて思ふ、十歳、舟を繫ぎし处、

細雨疎烟水国秋　細雨疎烟、水国の秋。

この詩もまた、絶海晩年の作である。「盆蘆」とは蘆の盆栽で、この場合、起句に「一掬の盆蘆」とあるので、あまり大きいサイズではなかったようである。五山文学には、しばしば「盆石」「盆仮山」「盆山水」などに関

する作品が見受けられる。例えば、『濟北集』卷第一（『五山文学全集』第一卷所収）には「盆石賦」が収められており、ある夏の日に盆石（青い盆に白い砂が敷いてある）を眺めて楽しんでいた虎関師鍊（一二七八〜一三四六）が、「争_二奈其髡_一何」と客に笑われたので（「髡」は「髡」の俗字で、「剃る」とか「坊主頭」の意。ここ）では、一見、何の変哲もない盆石を揶揄して述べているのだらう、「子視_二培塿_一而不知_二巨嶽_一焉。夫盆石之玩也。仮_二于山水_一矣。水_二其根坻_一者。状_二于波流_一也。蒲_二其岩隈_一者。肖_二于草木_一也」や、「今此石之高数寸。盆之広盈尺。海嶠之形状不_レ乏。碧峰入_レ雲而鬢束者有_レ之。青屏涵_レ水而壁立者有_レ之。岩洞若_レ剡而可_レ隠_二神仙_一者有_レ之。磯崎平延而可_レ釣_二魚鼈_一者有_レ之。径路狭窄而纒樵蘇之可_レ通者有_レ之。湫池互陰而似_二龍蛇_一之可_レ蟄者有_レ之。我避_二培塿之雜穢_一。省_二看養之苦役_一。玩_二此具体之微_一。又不_レ宜乎。子之嫌_レ髡者。其阜埜乎。予之不_レ嫌者。其絶岳乎」や、「又此盆石。子為_レ大乎。為_レ小乎。我吹_レ水而鼓_二起四海之洪濤_一。瀉_レ峰而垂_二下九天之飛瀑_一。洗_レ石者整_二頓乾坤_一。換_レ水者掀_二翻溟渤_一。是物之變而我之常也。夫物之小大未_レ定矣」等と論を展開させている。虎関は、高さ数寸の石と広さ一尺余りの盆に、あるいは海嶠を、あるいは雲に入っている碧峰を、また、あるいは神仙が隠れていそうな岩洞、魚鼈が釣れそうな磯崎、龍蛇がひそんでいそうな湫池などを観じている。すなわち、「此の具体の微を遊ぶ」と記されているように、具体的なものの中に「微」なるものを観じていたのである。このような物の見方は、『蕉堅藁』百二十五番詩にも通じていると思う。

手のひらサイズの蘆の盆栽に冷え冷えとした露が浮かび、軽やかな風がそよそよと吹いてくる。この起句と承句の情景が契機となって、絶海は十年間、舟を繋いでいた江南の地を思い起こし、「細雨疎烟、水国の秋」と結

んでいる。おそらく長江の水辺に群生する蘆が、秋になって穂をつけているさまを想起したのだろう。ここで、「細雨疎烟」に関して考えてみたい。『素隠抄』を繙くと、例えば、杜牧の「江南の春」詩の「南朝、四百八十寺、多少の楼台、煙雨の中」という句に対しては、

世上ハ、ドコモカモサザメキテ、ユウシケレドモ、杜牧ゴトキ才智アル者ハ、今ノ代ニハ用キラレズシテ、ヤウヤウ宣州ノ守護ヅレニナサレテ、江南道ヲ通ルトテ、南朝四百八十寺ノソコバクノ楼台ドモガアリシヲ見タゾ、我が身ノホドヲ悲ミテ、涙眼ニテミルホドニ、煙雨ノ朦朧タル中ニ見ルヤウデ、分明ニモ見エヌトゾ、又ハ煙雨ヲ以テ天下ノ暗昧ナルニタトヘテ、世ヲ諷シタゾ、

また、同じく杜牧の「昔遊を念ふ」詩の「半醒、半酔、遊ぶこと三日、紅白の花開く、煙雨の中」という句に対しては、

又ノ義ニ云フ、酩酊ト、メタトヨツテ、酔中ニ花ヲ看ル程ニ、梅ヤラウ、杏ヤラウ、李花耶、梨花耶ヲモ分
別ナク、紅白ト看ルマデデ、煙雨ノ中ノヤウニ、朦朧ト看ナイタリシモノヲト見タコソ面白ケレゾ、

という注が付されている。これらを参考にすると、小雨と切れ切れのもやが入り交じっていて、朦朧として分別
がつかず、水墨画さながらの風景を言うのであろう。『素隠抄』には「青山ノ上ニ煙雨ノカカリテ、濛濛トシタルヲ見レバ、本分現成ノニツノ境界ガソナハリテ、一入オモシロキトゾ」（「春山」・僧貫休・「重畳たり、太古
の色、濛濛たり、花雨の時」という記述もあり、禅僧が、朦朧（濛々）とした景色をプラス評価し、そこに、
本分（ものや人に本来備わった分限）と現成（悟りの姿がそのまま）目前にあらわれていること。禅宗用語）

という二つの境界が備わった状態を見出していたことが知られる。換言すると、朦朧（濛々）としたものを、その表層で捉えるだけではなく、自身の渺茫たる悟りの世界を通して、その本質において捉えようとしていたのである。このような物の見方は、虎関が言う「此の具体の微を玩ぶ」と共通するのではないだろうか。絶海は『蕉堅藁』百二十五番詩において、蘆の盆栽を見ながら、長江沿岸の蘆の群生を思い起こし、それと同時に、自身を深遠なる悟境の世界に解き放つことによつて、小雨と切れ切れのもやが入り交じった、朦朧とした情景を思い浮かべたのであろう。

三 絶海中津の自然観（山水観）——山居十五首と書簡を中心に——

絶海は自然をどのように捉え、そして、どのように接していたのであろうか——。

まずは『蕉堅藁』の「山居十五首、禅月の韻に次す」詩（三四）に注目せざるを得ないだろう。山居詩とは「（自然に囲まれた）山中に隠棲すること」を詠んだもので、初期の禅僧の作品には、比較的よく見られる詩材である。三十四番詩は、絶海が中天竺寺で修行している時に詠作したものである（本編第二章第二節参照）。紙面の都合で、全文を引用することは避けるが、絶海が修行目的以外に、山居した動機的一端については、以下の詩句から推察することができる。

①人世由来行路難 人世、由来、行路の難。

閑居偶得占青山 閑居、偶々青山を占むるを得たり。

（第一首目、一〜二句目）

②幽居日々心多楽 幽居、日々、心、楽しみ多し。

城市醺々人未醒 城市、醺々として、人、いまだ醒めず。 (第九首目、七く八句目)

③空王住処堪依止 空王、住する処、依止するに堪へたり。

回首人間事々乖 首を回らせば、人間、事々、乖く。 (第十二首目、七く八句目)

④嬾拙無堪世事勞 嬾拙、世事の勞に堪ふる無く、

沈冥高臥興滔々 沈冥、高臥して、興、滔々。 (第十三首目、一く二句目)

⑤久知簪組為人累 久しく知る、簪組の人の累ひと為るを。

製得荷衣勝錦袍 荷衣を製し得て、錦袍に勝れり。 (第十三首目、五く八句目)

山中とは対極に位置する人間世界(俗世間)は、元来、渡り難く、やる事なす事、思い通りに行かないことが多い(①・③)。高位高官が人の煩いとなることなどは十分承知している(⑤)、と絶海は言う。②では、都市に住む人々を評して、酒に酔っぱらっていて、まだ目覚めていない、と詠じているが、『三体詩』の「金山寺」詩(張祜)には、「因つて悲しむ、城市に在りて、終日、酔うて醺醺たるを」という句があり、『素隠抄』に、

コノ二句ハ、張祜ガ情思ヂヤホドニ虚ゾ、言フハ、コノ寺ノ実景ヲ見聞セシニ因ツテ、我ガ身ノ城市ニ在リ、毎日朝ヨリ暮ニイタルマデ、飲酒シテ、ウチ酔フテ酒氣ノ醺醺トサカクサキニマヒレテ、出世間ノ法ヲ聞カザル事ノカナシサヨトゾ、

という抄文が付されている。要するに絶海は、④にもあるように、俗世間における煩わしさに拘泥することを避

けるために山居した、と考えるのが妥当であろう。他の禅僧の山居詩を概観すると、「久しく人間を捨てて愛惜無し」(『永平広録』¹⁰卷第十・「山居十五首」)、「悠々たる世事、榮辱多し」(『南遊集』・「草庵首座の山居に和す」)、「浮世の豪華、隣りと作すに懶し」(『閻浮集』・「靈江の山居の韻 十首」)、「豈に是非、名利の間に入らんや」(『閻浮集』・「山居の韻に和す」)、「人間、十事、九功名」(『漁庵小藁』・「山中(春) 十首」)等の詩句があり、具体的に禅僧を煩わしく感じさせるものとして、愛惜、榮辱、豪華、是非、名利、功名など、現象的、相対的なものが挙げられている。『中華若木詩抄』には、「コノ桃ニ限ラズ、世上ノ榮ト云モ辱ト云モ、悲コトモ歎コトモ、朝暮ニ変リテユク物ゾ」(九十四番詩の抄文)という記述も見られる。なお、絶海は当該詩以外でも、「応世、今、夢無し」(二番詩第一首目)、「身を觀ずれば、渾て夢に似たり。世に在りて、澹として當み無し」(七番詩第一首目)、「世上の險夷、何ぞ論ずるに足らん」(五十六番詩)、「世事、從來、変態多し」(九十七番詩)と述べている。

再び絶海の山居詩に戻る。第五首目に「無数の峯巒、梵宮を囲む。自然に世と相通ぜず」、第八首目に「幽栖、地僻にして、人の知ること少なり」、第九首目に「此の地、由来、俗駕無し。移文、何ぞ必ずしも山靈に託さん」とあるように、実際に絶海が隠棲した中天竺寺は、無数の山々に囲まれていて、世間との交わりも無く、俗人も尋ねて来ないし、回し文を山靈に託して、人を立ち寄せないようにする必要もないという(「北山移文」参照)。つぎに、このような環境にあって、絶海がどのように日々を過ごしていたのか、を問題としたい。

⑥ 壺中風景四時兼 壺中の風景、四時兼ね、

山色溪光共一簾

山色、溪光、共に一簾。

(第三首目、一〜二句目)

⑦ 静者襟懷久曠夷

静者の襟懷、久しく曠夷。

白頭嬾剃雪垂々

白頭、剃るに嬾し、雪垂々。

(第四首目、一〜二句目)

⑧ 有山何処能如此

山有るも、何れの処か能く此くの如からん。

憶得蓬萊碧海東

憶ひ得たり、蓬萊、碧海の東。

(第五首目、七〜八句目)

⑨ 身安心楽在無求

身安く、心楽しきは、求むる無きに在り。

自是僦人不肯休

おのづか 自らは是れ僦人、肯あへて休せず。

(第十首目、一〜二句目)

⑩ 问我山居有何好

我に問ふ、山居、何の好きことか有る、と。

此中即是四禪天

此の中、即ち是れ四禪天。

(第十四首目、七〜八句目)

はじめに⑦と⑨について。「静者」という語は、『論語』雍也第六(中国古典選)に「子曰わく、知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は樂しみ、仁者は寿いのちながし」とあるのを踏まえ、静かに山を樂しむ者、すなわち、ここでは絶海自身を指している。山中における絶海の胸の内は、広くて平らかであった。身体が安らかで、心が楽しいのは、求めるものが無いからだという。また、先掲の②では、静かな住まいは、毎日、心に樂しみが多いこと、④では、ひっそりと世間の煩いを避けて暮らしていると、興味が尽きないことが述べられていた。『中華若木詩抄』には、李太白の「山中問答」詩(一五三)の「余に問う、何の意ぞ、碧山に栖む、と。笑つて答えず、心、自から閑なり」という句に對して、

一二ノ句、世上ノ俗人ガ山中へ来テ李白ニ問ゾ、「此山中ノ寂寞タル処ニハ、何トシタル意ニ居住アルゾ。人間外レタルコトカ」。李白ガ一笑シテ、一向ニ俗人ニ取り合ワズ、口ニ風ノ引ニ返事シテノ用ハト云タル顔ヲシテイタゾ。ソコデ、いよ弥心中ガ涼シク閑ニ覺エタゾ。

という注が付されている。きつと絶海の心中も涼しくて、閑かだつたはずである。

ところで、絶海は、如上のように、自身の心と身体を解き放たせてくれた山中を、ある時は「壺中」(⑥)、また、ある時は「蓬萊」(⑧)、「四禪天」(⑩)などと称している。「壺中」には、費長房の故事が踏まえられている。費長房が市場で出会つた葉売りの老翁(仙人)は、商売が終わると、壺の中に跳び入つたが、そこには、美しい宮殿やうまい酒、よい肴が満ち溢れていたという話である(『後漢書』方術伝)。要は「壺中」とは、仙境や別天地を意味していよう。「蓬萊」も東海の東にあつて、仙人が住んでいたという仙山である。『袖中秘密藏』(『五山文学新集』第四卷所収)には、「蓬壺嶋」という詩題のもと、宗曙以下七人の禅僧の詠作が収められている(全八首中三首、恣意的に挙げる)。

門外蓬萊興不_レ窮、神仙長護梵王宮、一十有五巨鰲首、戴_二宝壺_一来献_二主翁_一 曙(宗曙)

寺前小嶋是蓬萊、自使_二神仙意不_レ埃、好是壺中秘靈菓、巨鰲万歳駕_レ山来 暉(朝暉)

寺前一嶋是蓬宮、○勢自_二金鼈背上_二通、瑤草琪花無数景、四時留秘_二玉壺中_一 繁(茂伯榮繁)

「四禪天」については、『岩波仏教辞典』に、

色界の四種の禪定・(四静慮)ともいう。(色界)は三界のうち(欲界)を超えた清浄な世界であるが、(無

色界〕より下で、未だ物質性が残っている。禪定によって到達する境地を象徴するものと考えられる。〔初禪〕は欲望から離れることによる喜び（離生喜樂）、〔二禪〕は禪定から生ずる喜び（定生喜樂）、〔三禪〕は通常の喜びを超越した真の喜び（離喜妙樂）、〔四禪〕は苦樂を超越した境地（非苦非樂）をそれぞれ特徴とする。四禪のそれぞれによって到達される世界が〔四禪天〕である。

（三五五頁、「四禪」の項より抜粋）

と説明されている。『竺儂和尚語録』巻中に「身は四禪に在りて、正樂に居す」（「禪居和尚の東山建仁に赴くを送る 二首」）、『空華集』巻第四に「四禪天の樂しみは、人間に在り」（「屋漏に因りて衆に示す」）、『乾峰和尚語録』巻之五に「樂しみは三禪に在りて、四禪に及ぶ」という用例があるように、「四禪天」には、樂しみが伴っている。それは、「禪定」（心靜かに瞑想して、真理を考えること）によって心身ともに動揺することがなくなり、安定したことから来る喜び、樂しみであり、絶海が山居することにより獲得した心身の状態と相通ずる部分があったものと思われる。とにかく絶海にとって山中は、「壺中」や「蓬萊」の如く、俗世間から離れていて、靜謐かつ清淨なところであり、それ故に「四禪天」に達したが如く、自身の心身が安定し、そのことに喜びや樂しみを感じるところでもあった。彼が「餘生、まゝ、山林に向かひて老ゆ。山林を除却して、何れの所にかかかん」（第四首目）と詠じたのも、成程首肯できる。

最後に、絶海の山居詩を考察し終えるに当たって、他の禪僧の山居詩には描かれていて、絶海のそれには描かれていないものを指摘しておきたい。それは、寂寞感や寂寥感である。山中は物靜かで、人の往来も無く、いく

ら禅僧と言えども、その胸に去来する寂しき、心細さを吐露せずにはいられなかつたようである。先に引用した『中華若木詩抄』百五十三番詩の抄文にも「此山中ノ寂寞タル処ニハ、何トシタル意ニ居住アルゾ」とあつたし、同書には「世上ニアレバ山居ヲ思ヒ、山居ナレバ又世上ノ念アルハ、常ノ習也」（百五十五番詩の抄文）という記述もある。その他、『永平広録』巻第十に「幾ばくか悦ぶ、山居、尤も寂寞たるを」（「山居 十五首」）、『閻浮集』に「山中、寂歴にして、人の問ふ無し」（「靈江の山居の韻 十首」）、『黄龍十世録』に「寂寞たり、道人の家」（「明極老人の山中雜言十章、韻に倚りて志を言ふ」）等の詩句も見られる。また、つぎに挙げる寂室元光「一二九〇〜一二三六七」のものなどから、西行の和歌を想起してしまうのは、わたくしだけであろうか。

山居

不求名利不憂貧 名利を求めず、貧を憂へず、

隱処山深遠俗塵 隱処、山深くして、俗塵に遠ざかる。

歳晚天寒誰是友 歳晚、天寒くして、誰か是れ友、

梅花帶月一枝新 梅花、月を帯びて、一枝新たなり。

『永源寂室和尚語録』卷之一、『国訳禅学大成』第二十五卷

絶海には「寒山、拾得、高風邈はるかなり。物外の清遊、誰と与ともにか同じからん。」（第十五首目）という詩句もあるが、これは、山中での暮らしが寂しくて詠んだものではなく、寒山と拾得の高風に憧れ、彼らに匹敵する禅僧にならんとして詠んだものであろう。

つぎに稿者が注目するのは、絶海の書簡類『蕉堅藁』百四十六〜百五十四番書)である。これらは、絶海が近江や甲斐(恵林寺)に赴いている時にしたためたものである。各書簡に目を通すと、近江の住居に関しては「所居、僻陋にして、世と接せざること知りぬべし」(百四十八番書)、甲斐の住居(恵林寺)に関しては「跡を荒棘に竄す」「幸ひに荒山僻郡の中に在りて」(百五十番書)、「居処、僻遠にして」(百五十三番書)と記されており、絶海が両地を、京都から遠く離れた片田舎と認識していたことがわかる。しかし、絶海は、辺境の地における、言わば、隠者的な生活に満足し、自ら楽しんでいたようである。と、いうのも、「某、丘壑の埜情、世に求めて、いまだ嘗て達官貴遊の門に趨謁せず」(百四十七番書)、「某、以つて巖穴に竄伏して」や「人生はいまだ尽きず。只だ太平の逸民たるを得ば、其れ亦た足りなん」(百五十二番書)、「巖穴は余が楽しみなり」(百五十四番書)という記述があるからである。「丘壑」とはおかたにであるが、転じて隠者の住居、またその楽しみを言う。『永源寂室和尚語録』卷之一に「餘生、羸^かち得たり、丘壑に安ずることを」(「再び震巖和尚の韻を用ふ」)、『乾峰和尚語録』卷之五に「最も愛す、丘栖壑処の地」(「高野十韻に和す」という用例がある。「巖穴」とはいわあなであるが、転じて世間を離れた所を言う。「巖穴ノ隱者」や「巖穴ノ土」ということばもある。『中華若木詩抄』には「上古ニハ、イマダ屋宅ト云コトモナクシテ、巢居・穴処トテ、人皆巢作り穴ヲ掘リテ、禽獸ト同居スルゾ。其時ハ欲念・忘念モナク、ソノマ、ニテ、心ノ造作モナク無為無事ナルゾ」(百六十六番詩の抄文)という記述がある。これを参考にすると、絶海が巖穴を楽しみとしたのは、そこに居る時は、欲念や妄念が無く、心中に煩わしさも無く、平穩無事だったからであり、この心身の解放感は、中国の山居時代におけるそれと相通

ずるのではないだろうか。以下、自然の中で行動する絶海の様子を確認する。

⑪某遠託鴻麻。息影此地。晨禪夜誦。一遵旧規。暇則倚軒嘯傲。以陶写乎雲樹猿鳥之趣。

(一四七 与光祿相公書)

⑫雖然時逢山水幽勝之处。披衣散策而陶治於猿鳥雲樹之趣。悠然如遊乎物化之元。

(一五二 答椿庭和尚書)

⑬春秋二時。乘閑拉二二衲子。一舸北渡拜謁林下。參學之暇。登山臨水。陶治乎雲鳥之趣。以極

旬月之歡焉。

(一五四 答常光古劍和尚書)

⑭について。近江における絶海は、朝は座禪、夜は読経というように、ひたすら古くからの規則を遵守することに努めていた。そして、暇ができると、軒端に寄り掛かって超然とし、雲樹猿鳥の様子に「陶写」していたという。「陶写」という語は、楽しんで憂いを払うという意味である。『晋書』列伝第五十には、つぎのような用例がある。

羲之既去官。与東土人士尽山水之遊弋釣為娛。又与道士許邁共修服食。採藥石不遠千里。偏游東中諸郡。窮諸名山泛滄海。歎曰。我卒当以樂死。謝安嘗謂羲之曰。中年以来。傷於哀樂。与親友別。輒作数日惡。羲之曰。年在桑榆。自然至此。須正賴絲竹陶写。恒恐兒輩覺其樂飲之趣。

(百衲本二十四史所收本)

⑮について。絶海は、山水の静かで美しい景色に出会うと、くつろいだ格好をして散策し、雲樹猿鳥の様子に

「陶冶」して、ゆつたりとして「物化の元」に遊んでいるようだったという。「陶冶」という語は、生まれつきの性質や才能を、円満に育て上げることが意味するが、『淮南子』卷二・俶真訓の用例を挙げておく。参考までに通釈（根津幸男氏執筆）も付しておいた。

有_レ有_者、言_フ万物摻落、根茎枝葉、青葱蒼龍、薩扈炫煌、蠓飛蠅動、岐行噲息、可_レ切循把握、而有_中數量_上。有_レ無_者、視_レ之不見_レ其形、聽_レ之不聞_レ其声、捫_レ之不_レ可_レ得也、望_レ之不_レ可_レ極也、儲与扈治、浩浩瀚瀚、不_レ可_レ隱儀揆度、而通_レ光耀_二者。有_下未_レ始有_レ無_{者上}、包_レ裹天地、陶_二治万物_一、大通_レ混冥、深閔广大、不_レ可_レ為_レ外、析_レ豪剖_レ芒、不_レ可_レ為_レ内、無_二環堵之宇_一、而生_レ有_無之根。有_下未_レ始有_レ夫未_レ始有_レ無_{者上}、

（「有」とは、万物が盛んにむらがり、根茎枝葉は青々と茂り色どりも鮮やかに、飛ぶもの、這うもの、足で行くもの、嘴で息するもの（生きとし生けるものすべて）は、なでたりこすつたりつかまえたり、まさに千様万態をなしているさまである。「無」とは、じつと視てもその形は見えず、じつと聴いてもその声は聞こえず、手でとらえようとしても手ごたえがなく、はるかに見わたしてもはてを見きわめられず、のびやかでなみはずれて広大であり、思いはかることも計量することもできず、それで光耀の境に通達しているさまである。「無無」とは、天地を包み、万物を化育し、大いに混冥の境に通達し、深く広大なので何物もその外側に出られず、豪（毫・けさき）や芒（のぎ）を細分したよう〔に微少〕なので何物もその内側に入れず、また狭いすき間も占有していないのに有無の根源を生ずるさまである。「無無無」とは、

5

(新釈漢文大系)

「物化」という語は、『莊子』内篇・齊物論第二の、つぎの箇所に基づいている。

昔者、莊周夢為_レ蝴蝶_二。栩栩然蝴蝶也。自喻適_レ志与。不_レ知_レ周也。俄而覺、則蘧蘧然周也。不_レ知_下周之夢為_二蝴蝶_一与、蝴蝶之夢為_レ周与_上。周与_二蝴蝶_一、則必有_レ分矣。此之謂_二物化_一。

(新釈漢文大系)

これは、有名な「蝴蝶の夢」である。莊周が蝶になった夢を見て、覚めた後、自分が蝶になった夢を見たのか、蝶が自分になった夢を見たのか、区別が付かなかつたという話であるが、五山禅僧はこの故事を好み、例えば、『蕉堅藁』にも、「春夢」詩(九〇)に「蝶は南華に入りて、曾て栩栩たり」という句が見える(「南華」とは莊子のこと)。「物化」は、「周と蝴蝶とは、則ち必ず分有り。此を之れ物化と謂ふ」とあるように、物の変化を意味している。そして「物化の元」とは、物の変化の根源、すなわち「栩栩然として蝴蝶たり。自ら喻しみ、志に適するかな。周たるを知らざるなり」とあるように、莊周が夢で見た蝶が、ひらひら飛んでいて、楽しそうにのびのびとしていて、自分が莊周であることに気付かないような状態を指しているよう。絶海は、雲樹猿鳥の様子を楽しんで憂さ晴らしをしたと同時に、雲樹猿鳥の生命や性質に共感し、物我の分別を忘じた境地、天地万物の根源を逍遙するような感覚を覚えていたのだろう。⑬は、じつは⑪、⑫の懐古談である。よって、ここでは触れない。本編第二章第四節参照。

四 中国の詩人(杜甫等)との比較——森野繁夫氏「杜甫と自然」に導かれて——

さて、ここまでは、絶海の自然描写や自然観を追ってきたが、つぎの作業としては、それを他の禅僧や、平安朝の貴族、江戸の儒者、本場中国の詩人のものなどと比較し、相対化して行かねばならないと思う。が、稿者の現在の力量では、それは到底適わない。したがって今回は、対照する詩人を、研究が進んでいる杜甫に絞り、森野繁夫氏のご論考「杜甫と自然」(『国語国文論集』(安田女子大学)第二十九号別冊、平一一・一)に拙論との接点を見付け、その作業の一階梯としたい。

森野氏は「杜甫の詩における自然は、目に触れる山川草木や鳥魚の姿形、耳に聞こえる自然の音を、ただ単に詠っているというのではなく、それらは全て自然についての杜甫の思想を背景としての表現であるように思われる」という考えをもとに論を展開されている。そして、宇宙や自然を成り立たせている「理(真・道)」に注目し、王羲之・陶潜・謝靈運とその現れ方、対応の仕方の違いを明らかにして、つぎのようにお纏めになっている。

杜甫は既に見てきたように、自然の「理」の存在を確認し、人間も含めて全ての生き物がその道理に従って生きていくはずのものであると考えていた。この点については王羲之ら六朝の三人と同じであるが、杜甫は更に、自然は万物それぞれの性を全うさせようとしており、「理」には自然の愛情、恵みが含まれていると考えていた。また「理」に対する対応の仕方について見ると、王羲之、陶潜、謝靈運は自分一身のことに考えなかつたが、杜甫は常に人間全体のことを、更には鶏や蟲、魚のことまで心配していた。時には自分の不遇について、どうしてこうまで辛い目に偶わねばならないのかと歎きを漏らすことはあつたが、何よりも他の人々のことが気になった。(中略)

同じ頃の人である李白や王維と比べても、杜甫のこの考え方は特別である。李白は仙道修業に精を出し、王維は仏教に安らぎを求めていたが、どちらも自分の悟りだけが問題であって、他人のことには思いは及ばなかった。おそらく杜甫ほど世の人々のことを心配した人はいなかったに違いない。杜甫が「詩聖」と称される理由もそのあたりにあるのであろう。

絶海の詩偈には、「理」の用例が三例見出せる。

(a) 真理融玄境 真理は玄境に融し、

微言滋道根 微言は道根を滋す。

〔蕉堅藁〕・二 湛然静者に呈し、并せて画を謝す 三首〔第二首目〕、五く六句目

(b) 幽栖誠所愛 幽栖、誠に愛する所、

生理却無聊 生理、却って無聊なり。

一笑問真幸 一笑して、真幸に問ふ。

百年何寂寥 百年、何ぞ寂寥たる、と。

〔蕉堅藁〕・二 冬日、中峰の旧隠を懐ふ、九く一二句目

(c) 神理精通玄又玄 神理、精通して、玄又た玄、

幽棲占得白雲辺 幽棲、占め得たり、白雲の辺。

〔絶海録〕卷下・二四八 妙菴、一く二句目

これによると、絶海も、宇宙・自然を成り立たせている道理や、天地の主宰者、造物主の存在を認識していたことがわかる。ただし、彼が禅僧であることが、その現れ方において、杜甫と異なる様相を呈する根本的な原因となっているように思われる。

(a)の「玄境」という語は、直訳すると、奥深い境地、もしくは玄妙な境界とでもなるが、いま一つ意味が判然としない。絶海は義堂の示寂後、掩土の仏事において法語を挙唱したが(『空華日用工夫略集』^上 嘉慶二年四月四日条)、その中で「這裏是れ慈氏の宮殿、這裏是れ大寂定門、龍盤虎踞、至人の玄境を拓き、瑞草異花、自己の田園に開く」とも述べている。「至人」は十分に道を修めた人、「至人ハ物ヲ遺ル」や「至人ハ己無シ」や「至人ハ夢無シ」ということばもあるので、「玄境」とは、端的に言うところ、物我一如の世界を意味するのではなからうか。(c)の「玄又た玄」ということばは、『老子』体道第一(新釈漢文大系)に「玄の又た玄、衆妙の門」とあり、(道が)幽遠で測り知れない状態を意味する。

さて、(a)では、まことの道理が、奥深い境界に融けると言い、(c)では、靈妙な道理は、奥深い上にさらに深い所まで精通していると言っているが、要はこの二つの主旨は同じで、(宇宙や自然を成り立たせる)道理が、(天地万物の根源にある)物我一如の世界に、すでに存していることを述べているのではないだろうか。絶海は、俗世間から韜晦して中天竺寺に山居したり、近江や甲斐に隱遁することによって、心身の解放感を獲得し、山中を「壺中」「蓬萊」「四禪天」に感じたり、雲樹猿鳥を見て「物化の元」に遊んでいるような感覚を覚えた。この時、彼は自然(山・雲樹猿鳥)と一体化して、物我一如の状態に在ったのであろう。少しく曖

味な物言いになるが、物事の現象（外相）を客観的に見るだけでなく、その本質を、それと共感する心の働きの中において捉えるのが、禅僧の物の観じ方と言えようか。なお、(b)には、静かな住まいは、まことに愛するところ、生物が死んだり、生きたりする道理は、却って退屈だ、とあるが、絶海は自然と一体化し、また一方の手持ち無沙汰だったので、このような発言をしたのであろうか。

五 『蕉堅藁』の序と跋——むすびにかえて——

以上、絶海の詩偈に見られる、自然を描写した句に注目して論を進めてきたが、最後に『蕉堅藁』の序文（道衍）と跋文（如蘭）とを振り返りつつ、本章を擱筆したい。

道衍は『蕉堅藁』の詩風を、「清婉峭雅にして、性情の正より出づ」と評した。「清婉」とはきよくて、やさしいこと、「峭雅」とはけわしく、きびしくて、みやびなこと、「性情の正」とは「性」（本性）と「情」（心情）がともに正常な状態にあることを言う。「性」が正常な状態（「静」「中」にある時、「情」は発動し、「情」に節度がある時にそれらは正常な状態（「和」）にあると言える。性理学（理気学、宋学とも言う）に基づく。中巖円月『中正子』性情篇卷之四・内篇一（『五山文学新集』第四卷所収）参照。『蕉堅藁』の序文には、他に「性情の正」ということばの用例がある。

(ア) 詩之去道不遠也。蓋其繫風俗。関教化。興亡治乱。足_レ以有_レ徵。勸善懲惡。足_レ以有_レ誠。故閭巷思婦之賦。田塾小子之作。其言出_二於性情之正_一者。而孔子亦取焉。況夫郊廟朝廷会盟燕享。賛_二頌功德_一。

被_レ之於絃哥_一。奏_レ之於金石_一者哉。以_レ斯論_レ之。

(イ) 吾浮_レ豳氏於_レ詩。尚_レ之者猶衆。晋之湯休。唐之靈徹皎然道標齊已。宋之惠勲道潛。皆尚_レ之而善鳴者也。

然其処_二山林草沢之間。烟霞泉石之上_一。幽閑夷曠。以_レ道自樂。故其言也出_二乎性情之正_一。而不_レ墜_二於庸俗_一。誦_レ之誦_レ之。使_下人清_二耳目_一而暢_レ心志_上也。蓋亦可_レ羨矣。

特に(イ)に着目する。晋代の湯休、唐代の靈徹、皎然、道標、齊已等、仏教徒には詩を尊ぶ者が多く、その名声は世間に鳴り響いている。しかし、彼らは、山林草沢の間や、烟霞泉石の上に住んでいて、静かで奥床しく、広々とした心で、道(理、真)にしたがって自ら楽しんでゐる。彼らの発することばは「性」「情」の正常な状態から出たもので、決して凡俗に陥っていない。詩を歌ったり、読んだりすると、聞く人や読む人の耳目を清めて、その志を遠大にさせる、とあるが、湯休以下の生活態度は、絶海の中国山居時代、近江・甲斐隱遁時代における生活を想起させる(序・跋とも道德的詩文觀に基づくため、多少の違いはあるが)。「蕉堅藁」の跋文には、先に触れた「時に山水幽勝の処に逢へば、衣を披_{ひら}き、策を散じて、猿鳥雲樹の趣きに陶冶し、悠然として物化の元に遊ぶが如し」(⑫)という一文を引用した後、

此皆樂_レ道之至言。豈可_レ与_下詩人留_二連光景_一。玩_レ物喪_レ志。比擬_甲哉。

と、これはすべて道を楽しむ至言であること、詩人が風景に心奪われ、無用の物を弄んで、その本心を失うのは比べられないことが述べられている。

絶海は自然(絵画、扇面、盆石等を含む)と接すると、その生命や性質(この場合、万物を生成化育する「元

「気」と表現する方が適切か」と交感して、自然と一体化し、その根源に存する物我一如の世界に遊んでいた（五山禅僧が『老子』や『莊子』を愛読していたことを鑑みると、彼らは「物我一如の世界」に悟境に近いものを感じていたのかも知れない）。したがって、風景に捉われることもなく、「性」と「情」も常に安定していたように思われる。詩偈に見られる自然描写が的確で、あたかも眼前にあるかのように描かれているのも、また、例えば、山居詩に寂寞感や寂寥感が詠まれなかったのも、彼と自然（山）との間が非常に近く、自余の感情の介在を許さなかったのではなからうか。寂室の「風、飛泉を攪かいて、冷声を送る。前峯、月上りて、竹窓明らかなり。老来、殊に覚ゆ、山中の好きことを。死して巖根にあらば、骨もまた清し」（『永源寂室和尚語録』巻之一・「金蔵山の壁に書す」）などに比べると、絶海の詩には、ある種の物足りなさを感じるが、実は、これこそが、彼の持ち味の一つであることを、稿者は本章で力説したのである。

注

- (1) 芳賀幸四郎氏『中世禅林の学問および文学に関する研究』（日本学術振興会、昭三二）・「第二篇 中世禅林の文学」・「第一章 禅僧の文学観」、二五四～二五五頁。
- (2) 引用は『大正新修大蔵経』第八十卷「続諸宗部」による。
- (3) 引用は五山版、作品番号は蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇）による。返り点は、江戸の版本

(寛文十年版か無刊記本)等を参考にして、私に施した。

- (4) 諸書では「真寂山」を不明とするが、西尾賢隆氏『中世の日中交流と禅宗』(吉川弘文館、平一一)の「第九章 室町幕府外交における絶海中津」(旧題「室町幕府外交における五山僧——絶海中津を中心に——」、『日本歴史』第五三七号、平五・二)には、以下のような記述がある。

洪武六年(一三七三)絶海は、清遠が退居している杭州の真寂山中に訪ねている。ここは「笑隠訶公行道記」(『蒲室集』卷一五付)、「鳳皇山禅宗大報国寺記」(『金華黄先生文集』卷一一)、それに清遠の碑銘からすると、笑隠(大訶、朝倉注)・清遠ともかつて住持であった報国寺(甲刹)における笑隠門下が、師の遺齒爪髪を奉じて鳳皇山に塔した地を梁渚とっていて、ここに庵居して真寂といったものといえる。

(二一六頁)

- (5) 引用は『大正新修大藏経』第八十卷「統諸宗部」、作品番号や詩の総数は梶谷宗忍氏訳注『絶海語録』二(思文閣出版、昭五一)による。訓読は梶谷氏・前掲書を参考にして、私に施した。

- (6) 引用や詩の総数は『五山文学全集』第二巻による。訓読は同書を参考にして、私に施した。

- (7) 引用は『五山文学新集』第四巻による。訓読は増田知子氏『中巖円月 東海一漚詩集』(白帝社、平一四)を参考にして、私に施した。

- (8) 福原麟太郎、吉川幸次郎氏『二都詩問』(新潮社、昭四六)・「東への手紙」、八六〇八七頁。

- (9) 寺田透氏は、「連立って帰った留学僧のひとりと別れるに当って詠じた作だったろう」(『義堂周信・絶海

中津』、日本詩人選24、筑摩書房、昭五二、二四五頁）と指摘されている。

(10) 引用は大谷哲夫氏『訓註 永平広録』下巻（大蔵出版、平九）による。

(11) 引用は蔭木英雄氏『訓注 空華日用工夫略集』（思文閣出版、昭五七）による。

※ 引用本文に関しては、特に表記していない場合、『五山文学全集』『五山文学新集』所収本による。また、句読点、訓読（一部）、傍線、記号、番号は私に施した。旧字体や異体字を私に改めた箇所もある。

第四章 五山文学における禅月の受容——『蕉堅藁』を起点として——

はじめに

稿者は今まで、主として絶海中津〔一三三六―一四〇五〕の伝記を中心に研究してきた（前編参照）。彼の詩文集である『蕉堅藁』¹には、「山居十五首、禅月の韻に次す」（三四）や、五十三番詩に「偶々府を辞するに当たりて禅月に似」という句があり、合計百七十二首中（他作を七首含む）、禅月大師（徳隠貫休、八三二―九一〇）に関連した詩が十六首もある。したがって、絶海の禅月受容を見ることは、将来的に絶海の詩風や文学観を追究して行きたいと考えている稿者にとっては、非常に有意義なように思われる。

さて、夢窓派の休翁普貫（一に普寛、または普観）の名字相応は、禅月の法諱（貫休）に由来するという（玉村竹二氏『五山禅僧伝記集成』、講談社、昭五六）。また、芳賀幸四郎氏や蔭木英雄氏は、『禅月集』が五山文学僧の間で愛読されていたことを指摘しているが、²その実態・様相までは明らかにされていない。例えば、杜甫や白居易に関しては、近年、堀川貴司氏「中世禅林における白居易像」（『国語と国文学』第七十八巻第五号、平一三・五）や太田亨氏「日本禅林における杜詩受容——禅林初期における杜詩評価——」（『中国中世文学研究』第三十九号、平一三・一）という論考もあり、詳細な調査結果が報告されている。『中華若木詩抄』には、杜甫と白居易がともに三首採られているのに対して、禅月は一首も採られていない（最多は陸游の八首）。また『翰

林五鳳集』(以下、『五鳳集』と略す)には、釈教(巻第五十七)や支那人名部(巻第五十八〜六十一)があり、杜甫関連詩は五十二首、白居易関連詩は五首収められている。禅月に関連するものは、全く見受けられない(最多は陶淵明の七十七首。『蕉堅藁』三十四番詩は、『五鳳集』巻第二十六〜三十一・雑和部、『蕉堅藁』五十三番詩は、『五鳳集』巻第三十二・送行分韻部に収録されている)。いったい禅月は、五山禅僧の間でどのように認識・理解されていたのであろうか。本章では、絶海の『蕉堅藁』を起点として、五山文学における禅月受容の実態・様相を明らかにしてみたいと思う。知名度という点では、所謂“特A級”の杜甫や白居易に遠く及ばない、禅月をはじめとした、所謂“B級”の中国の詩人が、五山禅僧にどのように捉えられていたのか——。これも稿者にとっては、興味深い問題の一つである。なお、小林太市郎氏の名著『禅月大師の生涯と芸術』(創元社、昭和二二)を参考にさせていただくところが多かった。

一 禅月の生涯の概略——『禅月集』後序

本論に入る前に、禅月の生涯のあらましを確認しておきたい。小林氏も「第一章 『禅月集』及びその他の貫休伝記資料」「一 貫休伝記資料」において指摘されているように、禅月の伝記資料の中で最も古く、記事の信頼性が高いのが、門人曇域による『禅月集』の後序である。これは蜀の乾徳五年(九二二)、禅月の示寂後十一年目にしての作であり、禅月の遺命によって撰述されたものである。ついで、宋の贊寧が撰した『宋高僧伝』巻第三十・「梁成都府東禅院貫休 処默曇域」が挙げられるが、これは、その大部分が、曇域の禅月伝に基づくもの

である。以下、かなりの長文であるが、『禪月集』の後序から抄出する。

先師名貫休、字德隱、婺州蘭溪縣登高里人也。俗姓姜氏、家伝儒素、代繼簪裾、少小之時、便帰覺路於和安寺、請円貞長老和尚為師。日念法華經一千字。數月之内、念畢茲經。先師為童子時、與隣院童子法号処黙、偕年十餘歲、同時發心念經。每於精修之暇、更相唱和。漸至十五六歲、詩名益著。遠近皆聞。年二十歲、受具足戒。後於洪州開元寺、聽法華經。不數年間、親敷法座。広演斯文。邇後兼講起信論。可謂三冬涉學、百舍求師、尋妙旨於未伝、起微言於將絶。于時江表之士庶、無不欽風。年齒漸高、属天下喪乱時、処黙和尚謂師曰、吾師抱不羈之才、懷自然之道。時不我与成、無傷哉。復為先師曰、分袂無血涙、望処空闌干。後隱南嶽。□□不□先聃為備者曰、吾聞岷峨異境、山水幽奇。四海騷然、一方無事、遂乃過洞庭、趨渚宮、歷白帝。旋聞大蜀開基創業、奄有坤維。歎曰、不有君子、寧能匡乎。遂達大國、進上先皇帝詩。其略曰、一瓶一鉢垂垂老、万水千山得得来。高祖礼待。膝之前席。過秦王待道安之礼、踰趙王迎凶澄之儀。特修禪宇、懇請住持。尋賜師号曰禪月大師。曲加存恤。優異殊常。十年已來、迥承天睴。無何、壬申歲十二月、召門人謂曰、古人有言。曰、地為牀兮天為蓋。物何小兮物何大。苟愜心兮自忻泰、声与名兮何足頼。吾之住世、亦何久耶。然吾啓手足、曾無愧心。汝等以吾平生、事之以儉。可於王城外、藉之以草、覆之以紙、而藏之。慎勿動衆而厚葬焉。言訖、奄然而絶息。遂具表聞天。先帝蹙然久之。乃命所司、備二期葬事。于時在城士庶無不悲傷。曇域遂以先師遺言上奏、請以薄葬之

礼^一。帝曰、朕治命可^レ行焉。勅令^三四衆共助^二葬儀^一。特豎^三靈塔^一、勅謚^二白蓮之塔^一。以^三癸酉年三月十七日^一、於^二城都北門外十餘里^一、置^二塔之所^一。地号^二昇遷^一。葬事既周哀制斯畢。暇日或勲賢見^レ訪。或朝客相尋。或有^レ念^二先師所^レ制一篇兩篇^一。或記^三三句五句^一。或未^レ閑^二深旨^一。或不^レ曉^二根源^一。衆請^三曇城編^二集前後所^レ制詩文贊^一。曰、有^二見聞不^レ暇^二枝梧^一。遂尋^二檢藁草及暗記憶者^一。約一千首乃雕刻版^レ部。題号^二禪月集^一。曇城雖^レ承^二師訓^一、藝學無^レ聞。曾奉^二告言^一、輒直^二序事^一。時大蜀乾德五年癸未歲十二月十五日序(下略)

禪月——名は貫休、字は德隱——は婺州蘭溪県登高里(浙江省金華市の北)の出身で、俗姓は姜氏、儒者の家に生まれ、家は代々、簪裾を継いでいた。幼少の時に和安寺で出家し、円貞長老和尚に師事した。一日に『法華經』一千字を念誦して、數ヶ月のうちに、そのすべてを暗記し終えたという。童子の時、隣院の処黙という法号を有する童子と、ともに十余歳で同時に発心し、經を念じた。また、仏道修行の余暇ごとに、互いに詩を相唱和し、漸く十五、六歳になつて詩名が益々あらわれ、近くの者も、遠くの者も知らない者はいなかつたという。二十歳で具足戒を受けて後、洪州(江西省南昌県)の開元寺で『法華經』を聴き、數年も経たない間に、自ら法座を敷いて、広くその内容を説いた。その後は『起信論』も兼ねて講義したという。その後禪月は、各地に遊んで緇素と交わつたのだが、最後の安住の地を蜀国に求めた。先皇帝の王建に「一瓶一鉢、垂垂として老ひ、万水千山、得得として來たる」の詩を献上すると(禪月は得得來和尚とも称せられた。⁴)『禪月集』卷第二十・「陳^レ情献^二蜀皇帝^一」、王建は礼を以つて禪月をもてなし、特に東禪院の禪宇を修して、懇請して住持せしめた。ついで禪月大師という師号を賜つた。永平二年(九一二)十二月、禪月は、枕頭に門人を召して、古人の言を引用し

ながら遺戒を述べて、奄然と息絶えた。なお、引用文では引き続き、禅月の葬儀や『禅月集』編纂の経緯などが記されているが、今は詳述しない。

二 五山文学における禅月の受容

さて、これから実際に禅月の受容の用例を見ていくのであるが、一概に「禅月の受容」と言っても、それには様々なレベルがある。今回は研究の一階梯として、仮に「作品の受容」「伝記の受容」「その他」の三つに分類して、絶海の『蕉堅藁』を中心に論を進めて行きたい。なお、五山文学作品の引用は、『五山文学全集』（以下、『全集』と略す）、『五山文学新集』（以下、『新集』と略す）、『続群書類従』（以下、『続群』と略す）、『大正新修大蔵経』（以下、『大蔵経』と略す）等による。

(I) 作品①——山居詩

五山僧は禅月の作品をどのように読み解いていたのだろうか――。

第一首目	第一首目	難・山・間・瀑・攀(上平十五刪)
絶海山居詩	禅月山居詩	韻 字

まずは『蕉堅藁』三十四番詩について。
これは詩題に「山居十五首、禅月の韻に次す」とあるように、禅月の「山居詩并序」(『禅月集』卷第二十三所収、二十

第二首目	第二首目	頭・遊・樓・流(下平十一尤)
第三首目	第五首目	兼・簾・嫌・厭・織(下平十四塩)
第四首目	第八首目	夷・垂・枝・池・之(上平四支)
第五首目	第十首目	通・風・中・東(上平一東)
第六首目	第十二首目	馨・苓・餅・寧(下平九青)
第七首目	第十四首目	紗・霞・槎・花・麻(下平六麻)
第八首目	第十五首目	扉・帰・暉・稀(上平五微)
第九首目	第十六首目	冥・青・経・靈・醒(下平九青)
第十首目	第十七首目	休・鷗・頭・柔(下平十一尤)
第十一首目	第十九首目	畦・西・芥・啼・溪(上平八齊)
第十二首目	第二十首目	諧・堦・崖・乖(上平九佳)
第十三首目	第二十二首目	滔・濤・高・袍(下平四豪)
第十四首目	第二十三首目	前・年・眠・天(下平一先)
第十五首目	第二十四首目	同・宮・空・窮(上平一東)

四首連作)のうちの十五首に、絶海が次韻したものである。紙面の都合上、ここで両者の山居詩をすべて引用することは憚られるので、取り敢えずその様相を表に纏める。なお、「次韻」とは「和韻」の一種で、特定の詩(本韻詩と言う)の文字およびその順序をそのまま用いる作詩法を言う。

禅月の山居詩の詠作状況は、その序文で知ることができる。

序曰、愚、咸通四五年中、於鍾陵作山居詩二十四章。放筆。藁被人將去。厥後、或有散書於屋壁、或吟詠於人口、一首兩首時聞之。皆多字句舛錯。洎乾符辛丑

歲避寇於山寺、偶全獲其本。風調野俗、格力低濁、豈可聞於大雅君子。一日抽毫改之。或留之除

レ之修レ之補レ之、却成三十四首。亦斐然也。蝕木也。概山謳之例也。或作者氣合、始為一朗吟之可也。

禪月は咸通四、五年（八六三、四）、鍾陵（江西省）で一旦、山居詩二十四章（草稿）を作ったのだが、誰かに將ち去られてしまう。その後、一、二首は時々、或いは家の壁に走り書きされているのを見たり、或いは人口に吟詠されるのを聞いたりしていたが、字句が間違っていることが多かった。乾符八年（中和元年、八八一）に黄巢の乱を毘陵（江蘇省武進市）の山寺に避けたところ、偶々散佚した草稿本を得、詩の調子が俗っぽく、品格が低かったので、いま一度推敲し、山居詩二十四首を完成させたという。

対する絶海の山居詩については、本編第二章第二節で言及した。その結果、絶海が中国に留学している時、すなわち応安元年（洪武元年、一三六八）〜永和三年（洪武十年、一三七七）、主として禅道修行に精進した中天竺寺において詠作したと結論付けるに至った。

稿者は先日、第七十四回和漢比較文学会東部例会（平成十四年一月二十六日、於大東文化大学）の席上で、「五山文学における「和韻」について——絶海・義堂を中心に——」という題目のもと、口頭発表をさせていただいた。そして絶海・義堂の和韻詩の詠作状況を、（A）贈答・唱和にともなって詠作する場合と、（B）本韻詩が契機となって詠作する場合、（B）はさらに、（a）本韻詩が中国の詩人のもの、（b）本韻詩が先輩僧のもの、（c）本韻詩が自身の旧作、と大きく分類した（本編第五章に論文化した）。

これによると、絶海が、禅月の山居詩に次韻した状況は、（B）（a）のパターンに当てはまる。当時の禅僧が多く漢籍に精通していたことはよく知られているが、彼らはある作品と対峙して、その作品内容に共感し、

興に乗じた時に作詩していたと思われる。『五鳳集』卷第五十八、六十一の支那人名部には、「フヲ読ム」という詩が散見する（例えば「読ニ伯夷伝ニ」「読ニ逍遙遊篇ニ」「読ニ孔明出師表ニ」「読ニ東坡試院煎茶詩ニ」「読ニ和靖詩ニ」等）。したがって、このような状況で和韻詩を作った場合、その詠作内容は、おのずと本韻詩と同趣のものになってしまふ。おそらく絶海も、中天竺寺に山居していたからこそ、禅月の山居詩に心惹かれて、次韻したのである。どこか禅月の山中における心境（禅境）に對置する心が存したのかも知れない。ちなみに絶海が次韻する際、二十四首から十五首を選んだことに関しては、今のところ、あまり深い意味はなかったのではないかと考えている。本編第五章参照。

ここで、恣意的にはあるが、両者の山居詩を各一首ずつ抜粋し、味読してみたい。

三四 山居十五首、禅月の韻に次す（第十四首目） 絶海中津

一庵無事只蕭然 一庵、事無く、只だ蕭然。

栢子燒殘古仏前 栢子、燒き残る、古仏の前。

電露身心真暫寓 電露の身心、真に暫く寓す。

鷓鴣栖息尽餘年 鷓鴣の栖息、餘年を尽くす。

綠蘿窓外三竿日 綠蘿、窓外、三竿の日。

黃鳥聲中一覺眠 黃鳥、聲中、一覺の眠り。

問我山居有何好 我に問ふ、山居、何の好きことか有る、と。

此中即是四禪天 此の中、即ち是れ四禪天。

【通釈】庵の中は、何事もなく、ただひっそりとしている。栢の実が、古仏の前に焼け残っている。稲妻や露のようなはかない身心を、この庵にほんのしばらく宿してみる。みそささいが棲息するように、静かに余生を送る。緑色の葛が絡む窓の外に、朝日が三竿ほどの高さまで昇り、鶯の声の中で、一度眠りから覚める。ある人がわたしに「山居にはどのような良い点がありますか」と尋ねたならば、わたしは「こここそが、すなわち四禪天である」と答える。

* * *

山居詩（第二十首目） 禅 月

自休自了自安排 自ら休止し、自ら了して、自ら安排す。

常願居山事偶諧 常に願ふ、山に居して、事、偶諧することを。

僧採樹衣臨絶壑 僧は樹衣を採りて、絶壑に臨み、

金華山出樹衣僧多採為蔬菜味極美也 金華山より樹衣を出だす。僧は多く採りて蔬菜と為す。味、極めて美なり。

狢争山果落空堦 狢は山果を争ひて、空堦に落つ。

閑担茶器縁青嶂 閑かに茶器を担ひて、青嶂に縁り、

静納禅袍坐緑崖 静かに禅袍を納めて、緑崖に坐す。

虚作新詩反招隠 虚しく新詩を作りて、招隠に反す。

出来多与此心乖 出で来たれば、多く此の心と乖そむく。

【通釈】わたしは好きな時に休み、好きな時に終えて、物事の移り変わりに身を任せている。山の中に隠居して、身の回りで起こる出来事が、偶然うまく行くことを、いつも願っている。僧侶は樹衣を採るために、深く険しい谷を見下ろし（金華山で樹衣は採れる。僧侶はたくさん樹衣を採って、野菜として食用している。味は極めて美味しい）、黒色の猿は山の果物を奪い合って、人気のない階段を落ちて行く。わたしはのどかに茶碗を持って、青い峯に身を寄せ、静かに僧衣を着て、緑色の崖のところで坐禅する。虚しく新しい詩を作って、隠者を招こうとする考えに反す。出来た詩を吟じてみると、甚だ今の自分の心に背いている。

両詩からは、煩わしい俗世間を離れて、静謐な山中で自然や動植物に囲まれながら、自己と向き合い、修行に励む真摯な仏者（禅者）の姿が垣間見える。ただし、絶海は「山居」を「四禅天」と評している。「四禅天」とは、色界の四種の禅定（心静かに瞑想して、真理を考えること）を四禅（「初禅」…離生喜樂、「二禅」…定生喜樂、「三禅」…離喜妙樂、「四禅」…非苦非樂）と言い、四禅のそれぞれによって到達される世界を言う（『岩波仏教辞典』参照）。義堂周信（一一三二〜一五〇八）の『空華集』巻第十には、「但得此心無所在」。一庵中有四禅天（「題通玄菴」并叙）という用例も見られる。一方、禅月は「山居」して、身の回りの出来事が、偶然うまく行くことを望んでいる。別の山居詩（五首目）では「居山別有非山意」と詠じており、「山居」自体を別段、意識していない。このあたりに絶海と禅月の、仏者（禅者）としての微妙な心境（禅境）の違いが出ているように思われる。

ところで、他の五山文学作品に目を向けてみると、以下のような記述が見られる。

①某、眼飽支竺、名喧夏夷、禅月有山居詩、嘲錦衣之遊龍華寺、趙州無柏樹話、指鉄觜以呼獅

子兒^一、(下略)

〔翰林葫蘆集〕第一・「霖父住^二相国^一」、〔全集〕第四卷)

②某、洛下名縉、山東望族、雄深文如^レ誦^二張無尽僧堂記^一、鼻咲^二諸方^一、高古句似^レ詠^二陶貫休山居詩^一、足称^二独歩^一、(下略)

〔流水集〕二・「春起龍住^二東福^一」、〔新集〕第三卷)

③藏叟和尚、跋^二慶雲谷録尾^一云、南堂說法、或誦^二貫休山居詩^一、或唱^二柳耆卿歌^一、謂^レ非^二說法^一可耶、礪陰師祖所謂順^レ朱朱順、亦此意也、如今諸方長老、以^二明日上堂^一、一夜思量得、花簇^々、錦簇^々、不^レ直^二半文錢^一、只是業識增長耳、

〔東海一漚集〕四・「藤陰瑣細集」401、〔新集〕第四卷)

【注】「趙州」とは趙州從諗、「鉄觜」とは光孝慧覺、「霖父」とは霖父乾道、「張無尽」とは張商英、「春起龍」とは起龍永春、「藏叟和尚」とは藏叟善珍、「慶雲谷」とは雲谷懷慶、「南堂」とは南堂元靜、「柳耆卿」とは柳永、「礪陰師祖」とは敬叟居簡。

①・②は入寺疏である(①は山門疏)。斯くの如き、住持が新たに任命された時に宣誦される文書の中で、禅月の山居詩が触れられるということは、この詩が当時、禅林社会においてかなり人口に膾炙していたことを示す一証左となる。②によると、その句風は、気高くて俗と離れていると見なされていたようである。③では、中巖円月「二三〇〇く七五」が、甚だ否定的ながらも、南堂元靜が説法に際して、禅月の山居詩を口ずさんだことを伝えている。ちなみにこの南堂の逸話は、『雲谷和尚語録』跋(藏叟善珍執筆、『禅宗集成』第二十四冊所収)においても確認することができる。

惟肖得巖〔一三六〇〕一四三七〕の『東海瑠華集』二には、つぎのような文章がある。

迢碧字説

東山佳少、諱曰宗仁、以能仁氏〔無カ〕為宗當矣、就予需別称二字、禪月詩云、道人優曇華、迢々遠山碧、
據迢碧以命焉、伝曰、仁者樂山、弗謀而合而已、(中略)子克護其宗、脱略凡近、比遠者大者、
高自標置、若雪後諸峯、窓中列岫、則使彼仮服徒、望焉而知慚、仰焉而取則、寔叔季優曇華矣、

〔新集〕第二卷

これは、建仁寺の少年僧——法諱は宗仁——の字(道号)の由来を説いている。惟肖は、禪月の「道人、優曇華、迢々として、遠山碧なり」という詩句に基づき、「迢碧」と命名したという。少年僧の法諱と道号は、謀らずも「仁者は山を樂しむ」〔論語〕雍也第六)ということばと照合していた。引用された禪月の詩は、『禪月集』卷第三に収録されている「閑居擬齊梁四首」のうちの一首である。

夜雨山草滋

夜雨山草滋。爽籟生古木。閑吟竹仙偈。清於嚼金玉。蟋蟀啼壞牆。苟免悲踟促。道人優曇花。迢迢遠山緑。

また、建仁寺兩足院藏『東海瑠華集(絶句)』〔新集〕第二卷所収)には、「五絶」という類題のもと、六十

四首の俗詩が掲げられているが、その中には、東方虬・高適・李嗣宗・劉言史・鄭愔等とともに、禪月の詩も一首採られている。この詩は、『全唐詩』卷八百三十七・貫休十二にも見える。

晚望

貫休

落日碧江静、蓮唱清且閑、更尋花發処、借月過前湾、

玉村氏は「俗詩は惟肖が諸本涉獵の際書留めておいた覚え」（「惟肖得巖集解題」）と指摘しておられる。

彦龍周興（「四五八〇九一」）の『半陶文集』三・「半陶庚戌藁 延徳二年」には、つぎのような文章がある。

829

扇面 代「桃源」、

余読禪月集、有商山一皓之語、可怪矣、今也、非山非洞、又非枯松流水之間、而基者二人、隅坐觀者一人、三皓在此、留在商山者、必一皓也、使人思而得之、繪事之妙也、曰四皓曰一皓、隱于橘、隱于竹、皆一皓也、扇兮々々、有三皓哉、

〔新集〕第四卷

【注】「桃源」とは桃源瑞仙。

これは扇面図に対する賛詞である。「商山四皓」とは、秦末に世乱を避けて商山に隠れた四人の鬚眉が白い老人——東園公・夏黄公・用里先生・綺里季——のことで（『漢書』王貢伝序等）、禪僧が好んで用いた詩の素材である（『五鳳集』卷第五十九・支那人名部には、「商山四皓図」「扇面四皓」「四皓囲碁図」等の詩が見られる）。彦龍の眼前にある扇面には、碁を打つ者が二人、それを隅の方に座って見る者が一人の、計三人の老人が画かれていたようである。と、すると、商山には、残りの老人が一人留まっているはずで、「人をして思ひて之を得せ

しむるは、絵事の妙なり」と彦龍は賞讃している。彼は『禅月集』を読んでいて、書中に「商山一皓」という語があることを知っていたのである。

遇_二道者_一

鶴骨松筋風貌殊。不_レ言_二名姓_一絶_二榮枯_一。尋常黎杖九衢裏。莫_二是商山一皓_一無。身帶_二煙霞_一浮_二汗漫_一。葉兼_二神鬼_一在_二胡蘆_一。只_レ心_二張果支頤輩_一。時復相逢醉_二海隅_一。

〔『禅月集』卷第二十一〕

なお、『蕉窓夜話』にも、以下のような記述がある。

393 商山一皓 禅月集ニアルソ。常ニハ商山四皓トコソ云ニ面白ソ。四人ノ名ハ東園公、夏黄公、季理綺、用里先生也。常ニ角ハ用ト同ソ。人ノ名ニナル時ニ、ロクノ音ソ。人カ常ニカクト読テ愧ヲカクソ。

(鈴木博氏「蕉窓夜話(校)」一・二、『滋賀大学教育学部 紀要』第二七号・第二八号、昭五二・五三)

(III) 作品③——詩評

五山僧は禅月の作品をどのように評価していたのであろうか――。

(I) (II) とも関わってくると思われるが、『東海一漚集』四・「藤陰瑣細集」から抄出する。

353 唐僧能_レ詩者多、而以_二貫休・齊己_一、尤為_レ称_レ之、則固是也、宋以_二参寥・覚範_一為_レ称、以_レ予論_レ之、(中

略) 貫休少年行、五言二首云、自拳_二五色毬_一、进入他人宅、却捉_二蒼頭奴_一、玉鞭打一百、面白如_レ削_レ玉、猖狂曲江曲、馬上黄金鞍、適来新賭得、

【注】「參寥」とは永明道潛、「覺範」とは覺範慧洪。禪月の「少年行」は、『禪月集』巻第一収録。

唐代の僧の中には詩の上手な者が多いが、禪月と齊己が最も上手だった、と中巖は述べているが、この禪月に關する評価は、わが国の禪僧の間では一般的な理解だったようである。

① 孜孜壯業豈違時、乃是才名天上姿、已伴子雲親問字、何曾禪月独能詩、(下略)

〔雲巢集〕・「次下賀友人書室之韻上」、〔新集〕第四卷)

② 尊師也則洛下詩壇之翹楚、而今代蒲室之流亞也、亦寒山子・禪月老之古風、可_レ以見_レ之、標・昼之輩、不_レ可_レ企_レ於此_レ矣、

〔雲巢集〕)

③ (上略) 某。篤学而華。孤標以_レ雅。法灯為_レ染衣相。鹿門旧隱未_レ忘。禪月称_レ能詩僧。龍興新題可_レ想。(下略)

〔雪樵独唱集〕三・「利涉住_二万寿_一道旧」、〔新集〕第五卷)

④ 禪也詩也、非_レ具_二頂門_一一隻_二者_一、難_レ言_レ之、詩道伝_二吾徒_一者久矣、(中略) 至_二東震_一則宋惠休殊未来之句、唐貫休何曾見之嘆、今猶以為_二口実_一、一休之後、清凉国師・大覺禪師・參寥・覺範諸師、以_二詩頌_一動_二人主_一傾_二權臣_一、(下略)

〔翠竹真如集〕二・「蒙庵百首 明応八季秋」²³⁵、〔新集〕第五卷)

⑤ 儒釈兼通実且華、使_二公如_レ志幾興_一家、子雲容貌不_二奇異_一、禪月詠歌堪_二歎嗟_一、(中略)

〔心華詩藁〕・「次_レ韻答_二大伝蔵主_一」、〔新集〕別卷二)

【注】「子雲」とは楊雄、「蒲室」とは笑隱大訥、「標」とは道標、「昼」とは清昼(皎然)、「利涉」とは利涉守溱、「清凉国師」とは清凉文益、「大覺禪師」とは大覺懷璉、「大伝蔵主」とは大伝有承。

②や④では、寒山、道標、皎然、惠休、清凉文益、大覚懷璉、永明道潜、覺範慧洪らと並び称されている。一方、中国の詩話に目を遣ると、つぎのような記述を見付けることができる。

⑥ 釈皎然之詩、在唐諸僧之上（唐詩僧有法震、法照、無可、護国、靈一、清江、不特、無本、齊己、貫休也。）
『詩人玉屑』卷之二・詩評・「滄浪詩評」、中華書局、（内は割注を示す）

⑦ 石林詩話云：『唐諸僧、中葉以後其名字班班為一時所稱者甚多、然詩皆不傳、（中略）陵遲至貫休、齊己之徒、其詩雖存、然無足言矣。中間雖皎然最為傑出、故其詩十卷独全、亦無甚過人處。』（下略）
『茗溪漁隱叢話前集』卷第五十七・「僧詩無蔬筍氣」、中華書局

『詩人玉屑』、『滄浪詩話』、『漁隱叢話』、『石林詩話』、いずれもわが国の禅僧によく読まれた書物である。⁵⁾⑥では、禅月は、唐の詩僧の一人として数えられており、⑦では、「然れども言ふに足ること無し」と、かなり辛辣な評価がなされている。

(IV) 伝記①——錢鏐との親交、不和、決裂

五山僧は禅月の生涯のどのあたりに興味を持っていたのだろうか——。

『蕉堅藁』五十三番詩の本文を掲げる。

五三 まさに近県に往かんとして、觀中外史に留別す 時に臨川復位の訴へに因りて、宇治より江州に如く

客路無多冬日暖 客路、多きこと無く、冬日暖かなり。

出郊徐歩散幽襟 郊を出でて、徐かに歩んで、幽襟を散ず。

偶当辞府似禅月 偶々府を辞するに当たりて禅月に似、

未即買山同道林 いまだ即ちに山を買ひて道林に同じからず。

勁草有誰憐晩節 勁草、誰有りてか晩節を憐まん。

甘棠空自恋春陰 甘棠、空しく自ら春陰を恋ふ。

白漚江上旧盟冷 白漚、江上、旧盟、冷ややかに、

老鶴何妨万里心 老鶴、何ぞ万里の心を妨げん。

【通釈】近江への旅路はそれ程遠くなく、冬の日差しは暖かい。宇治の郊外を出て、ゆっくりと少しずつかに歩き、沈鬱とした気分を晴らす。たまたま都を去るに当たって、その行動は禅月（が錢鏐の許を去ったの）に似ており、いまだに、すぐさま山を買って、支遁と同じような事はしていない。勁草（の如きわたし）の晩節を、誰がいつたい、慈しんでくれようか。（善政を施した周の召公がその下に宿ったという）甘棠は今も空しく、わたしは春の木陰を思い慕うばかり（夢窓派の「甘棠道場」たる臨川寺は「五山」に昇位してしまい、わたしは元の「十刹」に復位することを望んでいる）。江上の白漚（の如きあなた（観中中諦）との古くからの忘機の交わりは、今もなお健在。老鶴（の如きわたし）が万里の高空を飛ばんとする志を、どうして妨げることができようか。

この詩の詠作状況も、すでに本編第二章第二節で言及した。永和三年（一一三七）、細川頼之（一一三二～九）が臨川寺を「十刹」から「五山」に昇位させた。夢窓派の中でも春屋妙葩（一一三一～八八）を中心とした一派は、同寺が夢窓派の「度弟院」から「十方刹」になることを恐れ、これに激しく反対し、「十刹」に復位さ

せるように幕府に提訴した。そして、春屋一派に属していた絶海は、この動きに連動し、宇治に客居した後、永和四年の冬頃、近江に行かんとして、この詩を詠出したのである。

さて、三句目に「偶々府を辞するに当たりて禅月に似」とあるが、諸注では、禅月に関する故事を未詳として、先に結論から述べると、わたくしは、錢鏐との逸話を典拠にしているのではないかと考えている。ただし、この逸話は、少し複雑な様相を呈している。

まず、先に引用した『禅月集』の後序には、該当する記事は見当たらない。『宋高僧伝』には、

乾寧初齋志謁吳越武肅王錢氏。因獻詩五章。章八句。甚愜旨遺贈亦豐。王立去偽功。朝廷旌為功臣。乃別樹堂立碑記同力平越將校姓名。遂刊休詩于碑陰。見重如此。〔大藏經〕第五十卷

とあり、禅月が乾寧（八九四―九七）の初め、吳越の錢鏐（字は具美、諡は武肅）に謁見し、每章八句の詩五章を献じたところ、大いにその意にかなない、遺贈を十分に受けたと記されている。

これに対して、『唐才子伝』巻第十の「貫休」項には、

初、昭宗以下武肅錢璩平董昌功上、拜鎮東軍節度使、自称吳越王。休時居靈隱、往投詩賀、中聯云：「滿堂花醉三千客、一劍霜寒十四州。」武肅大喜、然僭侈之心始張、遣諭令改為「四十州」、乃可相見。休性躁急、答曰：「州亦難添、詩亦難改。余孤雲野鶴、何天不可飛？」即日裹衣鉢、扞袖而去。

（文津出版社）

とある。禅月が靈隱寺に居た時、鎮東軍節度使であり、自称吳越王の錢璩に詩を奉ったところ、頷聯に「滿堂、

花のごとく酔ふ、三千の客。一劍、霜のごとく寒し、十四州」とあり、錢鏐は内心、大喜びだった。しかし、奢侈の心に流されて、「十四州」を「四十州」に改めるならば対面してもよい、という訓令を出したので、躁急な禅月は、「州もまた添へ難く、詩もまた改め難し。余、孤雲、野鶴、何れの天にか飛ぶべからざらん」と答えて、すぐに衣鉢を纏めて、決然として去って行ったという。同様の話は、『唐詩紀事』や『瀛奎律髓』等でも確認できる。

一方の『宋高僧伝』では錢鏐との親交を、もう一方の『唐才子伝』では錢鏐との不和、決裂を伝えている。両書とも、わが国の禅僧によく読まれた書物なので、彼らの間では、二通りの理解がなされていたようである。例えば、景徐周麟（一四四〇〜一五一八）の『翰林葫蘆集』第六には、

蔭涼軒主以事赴江左軍營、有途中八詠、予一日過軒下、出之見示、予乞而帰、諷詠涉日、吁今代無此作、求之古詩僧之間、有事実粗相類者、禅月謁吳越王、因賦詩五章八句、以頌平越之功、王喜之、軒主出入大將軍油幕、（下略）

【注】「蔭涼軒主」とは亀泉集証、「大將軍」とは足利義尚。

という文章がある。傍線部 a は『宋高僧伝』に拠ってしよう。景徐は、蔭涼軒主（亀泉集証）が、近江国にある大將軍（足利義尚、一四六五〜八九）の軍營に赴く途中、律詩を八首詠じたことを知って、権力者・吳越王（錢鏐）と詩僧・禅月の親交を想起している。また、祖溪徳濟の『水拙手簡』に収められている大昌院衣鉢侍者禅師の書簡の中には、

雖_二吾土_一而変非_レ故。水為_二兵塵_一而流不_レ清。況又袈裟非_二轅門之具_一。鉢盂非_二牙帳之器_一。孤雲野雀慚_二禪月_一者不_レ少。鴻慈不_二以為_レ怠。 (下略) (『統群』第十三輯下)

というくだりがある。傍線部b「孤雲、野雀(雀ノ誤字カ、朝倉注)、禪月を慚ずる者少なからず」には、『唐才子伝』に見られる、禪月が錢鏐と決裂する際に発した言(「余、孤雲、野鶴、何れの天にか飛ぶべからざらん」)が踏まえられていると思われる。正宗龍統(一二四二八〜九八)の『禿尾鐵苕集』には、「野鶴孤雲自在飛」(正宗和尚住_二東山建仁禪寺_一語録)という用例もある。なお、『蕉堅藁』五十三番詩の八句目「老鶴、何ぞ万里の心を妨げん」にも、この禪月の言が影響しているのではないか、とわたくしは考えている。⁸⁾西胤俊承の『真愚稿』には「未_レ応_三錢氏留_二禪月_一」(「再用_二前韻_一寄_二鄂隱上人_一」)という詩句があるが、これも基本的には、禪月と錢鏐の不和、決裂を下敷きにして詠出されたものだろう。

再び『蕉堅藁』五十三番詩に戻る。絶海は春屋一派の一員として、臨川寺をめぐる幕府の政策に反発し、京都から近江に隠遁した。その際、絶海は自身の姿を、権力者・錢鏐の意に逆らい、彼の許を去った詩僧・禪月の姿に重ね合わせていたのではないだろうか。なお、この解釈のほかにも、稿者の読解には、諸注と異なる箇所があるので、【通釈】を参照していただければ幸いである。

(V) 伝記②——石霜慶諸との師弟関係、禪月閣等

虎関師鍊(一二七八〜一三四六)の『濟北集』卷第十一・詩話には、

夫齊己（己）者唐末人。為鄭谷詩友。謂禪月齊己（己）也。二人共參遊仰山石霜會下。禪書中往往而見焉。

（『全集』第一卷）

【注】「仰山」とは仰山慧寂、「石霜」とは石霜慶諸。

という記述があり、禪月と齊己が、仰山慧寂や石霜慶諸の会下に参遊したことが記されている。文中には「禪書の中に往往にして見ゆ」とあるが、無学祖元（一一二六〜八六）の『仏光国師語録』巻第二・仏光円満常照国師台州真如禪寺語録二の、

張拙秀才。因禪月大師指参石霜。霜問秀才何姓。張云名拙。霜云覓巧尚不可得。拙自何来。公忽有省。乃呈偈曰。（下略）

（「瀋山養子。恩威並行。只是二子。向背有異。且道。諸訛在甚麼处。喝一喝」、『大藏經』第八十卷）

【注】「瀋山」とは瀋山靈祐。

という箇所は、『五灯会元』巻第六の張拙秀才の条からの抜粋である。ここでは、禪月が張拙に、石霜の許に参じるように指図している。禪月と石霜の師弟関係に関して、禪書以外に目を向けてみると、『唐詩紀事』『瀛奎律髓』『苕溪漁隱叢話前集』等に記述があり、『禪月集』巻第十三には「送僧入石霜」という詩も見受けられる。『禪月集』後序や『唐才子伝』には記述がない。

○赤旃檀塔六七級、白函菖花三四枝、禪客相逢只彈指、此心能有幾人知。石霜問云、如何是此心。休不能答。石霜云、汝問我答。休即問之。霜云、能有幾人知。

『唐詩紀事』卷第七十五・「僧貫休」項、四部叢刊

○方回：齊己、潭州人、与貫休並有聲、同師石霜。二僧詩、唐之尤晚者。己詩如下「夜過秋竹寺」、醉打老僧門上、最佳。此詩起句自然、第六句尤好。

『瀛奎律髓』卷之十二・秋日類、僧齊己・「新秋雨後」、上海古籍出版社

また、蘭坡景菴（一四一九〜一五〇二）の疏の一節には、

（上略）久聞高風之激貪。俄為群生而出世。昔貫休徒^度万寿。拔毛遂於三千人。今円照住五峰。觀君実於八九分。（下略）

『雪樵独唱集』三・「仙英住天龍諸山」

【注】玉村氏は「徒」字に、「尊經閣本「徒」ヲ「徙」ニ作ル。採ルベシ」という注を付されている。「円照」とは法空宗本、「君実」とは司馬光、「仙英」とは仙英周玉。

とあり、禅月が万寿寺（江蘇省蘇州市の東北）に徙居したとあるが、『中興紀聞』卷第三の「禅月大師」項には、万寿寺有禅月閣。禅月者。唐僧貫休也。生於婺之蘭溪。（下略）

『筆記小説大観』第九冊

という記述があり、万寿寺に彼の寓跡があることが知られる。『扶桑五山記』一・大宋国諸寺位次の「万寿蘇州平江府報恩光孝禅寺」項にも、景致の一つとして禅月閣が挙げられている。『空華集』卷第十九の「嶽岱宗住相万寿道旧疏」に「升禅月堂。則一氣撥転如来蔵」とあり、『雪樵独唱集』三の「利涉住万寿道旧」に「禅月称能詩僧」（前掲）とあるのも、このことを踏まえてのことだろう。

この他、清拙正澄（一二七四〜一三三九）の『禅居集』に「餅鉢垂垂白髮而来。禅月受知於蜀主」（「明極

和尚住^ニ建長^ニ諸山疏^一』とあるのは、禅月が蜀国に入り、先帝の王建に「一瓶一鉢、垂垂として老ひ、万水千山、得得として来たる」の詩を献上したことを、『松山序等諸師雜稿』に「一身瓶錫行李、想必如^ニ禅月之浮游^一」とあるのは、禅月が各地に遊んで縑素と交わったことを、それぞれ踏まえていると思われる（『禅月集』後序等参照）。また、『翰林葫蘆集』第一に「禅月有^ニ山居詩^一」、嘲^ニ錦衣之遊^ニ龍華寺^一」（『霖父住^ニ相国^一』、前掲）、『雪樵独唱集』三に「禅月称^ニ能詩僧^一。龍興新題可^レ想」（『利涉住^ニ万寿道旧^一』、前掲）とあるのは、禅月が龍華寺（四川省成都市）や龍興寺（湖北省十堰市房県）に滞在したことを踏まえているのだろう（『宋高僧伝』『太平広記』等参照）。

(VI) その他——十六羅漢図

こういう自由に羅漢図を画く画家のなかにあつて、禅月大師貫休は、まさに面期的な画家といわれる。彼はこの羅漢図の一つのスタイルを確立した。羅漢といえは禅月、禅月といえは羅漢といわれるようになる。

（梅原猛氏『仏像・羅漢』、『梅原猛著作集』2所収、集英社、昭和五六、三三八頁）

禅月で忘れてはならないのが、彼が十六羅漢図の名人だったことである。羅漢図はその作風や、羅漢の相貌の表現などによって、一般的に「和様」「禅月様」「李竜眠様」に分けられる（田中義恭氏・星山晋也氏『目でみる仏像6 羅漢・祖師』、東京美術、昭六二）。試みに彼の事跡を追ってみると、以下のような記事がある。

①乾寧初齋^レ志謁^ニ吳越武肅王錢氏^一。（中略）休善^ニ小筆^一得^ニ六法^一。長^ニ於水墨^一形似之状可^レ觀。受^ニ衆安橋強

氏菓肆請^一。出^二羅漢一堂^二云。每^レ画^二一尊^二必^レ祈^三夢得^三応真貌^一。方^レ成^レ之。与^二常体^二不^レ同。

〔宋高僧伝〕

②王氏建国時。来居^二蜀中龍華之精舎^二。因^レ縦^レ筆。用^二水墨^二画^二羅漢一十六身并一仏二大士^二。巨石縈^レ雲。枯松帶^レ蔓。其諸古貌。与^二他人画^二不^レ同。或曰。夢中所^レ觀。覺後^レ図^二原作^レ円。摺^二明鈔本^二改^レ之^一。謂^二之^二応夢羅漢^一。門人曇域、曇弗等。甚秘重^レ之。(下略) 出^二野人間話^一

〔太平広記〕卷第二百一十四・「貫休」項、中華書局)

①からは、禅月が呉越を流浪していた頃、衆安橋の強氏菓肆に頼まれて羅漢一堂を描いたこと、②からは、王建が蜀を建国した時、龍華寺に来居していた禅月が、同寺の水墨画羅漢十六身並びに一仏二大士を描いたことが知られる。文中に「一尊を画くごとに、必ず夢に応真の貌を得んことを祈る。まさに之を成す。常体と同じからず」とか、「其の諸古貌、他人の画と同じからず。或るひと曰ふ、夢中に観る所、覺むる後に之を図す、と。之を応夢羅漢と謂ふ」とあるように、禅月は、夢中に見た容貌をそのまま描いていたらしく、その羅漢図は、他人の作と異なっていたという。田中・星山両氏は、禅月様の特徴を「胡貌梵相(インド・西域の顔形)」という奇怪な容貌をしていて、点景人物を配さず、中央に尊者を大きくあらわすのを特色とし、墨線を主体として古様な作風で描く(三二二頁)と説明されている。

瑞溪周鳳(一二三九一〜一四七三)の『臥雲日件録抜尤』長祿二年(一四五八)二月廿九日条には、以下のよう
な記事がある。

廿九日、赴建仁寺方丈府君相伴^一、点心罷、府君登慈視閣^一、齋罷、登閣、々中有藏經^一、皆黑漆函、今春自高麗^一來、壁掛十八羅漢像^一、蓋十六羅漢外、加慶友尊者・禪月大師^一、為二十八^一也、凡十八之設、古人有評、常以賓頭盧、梵語有增減^一、誤為兩、而加以慶友^一、亦非也、今雖无賓頭盧兩人之誤^一、而有加慶友^一之非^一、又以禪月^一補之、恐非歟、(下略)

(大日本古記録)

【注】「府君」とは足利義政。

この日、瑞溪は建仁寺の方丈に赴いた。足利義政の相伴だった。齋会が終わって慈視閣に登ると、そこには高麗将来の大蔵経とともに、壁に十八羅漢像が掛けてあったという。十八羅漢とは、十六羅漢に二尊者(尊名は不定)を加えたものである。二尊者に関しては、『法住記』の説者である慶友尊者と、第一尊者の賓頭盧尊者とを当てはめる場合が少なくないが、当該記事では、慶友尊者と禪月大師になっており、興味深い。ただし、瑞溪は疑問視している。

また、『天隱和尚文集』(『新集』第五卷所収)には、⁴⁵⁴ 禪月大師十六羅漢画像記」がある。長文なので、引用は避けるが、赤松政則が天隱龍沢(一四二二〜一五〇〇)に命じて、禪月大師作(おそらく模本)の十六羅漢画像の顛末を記さしめている。

三 詩僧ということ——結びにかえて

以上、甚だ大雑把ではあるが、五山文学における禪月受容の実態・様相に迫ってみた。この作業を通じて、改

めて五山禅僧の膨大な読書量、広大な読書圏を実感した。例えば、禅月の作品に関しては『禅月集』、詩評に関しては『詩人玉屑』『滄浪詩話』等、伝記に関しては『宋高僧伝』『唐才詩伝』『五灯会元』等から知識を得ていたことがわかる。また、当然と言えば当然であるが、禅月の受容の傾向に、五山禅僧の性格や興味、当時彼らが置かれていた社会的な立場・境遇などが如実に反映されていることに気付いた。それは絶海の場合も、決して例外ではない。

例えば（Ⅰ）の山居詩は、作者（禅僧）が実際に山居して詠ずるものである。絶海以外にも、初期の禅僧の作品集には比較的よく見られ（道元『永平広録』、夢窓疎石『夢窓国師語録』、龍山徳見『黄龍十世録』、鉄舟徳済『閻浮集』等）、彼らが好んだ詩（偈）のテーマの一つと言える。彼らは厳しい修行の合間を縫って、自己の心境（禅境）をストレートに吐露していたのだろう。（Ⅱ）では、「商山一皓」という語が言及されていた。禅僧は詩文を作成するために、まず中国の古典を講学、注釈する必要があった。抄物はこのような背景のもと、どのように大量に生産されたものと思われる。（Ⅲ）に見たように、五山文学僧は、やはり中国の、特に詩（偈）の上手な文筆僧に心惹かれたようである。（Ⅳ）の、権力者・銭鏐と詩僧・禅月との関係は、そのまま幕府（将軍）と五山禅僧との関係に移行させて考えることができよう。禅宗寺院は幕府の管理下にあり、五山禅僧にとって、幕府との交渉事は、日常的に直面した難題の一つだったに違いない。（Ⅴ）では、禅月と石霜の師弟関係について触れられていた。抑も禅宗は師資相承を重んずる宗派で、玉村氏は「それを語る時には、常にその法系を脳裏にえがきつつ話をすすめなければならぬ」（『五山文学』「はしがき」と述べておられる。（Ⅵ）の羅漢に関し

て、田中・星山両氏はつぎのように説明されている。

(上略) 五百羅漢図や十六羅漢図は禅宗寺院で山門の楼上に木造の十六羅漢像を安置したのに始まって、それは各宗にも及んで仏法の護持者として羅漢が祀られた。

画像の羅漢は、禅堂に掲げられた。近世になると禅寺で、羅漢会が盛んに催され、多くの参詣者を集め、民間では羅漢まわしの遊戯などが行われ、羅漢の名は親しまれている。(三五頁)

最後に本章を締め括るにあたって、中国の詩僧について付言しておきたい。(Ⅲ)や(Ⅳ)からも推察されるように、五山文学僧は、文筆僧という立場が共通することもあつて、彼らに対して一種の親近感を抱くとともに、彼らから多大な影響を受けていたと思われる。例えば『空華集』巻第十一には、つぎのような文章がある。

古之高僧居_レ岩穴_一。修_レ戒定慧_一。而餘力及_レ詩。寓_レ意於諷咏_一。陶_レ治性情_一者。固多矣。而視_レ其詩_一。則率以_レ道德_一為_レ主。章句為_レ次。枯澹平夷。令_レ讀者思慮洒然_一。若_レ唐皎然靈徹道標_一三師_一。以_レ詩鳴_レ於吳越之間_一。故諺美_レ之曰。雪之昼。能清秀。越之徹。洞_レ冰雪_一。杭之標。摩_レ雲霄_一。(下略)

〔築雲三隱倡和詩叙〕

昔の高僧の詩は、道德を主とし、章句は二の次だった。高僧の「枯澹(淡)」で「平夷」な詩風は、読者の心をさっぱりとさせたという。「枯澹(淡)」や「平夷」は、五山文学を読み解くキーワードになり得るだろうか。今後は、今回の禅月に関する結果を踏まえながら、他の中国の詩僧の、五山文学における受容にも注目してみたいと考えている。

注

- (1) 引用は五山版、作品番号は蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇）による。返り点は、江戸の版本（寛文十年版か無刊記本）等を参考にして、私に施した。
- (2) 芳賀幸四郎氏『中世禅林の学問および文学に関する研究』（日本學術振興會、昭三二）、蔭木氏・前掲書。
- (3) 引用は四部叢刊（徐氏本）による。ただし、内閣文庫蔵『禅月集』（毛晉本、漢書番号三四二二）で改めた箇所もある。
- (4) 『湯山聯句鈔』では、「¹⁰³得々、和尚を呼ぶ」という句について、「得々和尚ト云テ、老僧ノ名デアルゾ。千山万水得々^{として}来ト云句作タヲ、其人ヲ得得和尚ト云ゾ」（引用は岩波・新大系本）という抄文が付されている。
- (5) 芳賀氏・前掲書「第二編 中世禅林の文学」第二章 大陸文学の鑑賞と研究」に詳しい。川瀬一馬氏『五山版の研究』（日本古書籍商協會、昭四五）によると、『詩人玉屑』には五山版も存する。
- (6) 芳賀氏・前掲書、第二編、第二章に詳しい。『宋高僧伝』は『普門院蔵書目録』（『東福寺史』所収）にも記述がある。『唐才子伝』には五山版も存する（川瀬氏・前掲書）。
- (7) 義尚は長享元年（一四八七）九月、近江守護の六角高頼を討伐するため、同地に赴いた。亀泉は蔭涼軒主として、屢々、將軍義尚の陣中に伺候したが、『蔭涼軒日録』によると、この時の訪陣は、翌二年十月九日のことである。朝倉尚氏「景徐周麟の文筆活動——長享二年（三）——」（『地域文化研究（広島大学総合

科学部紀要Ⅰ』第二〇巻、平六)参照。なお、氏は「景徐が指す貫休の詩作と逸話については存疑。『全唐詩話』では、貫休は呉越国の王・錢鏐に詩を投じているが、この詩の語句をめぐる対立している。その結果、貫休は蜀に去る」と指摘されている。『全唐詩話』は、後人が『唐詩紀事』から抜粋して編したものである。

(8) 蔭木氏・前掲書、入矢義高氏校注『五山文学集』(新日本古典文学大系48、岩波書店、平二)、梶谷宗忍氏訳注『蕉堅藁 年譜』(相国寺、昭五〇)では、杜甫の「遣興」の「老鶴万里心」という句が挙げてあり、稿者もこれには異論がないが、禅月の言の影響も、少なからずあると考えている。

※引用本文の句読点、返り点、傍線、記号、番号は私に施した。また、旧字体や異体字を私に改めた箇所がある。

【付記】

資料閲覧に際して、国立公文書館内閣文庫当局のご厚情を賜りました。ここに記してお礼申し上げます。

*

*

脱稿後、『禅月大師山居詩略註』(海門元曠注)という書物があることを知った。『国書総目録』によると、元

禄三年〔二六九〇〕の序文をもち、元禄十年版と刊年不明の版本が存するという。詳細な検討はこれからであるが、このような本が江戸時代に流布したということは、それ程禅月の山居詩が人口に膾炙していたということであるろう。

第五章 五山文学における「和韻」について——絶海・義堂を中心に——

はじめに

「和韻」とは、特定の詩と同じ韻を用いて詩を作る方法を言う。わが国の五山文学作品には和韻詩が非常に多く、代表的な詩の総集である以心崇伝（一五六九～一六三三）他編『翰林五鳳集』では、卷第十一・十二は試筆和分韻、卷第二十六～三十一は雑和部となっている。にもかかわらず、管見の範囲では、この作詩法は、従来、あまり注目されていない。五山禅僧の作品を正しく読み解き、研究して行くためには、このような基本的な事柄が明らかにされなくてはならないと思われる。

本章では、「五山文学の双璧」と称せられた絶海中津（一三三六～一四〇五）と義堂周信（一三二五～八八）の作品類を通して、和韻詩の様相の一端を明らかにしてみたいと思う。義堂には『空華日用工夫略集』¹（以下、『日工集』と略す）という日記が残されているので、詠作状況を知る上で便利である。原詩（特に「本韻詩」と呼ぶ²）が判明する場合は、和韻詩との、内容面での関係を考察する。また、和韻詩の作成が、五山文学にとって、あるいは五山禅僧にとって如何なる意味を持つか、も併せて考えてみたい。

一 「和韻」という作詩法

まず、本論に入る前に、「和韻」という作詩法について確認しておきたい。『文体明弁』（明・徐師曾撰）の「和韻詩」項に、つぎのような説明がなされている。

一三 和韻詩 按和韻詩有三體。一曰依韻、謂同在一韻中而不必用其字也。二曰次韻、謂下和其原韻而先後次第皆因之也。三曰用韻、謂下用其韻而先後不必次也、如韓愈《昌黎集》有《陸渾山火和皇甫湜用其韻》是已。（湜詩今不傳、故採此詩不錄。）古人廣和、答其來意而已、初不為韻所縛。如高適贈杜甫云。「草《玄》今已畢、此外更何言？」甫和之則云。「草《玄》吾豈敢？賦或似相如。」（中略）中唐以還、元、白、皮、陸更相唱和、由是此體始盛、然皆不及他作、嚴羽所謂「和韻最害人詩」者此也。今略採次韻詩二篇、以備一體、且著其說、使學者勿效尤云。（下略）

（『明詩話全編』肆、江蘇古籍出版社）

和韻詩には三種類ある。一つは本韻詩と同じ韻中の文字を用いるが、必ずしも本韻詩の文字を用いなくてもよい「依韻」、一つは本韻詩の文字およびその順序をそのまま用いなくてはならない「次韻」、残りの一つは本韻詩の文字を用いるが、必ずしもその順序通りに用いなくてもよい「用韻」である。元来、古人の廣和は、その来意に答えるのみで、初めは韻に縛られることはなかった。中唐以降、元稹や白居易らが互いに相唱和したことにより、この作詩法が始めて盛んになったという。しかし一方で、後世になると、詩人がいたずらにその出来映えを競い、その才能を誇るとして、この作詩法に対して批判的な意見も提起されるようになった。『文体明弁』中にもその一部（傍線部）が引用されていたが、宋の嚴羽が撰述した『滄浪詩話』には、以下のような記述がある。

和韻最害_二人詩_一。古人酬唱不_二次韻_一、此風始盛_二於元白皮陸_一。本朝諸賢、乃以_レ此而闕_レ工、遂_二至_レ往復有_二八九和者_一。
〔滄浪詩話校釈〕・詩評・四一、人民文学出版社

翻つてわが国の五山文学作品に目を向けてみる。本章を通じても気付かれると思うが、和韻詩の大半は「次韻」である。それは例えば、「韻ヲ用フ」とか「韻ニ依ル」、「韻ヲ借ル」と記されている、である。虎関師鍊「二七八〜一三四六」の『濟北集』巻第十一・詩話には、

楊誠齋曰。大抵詩之作也。興上也。賦次也。賡和不_レ得_レ已也。(中略)至_二於賡和_一。則孰触_レ之孰感_レ之孰題_レ之哉。人而已矣。出_二乎天_一猶懼_レ狀_二乎天_一。專_二乎我_一猶懼_レ強_二乎我_一。今牽_二乎人_一而已矣。尚冀其有_二一銖之天。一黍之我_一乎。蓋我未_二嘗覲_二是物_一。而逆追_二彼之覲_一。我不_レ欲_レ用_二是韻_一。而抑從_レ彼之用_一。雖_二李杜_一能_レ之乎。而李杜不_レ為_レ也。是故李杜之集無_二牽率之句_一。而元白有_二和韻之作_一。詩至_二和韻_一而詩始大壞矣。故韓子蒼以_二和韻_一為_二詩之大戒_一。此書佳矣。然不_二必皆然_一矣。夫詩者志之所_レ之也。性情也。雅正也。若_二其形_一言也。或性情也。或雅正也者雖_二賦和_一上也。或不_二性情_一也。不_二雅正_一也。雖_レ興次也。(中略)又李杜無_二和韻_一。元白有_二和韻_一而詩大壞者非也。夫人有_二上才_一焉。有_二下才_一焉。李杜者上才也。李杜若有_二和韻_一其詩又必善矣。李杜世無_二和韻_一。故賡和之美惡不_レ見矣。元白下才也。始作_二和韻_一不_二必和韻而詩壞_一矣。只其下才之所_レ為_レ也。故其集中雖_二興感之作_一皆不_レ及_二杜李_一。何特至_二賡和_一責_レ之乎。(下略)

〔五山文学全集〕第一卷)

という文章がある。楊万里(楊誠齋)や韓駒(韓子蒼)の、「和韻」に対する批判的な言が引用されているもの

の、詩は志の之く所であつて、「賦」や「和」であつても、性情や雅正が表われていたら「上」である（性情や雅正が表われていなかったら、「興」であつても「次」である）、元稹や白居易は「下才」だから和韻詩が芳しくなかった（「上才」の杜甫・李白に和韻詩があつたら傑作に違いない）、と虎関は（苦しい）フオローをしている。どうして和韻詩は、五山禅僧の間でもてはやされたのだろうか――。

二 絶海・義堂の和韻状況

絶海および義堂の和韻状況を見てみる。

○絶海中津『蕉堅藁』³⁾

- ・五言律詩他（計三〇首、他作四首を含む） ……三首（すべて他作）
- ・七言律詩（計六七首） ……二二首
- ・五言絶句他（計二〇首） ……一首
- ・七言絶句（計五五首、他作三首を含む） ……一四首（他作三首を含む）

○絶海中津『絶海和尚語録』⁴⁾（以下、『絶海録』と略す）

- ・偈頌（計一二〇首、他作一首を含む） ……三六首（他作一首を含む）

○義堂周信『空華集』⁽⁵⁾

・卷第一

・古詩(計七首) ……二首

・歌(計三首) ……一首

・楚辭(計一首) ……ナシ

・四言(計一七首) ……ナシ

・五言絶句(計五六首) ……一首

・六言絶句(計一首) ……一首

・七言絶句(計一三二首) ……六一首

・卷第二

☆七言絶句(計二〇九首) ……一一一首

・卷第三

☆七言絶句(計二二三首) ……一〇七首

・卷第四

・七言絶句(計二三六首) ……五六首

・卷第五

・七言絶句(計二二四首、四首は他作か) ……六七首

・卷第六

☆五言八句(計一九三首) ……一三八首

☆五言排律(計二首) ……二首

・卷第七

☆七言八句(計一七〇首) ……一四四首

・卷第八

☆七言八句(計一八〇首) ……一四七首

・卷第九

☆七言八句(計一五一首、他作三首を含む) ……八五首(他作二首を含む)

・卷第十

・七言八句(計一〇〇首) ……三六首

・七言排律(計一首) ……ナシ

【注】 ☆印は五割以上が和韻詩であることを示す。なお、和韻詩の総数は、現段階で把握し得るものであつて、今後の調査により変動する可能性がある。本来ならば、本韻詩と逐一、照合するのが望ましい

が、散佚している場合が殆どで、数値は目安程度に考えていただきたい。

絶海の詩作品は『蕉堅藁』、偈頌作品は『絶海録』に収められている。前者は総数一七二首中四〇首（約二三・三％）、後者は総数二二〇首中三六首（三〇・〇％）が和韻詩である。義堂の詩（偈頌）作品は『空華集』に収録されており、総数一八九六首中、和韻詩は九五八首（約五〇・五％）である。義堂の詩の半数が和韻詩であることが注目される。

三 絶海・義堂の和韻詩の詠作状況

先に結論から述べると、絶海と義堂の和韻詩を概観すると、その詠作状況は、（Ⅰ）贈答・唱和にともなって詠作する場合と、（Ⅱ）本韻詩が契機となって詠作する場合とに大きく分類される。さらに（Ⅱ）は、（a）本韻詩が中国の詩人のもの、（b）本韻詩が先輩僧のもの、（c）本韻詩が自身の旧作、の三つの場合に分けられる。以下、具体的に各々の用例を見て行くことにする。なお、「本韻詩」項には当該詩の本韻詩、「参照」項には当該詩と同じ韻字が用いられている詩をそれぞれ掲げた。傍線、文字囲、番号等は私に施した。

（Ⅰ）贈答・唱和にともなって詠作する場合

①『蕉堅藁』

一 呈真寂竹菴和尚

不堪長仰止。渚上寄高踪。流水寒山路。深雲古寺鐘。香花嚴法會。冰雪老禪容。重獲霑真菓。多生慶此逢。

一 A 和

豫章老謬懷渭

絕海藏主力究本參。禪燕之餘閒事吟詠。吐語輒奇。予歸老真寂。特枉存慰。將遊江東。留詩為別。有曰。流水寒山路。深雲古寺鐘。氣格音韻。居然玄勝。當不愧作者。予老矣。無能為也。不覺有媿後生之歎。遂次韻用答。誠所謂珠玉在側。不自知其形穢也。

三韓辭海國。五竺訪靈踪。洗盆龍河水。燒香鷲嶺鐘。安居全道力。段食長齋容。特枉留詩別。何時定再逢。

洪武六年。歲在癸丑。冬十二月廿日。書真寂山中

一 B

豫章蒲菴來復

東遊吳越寺。雲水寄行蹤。晴曬花間納。寒吟月下鐘。鴻飛誇健翮。鶴瘦識清容。別去滄洲隔。樽桑幾日逢。

一 C

延陵夷簡

絕海藏主。嘗依今龍河全室宗主。於中天竺室中參究禪學。暇則工於為詩。又得楷法於西丘竹菴禪師。故出語下筆。俱有準度。將遊上國。觀人物衣冠之盛。与夫吾宗碩德禪林之衆。有

レ詩留ニ別竹菴一。菴喜而和レ之。茲承レ見レ示。復徵ニ於予一。遂次レ韻一首。奉ニ答雅意ニ云。

問レ道金陵去。因求ニ勝地踪。光飛舍利塔。声動景陽鐘。燕墨懷ニ王樹一。鷹巢謁ニ鏡容一。龍河禪席盛。聖

代喜ニ遭逢一。

【注】「竹菴和尚」「懷渭」とは清遠懷渭、「蒲菴來復」とは見心來復、「夷簡」とは易道夷簡、「全室宗主」

とは季潭宗渤。

②『蕉堅藁』

八〇 応レ制賦ニ三山一

熊野峰前徐福祠。滿山葉草雨餘肥。只今海上波濤穩。万里好風須ニ早歸一。

八〇A 御製賜レ和 大明太祖高皇帝

熊野峯高血食祠。松根琥珀也応レ肥。当年徐福求ニ僊藥一。直到ニ如今一更不レ歸。

【注】「高皇帝」とは洪武帝（朱元璋）。

③『空華集』卷第四

觀中寄ニ南陽艸廬函詩一。予読レ之忽憶。昔觀中訪ニ予南陽旧業一過レ冬。煨レ芋戲擬ニ老坡餅筍一作ニ芋筍詩

一。今觀中在レ里予廩ニ官寺一。屢乞レ退未レ許。有レ感次レ韻一首謝ニ觀中一曰。

披_レ函想_レ聽_二臥龍吟_一。艸舍天寒雨雪深。一出聊酬_三顧重_一。英雄割拠本無心。
新詩讀了一長吟。旧隱南陽落葉深。尚記_三冬風雪夜_一。蹲鴟撥出地爐心。

【注】「觀中」とは觀中中諦。

〔本韻詩〕「青嶂集」（觀中中諦著）

九七 南陽艸庐図

隴畝夕陽梁甫吟。中原消息乱雲深。輟_レ耕初起鬢如_レ雪。不愧_二刘郎鼎心_一。

（梶谷宗忍氏訳注『觀中録 青嶂集』、相国寺、昭四八）

④ 『空華集』卷第九

奉_レ呈_二淮后大相公_一

幾年林下望_二雲霄_一。今夕那期辱見_レ招。東閣華筵披_二宿霧_一。西園琪樹戰_二涼飈_一。座間天近蓬萊闕。簷際秋高
河漢橋。慙我疎才非_二賦鼎_一。謾聯_二拙句_一答_二璠璫_一。

答_二管翰林學士見_レ和_一

翰林珠玉下_二青霄_一。喚_二起吟魂_一不_レ待_レ招。工部逸才詩似_レ史。謫仙豪氣筆凌_レ飈。送迎每見雲隨_レ馬。來往時
愁水斷_レ橋。応_二是交情無_二貴賤_一。武夫勿_レ怪廁_二瑤瑤_一。

【注】「准后大相公」とは二条良基、「菅翰林学士」とは東坊城秀長。

【参照】『日工集』康暦二年（一三三〇）八月十四日条

十四日、二條殿使_下菅秀長送_二緘_一来_上、其詩叙曰、謹依_二来韻_一、奉_二答建仁義堂和尚座右_一、致_二日外垂訪之謝_一云、

老禪昂氣自籠_レ霄、甚喜来遊_レ応_二我_一招、雅韻驚_レ人歌_二白雪_一、霏談洗_レ耳起_二清颯_一、関河曾隔幾千里、雲月今隣第五橋、何日得_レ過_二方丈室_一、重聽_内新句_外夏_乙琅_瑤、（下略）

⑤ 『蕉堅藁』・「宝冠精舍次_二韻大亨西堂見_レ訪_一」（九九）

⑥ 『蕉堅藁』・「次_二允修小生歲旦韻_一」（一二七）

⑦ 『絶海録』卷下・「和_レ韻謝_二天寧天倫禪師上竺一菴講師過訪_一」（二七六）

【参照】『青嶂集』・「和_二天倫和尚韻_一」（二二）

⑧『絶海録』卷下・「將往近県」。次韻奉別元章和尚。「三首」(二八三)

⑨『空華集』卷第二・「素中上人所藏錢舜舉自贊牡丹芙蓉梅竹同幅之画蓋天下絶品也。予欲借一觀。上人戲予曰。子若和吾詩當以画為報也。喜不自勝。連和二章。幸勿食言云爾」(二首)

〔本韻詩〕『空華集』卷第二・「觀諸友淵明采菊圖詩卷戲題其尾」

⑩『空華集』卷第三・「次韻悼大喜和尚」(三首)

⑪『空華集』卷第七・「器之藏主疊和三首見寄。意在以文挑戰。予倒旌而退。復和三首以納款云」(三首)

〔本韻詩〕『空華集』卷第七・「和韻答古庭訓藏主」、「次韻再酬古庭」、「次韻答義田了藏主」等

〔参照〕『空華集』卷第七・「黄梅塔下值雪有懷寄古庭」。兼簡諸友以促駕云、「和答璣叟璇藏主以述昔遊之情」、「和酬古庭見索先師之語」等

⑫ 『空華集』 卷第八・「寄_レ答京城諸友_二各次_二來韻_一」〔六首〕

⑬ 『空華集』 卷第八・「次_レ韻賀_三石室住_二建長_一」

⑭ 『空華集』 卷第九・「次_レ韻戲謝_二無外袖_レ茶見_レ訪_一」

⑮ 『空華集』 卷第十・「次_レ韻答_二明室_一」并叙

序文に「明室侍者家世天潢。年尚少性最敏。昨於_二慈聖老人筵中_一。和_二余茶鼎詩唐律八句者_一。食頃而成。時觀者如_レ堵。咸駭歎曰。未會有也。余老且遲鈍。不_レ勝_二健羨_一。重用_二前韻_一為_レ詩張_レ之而自嘲云」とある。

〔本韻詩〕『空華集』 卷第十・「某蓄_二小茶鼎_一。寔今左丞相源君所_レ賜。珍愛之佳器也。顧_二余陋室雖_レ欲_二私藏_一可_レ得哉。遂送上_二慈聖龍湫和尚_一。少補_二客筵茗具之闕_一云」、「龍翁和_二前偈_一且以_レ鼎見_レ還復和再獻」

①く④は詩の全文、⑤く⑮は詩題と序文のみを掲げた。詩の贈答や唱和は、複数の禅僧間（時に公家も含む）で行われるのが一般的なので、本韻詩が複数あったり、自身の作だったりする場合もある。まずは②、『蕉堅藁』からの引用である。この二首の詠出経緯は、『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）永和二

年〔一三七六〕条で知ることができる。

永和二年丙辰。師四十一歳。大明洪武九年春正月。太祖高皇帝召見英武楼。問以法要。奏对称旨。又召至板房。指日本图。顧問海邦遺跡熊野古祠。勅賦詩。詩曰。熊野峯前云云。御製賜和曰。熊野。

又賜以僧伽梨・鉢多羅・茶褐椀・櫛栗杖・并宝鈔若干。詔許還国云云。(下略)

〔大正新修大藏經〕第八十卷

これによると、絶海は永和二年(洪武九年)、四十一歳の時に、高皇帝〔一三二八〜九八〕に金陵(南京)の英武楼に招かれ、法要を問われて、その答えは皇帝の気に入るものであった。また、皇帝に書籍の部屋に招かれて、日本の地図を指しながら熊野の古祠を尋ねられ、勅命によつて熊野三山(熊野三社、本宮・新宮・那智)の詩(八十番詩)を賦すと、御製の和(八十番詩A)を賜った。また、皇帝からたくさんのご褒美(僧伽梨等)をいただき、日本に帰ることを許されたという。

再び②に戻る。「御製の和を賜ふ」とあるが、両詩とも一、二、四句目の韻字が「祠」「肥」「帰」なので、八十番詩Aは、八十番詩に次韻していると言えよう。韻字に注目しながら、少し内容面に目を向けてみる。「徐福」は始皇帝の命令で、童男童女を率いて海上に入り、不老長寿の仙薬を求めたのだが、その後行方不明になり、熊野に到着したという伝説もある。⁶⁾ 両詩はこのことを踏まえている。まずは一句目。絶海が「熊野の峰前、徐福の祠」と詠じているのに対して、「祠」を韻字に用いなくてはならない高皇帝は「熊野の峰高し、血食の祠」と詠じ、ともに徐福の祠を詠じている。続いて二句目は、絶海は「満山の薬草」、高皇帝は「松根の琥珀」がそれぞ

れ「肥」えると詠じている。四句目の韻字は「帰」であるが、高皇帝は「不帰」と用いており、三句目から四句目にかけて、その昔、徐福は仙薬を求めたが、今に至るまで帰って来ない、と詠んでいる。対する絶海は、只今（天子の御威徳で）海上は波が穏やかで、万里の好風を受けて、徐福は（仙薬を持って）早く帰って来るでしょう（わたしも早く帰国したい）、と詠んでいる。一方は希求を詠み、一方は現実を詠んでおり、好対照である。なお、この絶海と高皇帝のエピソードは、広く流布していたらしく、度々他の禅僧の詩文集や抄物（『補庵京華前集』『翰林葫蘆集』『中華若木詩抄』等）に指摘されている。

①は、序文や詩後の自注によると、洪武六年（応安六年、一三七三）十二月二十日、真寂山において、これから江東地方（金陵）へ赴かんとする絶海が、清遠懐涓に留別詩を贈呈し、それに対して清遠、見心来復、易道夷簡がそれぞれ送別詩を唱和したことがわかる。絶海が「多生、此の逢を慶ぶ」（一）と、清遠に逢えた喜びを詠じているのに対して、清遠は「何れの時か再逢を定めん」（一A）と詠じ、再会を期している。見心も「樽桑、幾日か逢はん」（一B）と、日本での再会を望み、易道は「聖代、遭逢を喜ぶ」（一C）と、絶海に逢えたことを喜んでいいる。③は義堂と観中中諦「二三四二〜一四〇六」、④は義堂、二条良基「二三二〇〜八八」、東坊城秀長の詩の応酬であるが、いずれも内容面では、本韻詩と和韻詩がよく呼応していると思われる。③に関しては、徐庶が諸葛亮を臥竜と評したこと、劉備が三度、諸葛亮の草廬を訪れ、出廬を請うたことなど、使用されている故事まで呼応している（『三国志』諸葛亮伝、『蒙求』「孔明臥龍」・「諸葛顧廬」参照）。

さて、これまでと少し視点を変えて、『日工集』を見ることによって、禅僧の日常生活における和韻詩の在り

方を確認してみたい。永徳二年（一三八一）正月十一日（廿日条を挙げる）。

十一日、晴、赴東光古劍之招、時會者玉堂・將作（臣）・土岐宮内少輔・山名民部、古劍出新年試筆七言八句詩、和者十九人、將作問金剛經四句偈等事、余略答之、又問曰、俗人可得悟否、余曰、悟無真俗、安有不悟之理哉、又曰、或云（曰イ）不悟如何、余曰、悟不悟、是什麼椀、只貴自默契耳、因舉莊子輪扁云々、

十二日、陰、和胡字八句、寄東光古劍、

十三日、雨、元章和余湯字・華字各一首見呈、

十四日、雨歇而陰、午後晴、連和胡字三首、戲答古劍、

十五日、古劍復和胡字三首、余又和三首、是夜以無油故、戲及東壁隣光云々、

十六日、晴、不遷・元章來賀、余與僧録・太清・參下府、々君出接、略賀而退、人事、銀劍一腰・杉紙十刀、伴僧録抵通玄寺賀歲、尼長老母子三人々事、一襲十刀、余獨先歸、與不遷・元章相看、不遷出和余賀首座君字八句詩、余出胡字唱和之什、元章・不遷寫取而去、就于管領宅賀歲、人事、青磁爐瓶・一襲十刀、時令弟將作在焉、次過赤松宅、他之不面、

十七日、晴、大御所、次大方殿、次無等局賀歲、次建仁方丈・諸塔菴巡賀、南禪蘭洲及古劍至、不值、古劍復和胡字、留而去、余亦和者三首、

十八日、晴、府畿、請南禪長老蘭洲及僧九人、例也、余先與蘭洲人事、十刀一襲、時古劍復至、戲話商

「權胡字和章」、古劍又出昌普省「母八句者」、予和之、予与古劍「以詩戰」、且云、足成三十偈而止可也、古劍拳^二旧作^一曰、塔前班竹今朝泪、壁上莓苔旧日詩、龍湫所^二歎伏^一也、

十九日、晴、作^レ詩寄^三謝雲門太清和尚送^二古尊宿錄^一、小師宗儔侍者持來、故有^二香林抄底獨雲門之句^一、廿日、晴、太清和^二門字^一者三首、為^二南子^一也、古劍至、以^二胡字諸作^一、与^レ余講明、余改^二数十字^一、万里小路・侍從中納言殿賀歲、話及^二旧年雪詩唱和^一、人事、十刀一襲、右京大夫殿・月心和尚來札、

【注】「古劍」(十一日条)とは古劍妙快、「玉堂」(同上)とは斯波義將、「將(匠)作」(同上)とは斯波義種、「土岐宮内少輔」(同上)とは土岐詮直、「山名民部」(同上)とは山名氏清、「元章」(十三日条)とは元章周郁、「不遷」(十六日条)とは不遷法序、「僧録」(同上)とは春屋妙葩、「太清」(同上)とは太清宗渭、「府君」(同上)とは足利義滿、「尼長老」(同上)とは智泉聖通、「首座」(同上)とは鏡湖以宗、「管領」(同上)とは斯波義將、「赤松」(同上)とは赤松義則、「大御所」(十七日条)とは澁川幸子、「大方殿」(同上)とは紀良子、「蘭洲」(同上)とは蘭洲良芳、「昌普」(十八日条)とは天心昌普、「龍湫」(同上)とは龍湫周沢、「宗儔侍者」(十九日条)とは友岩宗儔、「香林」(同上)とは香林澄遠、「雲門」(同上)とは雲門文偃、「南子」(廿日条)とは浦雲周南、「万里小路」(同上)とは万里小路嗣房、「侍從中納言殿」(同上)とは三条西公時、「右京大夫殿」(同上)とは細川頼元、「月心和尚」(同上)とは月心慶円。

十一日条。義堂は古劍妙快到招かれて、斯波義將(玉堂、一三五〇〜一四一〇)や義種(将作)等と東光寺を

訪れた。古劍は新年の試筆七言八句詩を作り、その詩に唱和する者が十九人いた。翌十二日、義堂は胡字八句に和韻して、古劍に寄せた。十四日にも胡字三首に連和し、戯れに古劍に答えている。翌十五日には、古劍がまた胡字に三首和すると、義堂もまた三首和した。この夜は油が無かったので、「東光寺」に因んで、戯れに「東壁の隣光」という語句を詩に詠み込んだという。十六日、不遷法序と元章周郁が義堂の許を訪れ、一連の古劍との胡字の唱和詩を写し取って去って行った。十七日にも、古劍が胡字に和してその詩を残して去った後、義堂もまた三首和している。そして十八日、古劍がまた義堂の許を訪れ、戯れに胡字の唱和のことを話題に出したので、義堂は、古劍と詩を以って戦っている現状を省察し、「十偈を成すを足れりとして止むれば可なり」と言つて、一連の詩の応酬（詩戦）に終止符を打ったのである。なお、二日後の二十日、義堂と古劍は、胡字の諸作について説き明かし、義堂は数十字を改めている。義堂の詩は、『空華集』巻第十に収録されている。古劍の詩に関しては、彼の詩文集である『了幻集』にも見当たらない。

古劍新年試筆偈和第二十韻十首有叙

余少時耽詩。嘗在関左用城雷峯三韻為八句詩和答友人者殆乎百篇。好事者雅為詩戰。逮三年稍長。銳氣銷磨。乃痛悔前非。慎防口業。不復從於戰事矣。会庚申春來。輦下後三年。壬戌歲首一夕。忽被下東光古劍老禪將以胡字韻為突騎。襲我。我不備。其鋒不可當。而避之無計。窘不奈。揭竿為旗。剡蒿為矢。三戰三北而乃降矣。遂収其遺矢。墮鏃。束為二包。奉納。呵呵

甲子推窮到大初。笑他水牯老於吾。相蓬且問年多少。特地休論法有無。画餅充饑。似月。燃燈授記

驗同符。伽陀写出虚空紙。字字看来説不胡。

(三首省略)

上元座向暝鐘初。東壁隣光喜及吾。祖室千燈從此統。油餅一滴弗憂無。詞章麗似宜春帖。号令嚴於玉帳符。莫放神鋒輕出匣。邇來識劍少風胡。

(以下五首省略)

【注】「古劍」とは古劍妙快。

ここで注意したいのは、『日工集』永徳二年正月十八日条にも見られたが、義堂が、古劍との詩の応酬を「詩戦」と表現(認識)していたことである(⑩の詩題には、「意は文を以つて戦ひを挑むに在り」と記されている)。序文の「たまたま庚申の春、輦下に來たりて後三年」以下の文章は、例えば古劍を「老禅将」に喩えていたりして、非常にユニークである。義堂が詩の唱和を、より文学的、遊戯的に捉えていたことが端的に表われているよう。

先に挙げた『日工集』の引用において、義堂と古劍の詩の応酬以外にも、「和韻」に関する記事は散見した。こうして見ると、詩の贈答や唱和は、禅林社会において日常的に行われており、「和韻」という行為は、社交の手段として半ば習慣的に、時として遊戯的に行われていたことが知られる(和韻詩の詩題にもよく「戲」字が見られる。⑨・⑭参照)。それ故、例えば、唱和の場などでうまく立ち振舞えるように、常日頃から義堂の許に和韻詩の添削を求めてやってくる禅僧や公家が跡を絶たなかつたのであろう(『日工集』貞治六年追抄七月九日条、応安三年八月七日条、永徳元年十一月十三日条等参照)。

(II) 詩作の契機になる場合——(a) 本韻詩が中国の詩人のもの

① 『空華集』 卷第六

二月二十四夜大雨。次早余病少間。偶閱唐高僧無可贈詩僧。有曰病多身又老。枕倦夜兼長之句。遂感于心。和其全篇付侍僧曰某者誦之。曰

雨声喧竹屋。風響撼松堂。幾夜吟欹枕。三春病臥牀。停鋸階草蔓。懶鑷領髭長。今古亡羊者。豈惟穀与臧。

「本韻詩」『全唐詩』卷八百十三・無可一

贈詩僧

寒山对水塘。一作廊。竹葉影侵堂。洗藥冰生岸。開門月滿牀。病多身又老。枕倦夜兼長。来謁吾曹者。呈詩問否臧。

(明倫出版社印行。〈 〉内は割注を示す)

② 『空華集』 卷第六

和皎然詩送中竺道者赴叡山受戒并序

不肯資章甫。勝衣被木蘭。今随秣陵信。欲及蔡州壇。梵寺鐘声遠。春山戒足寒。帰来次第学。

応_レ見_二後心_一難_レ。此乃唐高僧書之昼公。送_下志公沙弥赴_二上元_一受戒_上詩也。永和丙辰二月。小師中竺季十
三。以_二道者_一。自_二福山_一。將_下赴_二比叡山_一。登壇受戒_上也。特來告_レ辭。且需_二餞詩_一。則告_レ之曰。夫登壇
受戒。寔_二仏祖之權輿_一。禪智之基本也。而邇季_二賈浮囂之輩_一。冒_レ名竊_レ服。辱_二戒壇_一者皆是也。汝其慎也哉。
遂書_二昼公詩於前_一。步_二其韻於後_一。示為_二受戒之資_一云。

剪_レ髮為_二童子_一。安_レ名配_二法蘭_一。試_レ經須_レ得度。稟_レ戒要_レ登_レ壇。岳雪粘_レ鞵濕。江風掠_レ面寒。青春看_レ易暮。
海路莫_レ愁_レ難。

【注】「昼公」とは皎然（俗姓は謝、字は清昼）。

③ 『蕉堅藁』・「山居十五首次禪月韻」〔十五首〕（三四）

「本韻詩」『禪月集』卷第二十三・「山居詩」并序〔二十四首〕

④ 『空華集』卷第一・「自書夢山說後」

序文に「余既為_二噩上人_一作_二夢山說_一。後數月一日閉_レ戸午睡。睡中有_レ若_下人引_レ余徑歸_二半雲旧隱_一。盤_中桓乎
烟霏空翠間_上。忽聽_二剥啄_一。覺而眠_レ之。乃夢山上人也。手_二茲卷_一求_レ書_レ後。拭_二睡目_一和_二蘇詩_一。以填_レ之曰。」
とある。

「本韻詩」「蘇軾詩集」卷二十三・「初入廬山三首」

⑤『空華集』卷第九・「謝永相山惠扇面蘇李泣別圖」次三元朝楊氏贊韻

①・②は詩の全文、③～⑤は詩題と序文のみを掲げた。①の『空華集』巻第六からの引用に注目する。序文によると、ある年の二月二十四日夜、外は大雨が降っていた。翌朝、義堂は少しく病気が癒えた。偶々唐の高僧である無可の「詩僧に贈る」詩を目にして、「病多くして、身も又老ゆ。枕に倦みて、夜兼ねて長し」の句に感じ入り、その詩全編(①「本韻詩」参照)に和して、侍僧に誦せしめたという。義堂の詩には、「幾夜吟じて、枕を敬そはだつ。三春病んで、牀に臥す」という句が見受けられる。

芳賀幸四郎氏『中世禅林の学問および文学に関する研究』(日本學術振興會、昭三一)などを見ても、当時の禅僧が多く漢籍に精通していたことが知られる。彼らはある作品と対峙して、その作品内容に共感し、興に乗じた時、詩を詠出していたと思われる。『翰林五鳳集』巻第五十八～六十一の支那人名部には、「フヲ読ム」という詩が散見する。

・「読伯夷伝」(巻第五十八、江西・三益)

・「読宋玉風賦」(同右、琴叔・梅陽)

・「読逍遙遊篇」(同右、琴叔)

・「読」金銅仙人辞漢歌」（卷第五十九、心田・琴叔）

・「読」孔明出師表」（同右、春沢・熙春）

・「読」蘭亭記」（同右、蘭坡）

・「読」淵明歸去來辭」（同右、瑞溪・月舟・村庵）

・「読」李白清平調詞」（卷第六十、瑞岩・万里・月舟・仁如・天隱・蘭坡）

・「読」杜甫洗馬行」（同右、春沢）

・「読」杜牧集」（同右、絶海）

・「読」東坡試院煎茶詩」（卷第六十一、瑞岩・春沢）

・「読」和靖詩」（同右、南江）

したがって、このような状況で和韻詩を作成した場合、その詠作内容は、おのずから本韻詩と同趣のものになつてしまう。それは②に関しても同様で、義堂は永和二年（一三七六）二月、唐の高僧である皎然の「至洪沙弥の上元に赴きて受戒するを送る」詩（②「本韻詩」参照）に和して、中竺道者が比叡山に赴いて受戒するのを送っている。

(b) 本韻詩が先輩僧のもの

① 『空華集』 卷第五

同諸友_二和_一禪居詩_一題_三嶋廟亭壁_一并叙

信每歎_二生晚不_レ及_レ識_二禪居師_一。故游_二名山勝槩_一。得_レ見_二其遺題_一。則雖_二片言隻字_一。皆收而宝_レ之。丁未秋九月。予及福鹿岡山諸友。志_二諸古_一者若干人。偕登_二斯亭_一。拜_二觀禪師泊諸老倡和之什_一。想_二見前朝人物之盛_一。乃属_二同遊者_一賡歌。以告_二後來君子_一。庶乎繼_二述厥美_一云

禪居妙偈筆通_レ靈。滿壁龍飛霧雨_レ腥。後四十年滄海變。山神猶護_二旧氈_一青。

禪居和尚題_三三島廟壁_一偈附

瀬戸行宮古最_レ靈。魚龍舞_レ浪海風_レ腥。浙江亭上多_二疑似_一。隔_レ岸越山相對_レ青。

【注】「禪居」とは清拙正澄。

② 『空華集』 卷第九

題_二温泉広濟接待菴_一并叙

応安甲寅春。余以_二湯医_一与_二九峰禪師_一会_二于斯菴_一。一日九峰出_二故梅洲老人旧題及自和者_一。命_二余泊同遊者_一和_レ之。後四年戊午春。九峰主_二於正統_一。余尸_二黄梅_一。隣牆往反話及_二温泉旧遊_一。遂探_二諸故紙中_一得_二其旧藁_一。仮_二筆遵用中_一書_レ版而刊_レ之。九峰眎_レ之曰。劍已去矣。子尚刻_レ舟何也。余笑而不_レ答。遂書_レ為_レ叙。

中宵夢破響浪_レ浪。応_二是巖根涌_一熱湯。寬寬伝_レ泉煙遶_レ屋。家家具_レ浴客賒_レ房。海涯地暖冬無_レ雪。山路天寒

午踏_レ霜。遠嶼朦朧雲霧黑。江潮送_レ月落_二微茫_一。 梅州

山開_二三面_一滄浪。上有_二靈神_一惟走_レ湯。潮怒雷声高_二曉枕_一。沙堆雪色護_二雲房_一。青松一樹何年墓。紅葉千林昨夜霜。勝槩無_二詩收拾_一。多情遠客_二轉蒼茫_一。 九峰

温泉乱浴汗淋漓。接得知消_二幾杓湯_一。宿客每分_二齋店榻_一。詩人偏愛_二贊公房_一。陶_二成什器_一輕_レ於_レ土。煮_二出官塩_一白_レ似_二霜_一。暫借_二僧窓_一同_二遠眺_一。東南目断水茫茫。

【注】「九峰禪師」とは九峰信虔、「梅州老人」とは中巖円月、「遵用中」とは用中昌遵。中巖の詩は、『東海一漚集』一に「熱海」と題して収録されている。

③ 『蕉堅藁』・「次韻壺隱亭」(六三)

【参照】『空華集』卷第八・「留題能叟居士壺隱亭」二首

④ 『絶海録』卷下・「永徳壬戌春清白寺賞_レ花。謹奉_レ追_二和先国師韻_一」(一九三)

⑤ 『絶海録』卷下・「次韻節月軒」(一九四)

〔参照〕『空華集』卷第四・「追和_二篩月軒旧韻_一。賀_二臨川古劍_一」。『了幻集』（古劍妙快著）・「建武甲戌歲

吾先國師憩_二乎臨川_一之日。栽_レ竹於東軒_一。軒扁_二篩月_一。説_レ偈賞_レ焉。從而和者。凡三十有四人。皆江湖英
衲。卓犖瑰偉之士也。後四十年。庚申夏。予來在_レ此。數_レ其人_一之在_二于今_一者_上。不_レ過_二三四輩_一爾。掩_レ卷
浩嘆不_レ已。而此君固自若也。追和_二厥韻_一。聊寄_二仰慕之意_一。且記_二歲月_一云。」

①・②は詩の全文、③〜⑤は詩題のみを掲げた。①の『空華集』巻第五からの引用に注目する。「禪居師」とは中国渡來僧の清拙正澄（一二七四〜一三三九）のことである。序文によると、義堂は遅く生まれたため、清拙と面識がなく、そのことを常々嘆いていた。それ故に名山や勝景を訪れ、清拙の遺題を發見すると、それがたとえ片言隻字であっても、すべて手に入れて宝物にしていたという。貞治六年（一三六七）秋、義堂は、建長寺や円覚寺の諸友等とともに三島廟（三島大社、静岡県三島市大宮町）の四阿に登り、清拙や諸老の唱和詩を拝観して、前代の人々の盛んな様子を想像した。そして、同遊の者たちとその詩に唱和し、後世の人々に、眼前の美しさを語り継_二ごう_一とした。『五山文学新集』別巻一には「詩軸集成」があり、『三嶋廟亭詩』（東福寺靈雲院蔵の『龜鑑集』という古写本の雑録の中に在る）も収められている。これによると、清拙が同廟に遊んだのは元徳元年（一二二九）春、義堂がこの詩軸を作成したのは応安二年（一三六九）秋七月朔のことである。こうして見ると、禪僧が名勝地や寺院の境致、塔頭、寮舎などを訪れた際、風景の素晴らしさや古跡（旧跡）の奥床しさ、以前に同地を訪れ、詩を吟詠した先輩僧に対する尊敬の念などが相俟って、彼らをして和韻せしめていたと言えようか。

義堂の詩には、「禪居の妙偈、筆、靈に通ず」という句も見受けられる。

②は、義堂が応安七年（一二三七）二月十八日に、湯治先の熱海広濟庵で中巖円月（一二三〇〇〜七五）の旧題に和したものである（『日工集』）。ここでは、同じく中巖の詩に和した九峰信度のもと同様、主として眼前の風景が詠じられているようである。

なお、つぎのような用例もある。『空華集』巻第七に「次韻春屋首座四十首」という詩があり、その序文には、

辛卯春。吾兄春屋首座有_二病中作_一。同病諸公遞相賡和。或五首。或十首。乃至三三十首。愈出愈奇。一時之盛作也。周信亦効_二其響_一。凡四十首。此内或贈答。或時事。或題詠。或紀行。余時有_二温泉之行_一。遂及_レ之云。

と記されている。これによると、春屋妙葩（一二三一〜八八）には、観応二年（一二三五一）春に病中の作（虫字韻）があり、同じ病気に罹った諸公と、或いは五首、或いは十首、乃至二、三十首、互いに相賡和したという。義堂もそれにならって、機会を別に_レして四十首も次韻したのだが、その詠作内容は、贈答、時事、題詠等と多岐に渡っており、病中の作から離れていることも注目されよう。

(C) 本韻詩が自身の旧作

①『空華集』巻第四

人日過_レ龜山_一訪_レ無求首座_一不_レ值。追和_レ旧韻_一留_レ題屋壁_一

人日尋_レ人不_レ在_レ山_一。童兒一笑指_レ他_レ山_一。梅花处处開_レ應_レ遍。不_レ是雲間_一即水_一間。

【注】「無求首座」とは無求周伸。

〔本韻詩〕『空華集』卷第四

仏成道日送_レ無求首座_一歸_レ西山_一

瞿曇曾出雪中_一山_一。首座今歸雪外_一山_一。等是心難_レ忘_レ熟_レ处_一。睦州房在_レ万松_一間_一。

② 『空華集』卷第二・「十八日府命屢至再歸_レ瑞泉_一自和_レ旧偈_一」

〔本韻詩〕『空華集』卷第二・「己酉二月十三日因_レ事謝_レ事瑞泉_一有_レ偈留_レ別道人_一」

③ 『空華集』卷第八・「癸卯分歲自和_レ前韻_一」

〔本韻詩〕『空華集』卷第八・「謝_レ東谷西堂_一惠_レ柑_一」

〔参照〕『空華集』卷第八・「甲辰歲旦試筆併前和答向陽谷」、「用柑字韻詠雪」、「人日偶詠杜詩」
有レ感復用前韻呈陽谷

①は詩の全文、②・③は詩題のみを掲げた。①は『空華集』卷第四からの引用である。この詩の、より詳しい詠出経緯は、『日工集』で知ることができる。

七日、赴西山、三會・雲居上香展拜、兩院主・臨川・天龍方丈人事、次過無求房、々主宅之、因用旧韻山字作詩、留付惠珙童子、即絶海度弟也、候無求歸呈似、詩曰、人日尋人不在山、童子一笑指他山、梅花処々開応遍。不是雲間即水間、楷中和山字曰、北斗維南有此山、崢嶸秀氣压群山、陽崖多産玉芝草、雨露恩從霄漢間、(下略)

(永徳三年正月七日条)

【注】「無求」とは無求周伸、「惠珙童子」とは元璞惠珙、「楷中」とは楷中口模。

永徳三年(一一三三)正月七日、義堂は、西山の臨川寺や天龍寺を挨拶回りしたついでに、無求周伸(一一三三二〜一四一三)を訪ねたが、あいにく不在だった。よって、旧韻の山字——『日工集』によると、前年の十二月八日(仏成道日)に無求が西山に帰るのを送って作った自身の偈(①)「本韻詩」参照)の韻を用いて、この詩を作り、絶海の徒弟である元璞惠珙に預けておいたという。両詩の内容面での関わりは、それ程ないように思われる。

○ 補 足

この節を終えるに当たって、論の進行とは別に、気付いたことを四点、以下に述べておきたい。

第一点は、禅僧が韻に和(次)す時の意識について、である。(I)③で義堂は、観中の詩一首に次韻して、二首詩を作っている。また、(II)(a)③で絶海は、禅月大師(徳隠貫休、八三二〜九一二)の山居二十四首のうち十五首に次韻している。この他、『空華集』には「次韻答_二嚴密室劍南江_一七首」詩(卷第三)や、「和_三立季成再住_二信陽安国_一四首」詩(卷第五)があり、前者は、結句の韻字が「盃」字四首と「風」字三首、後者は、結句の韻字が「来」字三首と「幽」字一首から成っている。それぞれ本韻詩は未詳であるが、前者は盃字韻一首と風字韻一首の計二首、後者は来字韻一首と幽字韻一首の計二首と推測される。以上のことから、彼らは、かなりアットランダムに韻字を選んで、詩を詠作していたのではないか、と思う。

第二点は、幼童や少年僧との詩の唱和に関して、である。『蕉堅藁』には、(I)⑥に挙げた「允修小生の歳旦の韻に次す」詩(一二七)の他にも、「人日、劍童の韻に和す」詩(一二二)や「霑童の韻に和す」詩(一二三)があり、幼童や少年僧との唱和詩を確認することができる。『空華集』には見当たらない『日工集』には、義堂が少年僧の作品(試筆詩)を添削したり、少年僧に詩作を促す記事が見受けられる。永徳二年正月一日条、同五日条、嘉慶二年正月二日条等参照)。

室町時代の後期になると、禅林社会では、試筆詩やその代作詩、唱和詩が盛んに作られるようになった(横川

景三（一四二九〜九三）や景徐周麟（一四四〇〜一五一八）の作品集には、試筆代作詩や唱和詩がよく見られる。元来、試筆詩は誰でも製することができたのだが（Ⅰ）で引用した『日工集』永徳二年正月十一日条では、古劍が製した試筆詩に対して、そこに居合わせた者が唱和詩で応えている）、この頃になると、主として幼童や少年僧によって製せられるようになった。幼童や少年僧が独力で作詩することが不可能な場合は、師僧が代わって作ったという。⁽¹⁰⁾ これらのことを勘案して、稿者は『蕉堅藁』に試筆唱和詩、言い換えれば艶詩の濫觴（萌芽）を認めたいと考えている。

第三点は「前韻二和ス」という表現について。この場合の「前韻」とは、作品集において、当該詩の直前に位置する詩の韻を意味するのではない。例えば、（Ⅰ）⑮に挙げた『空華集』卷第十所収の「次レ韻答三明室一并叙」詩の序文には、「重ねて前韻を用ひて」とある。この詩の八句目の韻字は、「鑑」であるが、鑑字韻は、当該詩よりも三、四首前に、二首並んでいる。（Ⅰ）⑮「本韻詩」参照。要するに、「前韻」とは、唱和の場において、当該詩を詠出する以前に自身（もしくは他者）が詠んだ詩の韻を意味するのであろう。

第四点は「く字韻二和ス」という表現について。（Ⅰ）で引用した『日工集』永徳二年正月十一日〜廿日条には、「胡字八句に和す」とか「胡字三首に連和す」とあり、「胡字」とは七言律詩の八句目の韻字を指している。また、（Ⅱ）（c）で引用した『日工集』永徳三年正月七日条には、「因りて旧韻山字を用ひて詩を作り」とあり、「旧韻山字」とは七言絶句の一句目もしくは二句目の韻字を指している。『空華集』全体に目を配ると、「和二頻字韻一与二諦叔真一詩（卷第八）、「重二和昏字韻一酬二海東暉一詩（同上）、「和二朋字韻一答二介然上人村居一云二

首」詩(同上)では、「頻」「昏」「朋」字はすべて、八句目の韻字に用いられている。また、「春日和素中秋字」詩(巻第二)で「秋」字は二句目、「復用橘字韻寄陽谷義山二上人」詩(巻第八)で「橘」字は四句目、「用柑字韻詠雪」詩(同上)で「柑」字は一句目にそれぞれ用いられている。以上のことから、一般的に「A字韻二和ス」と言えば、絶句ならば四句目(結句)、律詩ならば八句目の韻字が「A」字である詩に和(次)したように考えがちであるが、現実には必ずしもそうではないように思われる。

四 「和韻」から見た絶海・義堂

以上、絶海と義堂の和韻詩の詠作状況を、大まかに分類した。詩によっては曖昧なものも存するが、数量的には「(I)贈答・唱和にともなう場合」が圧倒的に多く、ここに、五山禅僧の、いわゆる「同社」「友社」の繋がりと、その中で詩作に興じる彼らの有様とを見ることができよう。彼らは、中国において「和韻」が否定される向きがあることを知っていたにもかかわらず、やはり沸き立つ衝動を自制し難かったのだろう。義堂の詩の半数が和韻詩だったのは、彼が当時、禅林社会の中枢的な役割を担っていたことも理由の一つとして挙げられると思う。作品解釈が大雑把であるため、五山禅僧の禅心や悟境の交流までは捉え切れていないが、和韻詩の作成に、彼らの、文学活動へ傾斜する一面を、稿者は読み取りたいと思っている。

さて、「和韻」に関して概略的なことを述べてきたが、いま一度、絶海および義堂の作品に立ち返り、一、三気付いたことを述べておきたい。『蕉堅藁』九十七、九十八番詩の本文を挙げる。

九七 錢原和清溪和尚韻

世事從來多變態。当初早悟有如今。青山高臥茅簷下。不許白雲知此心。

九八 和前韻答崇大岳

拙者八月廿六日乘涼出遊。州中名山曰勝尾。曰箕面。曰神咒。曰十輪。窮奇探勝興寄浩然。遂詣西宮之社。所謂劍珠者。蓋絕世之奇觀也。凡經四日而歸。錢原之寓所。乃知高駕來臨等。余不遇而歸也。珙童口誦見留之作。厥韻琅々然也。於是不能無社燕秋鴻之歎。修書之次輒依芳押。

以答來意云。

君來我出似相避。礪媿林慚悵至今。百歲光陰秋荏苒。何時風雨細論心。

【注】「清溪和尚」とは清溪通徹、「崇大岳」とは大岳周崇、「珙童」とは元璞恵珙。

絶海は至徳元年〔一三八四〕六月、四十九歳の時に、將軍足利義滿〔一三五八〜一四〇八〕に逆らつて、摂津国の錢原（大阪府茨木市）に隠棲した（『仏智年譜』）。詩題や序文によると、前詩は、錢原で清溪通徹〔一三〇〇〜八五〕の韻に和したものである。後詩は、絶海が八月二十六日から四日間、勝尾寺、箕面寺、西宮神社等に赴き、錢原の寓居を留守にしている間に、あいにく同所を訪れ、帰つて行つた大岳周崇〔一三四五〜一四二三〕の韻に和して、その來意に答えたものである。ちなみに、清溪と大岳の詩は、未詳である。

ところで、ここまで述べて来て、一つ気になることがある。それは九十八番詩の詩題に「前韻に和して」とあり、その序文に「輒ち芳押に依る」とあることである。なるほど九十七、九十八番詩、ともに二、四句目の韻字

が「今」「心」になっており、詩題にあるが如く、後詩は前詩に和韻している。にもかかわらず、序文では「あなた（大岳）の押韻に依る」と述べている。いったいどういうことなのだろうか。

この現象をスムーズに説明するためには、絶海、清溪、大岳の繋がりを想定せざるを得ないのではないだろうか。三者とも夢窓派である。おそらく大岳は、京都で清溪と接触して、九十七番詩のことを知り、自身も同じ韻字を用いて、絶海と詩を唱和したのであろう。したがって絶海は、九十八番詩において大岳の韻に依ったと同時に、結果的に自身の前作（九十七番詩）にも和韻したことになるのである。建仁寺両足院蔵『東海瑠華集（絶句）』（『五山文学新集』第二巻所収）には、惟肖得巖の先輩に当たる五山僧——義堂・絶海・無求・雲溪支山・観中等——の七言絶句が百六首挙げてある。絶海の作は二十二首採られているが、九十七番詩の詩題が「答義堂和尚見寄」となっていることが注目される。想像を逞しくすると、絶海、清溪、大岳の繋がりに、同じく夢窓派の義堂も関与していたのかも知れない。絶海の京都召喚を、義満に進言したのは、義堂である（『日工集』至徳三年二月三日条）。

このように「和韻」に注目すると、今まで気付き得なかった同社・友社の実態が浮かび上がって来ることがある。もう一例、絶海と観中（作品集は『青嶂集』。偈頌の総数は一五〇首）の交流を指摘したい。まず、『蕉堅藁』には「まさに近県に往かんとして、観中外史に留別す」詩（五三）や、「観中を懐ふも至らず」詩（八六）があり、『青嶂集』には、後詩に和した「和絶海和尚韻」詩（七四）が見られる。また、『絶海録』巻下には「観中和尚の雪韻に和す」詩（二二七）、「観中和尚の仮山水の韻に次して、鹿苑の常光国師に呈す」詩（二六

五)、「相国の観中和尚の重陽の韻に次す」詩(二七四)があり、各々の本韻詩は、『青嶂集』に確認することができる(一四八 回雪謝諸老先訪二「一一 頃觀鹿苑庭下仮山水二題二偈二呈上堂頭国師大和尚座二「一三 相国重陽上堂」)。『青嶂集』には「和絶海和尚重陽韻于時法鼓新輓」(一一二)という詩も見受けられる。この他、『絶海録』と『青嶂集』には、韻字が同じ詩(偈)が散見する。

・『絶海録』卷下・「和相国大岳和尚中秋韻」(二二二)——『青嶂集』・「和太岳和尚立秋韻」(五六)

・『絶海録』卷下・「次韻賀弘祥荆山長老」(二六三)——『青嶂集』・「和詩追奉慶弘祥荆山長老」(一

九)

・『絶海録』卷下・「和韻謝天寧天倫禪師上竺一菴講師過訪」(二七六)——『青嶂集』・「和天倫和尚韻」

(一一)

・『絶海録』卷下・「次韻答樹心翁」(二八〇)、「重用青字韻」。餞心翁東歸」(二八一)——『青嶂集』

・「和心翁和尚韻」(一四)

絶海には日記の類は残されていないが、以上のように、直接的もしくは間接的に、頻繁に観中と詩を贈答、唱和したことを鑑みると、二人がかなり親密な間柄であったことが推察される(前編第四章では、二人の詩会におけるエピソードを紹介している)。

本節のはじめに、稿者は、義堂に和韻詩が数多く見られる理由として、彼が当時、禅林社会において中枢的な立場に在ったことを指摘した。ちなみに、夢窓疎石(一二七五〜一三五二)や春屋に和韻詩が多いことも、同様

の理由で説明できると思う（意外と思われるのが、あの一休宗純〔一三九四〜一四八一〕に和韻詩が極端に少ないことである。この事実は、これまでの一休像を見直す契機になるかも知れない。伊藤敏子氏編「考異狂雲集」に一例のみ）。ここで、いま一度、第二節の『空華集』の和韻状況に注目する。例えば、七言絶句は巻第一（六一首、四六・二％）、巻第二（一一一首、五三・一％）、巻第三（一〇七首、五〇・二％）、巻第四（五六首、二三・七％）、巻第五（六七首、三一・三％）、七言律詩は巻第七（一四四首、八四・七％）、巻第八（一四五首、八〇・六％）、巻第九（八五首、五六・三％）、巻第十（三六首、三六・〇％）に収められている。（ ）内は、巻中における和韻詩の総数とその割合を示す。義堂の生涯は大きく、①（京都）修行時代（正中二年〔一三二五〕〜延文四年〔一三五九〕、一〜三十四歳）、②（関東）在住時代（延文四年〜康暦二年〔一三八〇〕、三十四〜五十六歳）、③（輦寺）在住時代（康暦二年〜嘉慶二年〔一三八八〕、五十六〜六十四歳）に分けられ、『空華集』の作品配列は、詩文の種類ごとに、大体、制作年代順になっていると思われるので、義堂は晩年になるに連れて、和韻詩をあまり作らなくなったと言える。関東における義堂は、春屋の命令で、夢窓派の教線拡大のために、「教義を宣揚することはもちろん、文化政策によつて、有力外護者を檀那に獲得する」⁽¹⁾ことに努めた。和韻詩の量産も、それらに伴う社交の結果と見ることができよう。対して、晩年、京都での義堂は、一方で建仁寺・等持寺・南禅寺等の住持を勤め、また一方で義満や良基等と親しく交わっていたにもかかわらず、どうして和韻詩を作らなくなったのであろうか――。稿者は今、この問題に答える用意はないが、義堂の文学観を考える上で、一つの指標になるのではないかと考えている。

おわりに

今回は、絶海と義堂の作品類を中心に、五山文学における和韻詩の有様を概観したが、残された問題は、大小様々である。例えば、大きいものでは、座の文学、特に聯句文芸との関連は、いずれ明らかにしなくてはならぬであろう。⁽¹³⁾ また、和韻詩が詩軸に纏められて行く過程などにも興味がある。吉川幸次郎氏は、福原麟太郎氏との共著『二都詩問』（新潮社、昭四六）の中で、中国詩の「一韻到底」という原則に関して「この外国人からは面倒そうに見える詩法を、本国の人には、所要の行き先と合致するバスを、町角で待っているほどの面倒としか感じさせないのではないか」（東への手紙・二三頁）と指摘されているが、やはり外国人である五山文学僧が詩を作成する際、最も苦しんだのが「韻」の問題であろう。そのことが「和韻」のどのあたりに影響しているか——。これも今後、探ってみたいと思っている。

注

(1) 引用は辻善之助氏『空華日用工夫略集』（太平洋社、昭一四）による。また、返り点は蔭木英雄氏『訓注空華日用工夫略集』（思文閣出版、昭五七）を参考にして、私に施した。

(2) 『五山文学全集』や『五山文学新集』を繙くと、以下のような用例が見られる。

○『空華集』卷第十二・「敬序」_下「仏光師祖留題清見閣唱和板首上」

応安戊申。無二一公。適主茲山。有祖風烈。得名徳和章真染者若干篇。將附本韻而板刻之上。遂統乃韻。自題板尾。且空其右。以俟後之隨得而填焉。 (『五山文学全集』第二卷)

* * *

○『東海瓊華集』(惟肖得巖著)

梅屋以詩留別、歩韻奉寄、(本韻詩云、堂上慈親髮已霜、春未帰覲揖駕行、茆簷竹屋田園日、却可長安是故郷、)

顔筋柳骨挾風霜、十襲華賤数字行、藁底新吟添幾口、江山信美況吾郷、

(以下二首省略)

(『五山文学新集』第二卷。へ内は割注を示す)

(3) 引用は五山版、詩の総数や作品番号は蔭木氏『蕉堅藁全注』(清文堂、平一〇)による。また、返り点は江戸の版本(寛文十年版か無刊記本)等を参考にして、私に施した。

(4) 引用は『大正新修大蔵経』第八十卷「統諸宗部」、詩の総数や作品番号は梶谷宗忍訳注氏『絶海語録』二(思文閣出版、昭五一)による。また、返り点は梶谷氏・前掲書等を参考にして、私に施した。

(5) 引用や詩の総数は『五山文学全集』第二巻による。また、返り点も同書等を参考にして、私に施した。

(6) 原田稔氏「徐福の熊野来住とその日本古代文化に及ぼした影響」(『追手門学院大学文学部紀要』第三号、

昭四四)参照。

(7) 「詩戰」という語は、『日本国語大辞典 第二版』に「漢詩を応酬すること」と説明されている。『日工集』には他に二例ある(康安元年条、貞治元年夏条)。なお、『空華集』には、漢詩の応酬を「鬪鷄」に喩えている箇所があるので、参考までに一部、引用する。

及_二巳酉夏_一。余_二婦_一石屏_一。古庭之微又至。且急。余驚乃率_二行李之中_一。出而視_レ之。裋褐烟_二熏_一之_一矣。弘而披_二閱_一之。詩凡百首。古庭倡_二其首_一。天鑑和_二厥後_一。次焉者十七人。酬答往復。妙_二尽_一鷄字_一矣。而皆雌_二伏於古庭之雄_一。有_レ似_二乎鬪鷄之戲_一。余嘗游_二于洛之滸_一。方_二三月上巳_一。天氣乍快_一。有_下都人好_二鬪鷄_一者_上。会_二于城東爽塏之地_一。而角_二厥技_一。余方年少。迫而觀_レ之。一人籠_二赤鷄_一者。擅_レ場而出。是赤鷄也。尾秃翎疎。瘦如_二柴柁_一。殆若_下不_二自立_一者_上。於_レ是_二会者皆易_レ之。各出_二其養者_一。而踢_レ之而啄_レ之而刺_レ之。而赤者柴立弗_レ動。而後群者皆自失而退矣。余私問_二其故_一。乃曰是鷄也無_二他伎_一。惟知_二其雄_一而守_二其雌_一。所以克制_レ敵耳。今之倡和也類焉。古庭之才固雄矣。而雌_二其唱_一以挑_レ之。而天鑑及十七人者。亦皆雄者也。固欲_二鬪死決_レ勝。或淬_二乃鋒_一。或礪_二乃戈_一。拑_レ之角_レ之。而古庭不_レ血_二寸刃_一。承使_二皆歸_一於吾麾下_一矣。是亦無_レ他。惟強之知而弱之守。所以克先鳴耳。若_下夫馳_二強辯_一爭_二雄氣_一。鬪_二筆鋒之捷_一。貪_中詞場之功_上。惟勝是務焉。則其先鳴也未_レ可_レ知矣。(下略)

(卷第十二・「序鬪鷄詩卷」)

【注】「古庭」とは古庭子訓、「天鑑」とは天鑑存円。

(8) 本文中に「忽ち東光の古劍老禪將、胡字韻を以つて突騎と為して、我が不備を襲はる。其の鋒当たるべか

らずして、而も之を避くるに計無し」とあるが、これは「劉白唱和集解」（卷六十・2930）の「彭城の劉夢得は詩の豪なる者なり。其の鋒森然として、敢へて当たる者少なし」という箇所を明らかに踏まえているだろう。三木雅博氏「平安朝における「劉白唱和集解」の享受をめぐる」（『白居易研究年報』第二号、平一三・五）等参照。白居易は五山文学僧にあまり受容されておらず、その理由はいまだに明確になっていないが、この『空華集』の記事を踏まえてもう一度、考えてみたい。

(9) 蔭木氏は『義堂周信』（日本漢詩人選集3、研文出版、平一一）において、同詩を「制作年代の最も早いものと見られるものは、『空華集』卷七の虫韻の七言律詩四〇首である」（一一頁）として、観応二年（一三五二）春、義堂が湯治のため、有馬温泉に向かった時の作とお考えのようだが、稿者もこの意見に賛成である。と、いうのも、『日工集』永徳元年三月三日条で、有馬温泉に赴いた義堂が、「詩を作りて旧を懐ふ。叙に云く、余、辛卯の歳（観応二年）、上巳を以て茲の山に遊ぶ。転眇の間、已に三十一年なり。云々」と往事を偲んでいるからである。第四節で触れたように、『空華集』の卷第七には、義堂が詠んだ七言律詩の中で、最も早い時期の作品が収められている。また、次韻詩四十首中に「二月十六日、まさに温泉に赴かんとす。乱に因りていまだ遂げず。偶々此の作有り」詩（十七首目）や「乱後に興を遣る二首」詩（二十六、二十七首目）があるが、「乱」とは、具体的に言くと、氏もご指摘の如く、観応の擾乱（一三五〇〜五二）のことを指すだろう。この年の二月二十六日、高師直は武庫川付近で、上杉能憲によって斬殺された（『園太曆』等）。後詩に「乱後に」とあるのは、このことを踏まえてのことと思われる。四十首中には「上巳前

の一日、武庫溪に宿して、龜山の諸友に寄す」詩（二十八首目）や、「武庫山に過ぐ」詩（二十九首目）も見られる。この他、「地動に因りて友人に答ふ」（二十五首目）という詩があるが、『皇年代略記』の「崇光院」項には、この年の二月十九日に京都に大地震があり、將軍塚が鳴動したことが記されている。

ただし、稿者は「機会を別にして」という箇所を強調しておきたい。すなわち、その和韻状況は「(I) 贈答・唱和にともなう場合」ではなく、本韻詩と詠作時期がずれる可能性がある、ということである。春屋詩と義堂詩の詠作時期は（偶々）近接していたものの、例えば、慈氏門派の竺闕瑞要（義堂——大基中建——竺闕）などは、義堂の寂後に、機会を別にして義堂詩に和韻している。玉村竹二氏『五山禅僧伝記集成』（講談社、昭五八）の「竺闕瑞要」項には、以下のように記されている。

（竺闕は）南禅寺慈氏院の徒で、文明六年（一四七四）には、義堂が嘗て観応二年（一三五二）春、病臥中の法兄春屋妙葩の作の韻を和すること四十首（虫字の韻の七言律詩）があるのに、またその韻を和し、同時代の文筆僧・月建令諸・季弘大叔・太極・横川景三等をして、またその竺闕の韻の追和の詩を製せしめ、太極は五十首の和韻を製したという。それを軸装して、竺闕は大切に襲蔵していたという。

（二五八頁）

和韻詩の詠作時期を特定する際にも、注意を要する場合がある。

(10) 朝倉尚氏「禅林における試筆詩・試筆唱和詩について」『国文学攷』第六十五号、昭四九・一一 参照。

(11) 玉村氏は同解題で、両足院本に関して、つぎのように述べておられる。

この本は、江戸初期の写本であるが、その親本となった本は、或は惟肖の草稿本であったかとも思われる。その故は、この本に収められている所の惟肖の作品以外のものは、一見雑然と書きつづけられているように見えて、実はいずれも惟肖に関係のあるものばかりで、江西龍派の作品は惟肖に呈似されたもの、俗詩は惟肖が諸本涉獵の際書留めておいた覚え、義堂・絶海等の詩は、作品がいずれも惟肖に係の深い人のものばかりであるから、惟肖が先輩の作品を勉強のために披萃して座右に備えたものと考えられないこともない。

(一三〇一頁)

(12) 蔭木氏『義堂周信』、四三頁。

(13) 朝倉尚氏には「禅林聯句略史——義堂周信とその前後——」(『中世文学研究』第二十二号、平八・八。後に『抄物の世界と禅林の文学』(清文堂、平八)所収)というご論考がある。

【付記】

成稿後に内山精也氏に、蘇軾の次韻詩に関するご論考があるのを知った。「蘇軾次韻詩考」(『中国詩文論叢』第七集、昭六三・六)、「蘇軾次韻詩考序説——文学史上の意義を中心に——」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊・第一五集(文学・芸術学編)、平元・一)。氏によると、蘇軾は、現在伝わる詩の、約三分の一が次韻詩である(本韻詩が確認できるものに限る)。そして、それらを原篇(本韻詩、朝倉注)の提供者(作

詩者)で分類すると、「A 同時代の他者から寄せられた原篇に次韻した作品」「B 過去に詠んだ自己の詩に自ら次韻した作品」「C 古人の詩に次韻した作品」に分けられ、特にB、C類は、蘇軾が新たに確立した次韻の形態らしい。

本章では、日本中世の中でも異質な、禅林社会における和韻詩の様相を追ってきた。内山氏の言うB類やC類は、本章においても確認できた。また、義堂の和韻詩は、総詩数の半分以上を占める。『空華集』には蘇軾の詩に和したものがあるし(第三節(Ⅱ)(a)④参照)、『日工集』には「東坡、海上に在りて、陶淵明詩に和す」(貞治六年追抄八月八日条)というくだりも見受けられる。これらの現象は、いったい何を意味しているのだろうか――。他日を期したい。

*

*

本章は、第七十四回和漢比較文学会東部例会(平成十四年一月二十六日、於大東文化大学)における口頭発表を、加筆修正したものである。

結 章 今後の絶海中津研究

第一節 『蕉堅藁』の魅力解明に向けて

——「清婉峭雅にして、性情の正より出づ」——

本来ならば、結章においては、各章の研究成果を纏めて、何か総括的なことを述べなくてはならないのだろうが、繰り返し述べてきたように、本研究は絶海中津（一三三六～一四〇五）の基礎的研究で、ここで全体を振り返っても、各章の研究成果の羅列になりかねなく、また、それらを五山文学史や中世文学史に位置付けることは、現段階では困難と思われる。また、本研究では、絶海の伝記や作品に関する基礎的な事柄に注目するあまりに、『蕉堅藁』の作品としての魅力に十二分に迫ることができなかったように思う。そこで、各章の研究成果は直接、当該箇所を見ていただくとして、本節では、僧録司左善世であり、『逃虚子詩集』や『独庵外集』を著わした明僧道衍（一三三五～一四一八）が『蕉堅藁』を評した言——「清婉峭雅にして、性情の正より出づ」（序）——に関して、なるべく今回の研究成果と絡ませながら、私見を述べてみたい。と、いうのも、蔭木英雄氏をはじめとして、この道衍の評価に注目する研究者は少なくないものの、実際に絶海作品と、この評言とを突き合わせて論じた人は無く（序章第一節参照）、また、この評言は、『蕉堅藁』の特質や特徴を、具体的に知る手掛かりに

なるのではないか、と思うからである。

まずは、試みに「清婉峭雅」なる作風を、『蕉堅藁』の中に指摘してみたい。「清婉峭雅」とは、きよくて、やさしくて、けわしくて、みやびなことである。『蕉堅藁』に「清」字が多用されていることは、蔭木氏も指摘されるところである。氏は「清」字が内包するものとして、「道家的な超俗境」や、清らかな内面的詩境を指摘している。『三体詩素隠抄』（博文叢書第四冊。以下、『素隠抄』と略す）には、「清隠トハ、道家ヲ云フゾ、道家モ仏家ヲ学ンデ、無尽ノ名ヲ云フゾ、仏教ニハ梵ト云フ、梵ハ清浄ノ心ナリ、サテ、道家ニハ、清ノ字ヲ使フゾ、三清ト云フテ、紫清、太清、上清ナンドトテ用ウルゾ、仏家ニ、欲界、色界、無色界ト云フニ似セテ云フゾ」（「楊鍊師に贈る」・鮑溶）という記述もある。総じて五山禅僧は「清」字をよく用い、そのことに関しては、稿者も改めて考えたいと思っているのだが、絶海の「清」字の使用状況を大まかに分類すると、以下のような¹番号、記号、傍線、返り点は私に施した。以下同じ。

I 日常的（世俗的）なものにきよいと感じる場合（一般的）

〔例〕「清秋の北渚、紅蓮落つ」（三三三 新秋に懐ひを書す）、「寒露清霜、残夜の夢」（三三五 郷友志大道、金陵にて病ひに臥す）、「清夜、沈々として、群籟収まり」（二一五 鐘声近し）

II 寺院に関するものにきよいと感じる場合

〔例〕「詩に苦しみて、寸腸断え、鐘清くして、諸妄消ゆ」（二六 北山の故人の房に宿る）、「湖水、曉堂冷え、林風、夜磬清し」（七 宝石寺の簡上人に寄す二首・第一首目） ※『素隠抄』には「今日ハ

終日寺ニアリテ、風景ノ淡白ナルヲ愛シテ心モ清閑ナリシガ」(「少林寺に遊ぶ」・沈佺期)、「妙喜寺ニテ、後夜ノ勤行ヲセントテ磬ヲ打ツ、ソノ声ガ、ホノカニ一声聞コエゾ、ソノ時ニ、陸羽ハイトド耳根清淨ナラン、アラ羨シヤトゾ」(「陸羽を送る」・皇甫萇)、「是ノ如ク清淨ノ伽藍ニシテ、夜夜ニ坐禪三昧ニ入り給ハンホドニ、サコソ、耳根モ清淨、眼根モ清淨ニテオハスラント美メタゾ」(「普・選二上人に酬ゆ」・嚴維)という記述がある。また、寺院の大衆、すなわち修行僧を「清衆」と言い、「絶海和尚語録」(以下、『絶海録』と略す)には、二例見られる。

III 俗世間から離れることを望んでいた、実際に隠居している場合

〔例〕「万景の晴巒、客眼を清くし」(二二五 春日、北山の故人を尋ぬ)、「也また知る、畎畝に清寧を樂しむを」(三三四 山居十五首、禅月の韻に次す)・第六首目)、「物外の清遊、誰と与ともにか同じからん」(同第十五首目) ※『济北集』卷第三に「吾廬絶俗自清涼」(「篁竹侵軒」)、『南游稿』に「也知世外樂」清寧」(「寄題垂綸亭」)、『無規矩』坤に「詩資物外清遊樂、菊見花中隱逸人」(「再次韻」)という用例がある。また、『素隱抄』には「年ヨリタホドニトテ、中條山ノ下方ニ帰臥シタレバ、吾ガ本意ニカナヒタル故ニ、俄ニ精神モ清淨潔白ニナリタトゾ」(「下方」・司空圖)、『中華若木詩抄』には「城中ハ、紫陌ニ紅塵充滿シテ、車塵馬足ニ吹立テラレテ十丈モ高ク上ガルゾ。如レ烟也。其塵中ヨリ出テ此水竹ノ佳処ヘ来タルホドニ、一段涼シク、心モ清キ也」(七二 水竹の佳処)・謙岩)という記述がある。

IV 詠作している素材や典故による場合

〔例〕(a)「江流、声無く、断崖千尺。赤壁の遊、風清く、月白し」(七八 画に題す)・第二首目、(b)

「為に憐む、雲外松巢の鶴、清唳、時々縞衣を刷る」(九六 明絶侍者の雪中の韻に次す)、(c)「すべからく是れ氷肌、瘦することいよいよ弥甚だしかるべし。桃李をも將つて清新を闘はしむるを休めよ」(一一

八 謹んで相府の鈎旨を奉じて、資寿の無求老兄の戯るる有るに次韻す) ※(a)は、蘇軾の「後赤

壁の賦」の「客有れども酒無し、酒有れども肴無し。月白く風清し、此の良夜を如何せん」と「是に於て

酒と魚とを携へ、復た赤壁の下に遊ぶ。江流声有り、断崖千尺。(下略)」という箇所を踏まえている。(b)

は鶴、(c)は梅の属性による。『補庵京華前集』に「讚州太守源府君、平居能レ画如レ能レ文、扇面落レ筆

鶴双立、薛公十一已超レ群、縞衣玄裳仙骨瘦、九臯清唳声似レ聞、西湖月暗梅坡老、北岳夜寒蕙帳薰、(下

略)」「題二讚州府君所レ画扇面一竹下有レ鶴、景恩基蔵主請、(一)、『冷泉集』に「乾坤清氣莫レ如レ梅」(「早梅」)、『策

彦和尚詩集』に「梅有二清香一松有レ風」(「東東帶天神贊」)という用例がある。

V その他

禅僧も含めて、仏者は、主に寺院で修行して、煩惱の汚れから脱し、つねに汚れのない、清らかな法身(清淨法身)であるように努めていたに違いない。先の『素隠抄』からの引用にも、「仏教ニハ梵ト云フ、梵ハ清淨ノ心ナリ」(「楊鍊師に贈る」・鮑溶)という記述があった。しかし、後編第三章で見たように、俗世間には、煩わしいことが多く、禅僧の中には、絶海をはじめとして、山中に隠棲する者もかなりいた。山中は静かで清らかなので、彼らは、心身の解放感を獲得するとともに、わが身の清淨を実感していたことだろう。如上のことを考え

ると、絶海らが「清」字を多用したのも頷ける。隠逸詩（Ⅲ）に最も多い。今後は、中国文学や仏典等の用例も視野に入れて、さらに考察を深めて行きたい。⁽²⁾

ところで、中世文学史には「隠者文学」というジャンルがあり、西行の和歌や『方丈記』や『徒然草』がその代表作である。それらと、禅僧の隠逸作品（山居詩等）とを比較すると、いったいどのようなことが見えて来るだろうか。例えば、『徒然草』第七十五段の本文を挙げる。

つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるゝかたなく、たゞひとりあるのみこそよけれ。

世にしたがへば、心、外の塵に奪はれて惑ひやすく、人に交れば、言葉よその聞きに随ひて、さながら心にあらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事定まれる事なし。分別みだりに起こりて、得失止む時なし。惑ひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りて急がはしく、ほれて忘れたる事、人皆かくのごとし。

いまだ誠の道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心をやすくせんこそ、暫く樂しむとも言ひつべけれ。「生活・人事・伎能・学問等の諸縁を止めよ」とこそ、摩訶止観にも侍れ。

（岩波・日本古典文学大系）

世間に順応すれば、人間の心は、六塵（色・声・香・味・触・法）に強く引きつけられてしまい、迷いやすく、他人と交際すれば、人間の発することは、他人の聞きに抑制されてしまい、真実の心を偽ってしまう——。兼好は、このように環境に流されやすく、安定することのない、人間の微弱な心を凝視した結果、まだ真の仏の道

を知らなくとも、諸縁を離れて、わが身を閑かにして、周囲の事に關係しないで、心を安らかにすることこそが、一時的にはあるが、生を楽しむとも言えよう、と述べている。『徒然草』のこの章段のみから言うのは、少し気が引けるが、要するに、禅僧も兼好も、煩わしい俗世間から離れるという行為（行動）は共通している。が、兼好が、人間の微弱な心を安定させるために、環境を変化させるといふ、言わば受動的な隠遁であるのに対して、絶海らは、環境を変化させることによって、宗教者の清浄心の、さらなる純化をはかるといふ、言わば能動的な隠遁であるように思われる。思索者と実践者の違いが、如実に表れていて、面白い。後編第三章と関連させて考えるならば、これは少し言い過ぎになるかも知れないが、絶海は自然に囲まれて、心身の清浄の度合いが深まるに連れて、徐々に対象（自然）との距離が無くなり、やがて一体化して、山中を「四禅天」に感じたり、雲樹猿鳥を見て「物化の元」に遊んでいるような感覚を覚えたのかも知れない。

さて、「清婉」という語の用例を見てみる。

①許掾嘗詣簡文。爾夜風恬月朗、乃共作曲室中語。襟情之詠、偏是許之所長、辞寄清婉、有逾平日。簡文雖契素、此遇尤相咨嗟、不覺造膝、共叉手語、達于将旦。既而曰、玄度才情、故未易多有許。

〔世説新語〕賞誉第八、新釈漢文大系

②春山磔磔鳴春禽。此間不可無我吟。路長漫漫傍江浦。此間不可無君語。金鯉池邊不見君。追君直過定山邨。路人皆言君未遠。騎馬少年清且婉。（下略）

〔蘇東坡詩集〕卷九・「往富陽新城」。李節推先行。三日留風水洞見待、統国訳漢文大成

③(上略) 夫人偽蜀孟昶侍人、事具_二国史_一。如下「龍池九曲遠相通、楊柳絲牽_二兩岸風_一。長似_二江南_一好風景、画船来往碧波中。」「梨園弟子簇_二池頭_一、小樂携来候_二宴遊_一。試炙_二銀笙_一先按拍、海棠花下合_二梁州_一。」「月頭支給買花錢、滿殿宮人近_二数千_一、遇著唱名多不_レ応、含_レ羞走過_二御床前_一。」「内人追逐採_レ蓮時、驚起沙鷗兩岸飛。蘭棹把来齐拍_レ水、並船相鬪濕_二羅衣_一。」皆清婉可_レ喜。

(『詩人玉屑』卷之二十・閨秀 女類也・費氏、『和刻本漢籍隨筆集』第十七集)

①について。ある時、許掾(許詢)が、簡文帝(司馬昱)の許を訪れた。その晩は風が静かで、月が明るかったので、二人は奥の部屋で語り合った。胸中の思いを詠ずるのは、専ら許掾の得意とするところであったが、この時のことばと心は、いつもにも増して一段と「清婉」だったという。②においては、馬に騎った少年(李節推)は「清くして且つ婉なり」と、旅人たちが挙って、蘇軾に言っている。『四河入海』巻第一之二(抄物大系別刊、勉誠社)には、「清婉」に関して「芳(翰苑遺芳)云、毛詩有美一人、清揚婉兮」、「騎」に関して「其ハ、馬ニ騎テ、イカレシカ、ワカイ人テ、シカモ、婉美ナル、ヲトコテ、アツタト云ソ」という抄文が付されている。また、小川環樹・山本和義氏『蘇東坡詩集』第二冊(筑摩書房、昭五九)には、「清且婉」に関して「すがすがしく上品なさま。『詩経』鄭風の「野有蔓草」に「美しき一人有りて、清揚 婉たり」とあり、毛伝に「眉目の間の婉然として美しきなり」とあるが、ここでは姿全体として解する」という語注が施されている。③では、「龍池」「楊柳」「梨園弟子」「小樂」「宴遊」「宮人」「内人」「羅衣」等が詠み込まれた、華蘂夫人の詩が「清婉」と評されている。こうして見ると、月が皎々と照る中、簡文帝に詠ずる胸中の思い、颯爽と馬に跨る少年の姿、賢

夫人の作成した詩、いずれも爽やかで力強い中にも、やさしさや美しさがある感じが「清婉」と評されており、そうした感じを、あえて『蕉堅藁』の作品の中に求めるとしたならば、絶海が晩年、京都の大寺院に勤めている時に詠んだものになるのではないだろうか。と、いうのも、「長門の怨」詩（七〇）や、少年僧と唱和した詩（七十六、百二十二、百二十三、百二十七番詩）など、いわゆる艶詩の濫觴（芽生え）と思われるものが、この作品群には散見するからである。後編第二章第三節参照。

「峭雅」という語は、用例が見当たらないので、「清峭」「清雅」という語の用例を見ることにする。まずは「清雅」から。

④陳詳、字文幾、少出家、為桑門。善書記、談論清雅。（下略）

（『陳書』列伝第九・陳詳伝、百衲本二十四史所収本）

⑤清塞、字南郷、居廬嶽為浮屠、客南徐亦久、後來少室、終南間。俗姓周名賀。工為近体詩、格調清雅、与賈島、無可齊名。（下略）

（『唐才子伝』卷第六・「清塞」項、文津出版社）

⑥天親（甚疑者）甚薩從弥勒内宮而下。無著菩薩問曰。人間四百年。彼天為一昼夜。弥勒於一時中成就五百億天子。証無生法忍。未審說甚麼法。天親曰。祇說這箇法。祇是梵音清雅。令人樂聞。

（『五灯会元』卷第二、琳琅閣書店）

④では、陳詳の談論が「清雅」と評されている。⑤では清塞の詩の格調、⑥では梵音が、それぞれ「清雅」の評価対象となっている。すなわち、「清雅」という語は、主として音声が伴うものに対して用いられるようである。

る。『蕉堅藁』にも「旬日の前、嘗て府中の老居士を訪ぬ。時に金座頭といふもの有り。(中略) 林下に招来して、涼月の清宵に、数闋を歌ふを聴く。清雅の音、人をして耳根を一洗せしむ」(百五十三番書) という用例も見られる。また、④には「少くして出家し、桑門(後世は「沙門」という文字を用いる)と為る」、⑤には「廬嶽に居して、浮屠(図)と為る」とあるように、陳詳も清塞も出家して僧侶になっており、⑥の「梵音」とは仏の声を言う。「清」字の所為とも考えられるが(先に掲げた「清」字の分類表では、Ⅱ類に属する)、「清雅」という語に、仏教が絡んで来ているのも興味深い。ここで、翻って『蕉堅藁』に「清雅」なる作風を考えてみる。やはり第一に、その内実を具体的に説明することはできないが、絶海詩の持つ風格や調子を指摘できるのではないだろうか。玉村竹二氏によると、絶海は中国語で考え、中国語の概念で作詩していたという(『五山文学』一九〇頁)。稿者は後編第三章で、絶海の自然描写が的確であることを指摘したが、これも、絶海詩の格調が「清雅」であることと関連付けて考えてよいのかも知れない。第二に、いくら『蕉堅藁』が(文芸)詩を収録し、偈頌は排除している(『絶海録』に所収)と言っても、作者(絶海)は禅僧なので、本人の意図する、しないに関わらず、作品中に仏教的要素が混入するのは当然であり——稿者は後編第三章で、『蕉堅藁』四十二番詩の八句目に、禅問答や偈頌に見るが如き、表現の超論理的展開を指摘した——、これも「清雅」なる作風の一側面として指摘できるのではないだろうか。『関東諸老遺藁』には、「江湖名勝、各述_二華偈_一、以為_二之賀_一、音律清雅、句法斬新、什而映_レ之」(「隆侍者頌軸序」・不聞契聞)という用例もある。

つぎは「清峭」であるが、これも用例が稀少で、しかも、それが指し示す、意味内容や使用状況が曖昧である

『諸橋大漢和辞典』には、「清くぬきでる」として、『侍兒小名録』の「詞華清峭、眉目端麗」という用例が挙げられている。「峭」字は、「峭寒」や「峭峻」や「峭壁」等の熟語があるように、(高く) けわしいとか、きびしい、はげしいという意である。いったいこの文字は、『蕉堅藁』の何を表わしているのだろうか。

いまだ想像の域を出ていないのだが、わたくしは、「峭」字は、「すさまじ」という評価語に近い意味があるのではないか、と思っている。この語に関して、大野晋氏はつぎのように述べておられる。

「万葉集」に「朝露をうけて、しどろに咲き乱れた月草」ということを「朝露に咲きスサビたる月草」と歌っている。スサビとは、勢いのおもむくままに物事が成って行くことをいう。

雨降りスサブといえば、勢いそのままに雨のはげしく降ること。食ひスサブとは、気に入るままにむしゃむしゃとはげしい勢いで食うことだった。従って、歌ひスサムは、気のむくままに歌うこと。しかし、はげしいことをするのは、平安朝の宮廷の女性には、好ましいこととはされなかった。だからスサムから分かれたスサマシという言葉は、「源氏物語」や「枕草子」の作者にとつては決していい意味には使われなかった。不愉快な感覚を表わす言葉の一つになっている。

火をおこさない火ばち。婿をとつても四、五年も子供生まれぬ家。十二月の月末の長雨など。取りつくしまもないような、しらじらした感じのすることを、清少納言はスサマジキものとしてあげている。その中に、昼ほえる犬というのがあがるが、これなどは、女性のこまかい感受性のとらえたスサマジサであるといえるだろう。

それが鎌倉時代になると、すき間をもれる風の寒さを、スサマジといい、さかずきに残った酒の冷たさもスサマジといっている。

このように、スサマジイとは、昔から、物事の冷たさ、非情さとはげしきを見て、どうにもできない人間の気持をいう言葉である。
（『日本語の年輪』・「すさまじい」項、昭四〇、有紀書房）

抄物の類を繰っていると、しばしば抄文の中に、「すさまじ」という語が出てくる。例えば、『中華若木詩抄』には、「三千丈の壁、寒光動く。百万の人家、爽気の中」（一四四 洛陽の橋上にして北山の晴雪を看る）・九鼎）という句に対して、

三四ノ句、北山ニハ三千丈バカリニ聳ヘタル岩壁アリ。ソレニ白雪ガ映ジテ、遠キ処ヨリ見レバ、身ノ毛モ立チテ凄マジキゾ。只今橋上ニテ我バカリサルデハナイゾ。洛陽ノ人家ハ百万家モアルベキガ、ソノ家ゴトノ人ハコトハクアノ雪ヲ見テハ身ノ毛モ立ツベキゾ。雪ハ纒わづかニ三千丈ノ壁ニ映ズレドモ、其寒光ハ百万人家ヲ凄マジクスルホドニ、百万人家ハ三千丈ノ爽気ノ中ニアルゾ。爽ハ、スサマジキ也。又、三千丈ノ壁ヲ雪トモ見ルベキ也。雪ノ白ク積モリタルガ三千丈モアリテ、壁ヲ截きリタテタルガ如シト見ル也。壁ニアル雪ナレバ、此義モ宜シキ乎。

という注が付されており、三千丈ほどの岩壁に白雪が反射していて（三千丈の壁を雪と見る説もある）、その寒々とした景色を、遠くから見ると、身の毛もたち、「すさまじ」とある。本文中には「爽ハ、スサマジキ也」ともある。また、『素隠抄』には、「風物凄凄として、宿雨収まる」（同じく仙遊観に題す）・韓翃）という句に対

して「宿雨トハ、ヨベノ雨ゾ、ケサ宿雨ガ収メタレバ、コノ仙台ノ辺ノ風景物色が凄凄トスサマジク、涼クシテ、一段清潔ナルトゾ」(a)、「幾処か笳を吹く、明月の夜」(「九原の飲馬泉に過る」・李益) という句に対して「サレバ、月色ノ荒涼トスサマジキ折カラニ、アナタコナタニ笳ヲ吹ク声ガ聞コエタゾ」(b)、「寒磬、空林に満つ」(「吳明徹が故墨」・劉長卿) に対して「サテ又、吳公台上ノ寺ノ院院ニハ、晩ノ勤行ヲスルトテ、磬ヲ鳴ラシタゾ、秋ノ末ナレバ、ソノ声ノ悽マジキガ、空林ノ中ニ満チ満チテ、処処ニ聞コユルトゾ」(c) という注が付されている。(a)では、夕べからの雨があがったばかりの、仙遊観あたりの寒く冷ややかな風景や様子を、(b)では、月光の荒涼としたさまを、(c)では、秋の終わりという季節柄、寒々と聞こえる寺院の磬の音を、それぞれ「すさまじ」としている。翻って『蕉堅藁』の本文を概観すると、以下のような表現が見られる。

○「凄凉たり、天竺の寺。片石、巉岨に寄る」(四 三生石)

○「寒影、旌旗湿うるほひ、斜光、睥睨明るし」(「東宮の秋月二首」・第一首目)

○「寒雨、黄沙の暮、西風、白草の秋」(二八 出塞の図)

○「虚閣空廊、雲冉冉、疎烟小雨、晚凄々」(三二 南山の新居に故人の笱茗を持して贈らる。遂に之を留めて宿せしむ)

○「寒山、寂々として、茶人少まれなり。脩竹、冥々として、謝豹啼く」(三四 山居十五首、禅月の韻に次す)
・第十一首目)

○「寒露清霜、残夜の夢、紫参紅棗、旧山の秋」(三五 郷友志大道、金陵にて病ひに臥す)

○「首を回らせば、長洲古苑の外、断烟疎樹、共に凄其」(二三八 姑蘇台)

○「絶塞、病む時、仍ほ旅寓す。荒村、投ずる処、且く栖遲す。」(二六〇 古河の襟言 五首・第五首目)

○「雪霽れ、孤山、鶴、いまだ回らず。荒涼たる旧宅、数枝の梅」(二八五 和靖の旧宅)

○「淡月疎梅、野水の湾。何人か意を注ぎて荒寒を写す」(二二四 梅花野処の図に題す)

はたして道衍がこれらの表現を念頭に置いて「峭」と評したかは、甚だ心許ないところであるが、わたくしが今、追究できるのは、ここまでである。

さて、「性情の正」とは、「性(本性)」と「情(心情)」がともに正常な状態にあることを言う。直前まで見てきたような『蕉堅藁』の「清婉峭雅」なる作風が、「性情の正」によるというのは、いったいどういうことなのだろうか。つぎに少し考えてみる。

稿者は後編第三章で、絶海は自然と接すると、その生命や性質と交感して、自然と一体化し、その根源に存する物我一如の世界に遊んでいた。それ故に、風景に捉われることもなく、「性」も「情」も常に安定していた、と指摘した。そして、絶海が「坦率の性(心がさっぱりとして飾らないこと)」の持ち主であったことを考慮すると(前編第四章参照)、彼は、如何なる状況においても、常に「性」と「情」が正常な状態にあったのかも知れない。それは、たとえば絶海作品における禅月大師(徳隠貫休、八三二〜九二二)の受容状況や、和韻詩の詠作状況に、特に際立った特徴が見られないことなどからも言えようか(後編第四章、第五章参照)。だからこそ『蕉堅藁』は、作風が偏ることなく、仏者(禅僧)であるが故のきよらかさ、艶詩の持つやさしさや美しさ、す

さまじい感じ、上品な格調などがバランス良く相俟って、絶妙な作品に仕上がっているのではないだろうか。本節は道衍の言をもとにして、『蕉堅藁』の作風について考えてみた。論の運びが強引な箇所や、推測の域を出ていない箇所も見受けられると思うが、本節における考察結果と、本研究を通して行ってきたような基礎的研究とがうまく連関すると、『蕉堅藁』の魅力は、矢継ぎ早に解明されて来るものと信じている。

注

- (1) 『蕉堅藁』の引用は五山版、作品番号は蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇）による。返り点は、江戸の版本（寛文十年版か無刊記本）等を参考にして、私に施した。句読点も私に施した。他の引用本文に関しては、特に表記していない場合、『五山文学全集』、『五山文学新集』、『続群書類従』所収本による。また、『絶海和尚語録』の用例数は、梶谷宗忍氏訳注『絶海語録』一・二（思文閣出版、昭五一）による。
- (2) 神楽岡昌俊氏は『中国における隠逸思想の研究』（ペリカン社、平五）・第三章『世説新語』に現われた隠逸思想」で、『世説新語』に（人物評価の語として）頻出する「清」「簡」「達」三語に注目し、魏晉の隠逸の性格を特色づけるものとされている。なお、「清」字に関しては、意味の上から六つに分類されている。

第二節 今後の五山文学研究——五山文学と薔薇——

最近、改めて五山文学が「学界の孤児」たる存在であることを実感し、愕然とした出来事があった。それは、『国文学 解釈と教材の研究』の二月臨時増刊号（第四七卷三号、平一四・二二）として刊行された『古典文学植物誌』に「薔薇」の項目が見当たらなかったことである。たしかに国語辞典や百科事典の類を繙いても、『古今和歌集』と『源氏物語』と『枕草子』と平安漢詩文の用例ぐらいいしか挙がっていない。ところが、五山文学作品には薔薇が頻出し、まことに豊饒な世界を描出しているのである。本節では、その一端を紹介してみたい。

まず、薔薇の生態を確認しておく。平田喜信・身崎壽氏『和歌植物表現辞典』（東京堂出版、平六）の「さうび 薔薇」項から抜粋する。

ノイバラ バラ科。低地、山地に生える落葉低木。茎は長く伸び、刺が多数あって他の物にからみつく。葉は七く九の小葉（長さ二く四センチ）からなる。五く六月、二センチほどの小さな白い花が円錐状に集まって咲き、後に径七ミリほどの赤い実がなる。乾燥した実は漢方で営実といい、下剤や利尿剤に使う。日本にはこの他にも約一〇種のバラが自生するが、もっともよく見られるのはノイバラである。園芸品種の日本の栽培は明治以降盛んになった。

（一一一頁）

従来、古典文学（江戸時代以前）における薔薇の用例として、しばしば取り上げられるのは、以下の三例であ

ろう。番号、傍線は私に施した。以下同じ。

①『古今和歌集』卷第十・物名（岩波・新日本古典文学大系）

薔薇

貫之

436 我はけさ初にぞ見つる花のいろをあだなる物といふべかりけり

②『源氏物語』賢木

二日ばかりありて、中将まけわざしたまへり。ことごとしうはあらで、なまめきたる檜破籠ども、賭物などさまさまにて、今日も例の人々多く召して文など作らせたまふ。階のものと薔薇けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりもしめやかにをかしきほどなるに、うちとけ遊びたまふ。（下略）

（新潮日本古典集成）

③『枕草子』第七〇段・草の花は

さうびは、ちかくて、枝のさまなどはむつかしけれど、をかし。雨など晴れゆきたる水のつら、黒木のはしなどのつらに、乱れ咲きたる夕映え。
（小学館・日本古典文学全集）

先に②から。これは、三位の中将（頭中将）が、源氏のいる二条院を、負態に訪れた場面である。院の殿舎の正面から庭に降りる階段のものには、薔薇が少しばかり咲いている。実際のところ、ローザ・シネンシスすなわち中国の薔薇（月季花、庚申バラ、长春花などと言われる）は、遣隋使や遣唐使によって日本にもたらされてきたらしく（『日本大百科全書』19、小学館、昭和六三）、当時の人々も、目にする機会があったはずである。③

によると、薔薇は、近くで見ると、枝の様子などがむさ苦しいけれど、面白い。雨などが晴れ渡った後の水辺や、黒木の階段などの辺りに、薔薇が咲き乱れる夕映えの有様は面白い、と清少納言は述べている。ところで、②や、③の「黒木のはしなどのつらに」という箇所が、つぎに挙げる白居易の詩の二句目「階底の薔薇、夏に入りて開く」に基づくことは、諸注が共通して指摘するところである。

薔薇正まさに開き、春酒初めて熟す。因って劉十九・張大夫・崔二十四を招きて同じく飲む

甕頭竹葉経春熟 甕頭の竹葉、春を経て熟し、

階底薔薇入夏開 階底の薔薇、夏に入りて開く。

似火浅深紅圧架 火に似て浅深、紅、架を圧し、

如錫気味緑粘台 錫あめの如き気味、緑、台に粘ず。

試將詩句相招去 試みに詩句を將つて相招去せば、

倘有風情或可来 倘もし風情あらば、或ひは来るべし。

明日早花応更好 明日、早花、まさに更に好かるべし。

心期同醉卯時杯 心に期す、同じく卯時の杯に酔はんことを。

(『白楽天詩集』卷十七、続国訳漢文大成)

この白居易詩の一、二句目は、『和漢朗詠集』に採られた所為もあって(卷上・首夏・147)、人口に膾炙していたらしく、②や③の他にも、『栄華物語』「つばみ花」、『堤中納言物語』「逢坂越えぬ権中納言」、『本朝無題詩』

四十八〜五十番詩などに踏まえられている（岩波・大系本『和漢朗詠集』の補注を参考にした）。五山文学を除いた、江戸時代以前の古典文学における薔薇描写は、大体、この白居易詩の影響下にあると言っても過言ではない。①の物名歌に関しても、最近、中島輝賢氏により、七句目の「明日、早花、まさに更に好かるべし」や、同じく白居易の「戯れに廬秘書が新たに移せる薔薇に題す」詩を踏まえていることが報告された¹。なお、前掲の『和歌植物表現辞典』には、「薔薇」をそのまま直音表記したためか、歌語としてはほとんど用いられない。古今集に貫之の一首が見られるのみ」という記述がある（ところが、『新編国歌大観』によると、『現存和歌六帖』に二首、『志濃夫廼舎歌集』に一首、薔薇を詠み込んだ和歌がある）。

それでは、五山文学における薔薇の用例を見てみたい。『五山文学全集』や『五山文学新集』、『続群書類従』、『大正新修大蔵経』を繙くと、詩や偈頌から、疏、書簡、法語に到るまで、薔薇の用例を多数、見付けることができる。したがって、今回は『翰林五鳳集』から引用したい。と、いうのも、『翰林五鳳集』は、以心崇伝（一五六九〜一六三三）らが後水尾天皇（一五九六〜一六八〇）の命令のもと、五山の詩偈を書写、集録したものであり、五山文学内における特徴や傾向を知る指標でもあるからである。薔薇に関する詩偈は、巻第十四・夏部に纏めて二十七首収められている。返り点は私に施した。

- (1) 憶昔謝公携^レ妓遊。薔薇洞口彩霞流。山川一属卯金後。烟麁露香都是愁。謝安薔薇洞図 瑞岩
- (2) 洞口薔薇紅似^レ霞。謝公携^レ妓竹絲譚。合淝百万付^二兒輩^一。醉眼愛看無^レ辺花。又 琴 叔
- (3) 三処東山一色春。薔薇紅映対^レ棋人。晚従^レ誤為^二蒼生^一起。無^レ力花成^二洞裡塵^一。又 梅 陽

(4) 洞口花開昼錦明。謝公此地寄閑情。只將一滴薔薇露。洗得淮淝百萬兵。又 雪嶺

(5) 薔薇洞靜住多時。晉室安危欲付誰。白首風流被花惱。東山一出十年遲。紫薇洞 瑞溪

(6) 謝公平時何所樂。薔薇洞裡問春頻。閑華自作風流伴。小草未醫天下人。南渡諸賢千慮策。東山

獨臥万全身。功名入手白頭日。一戰淮淝清虜塵。薔薇洞 同

(7) 四海蒼生公一人。東山高臥不終身。困碁声中淮淝破。洞口薔薇幾度春。又 橫川

(8) 幹与木同蔓草同。短籬高架占芳叢。春風豈有兩般意。怪得一枝白紫紅。薔薇 虎関

(9) 東山近下半間雲。雨後薔薇滿庭薰。洞縱属君花属我。一般春色合平分。古洞薔薇 天隱

(10) 一夜連村穉綠新。薔薇院々露香勻。石榴五月洞門雨。猶可斯花落後春。又 惜芳春 落髮 月舟

(11) 薔薇雨溜滿庭馨。釀得臙脂露一瓶。無復人遺雲錦字。只分殘滴点羲經。薔薇露 仲芳

(12) 花裏位名比玉妃。風流態度摠相宜。籬籬扶起嬌無力。春雨恰如賜浴時。雨中薔薇 虎関

(13) 謝公一起老風塵。洞口薔薇少主人。昨雨庄花如有意。曉枝堅臥半叢春。雨後薔薇 彦龍

(14) 香度水精簾外風。曉枝庄架雨餘叢。少游唯道臥無力。不見深紅作淺紅。又 村菴

(15) 一院薔薇春不加。逐晴曝錦向庭除。東山宰相台恩重。衣紫於花雨露餘。又 橫川

(16) 滿架薔薇市上家。出門紫陌入門霞。一遊蹈遍雞林雨。昼錦知君衣被花。又 主人近自高麗一掃

宜竹

(17) 縹緲東山又在茲。風香滿架雨晴時。醉來堪愧与花似。露重薔薇無力枝。又 春沢

- (18) 洞口薔薇雨霽晨。開時明媚尚留春。風前如佩會稽印。花亦錦衣朱買臣。又 同
- (19) 薔薇紅綻半籬間。裁錦風前露爛斑。滿院雨薰花幾度。却疑此地變東山。又 同
- (20) 落尽群花雨洒窓。薔薇滿院獨無雙。却疑此地變西蜀。滴滴流紅濯錦江。又 同
- (21) 滿架薔薇風露新。嬋娟曝錦尚留春。枝々無力雨過後。花似東山高臥人。又 同
- (22) 露庄薔薇臥曉枝。誰歎修架欲扶之。蒼生渴望非難慰。花似謝公徵起時。修薔薇架

策彦

- (23) 修欄修架立多時。奈此薔薇委曉枝。心緒縱橫収不得。幾回吟斷季蘭詩。又 同
- (24) 蜀錦燕脂蔑以加。薔薇掩映小肪紗。縱然修架深調護。獨許憂鶯來弄花。又 同
- (25) 院落薔薇点不塵。多君修架待佳辰。好將一霎一欄露。染出明朝万架春。又 同
- (26) 薔薇綻处露斑斑。誰作紅衣粉里還。好似斯花栽画錦。會稽亦自有東山。薔薇錦 英甫
- (27) 画裏風光謝洞春。媚晴泣雨数枝新。如何只写花多態。不著東山縹緲人。画薔薇 九鼎

〔大日本仏教全書〕第八十九卷・芸文部二

引用本文を一読して気が付くのは、謝安（謝公、謝伝等）が頻出することである。彼の伝記は『晋書』列伝第四十九で知ることができるが、『蒙求』「謝安高潔」の方がコンパクトなので、これを引用したい。内容は、『晋書』の記事を簡略化したものである。

七 謝安高潔

晉書、謝安字安石、陳國陽夏人。年四歲桓彝見而嘆曰、此兒風神秀徹。後當不_レ滅_二王東海_一。王導亦深器_レ之。由_レ是少有_二重名_一。初辟除、並以_レ疾辭。有司奏、安被_レ召歷_レ年不_レ至、禁_二錮終身_一。遂棲_二遲東土_一。常往_二臨安山中_一、放_二情丘壑_一。然每_二遊賞_一必以_二妓女_一從。時弟万為_二西中郎將_一、總_二藩任之重_一。安雖_レ處_二衡門_一、名出_二其右_一、有_二公輔望_一。年四十餘始有_二仕志_一。征西大將軍桓溫請為_二司馬_一。朝士咸送。中丞高崧戲_レ之曰、卿屢違_二朝旨_一、高_二臥東山_一。諸人每相与言、安石不_二肯出_一、將_レ如_二蒼生_一何_レ。今蒼生亦將_レ如_レ卿何_一。安有_二愧色_一。後拜_二吏部尚書_一。時孝武立、政不_レ自_レ己。桓溫威振_二内外_一。安尽_レ忠匡翼、終能輯穆。進_二中書監錄尚書事_一。苻堅率_レ衆、次_二淮肥_一。加_二安征討大都督_一。既破_レ堅、以_二總統功_一進_二太保_一。薨贈_二太傅_一、諡_二文靖_一。

(新釈漢文大系)

謝安、字は安石、陳國陽夏の人である。幼い時から評判が高く、しばしば朝廷から任官の話もあつたが、すべて病気を理由に辞退したので、役人たちに反感をかつた。そこで彼は、ついに東方の地に移住し、静かに暮らした。つねに臨安の山中に行き、気儘におかやたにに遊んだ。山川に遊んで風景を眺める時は必ず、妓女を従えた。謝安は、四十歳を過ぎてからはじめて、仕官の志を持ち、征西大將軍の桓温は、彼を請うて司馬にした。朝廷の役人が皆、謝安を見送る中、中丞の高崧が冗談っぽく、「あなたはしばしば朝廷の御旨意に背き、東山にかくれ住んでいた。人々はいつも相共に『安石が一向に山から出る気が無いのならば、いったい人民(蒼生)のこともどのように考えているのか』と言ひ、『あなたが出仕した今となつては、人民はまた、あなたをどのように考へたらよいのか』と言つています」と言うと、彼は恥じて顔を赤らめた。その後謝安は、吏部尚書、中書監・録

尚書事、征東大都督、太保、太傅と出世し、前秦の苻堅が大軍を率いて、淮肥に陣をかまえ、晋に侵略しようとした際、大将としてこれをうち破り、勲功を立てたりしている。諡は文靖。

ところで、文章の終わりまで来ても、一向に謝安と薔薇の接点は見当たらない。『晋書』本文を見ても同様である。実は、東山の中腹にあつて、謝安が妓女を伴つて遊んだ処を、「薔薇洞」と言うのである。これは、『大明一統志』卷之四十五・紹興府に記されている。また、施宿の『嘉泰会稽志』にも記述がある。²⁾

薔薇洞《在東山之半》。旧伝、晉謝安携妓游処。唐李白詩、不到東山久、薔薇幾度花、白雲他自散、明月落誰家》
〔和刻本 大明一統志〕《内は割注を示す》

例えば(5)(27)について。これらの詩は『花上集』に採られており(前詩は、『臥雲藁』《五山文学新集》第五卷所収)や『花上集』《統群書類従》第十二輯下)では、「薔薇洞図」という詩題になっている)、同書には『花上集鈔』という抄物もある。

○ 薔薇洞

薔薇洞静 住多時。晋室安危欲付誰。白首風流被花惱。東山一出十年遲。東山不至久。薔薇幾回春。李白力作。世上ハシツカニナイカ、謝安ハ名人チャカ、縹緲住人ヲツレテ、薔薇洞酒ヲ飲テ遊タ。是ハモツタイナイソ。今ハ乱ル、ヲ、救ハイデ、誰ニ付セントスルソ。白一、年ハヨツタカ、美人トフトナケナウ遊タソ。是ハ花カ面白サニナヤマサレタソ。十年ヲソウ出タハ、是ハ花ノワサソ。摠シテ洞ヲ出タ事ヲハソシツタソ。在東山時ハ遠志、出ル時ハ小草ト云タコトソ。

○ 画 薔 薇

画裡、風光謝洞、春。媚晴、泣、雨、数枝新。如何、只写、花、多態。不、着、東山、縹、人。何、タル、上、手、画、工、ヤ
ラ。謝安カ洞ヲイキくト写タソ。媚晴一、晴ニハ、ニコくト笑フ美人、ヤウナソ。又雨カフレハ、臙
脂カウルヲウテ、ナクヤウナヨ。新ニウツクシイソ。如一、一ノ句、コトヘテ見ソ。此様ニウツクシウウツ
イタカ、美人達ヲツレテ、謝安カ東山テ遊タ。ソノサテ、タヨくトシタ美人タチヲハ、ナセニカ、ヌソ。
是レラカ山谷ナトニ多ソ。ソハ二人ヲソヘタラハヨカラウト云ソ。

(亀井孝氏『語学資料としての中華若木詩抄(系譜)』、清文堂、昭和五五。翻刻は私に施した)

前詩は、詩題からも察せられるように、謝安が東山の薔薇洞で遊んだ故事そのものを詠んでいる。後詩は、薔薇の絵に賦したものであるが、やはり謝安を想起し、彼が引き連れた美人が描かれていないことに不平を述べている。詳しい内容は、右の抄文を参照されたい。五山文学における薔薇の用例で最も多いのは、この謝安の故事を踏まえたものである。その理由は、一つには、東山建仁寺山内の大昌院に、「薔薇洞」という寮舎があったからである。『東山塔頭略伝』(史料編纂所謄写本)の「大昌院」項には、「天隱名龍澤 別號默雲。歴住真如、建仁《第二百十八世》、南禪《第二百二十一世》」。居室曰「薔薇洞」。(下略)」という記述があり、天隱龍沢(一二四二二〜一五〇〇)も、きっと謝安の故事に因んで、自身の居室を「薔薇洞」と命名したはずである。なお、『蒙求』には五山版も存するが、禅僧は『晋書』にも親しんでいたようである。と、いうのも、(7)で横川景三(一二四二九〜九三)が踏まえている謝安の逸話——百万の兵を率いた苻堅との戦いの最中、困窘を打っていたこと

——は、『晋書』に記されているが、『蒙求』本文には見えないからである。『翰林五鳳集』卷第四十三・雜器物には、「謝安困碁図」と題する詩が二首収められている。

さて、実は、謝安の故事の他にも、わが国の禅僧が影響を受けた、薔薇に関する詩句や故事は、かなり存在している。以下、現段階において把握しているものを、箇条書きに列挙する。なお、記号は私に施した。また、「例」には五山文学における用例の所在を、() 内には典故の所在を示した。

(a) 謝安が東山の薔薇洞に遊んだ故事(『蒙求』「謝安高潔」、『晋書』列伝第四十九、『大明一統志』卷之四十五等)

【例】(1) ～ (7)、(9)、(13)、(15)、(17) ～ (19)、(21)、(22)、(26)、(27) 等

(b) 李白「林壑久已蕪。石道生薔薇」(『李太白集』卷十四・「贈別王山人歸布山」)

【例】建仁寺兩足院藏『增禪林集句韻』第五・微五上平・「薇」字項

(c) 李白「不_レ向_二東山_一久。薔薇幾度花」(『李太白集』卷二十二・「憶東山」二首)

【例】『花上集鈔』「薔薇洞(瑞溪)」、「蕉窓夜話」 108

(d) 『孟東野詩集』卷第九・「和薔薇花歌」

【例】『梅花無尽蔵』第一・ 254

(e) 賈島「破却千家作一池。不_レ栽桃李種薔薇」(『全唐詩』卷五百七十四・賈島四・「題興化園亭

一)

〔例〕兩足院藏『增禪林集句韻』第五・微五^{上平}・「薇」字項

(f) 杜牧「夏鶯千轉弄^三薔薇」(『全唐詩』卷五百二十一・杜牧三・「齊安郡後池絕句」)

〔例〕(24)、『金鐵集』「同(仏誕生)」、「湯山聯句鈔」虞韻・11³等

(g) 高駢「水精簾動微風起。滿架薔薇一院香」(『全唐詩』卷五百九十八・高駢・「山亭夏日」、「禪林集句」
・七言)

〔例〕(14)、(16)、(17)、(21)、『智覺普明國師語錄』卷第三・「中條秋峯威公居士斷七請」、「策彥和尚
詩集」又(和^三玉府梅峯少年試春之韻)等

(h) 『予章黃先生文集』第五・「戲詠^三蠟梅二首」

〔例〕『翰林葫蘆集』第三・「詠^三魯直蠟梅詩」八首

(i) 秦觀「有^レ情芍藥含^三春淚。無^レ力薔薇臥^三曉枝」(『淮海集』卷第十・「春日五首」)

〔例〕(3)、(12)、(14)、(17)、(21) 〽 (23)、『補庵京華後集』「芍藥薔薇与^レ松図」等

(j) 王十朋「天衣杜鵑。東山薔薇」(『梅溪王先生文集』後集卷第一・「會稽風俗賦并叙」)

〔例〕兩足院藏『增禪林集句韻』第五・微五^{上平}・「薇」字項

(k) 「柳宗元得^三韓愈所^レ寄詩」。先以「薔薇露^三漉^レ手」(『雲仙雜記』卷之六・「大雅之文」)

〔例〕『空華集』卷第十二・「泉上人留別唱和詩序」、「梅花無尽藏」第一・25³、『水拙手簡』「与^三仙英」手

簡」等

(l) 張祐「曉風抹破燕支顛。夜雨催成蜀錦機。當_レ昼開時正明媚。故鄉疑是買臣婦」(『聯珠詩格』卷之一・薔薇)

〔例〕(4)、(11)、(15)、(16)、(18) 5 (21)、(24)、(26)、(27)、『湯山聯句鈔』先韻・492等

(m) 陶弼「桃紅李白薔薇紫、問_レ着東風_レ總不知」(『聯珠詩格』卷之十二・「對_レ花有_レ感」)

〔例〕(8)、『翠竹真如集』「5 四月旦上堂 結座」、『梅溪稿』「三教吸酸図」、『三脚稿』「性省号三英_一。即偈証_レ之」、『南陽稿』「祖師」等

(n) 徐寅「長養薰風_レ吹_レ曉吹。漸開_レ荷芰_レ落_レ薔薇_二」(『聯珠詩格』卷之十七・「初夏」)

〔例〕(9)、(19)、『黃龍十世錄』「明極老人山中雜言十章、倚_レ韻言_レ志」、『了幻集』「賀_二春藏主病起_一」、
兩足院藏『增禪林集句韻』第五・微五上平・「薇」字項、

(o) 高憲「抹_レ利花心_レ曉露、薔薇_レ萼底_レ温風」(『全遼金詩』中・高憲・「焚香六言(四首)」)

〔例〕『蕉窓夜話』 59

(p) 「薔薇葉已抽。秋蘭氣_レ當_レ馥」という詩句を含む「問_二来使_一」詩が陶淵明の作か否かを論じたもの(『苕溪漁隱叢話前集』卷第四・五柳先生下、『滄浪詩話』・考証等)

〔例〕『梅花無_レ尽_レ藏』第三上・256、同第六・12、同第六・53等

(q) 林和靖「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黄昏」(「山園小梅」)を野薔薇の評価としたもの(『苕溪漁隱叢話前集』卷第二十七・林和靖等)

*

*

現在、稿者が「五山文学と薔薇」に関して言及できるのは、ここまでである。今後はまず、(a) ～ (g) の典拠をもとにして、薔薇が作品にどのように表現されているか、を詳しく見てみたい。先程は簡単に「影響」と言ってしまったが、「影響」にも様々なレベルがある。それらを整理した上で、つぎの作業としては、禅僧が薔薇に対してどのようなイメージを抱いていたか、を考えたい。実際に薔薇は、禅僧の身近にあったのだろうか——。当時の日記類なども繙いてみなくてはならないだろう。そして、その後の作業こそが、稿者が最も重要視するところである。それは、はじめに見た『源氏物語』等の薔薇の用例と、五山文学におけるそれとの比較・検討である。

本研究を通して、稿者は、絶海中津「二三三六～一四〇五」の伝記および作品の基礎的研究に終始してきた。なぜなら、特定の禅僧（作家）に関する研究を充実させることによって、今後、中世のみならず、各時代の作家と比較・検討して、「学界の孤児」たる五山文学を、中世文学史や日本文学史に正確に位置付けたいと考えているからである。そして、稿者が、五山文学を相対化する、もう一つの方法として考えているのが、「素材」の比較である。すなわち、五山文学と、それ以外の文学とで、同じ「素材」——動植物・人物・故事等——の描かれ

方にどのような差が出てくるのか、また、その結果が何を意味しているのか、などを調査することによって、山文学の特徴や特異性を明確にせんとする試みである。ただし、研究目的を達成するためには、様々な「素材」における調査の積み重ねが必要となつて来よう。本節では、その一階梯として、「薔薇」に少し注目した次第である。

注

(1) 中島輝賢氏「紀貫之の〈薔薇〉の歌——漢詩文の影響と物名歌の場——」(『国文学研究』第三百二十五集、平一三・一〇)。

(2) 『会稽志』卷九・山の「上虞縣」項には、

東山在_二縣西南四十五里_一。晉太傅謝安所_レ居也。一名謝安山、巍然特_レ立於衆峰間、拱揖蔽虧、如_レ鸞鶴飛舞_一。其巔有_二謝公調馬路白雲明月_一二堂址。千嶂林立、下視_二滄海_一。天水相接、蓋絶景也。下_レ山出_二微徑_一、為_二國慶寺_一。乃太傅故宅、旁有_二薔薇洞_一。俗伝、太傅携_二妓女_一游宴之所。(下略)

(『四庫全書珍本』七集。句読点および返り点は、私に施した)

という記述がある。

※ 中国文学の引用は、主に四部叢刊、続四部叢刊、『全唐詩』、『^金金遼金詩』所収本に拠った。ただし、『李太白集』は統国訳漢文大成本、『聯珠詩格』は『和刻本漢詩集成 総集篇』第九輯（汲古書院）、『苕溪漁隱叢話』は中華書局本、『滄浪詩話』は『歴代詩話』所収本を用いた。また、作品番号に関して、『本朝無題詩』は本間洋一氏注釈『本朝無題詩全注釈』（新典社）、『蕉窓夜話』は鈴木博氏「蕉窓夜話（校）」一・二（『滋賀大学教育学部 紀要』第二七号・第二八号）、『梅花無尽蔵』は市木武雄氏『梅花無尽蔵注釈』（続群書類従完成会）、『湯山聯句鈔』は岩波・新日本古典文学大系本を用いた。

【付記】

脱稿後、位藤邦生先生から平川祐弘氏『東の橘 西のオレンジ』（文芸春秋、昭五六）を紹介していただいた。うかがったところでは、大変興味深い内容で、これから「五山文学と薔薇」を追究して行く上で、是非とも参考にしたいと思っている。

参 考 文 献 一 覧

一、著書、注釈書類

○上村觀光氏『五山文学小史』(裳華房、明三九) 《B》

○同 『五山詩僧伝』(民友社、明四五) 《B》

○岡田正之氏『日本漢文学史』(共立社書店、昭四) 《A》

○北村沢吉氏『五山文学史稿』(富山房、昭一六) 《B》

○山地土佐太郎氏編『絶海国師と牛隠庵』(雅友社、昭三〇)

↓「研究資料」として、以下の論文を収録する。

・玉村竹二氏「絶海和尚について」 《A》

・伊東卓治氏「絶海中津の墨蹟」 《F》

・福島俊翁氏「絶海禅師の遺文について」 《A》

・松山秀美氏「古典と土佐」 《A》

・神田喜一郎氏「禹域に於ける絶海」 《B》

・吹田独秀氏「絶海の杖」 《F》

・今関天彭氏「汝霖良佐事蹟」 《F》

・同 「日支文化の交流」 《E》

○梶谷宗忍氏『絶海語録』一・二（思文閣出版、昭五二） 《C》

○同 『蕉堅藁 年譜』三（相国寺、昭五〇） 《C》

○寺田透氏『義堂周信・絶海中津』（日本詩人選²⁴、筑摩書房、昭五二） 《D》

○玉村竹二氏『五山禅僧伝記集成』（講談社、昭五八） 《B》

○同 『日本の禅語録』第八卷「五山詩僧」（講談社、昭五三） 《C》

○同 『五山文学——大陸文化紹介者としての五山禅僧の活動——』（日本歴史新書、至文堂、昭四一）
《A》

○入矢義高氏校注『五山文学集』（新日本古典文学大系48、岩波書店、平二二） 《C》

○蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇） 《C》

↓私家版『蕉堅藁全注』（昭五二）を増補改訂。

二、論文類

- 豹軒老人「絶海和尚の文藻（一）」『禅文化』第一卷第四号、昭三一・三　《D》
- 同　「絶海和尚の文藻（二）」『禅文化』第二卷第五号、昭三一・七　《D》
- 古沢未知男氏「僧絶海の詩風」『九州中国学会報』四、昭三三・五　《D》
- 大野実之助氏「絶海と蕉堅稿」『漢文学研究』一〇、昭三七・一〇　《D》
- 戸田浩暁氏「松ヶ岡文庫蔵「蕉堅藁別考」——その校訂と補注——」『大倉山論集』第八輯、昭三五・七　《F》
- 同　「蕉堅藁考と蕉堅藁別考について」『大東文化大学創立六十周年記念中国学論集』、昭五九　《F》
- ↓二篇とも『中国文学論考』（汲古書院、昭六二）所収
- 蔭木英雄氏「絶海中津の詩風」『漢文教室』八四、昭四三・一　《D》
- ↓『中世禅林詩史』（笠間書院、平六）所収。旧版『五山詩史の研究』（笠間書院、昭五二）を増補改訂。
- 同　「義堂周信・絶海中津」『仏教文学講座』第三卷「法語・詩偈」（勉誠社、平六）　《A》
- 牧田諦亮氏「絶海中津と明僧との交渉——文学へのいましめ——」『禅学研究』第五十七、昭四四・二

《E》

○川口久雄氏「禅林山居詩の展開について——道元山居十五首と絶海山居十五首——」(『国学院雑誌』七二

—一一、昭四六・一一) 《D》

↓『花の宴』(吉川弘文館、昭五五) 所収

○安良岡康作氏「五山文学における比較文学上の一問題——中巖円月と絶海中津をめぐって——」(『比較文

学』潮文社、昭四七) 《D》

↓『中世的文芸の理念』(笠間書院、昭五六) 所収

○名波弘彰氏「絶海中津の五山詩について——叙景イメージリに見られる「境」と「心」との相応(correspondence)を中心として——」(『峯村文人先生退官記念論集 和歌と中世文学』、昭五二) 《D》

○玉村竹二氏『絶海年譜』に就ての疑義」(『日本歴史』第三六四号、昭五三・九) 《B》

↓『日本禅宗史論集』下之二(思文閣出版、昭五六) 所収

○ささきともこ氏「五山文学」(『研究資料日本古典文学』第十一卷「漢詩・漢文・評論」、明治書院、昭五九)

《A》

○西尾賢隆氏 「日中禅林における疏から表への展開」(『日本歴史』第五八八号、平九・五) 《E》

○同 「室町幕府外交における五山僧——絶海中津を中心に——」(『日本歴史』第五三七号、平五・二) 《E》

↓『中世の日中交流と禅宗』(吉川弘文館、平一一) 所収

○堀川貴司氏 「絶海中津——明で学んだ文雅的詩人——」(『国文学 解釈と鑑賞』第六十四卷十号、平一一・一〇) 《A》

○俞慰慈氏 「日中文化交流史的基础研究 《扶桑五山文学原典箋注係列》第一種——絶海中津《蕉堅藁》箋注 (I) (IV) (『福岡国際大学紀要』第一〜四号、平一一・三〜平一二・七) 《C》

《A》 ↓概説、《B》 ↓伝記、《C》 ↓注釈、《D》 ↓作品、《E》 ↓日中交流、《F》 ↓その他